

三手向原遺跡

— 中世土師器窯と集落遺跡の発掘調査報告 —

2 0 0 1 年 3 月

岡山市教育委員会

題簽 水内昌康先生

頁	行	誤	正
1	11	か <u>っ</u> ては	か <u>つ</u> ては
1	16	増加していくのは <u>の</u>	増加していくのは
3	11	5世紀 <u>台</u> である。	5世紀 <u>代</u> である。
4	1	館の方向に	館の方向に
4	17	伊 <u>東</u> 晃	伊 <u>藤</u> 晃
5	4	上東にかけての <u>密床</u> は	上東にかけての <u>密集</u> は
34	18	供献的な <u>変年</u> が	供献的な <u>用途</u> が
53	17	土 <u>鍾</u> と	土 <u>鍾</u> 10~12と
64	10	青磁 <u>碗</u>	青磁 <u>碗</u>
64	11	集水 <u>外</u> 状遺構	集水 <u>桁</u> 状遺構
70	図66	L = 4.9 <u>cm</u>	L = 4.9 <u>m</u>
72	6	断面形は四 <u>状</u> で	断面形は <u>皿</u> 状で
74	6	集水 <u>外</u> 状遺構	集水 <u>桁</u> 状遺構
82	図93	土師窯焼成窯 1	土師 <u>器</u> 焼成窯 1
82	図93	土師窯焼成窯 2	土師 <u>器</u> 焼成窯 2
88	33	円柱状の形態のものと板状の形態のものに分けられる135~144。	円柱状の形態のもの140~144と板状の形態のもの135~139に分けられる。
94	3	<u>近接</u> 並んでいる	近 <u>接</u> し並んでいる
94	21	円 <u>状</u> 163	板 <u>状</u> 163
96	19	青磁 <u>碗</u>	青磁 <u>碗</u>
115~	土器観察表	青磁 <u>碗</u>	青磁 <u>碗</u>
116	20	師器 <u>皿</u>	<u>土</u> 師器 <u>皿</u>
117	20	土 <u>御</u> 器鍋	土 <u>師</u> 器鍋
120	8	魚住焼 <u>壺</u> 鉢	魚住焼 <u>捏</u> 鉢
121	25	<u>溝</u> 19	<u>溝</u> 19
121	38	<u>溝</u> 19	<u>溝</u> 19

序

岡山市域の西半に位置します足守川流域は、広大な沖積平野が形成されており、豊かな実りを古代以来から提供してきた地でもありました。そのため、遺跡の密集度はずば抜けており、墳長が全国的に第4位の規模である造山古墳や、飛鳥時代まで遡るとされる大崎廃寺などの著名な遺跡も数多くあり、古代の備中国はもとより県下全域を含んだ「吉備国」の中心地と考えられます。

三手向原遺跡は、足守川の中流域に位置し、最終処分場建設に伴って発掘調査されました。かなり広い面積の調査ということもあり、古墳時代と鎌倉・室町時代の集落の様子が明らかとなりました。なかでも鎌倉・室町時代の集落内でみつけた土師器焼成窯は大変珍しいもので、県下でも4例目の発見ということになります。当時の窯業生産の実態を解明する貴重なデータになるものと思われまます。

本報告書は、以上の調査成果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料として、多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と、発掘参加者のご支援を頂きました。記して厚く御礼申し上げます。

平成13年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 玉光源爾

例 言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が平成5年7月20日から平成7年9月30日にかけて実施した三手最終処分場建設事業に伴う岡山市三手108-1の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は草原が担当した。
3. 遺物の実測およびトレースは木村真紀、山元尚子がおこない、遺物の写真撮影は草原がおこなった。編集は草原がおこなった。
4. 報告書の作成にあたって、土器の胎土分析は岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏に、人骨鑑定は岡山理科大学理学部の川中健二氏をお願いし、玉稿を掲載させていただいた。
5. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
6. この報告書に用いている方位は磁北である。
7. 図1は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「総社東部」を複製し、加筆したものである。
8. 遺物・実測図・写真等は、岡山市教育委員会にて保管している。

目次

第I章	位置と歴史的環境	1
第II章	調査の経過	5
第III章	遺構と遺物	10
第IV章	結語	123
附章I		155
附章II		160
図版		1~14

挿入図目次

図1 三手向原遺跡の位置	1
図2 周辺遺跡分布図	2
図3 調査区及び断面図位置	6
図4 A区土層断面(1)	7
図5 A区土層断面(2)	8
図6 B区土層断面	8
図7 竪穴住居1実測図	10
図8 A区古墳時代遺構配置図	11~12
図9 竪穴住居1出土遺物(1)	13
図10 竪穴住居1出土遺物(2)	14
図11 竪穴住居1出土遺物(3)	15
図12 甕15の内部出土状況断面	15
図13 竪穴住居1土器出土状況	16
図14 竪穴住居2実測図	17
図15 竪穴住居2出土遺物	18
図16 竪穴住居3実測図	19
図17 竪穴住居3出土遺物	19
図18 竪穴住居4実測図	20
図19 竪穴住居4出土遺物	21
図20 竪穴住居5実測図	22
図21 竪穴住居5出土遺物	23
図22 竪穴住居6実測図	24
図23 竪穴住居6出土遺物	25
図24 竪穴住居7実測図	26
図25 竪穴住居7出土遺物	27
図26 竪穴住居8実測図	29
図27 竪穴住居8出土遺物	30
図28 竪穴住居9実測図	31
図29 竪穴住居9出土遺物	32
図30 P501・P503・P505・P506・P507・P511・P512・P513・P514・P516実測図	36
図31 P502・P504-A・P504-B・P508・P509・P510・P517・P518実測図	37
図32 P289・P292・P294・P297・P417・P515・P519実測図	38
図33 土壌出土遺物(1)	39
図34 土壌出土遺物(2)	40
図35 建物12実測図	48
図36 A区中世下層遺構配置図	49~50

図37 建物12出土遺物	51
図38 建物13実測図	51
図39 井戸1実測図	52
図40 井戸1出土遺物	52
図41 P313・P314 実測図	53
図42 P308・P309・P310・P311・P312・P315・P316・P317・P318実測図	54
図43 P313・P317・P318出土土器	54
図44 溝10・11断面図	55
図45 溝10・11出土遺物	55
図46 建物1出土遺物(1)	56
図47 建物1出土遺物(2)	56
図48 建物1出土遺物(3)	56
図49 A区中世上層遺構配置図	57~58
図50 建物1実測図(1)	59
図51 建物1実測図(2)	60
図52 建物2出土遺物	60
図53 建物2実測図(1)	61
図54 建物2実測図(2)	62
図55 P66・P87 実測図	63
図56 P66(集水拵状遺構)出土遺物(1)	64
図57 P66出土遺物(2)	64
図58 P95出土遺物	64
図59 P95実測図	65
図60 P57実測図	65
図61 P57出土遺物	65
図62 P1・P4・P7・P19・P71・P88・P166・P261・P275・P280実測図	66
図63 P409・P410・P411・P412・P413・P414・P415・P419・P423・P424・P428・P500実測図	67
図64 P1・P4・P19・P71・P88・P166・P500出土遺物	68
図65 P410出土遺物	69
図66 P160実測図	70
図67 P160出土遺物(1)	70
図68 P160出土遺物(2)	70
図69 P160出土遺物(3)	70
図70 P113実測図	71
図71 P113出土遺物	71
図72 P420実測図	72
図73 P420出土遺物	72
図74 P203実測図	72
図75 P203出土遺物	72

图 76 墓 1 实测图	73
图 77 墓 2 实测图	74
图 78 溝 3 検出面出土遺物 (1)	75
图 79 溝 3 (建物 1 南西側) 出土遺物 (2)	75
图 80 溝 3 (建物 1 北側) 出土遺物 (3)	76
图 81 溝 14・15 实测图	76
图 82 A 区上層包含層出土銅銭	77
图 83 柵列 1 实测图	77
图 84 B 区中世遺構配置图	78
图 85 柵列 2 实测图	79
图 86 建物 14 实测图	79
图 87 P628 实测图	79
图 88 P628 出土遺物	80
图 89 P634 出土遺物 (1)	80
图 90 P634 实测图	81
图 91 P634 出土遺物 (2)	81
图 92 P637 实测图	81
图 93 C 区中世遺構配置图	82
图 94 建物 3 实测图	83
图 95 建物 4 实测图	83
图 96 建物 5 实测图	84
图 97 建物 6 实测图	84
图 98 建物 7 实测图	85
图 99 建物 8 实测图	86
图 100 建物 9 实测图	86
图 101 建物 10・11 实测图	87
图 102 建物 11 出土遺物	87
图 103 土師器烧成窯 1 完掘状況	89
图 104 土師器烧成窯 1 炉壁検出状況	90
图 105 土師器烧成窯 1 炉内遺物除去状況	91
图 106 土師器烧成窯 1 出土遺物 (1)	92
图 107 土師器烧成窯 1 出土遺物 (2)	93
图 108 土師器烧成窯 2	94
图 109 土師器烧成窯 2 出土遺物	94
图 110 P983 实测图	94
图 111 P983 出土遺物	95
图 112 P703 出土遺物	95
图 113 P703 实测图	96
图 114 P946 实测图	96

図115 P946出土遺物	96
図116 P1012実測図	97
図117 P893出土遺物	97
図118 P893実測図	97
図119 P1046実測図	98
図120 P1046出土遺物	98
図121 墓3実測図	99
図122 墓3出土遺物	100
図123 墳墓実測図	100
図124 P847実測図	101
図125 P847出土遺物	101
図126 P889実測図	102
図127 P889出土遺物	102
図128 溝30(部分)実測図	102
図129 溝30出土遺物	103
図130 溝19出土遺物(1)	103
図131 溝19出土遺物(2)	104
図132 包含層出土竈道具及びフイゴ羽口	105
図133 井戸2実測図	106
図134 D区中世遺構配置図	107~108
図135 井戸2出土遺物	109
図136 P1101実測図	109
図137 P1101出土遺物	109
図138 P1102実測図	109
図139 P1102出土遺物	109
図140 A区土壇出土遺物	110
図141 A区近世遺構配置図	111~112
図142 B区近世遺構配置図	113
図143 B区近世水田出土遺物	113
図144 C区近世遺構配置図	114
図145 D区近世遺構配置図	114
図146 竪穴住居出土土器分類	124
図147 土壇出土土器分類	125
図148 古墳時代遺構変遷図	127
図149 正善庵遺跡(注2一部改変)	128
図150 斎富遺跡(注3一部改変)	129
図151 津寺遺跡(注4一部改変)	129
図152 後期古墳分布状況	133
図153 三手向原遺跡中世全体図	136

図154 北側微高地（B・C・D区、山陽道調査区）全体図	138
図155 北側微高地建物棟方向	138
図156 椀法量変遷図	139
図157 椀変遷図	139
図158 各集落出土椀法量分布	140
図159 掘立柱建物床面積分布	140
図160 津寺遺跡土筆山調査区（注2）	142
図161 奥坂遺跡No40溝出窯道具（注1）	143
図162 三手向原1号窯復元想定図	144
図163 三蔵畑遺跡（注3）	146
図164 沖ノ店1号窯（注4）	147
図165 関戸廃寺（注5）	148
図166 平面および焚口比較（番号は焚口の位置）	149
図167 床縦断面比較	149
図168 成形技法別軒平瓦分布図	150

第I章 位置と歴史的環境

三手向原遺跡は、かつては瀬戸内海に続いていた吉備穴海といわれる内面に面した沖積平野に位置する。このあたりは律令制下では備中国賀夜郡生石郷に含まれるが、同国都宇郡の境とも接している。現在は岡山市域に含まれているが、もとは昭和30年に生石村が高松町に合併し、さらに昭和46年に岡山市へ合併したものである。遺跡周辺は最近まで水田の広がる牧歌的景観であったものが、新空港や山陽道の建設などの交通網の整備によって周囲の開発に拍車がかかり歴史的、自然的景観は急激に変貌しつつある。

本州島西側を東西へびる中国山地の南側には標高300～600mのなだらかな降起準平原である吉備高原が広がっている。吉備高原の南端は足守あたりで、そこから高梁川と足守川などの中小河川が形成した沖積平野が続いている。三手向原遺跡の位置する平野部の中央を流れる足守川は、現在は岡山市今保で笹ヶ瀬川と合流して見島湖へ流入しているが、かつては庭瀬のあたりで縄紋海進により生じた内海である吉備穴海に注いでいた。ただし平野部には旧流路の痕跡が数多く認められ、頻繁に流路が変わっていたことがうかがわれる。おそらくこのことと弥生時代以来の集落遺跡の消長とは、かなり密接な関係があるものと思われる。

沖積平野部に遺跡が認められるようになるのは縄紋時代からで、矢部奥田遺跡^①や真壁遺跡^②では早期の押型紋土器が出土している。しかし継的に遺跡数が増加していくのは後期からで、南溝手遺跡ではイネの籾痕のある土器片も出土している^③。イネの起源は新しい資料が蓄積されるたびに選んでいるが、それとは別に稲作の画期の1つが後期にあるように思われる。

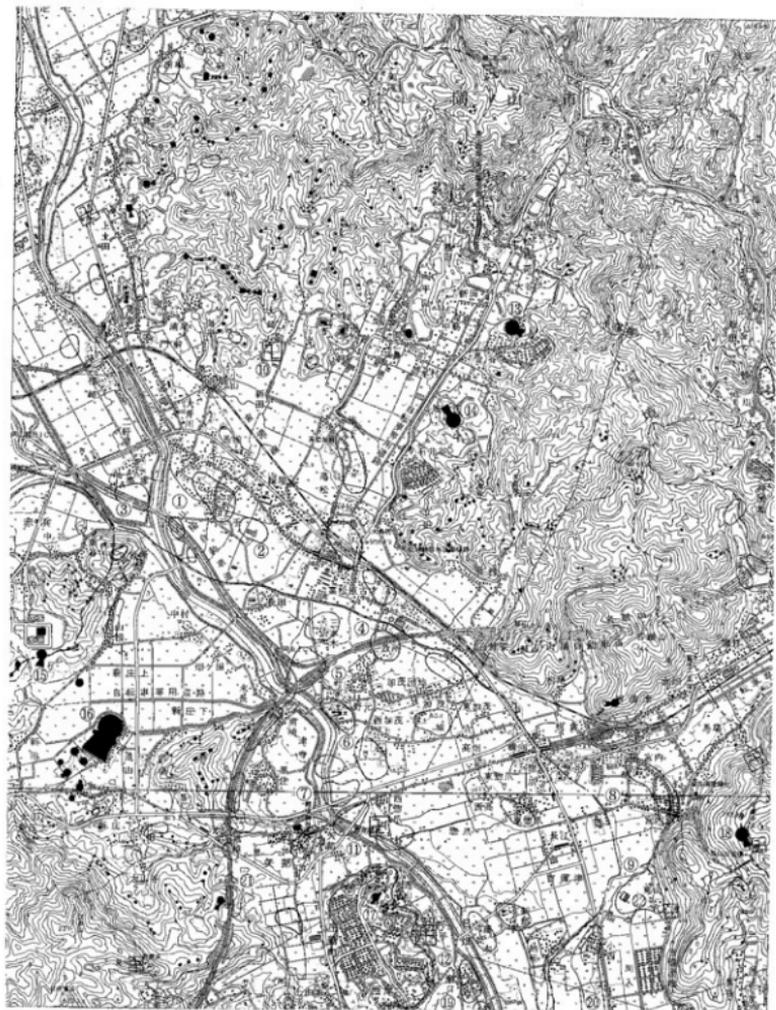
弥生時代に入ると集落の数はさらに増加する。それは足守庄岡連遺跡^④、岩倉遺跡、東山遺跡、川入遺跡などで^⑤、それらは低位部に位置する。集落遺跡の規模自体はそれ程大きくなく、微高地周辺の可耕地部の水田を基盤としたものであったと思われる。中期になって集落数は増加し、若干大きな集落も存在するが、旭川流域の南方遺跡群と比較すると規模や遺構密度に格段の差があり、小規模な集落が散在的に存在する景観であったといえる。

中期末になると遺跡数は爆発的に増加する。とくに丘陵裾部における増加は著しく、丘陵部における散布地はほとんどがこの時期である。足守川中流域の標高87mの小丘陵である雨筒天神山から南にかけての丘陵部を南北に縦走した山陽自動車道の建設に伴う調査でも、該期の集落が調査されている^⑥。それらは堅穴住居4棟から10数棟で構成される概して小規模なもので、丘陵裾部の小扇状地を基盤としたある程度自立的な水田経営をおこなっていた集落と推測される。

後期になると中期末の集落が消え、その代わりに平野部へ高塚遺跡^⑦、津寺遺跡^⑧、矢部南向遺跡^⑨、東山遺跡、上東遺跡^⑩などの大規模な集落遺跡が出現する。中期末に自立的な水田経営を獲得し



図1 三手向原遺跡の位置



- | | | | | |
|---------------|-------------|-----------|-----------|----------|
| ① 三手原遺跡 | ⑥ 津寺(加茂小)遺跡 | ⑪ 惣爪廢寺 | ⑭ 造山古墳 | ⑰ 矢部奥田遺跡 |
| ② 三手(庄内幼稚園)遺跡 | ⑦ 矢部南向遺跡 | ⑫ 日畑廢寺 | ⑮ 嵯築塚丘墓 | ⑱ 伝賀陽氏館跡 |
| ③ 高塚遺跡 | ⑧ 吉野山遺跡 | ⑬ 小盛山古墳 | ⑯ 中山茶臼山古墳 | |
| ④ 政所遺跡 | ⑨ 東山遺跡 | ⑫ 佐古田堂山古墳 | ⑲ 岩倉遺跡 | |
| ⑤ 津寺遺跡 | ⑩ 大崎遺跡 | ⑭ 小滝山古墳 | ⑳ 川入遺跡 | |

図2 周辺遺跡分布図

た個々の集落が、後期になってより生産性の高い平野部の開発をおこなうために結集したのだと思われる。そして後期後半になると矢部南向遺跡⁽¹¹⁾と、その周囲に流域で最も大きな集落が形成される。さらに南側にある王墓山丘陵上には全長が80mにも復元される双方中円形の榊築墳丘墓が築かれる⁽¹²⁾。また周囲には全長20m前後、あるいはそれ未満の墳丘墓や、墳丘の認められない墓などもある。これらのことは、矢部南向遺跡周囲を中心に求心的な集落結合がおこなわれ、さらに周囲の同時期の墓には、段階的な落差が認められることから、その結合には階層差が存在したことを推測させられる。この地域は古墳時代に入ると全長100mを越える大型墳を連続と築いており、全長200mを越える巨大墳も出現する。古墳時代における地域的特質はこの時期に形成されたといえる。

古墳時代になっても平野部には多くの集落遺跡があり、周囲の丘陵部にも数多くの古墳が築かれている。中部瀬戸内地域における中枢地の様相を呈している。この様相がピークに達するのが造山古墳や作山古墳の出現する5世紀台である。この2墳の細かな時期については本墳、及び陪塚からの表採遺物や若干の調査資料から序々に明らかとなってきているが⁽¹³⁾、詳細についてはまだまだデータ不足である。

しかし、規模的には足守川流域の首長の範囲におさまるものとは思われず、岡山県全域を含む吉備地域全体の代表である大首長⁽¹⁴⁾、もしくは優の代表である大王⁽¹⁵⁾の古墳であるという意見もある。5世紀代の集落遺跡の中心は矢部南向遺跡よりもやや北の津寺遺跡周辺に移動するようであり、5世紀末から6世紀初頭にピークとなる。ところがこの時期以降、遺構・遺物の量は激減する。古墳の築成をみても5世紀末で大型古墳築造は途絶えており、いわゆる「吉備の反乱伝承」と関連づけられた政治的变化と考えられている。ただし、集落遺跡の変化は政治的理由だけでは説明できないように思われる。

古墳時代後期、6世紀後半になると多くの堅穴住居が切り合って多数検出される状況となり、大規模な集落遺跡も形成されるようになる。周囲の丘陵部には後期古墳も数多く築造され、三井谷古墳群、大崎古墳群⁽¹⁶⁾、王墓山古墳群⁽¹⁷⁾のような群集墳を形成する古墳群も多数ある。三手向原遺跡の西側にある庚申山の中腹にも5基によって構成された小古墳群がある。これら後期古墳の大半は、築かれた時期が6世紀後半から7世紀前半のごく限られた時期の所産と推測され、その築造はまさに爆発的と表現できる様相である。古墳以外にもこの時期増えるのは製鉄関連の遺跡である。中期においても鍛冶道具を副葬した全長が40mの陸庵古墳⁽¹⁸⁾や造山古墳の陪塚とされる榊山古墳があるが、集落で製鉄関連の遺構や遺物が頻繁に出土するようになるのは6世紀後半以降である。製鉄という手工業生産の地域的高揚と、後期古墳の爆発的築造は密接な関連があると思われる。

古代前期の寺院跡も多く認められ、大崎産寺のように飛鳥時代まで創建年代が遡ると思われるものもある。ただ当地域における古代寺院建立の最盛期は白鳳時代で、この時期には「吉備式瓦当文」、「水切り瓦」といわれる特徴的な形態をした軒丸瓦が分布している。前者は備中、後者は備中・備後・安芸・出雲に分布しており、氏寺を建立した在地首長層間のつながりを示している。官衛関連の遺跡は川入遺跡⁽¹⁹⁾、津寺遺跡⁽²⁰⁾、吉野口遺跡⁽²¹⁾などで検出されており、いずれも規則的な遺構の配置をしている。しかしながら郡衛、郷衛などといった施設の性格まで解明できているものはない。

古代末から中世にかけての集落遺跡の調査例は多く、該期の遺構は少しでも安定している地形上には必ず存在するといっても過言でない密度である。しかし、それらは時期によって変化しており、津寺遺跡土筆山調査区⁽²²⁾のように14世紀代から集村化するものもでてくる。そして一辺約80mの方形で、幅約50mの濠が囲む伝賢陽氏館跡の周囲にある東山遺跡では、14世紀末から15世紀にかけての

時期で、館の方向に平行する町割状の溝が検出された。おそらく該期に在地領主を中心とした新たな在地秩序が形成されはじめたことを示していると推測される。三手向原遺跡の中世集落も、これら一連の動きに対応するものと思われる。

注

- (1) 高畑知功ほか「矢部奥田遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993年
- (2) 村上幸雄「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編 1987年
- (3) 平井泰男ほか「南溝手遺跡」1『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』100 1995年
- (4) 草原孝典『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994年
- (5) 正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 1974年
- (6) 正岡睦夫ほか「後池内遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994年
浅倉秀昭ほか「矢部堀越遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993年
井上 弘ほか「黒住・雲山遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994年
- (7) 岡本寛久ほか「高塚遺跡」『岡山市埋蔵文化財報告』20 1990年
- (8) 高畑知功ほか「津寺遺跡」5『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
- (9) 江見正己ほか「足守川矢部南向遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』94 1996年
- (10) 伊東 晃ほか「上東遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 1974年
- (11) 注9
- (12) 近藤義郎『橋築弥生墳丘墓の研究』橋築刊行会 1992年
- (13) 春成秀麿「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』1983年
島崎 東「備中榑山古墳採集の遺物について」『岡山市史研究』第3号 1982年
村上幸雄・前角和男「折敷山遺跡・雲上山11号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
1993年
宇垣匡雅「造山古墳前方部所在の石棺について」『古代吉備』第15集 1993年
安川 満「造山第4号古墳」岡山市教育委員会 1998年
安川 満「造山第2号古墳」岡山市教育委員会 2000年
- (14) 西川 宏「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』1964年
- (15) 出宮徳尚「吉備津彦伝承と造山古墳」『創立三〇周年記念水内昌康名誉会長頌寿記念誌上語る会吉備 されど吉備』古代吉備国を語る会 2000年
- (16) 小郷利幸ほか「岡山市足守地域史研究（2）」『古代吉備』第16集 1994年
- (17) 間壁忠彦ほか「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』10 1974年
- (18) 鎌木義昌ほか『総社市随庵古墳』総社市教育委員会 1965年
- (19) 注5
- (20) 注8
- (21) 草原孝典ほか『吉野口遺跡』岡山市教育委員会 1997年
- (22) 正岡睦夫ほか「津寺遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年

第II章 調査の経過

三手向原遺跡は、足守川、前川、血吸川などの中・小河川の合流地点のすぐ南側に位置しており比較的不安定な地形上にあるといえる。しかし、付近には古墳時代以降の集落遺跡である三手（庄内幼稚園）遺跡や、山陽道建設に伴って発掘調査された三手遺跡などがあり津寺から上東にかけての密床はないものの遺跡の分布をある程度認めることができる。そして当遺跡の南約1kmには、全長350mの造山古墳をはじめとした大型古墳が築かれており、古代における吉備地域の中枢地であったことがうかがわれる。

岡山市三手向原に、最終処分場が環境事業部によって設定された。用地が三手遺跡の推定範囲に含まれていることから、この決定に伴って環境事業部施設課から岡山市教育委員会文化課長宛に平成4年9月1日付けで、当用地理蔵文化財等の存在状況確認調査依頼がなされた。この依頼を受けた文化課は、当該地に遺跡が埋没している可能性があることから重機による試掘の必要性を指示し、文化課職員の立会に基づいて建設予定地で16ヶ所の試掘を行い、浅い所で現水田耕土下約20cmで中世および古墳時代の土器を含む包含層が存在することを確認した。その結果から設計変更等により遺跡の保存を図るのは不可能であることが判明した。このため文化課は平成4年10月14日付けで当該地が埋蔵文化財包蔵地にあり、文化財保護法の適用を受け、処分場建設の際には記録保存による事前の行政的措置の必要を旨の試掘調査に関する回答を環境事業部施設課に通知し、その実施に対する両者の連絡協議を要請した。文化課と環境事業部施設課で協議を重ねた結果、記録保存を平成5年度から実施することで合意に達した。発掘調査の着手に先立ち平成5年7月13日付けで岡山市長から文化庁長官宛に文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出され、続いて平成5年7月16日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。

以上の経緯の基に、三手最終処分場建設予定地の発掘調査は平成5年9月20日から平成7年9月30日にかけて実施された。調査面積は、10,600㎡である。

発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 奥山 桂

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）
狩野 久（岡山大学教授）
西川 宏（山陽学園教諭）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（岡山市文化財保護審議会副会長）

発掘調査担当者 青山 淳（岡山市教育委員会文化課長）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課専門監）
根木 修（岡山市教育委員会文化課長補佐）
神谷正義（岡山市教育委員会文化課主任）

（調査員） 草原孝典（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）
河田健司（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）

(経理員) 沼 智恵(岡山市教育委員会文化課主事)

発掘調査現場作業員 青木敏夫、赤木美雪、板野輝男、板野信代、大満神、岡田正人、黒宮文子、小西愿、小山笑子、杉原牧太郎、坪井美智子、天場勉、中山政太郎、長門卓正、難波俊一、二垣慶子、則武福市、蜂谷由太郎、林銀次郎、福永富貴子、牧野須美子、三垣久江、森脇和人、横田順一、渡辺春枝

発掘調査現場補助員 木村真紀

発掘調査現場事務員 戸田三枝子

出土物整理事務員 山元尚子

調査にあたり、対策委員の先生方に、多大なご指導・ご助言をいただいた。また、片桐孝浩、亀山行雄、佐藤竜馬、武田恭彰、弘田和司、福田正継、森格也、山本悦世、山元敏裕の諸氏には、諸々のご教示・ご助言を頂いた。

諸々にご助勢下さった方々に深謝する次第である。

経過と概要

調査区は山陽自動車道と足守川に挟まれた地点であり、山陽自動車道建設に伴う発掘調査では古墳時代や中世の集落が検出されており、当調査区でも同様な遺構が検出されることが予想された。しかしながら、現況の地表土には土器の散布がほとんど見られず、遺構密度はそれ程でないように思われた。

調査は敷地南側(A区)から行った。排土や敷地の形状から南側の三角形の敷地をA区、その北側の

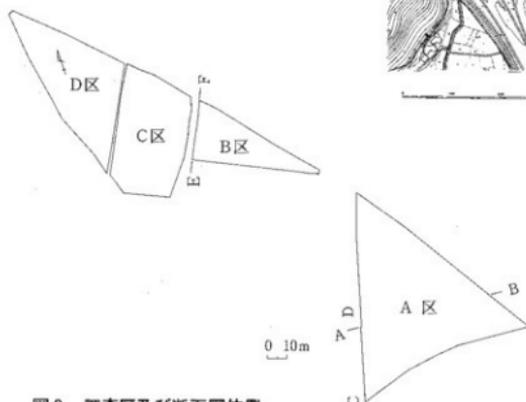


図3 調査区及び断面図位置

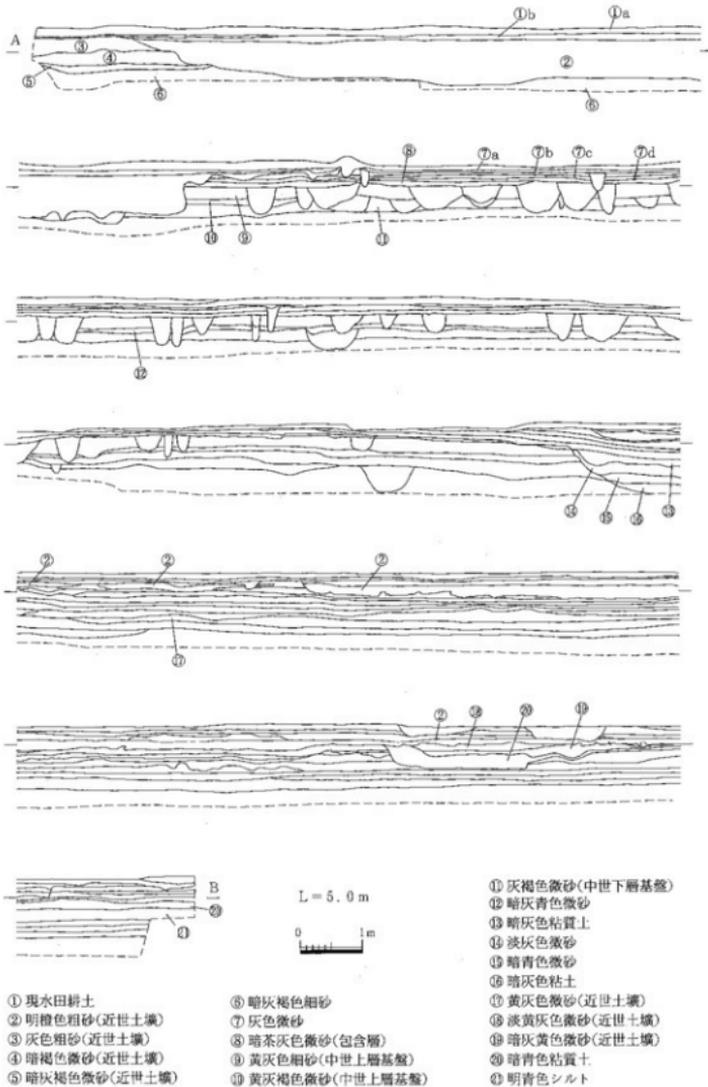


図4 A区土層断面(1)

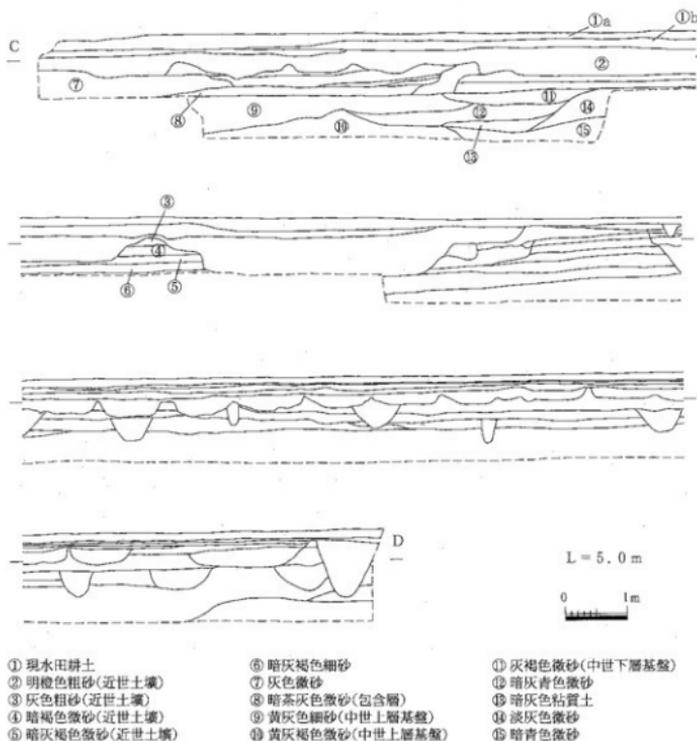


図5 A区土層断面(2)

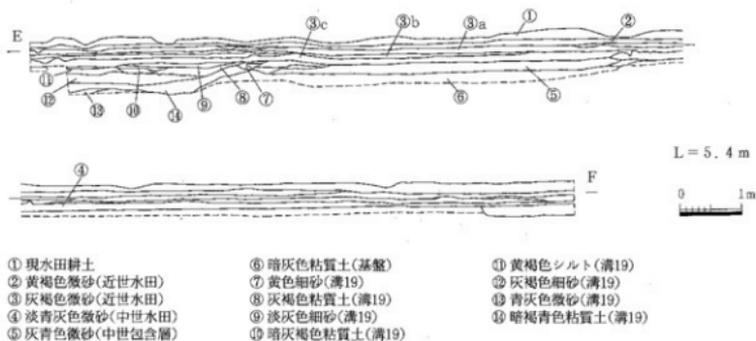


図6 B区土層断面

三角形の敷地をB区、その北側の平行四辺形の敷地をC区、北端の三角形の敷地をD区として設定した(図3)。調査区全体としては南側と北側の2つの微高地によって構成されており、A区が南側微高地の南半、B・C・D区が北側微高地に相当する。土層関係は近世の土取り穴によって攪乱されている部分はその埋没過程などにより複雑な様相を呈しているが、基本的には中世と古墳時代の遺構面の上面は近世までの水田層となっている(図4・5・6)。

A区、南側微高地は①層の基盤層に古墳時代と12世紀末(中世下層)の遺構が形成され、その上面に厚さ0.1~0.2mの⑨層がA区南半に分布する。この⑨層が分布する範囲に13世紀の遺構面が形成されている。このため⑨層は13世紀の遺構面の造成層の可能性がある。古墳時代の遺構は竪穴住居9棟と土壇で、竪穴住居は調査区西側の調査区外へものびており、微高地全体としてはもう少し住居数は存在するものと思われる。土壇は主に調査区北端部に集中しており、その形状や副葬品のありようから土壇墓群であったと推測される。中世下層面は掘立柱建物2棟、井戸、土壇でそれぞれの配置が規則的であることや時期幅も短いことから中世集落の1つのパターンを示していると思われる。中世上層面でも掘立柱建物が2棟検出されているが、庇を付属させるなど床面積が拡大しており遺物の出土量も多い。

B・C・D区、北側微高地も基本的な土層関係は同じだが、集落としての遺構面は13世紀前半の一面だけで、その後水田化されている。B・C・D区の調査区の成果と山陽自動車道の発掘成果とを合わせると、北側微高地全体の様相がほぼ明らかとなった。古墳時代には北半で竪穴住居と若干の遺構・遺物が検出されたほかは南半では遺構は全く検出されなかった。集落形成が活発になるのは13世紀前半だけである。この時期の集落の一角では土師器焼成窯が検出されており、土器作りもした村であったことが分かる。

近世以降は水田化されているが、各調査区からは近世後半の土取り穴と思われる土壇も検出されている。

発掘日誌(抄)

- | | |
|-----------|------------------|
| 平成5年9月20日 | 発掘器材の搬入・A区表土掘り下げ |
| 平成6年2月14日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| 6月13日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| 9月13日 | A区終了、B区表土掘り下げ |
| 9月20日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| 平成7年6月6日 | B区終了、C区表土掘り下げ |
| 6月28日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| 9月6日 | D区表土掘り下げ |
| 9月27日 | 発掘調査対策委員会開催 |
| 9月30日 | 発掘器材撤去、発掘調査終了 |

第三章 遺構と遺物

近世から古墳時代にかけての遺構が検出され、それぞれの層序関係は前章を参照されたいが、ここでは各遺構とそこから出土した遺物の概要を時期ごとに説明する。

I. 古墳時代 (図8)

古墳時代の遺構は、A区のみで検出された。A区で検出された微高地は、東西約50m、南北約90mの紡錘形と推定される。この微高地の中央に半円弧状に並んで竪穴住居が9棟検出され、その北側の微高地端部付近には、長楕円形の土壌がまとまって検出された。土壌はその形状から墓墳と推測される。

竪穴住居 1 (図7・9・10・11・12・13)

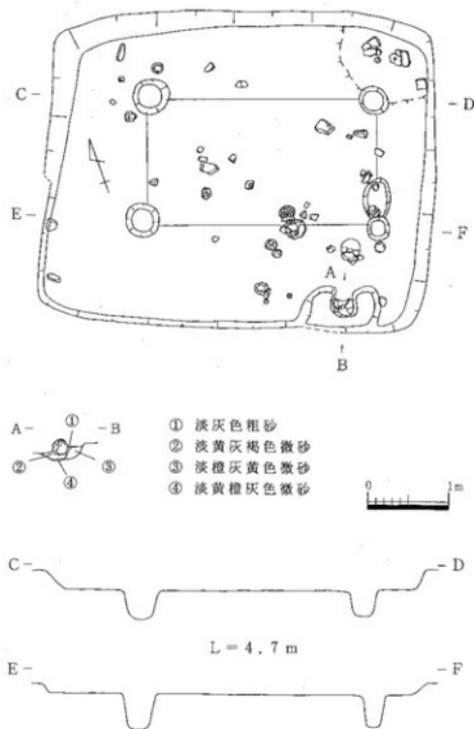


図7 竪穴住居 1 実測図

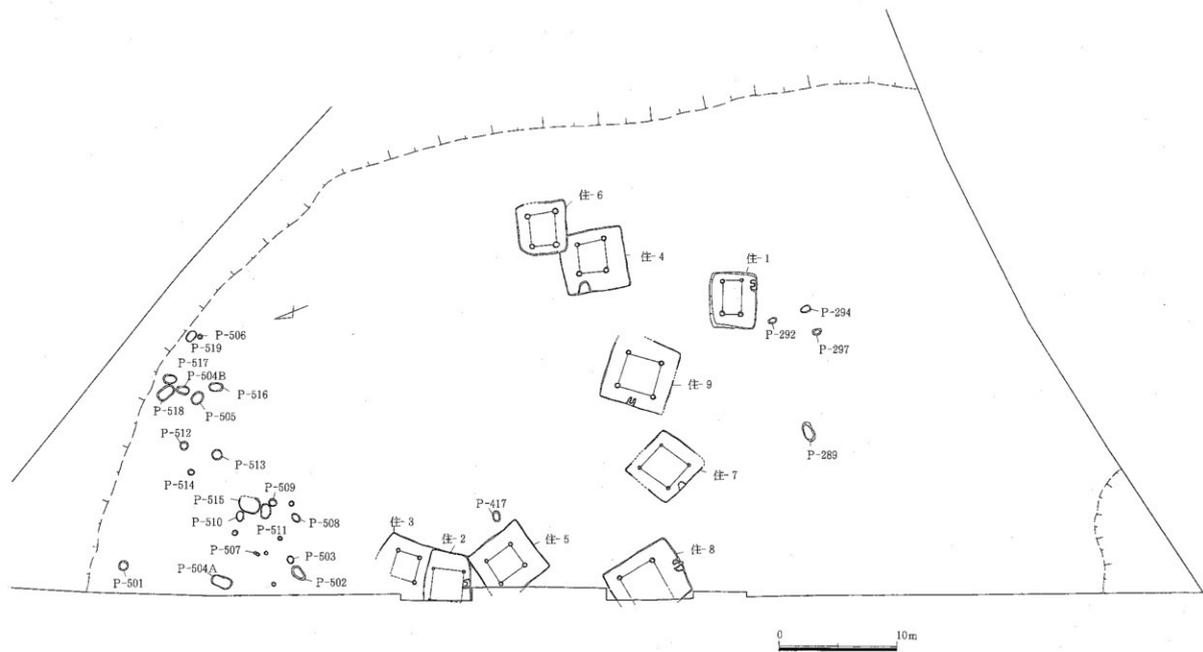


图8 A区古墳時代遺構配置図

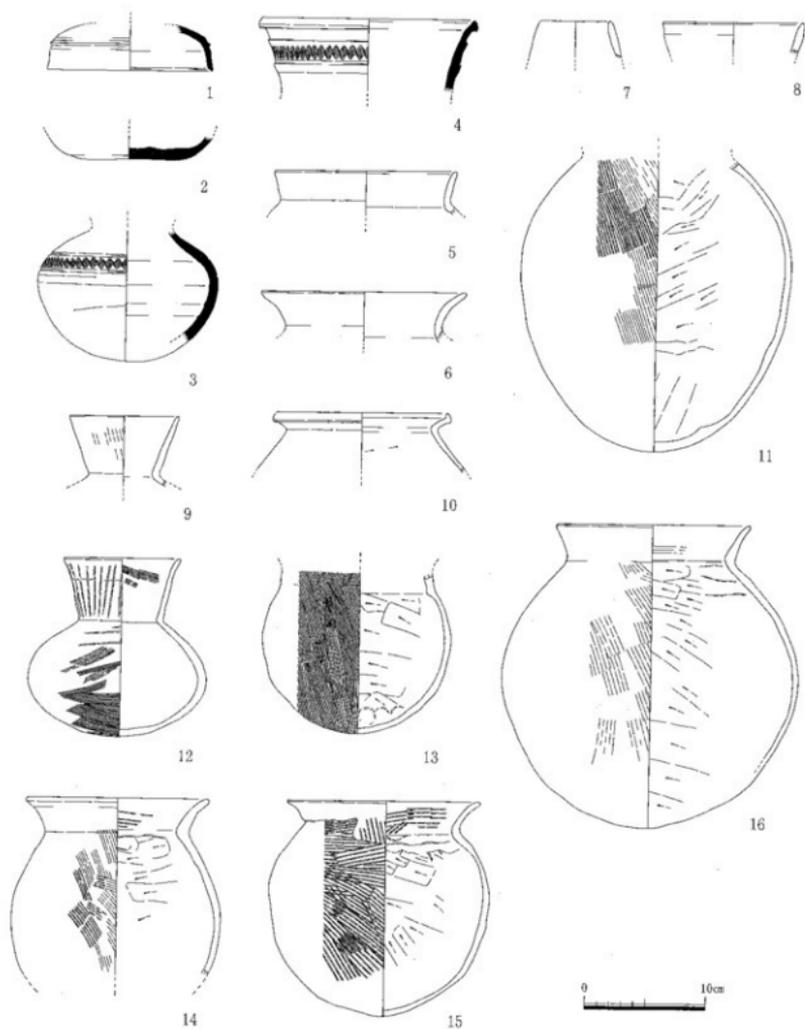


図9 竪穴住居1出土遺物(1)

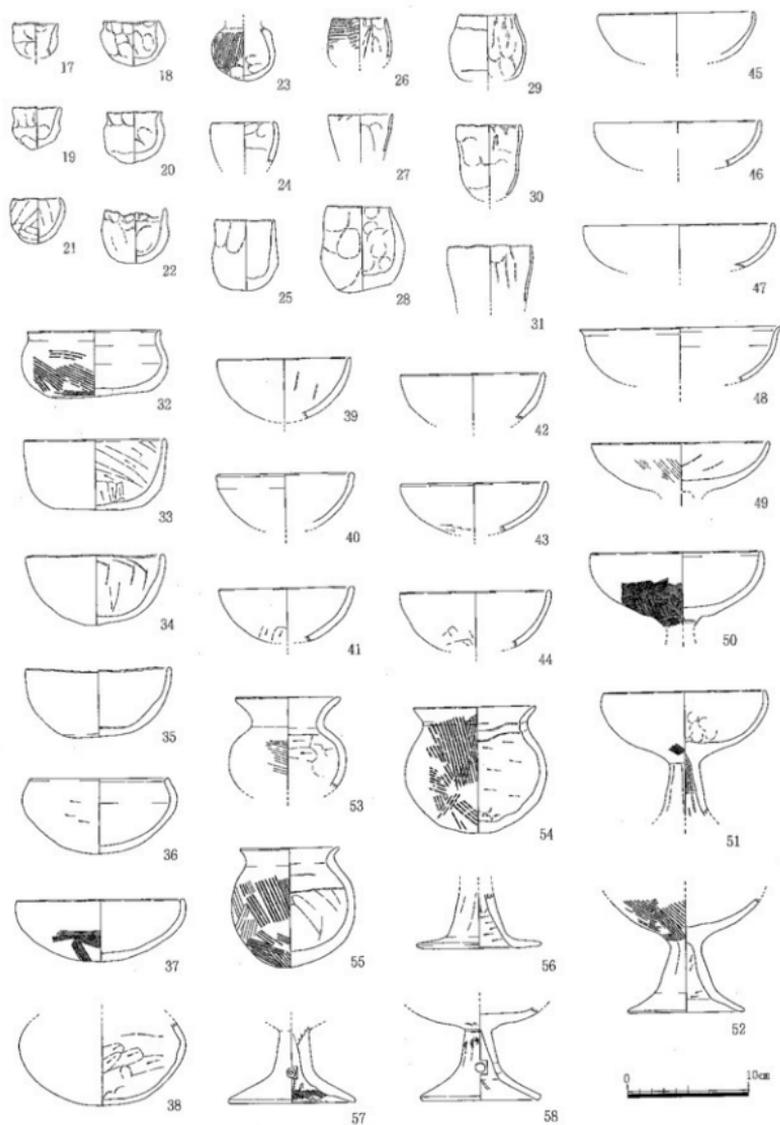
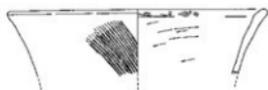


図10 整穴住居1出土遺物(2)

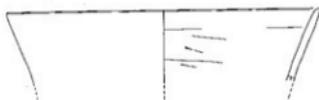
A区南端で検出された竪穴住居で、東西4.6m、南北4.0mの方形の平面プランをしており、柱穴は4つ検出された。検出面は4.6m付近で、床面までの深さは0.2mほどである。床面は北東コーナー付近が、周辺の床面よりも5cmぐらい径1mの範囲で高くなっている。柱穴の底レベルは4.3m付近である。南壁の東側コーナー付近にはカマドが付設されている。カマドは燃焼部が、長さ40cm、幅30cmで、袖の長さが短い。カマド内には土師器甕11が横倒した状態で出土しているが、これは床面より浮いていることから、支脚でなく使用している状態で埋没していたものと考えられる。甕11を除去した下から長さ14cm、幅6cmの河原石が立った状態で出土しており、これが支脚と考えられ、甕11はこの上かけられたものであったと思われる。支脚周辺の床面は焼けて若干焼土化している。

遺物は床面付近を中心に比較的多くの土師器と須恵器が出土している。個体数のみで比較すると、土師器が58点で、須恵器が4点と、圧倒的に土師器の方が多い。土師器には煮沸具から供膳具まで認められ、土師器の一部補完としての須恵器という使用形態であったことがうかがわれる。

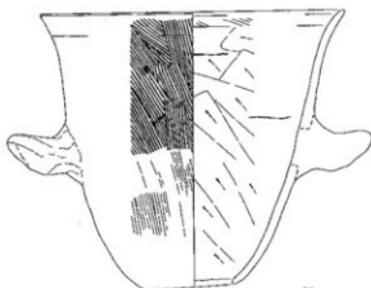
出土土器のうち完形、及び完形に近い土器の出土状況は、まずカマドの正面には甕16があり、同西側には甕13と手ずくね18・19・21が床面上で出土した。さらに甕16の



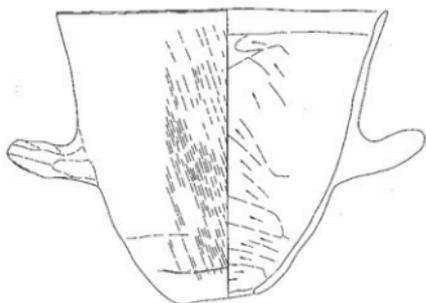
59



60



61



62



0 5 cm

図12 甕15の内部出土状況断面

図11 竪穴住居1出土遺物(3)

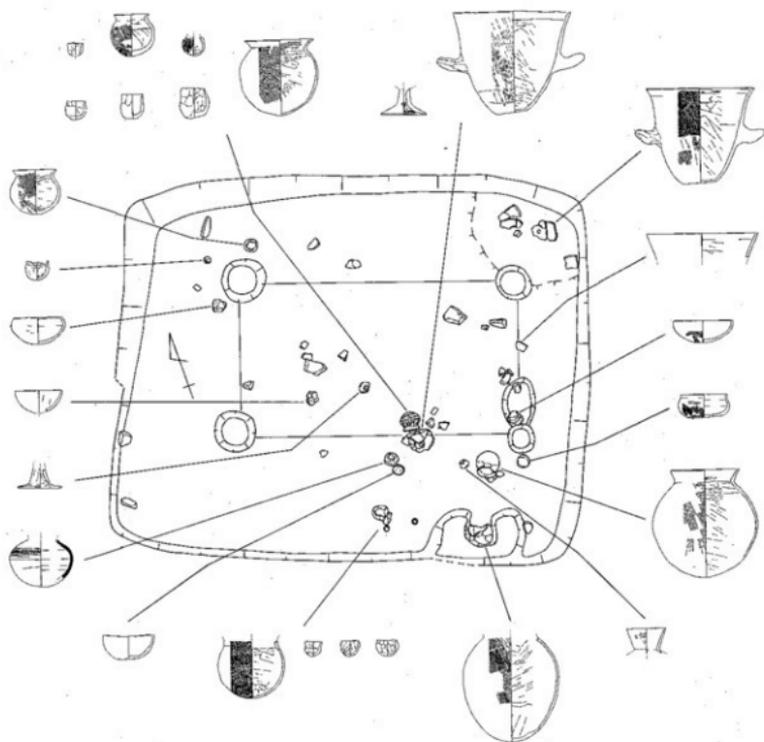


図13 竪穴住居1 土器出土状況

北側には甕62と甕15がある。甕15の中には手ずくね17・20・23・25・28をまざる入れてあり、その上に壺55が入れてあった(図12)。これは土器収納の1つの形態を示すものと思われる。そのほか周囲には須恵器の鎌3や、鉢32・35・37がカマドを取り囲むような位置から出土した。大雑把なとらえ方として、カマドを中心に甕や壺などの煮沸具があり、その周辺に近接して鉢などの供膳具が分布しているとみられる。ただ、高杯については住居中央付近で出土したものが多く、このほかカマドの正面にあたる北壁の東側コーナー付近から甕61が出土している。これら床面より出土した土器の配置がある程度当時の状況を反映しているとするならば、カマド周辺は調理に使用している土器の様子を示していると考えられ、一方で常時使用しない甕61のような、いわばストックのような煮沸具も屋内には存在したと考えられる。このほか製塩土器も埋土か床面で出土しており、当時の海岸線との関係から当遺跡へ持ち込まれたものと考えられる。

竪穴住居1の時期は、出土している須恵器から田辺編年のTK47、もしくはTK23に相当し、土器の形態も矛盾しない。

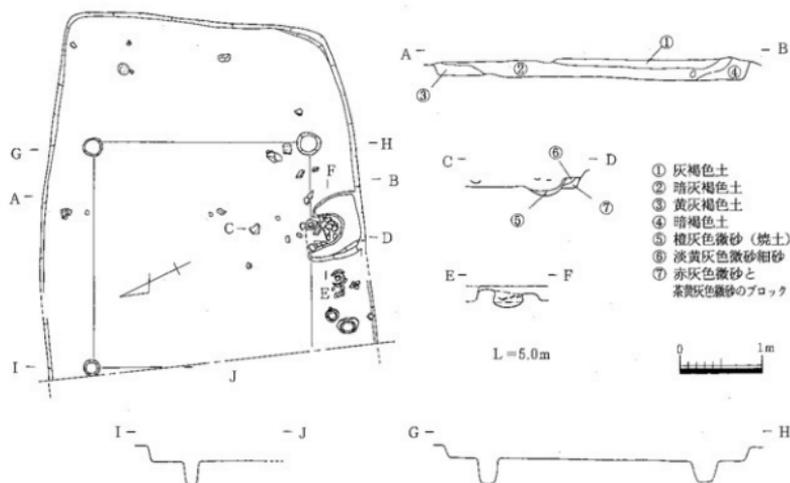


図14 竪穴住居2実測図

竪穴住居2 (図14・15)

A区中央北側で検出された竪穴住居で、北端部は調査区外のため明らかではない。南側では竪穴住居3を切っている。南北4.0m、東西4.1m以上の方形の平面プランで柱穴は3つ検出されたが、調査区外にもう1つ存在すると考えられる。検出面は4.8m付近で、床面までの深さは0.2mほどである。柱穴の底レベルは4.4m付近である。南壁にはカマドが付設されており、住居の平面形が正方形に近いとするならば、南壁のほぼ中央付近ということになる。カマドの燃焼部の長さは40cm、幅は30cmで、袖の長さは70cmである。カマド燃焼部からは甕70・71・75・76が検出されており、それらは床面より10cmほど浮いた位置にあることから、支脚に使用されていたのではなく、使用中の状態もしくは住居廃絶後に入ったものと思われる。カマドの西側には甕74・76・77が床面上で検出されており、この住居のカマドの周辺には比較的多くの甕が集中する傾向にある。

遺物はカマド周辺と北側に分かれて検出された。カマド周辺については甕以外には埴輪79・80と杯身66があり、ほかは北側から出土した。北側から出土した遺物のうち、杯蓋63・64・65・68は床面から10mほど浮いた位置で検出されており、当住居によって削平された竪穴住居3に属する遺物である可能性が高い。

竪穴住居2の時期は、床面から出土した須恵器から田辺編年のTK10に相当する。

竪穴住居3 (図16・17)

竪穴住居2により、南端部を削平されている。また北側も近世の土壌により削平されており、詳細な全形はわからないが、おおよそ一辺4.5mほどの方形の平面形と推測される。柱穴は3つ検出されたが、本来は4本柱と考えられる。

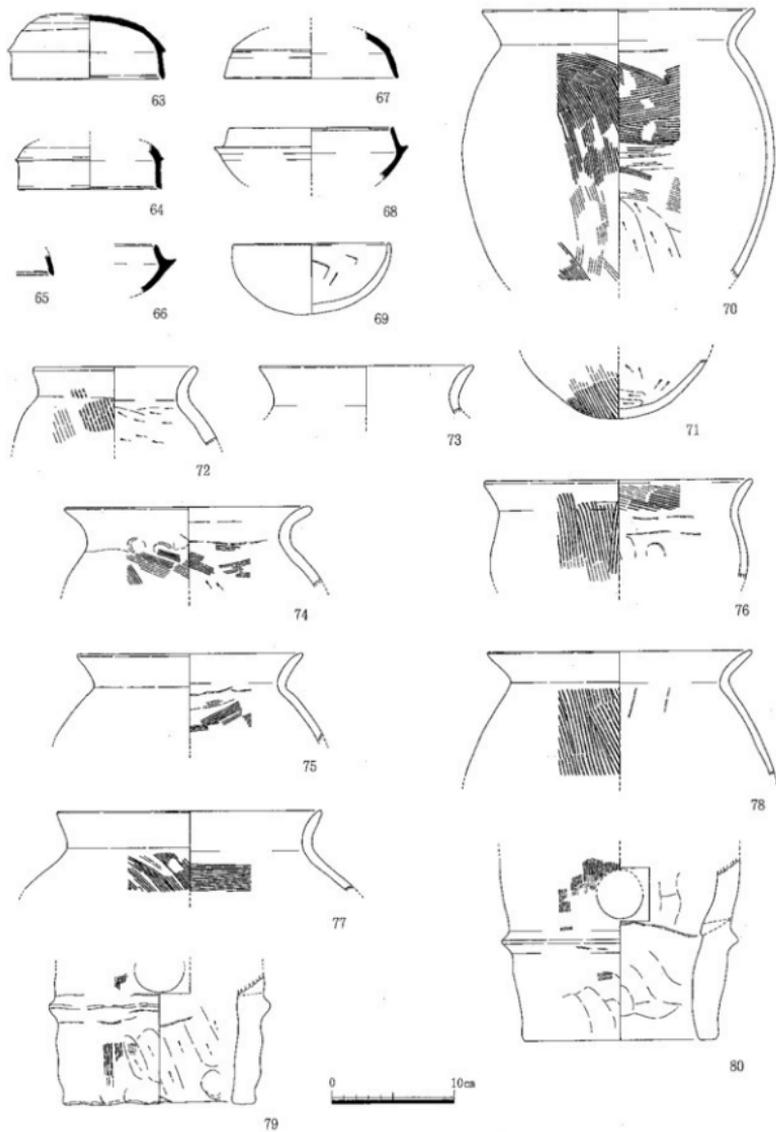


図15 竪穴住居2出土遺物

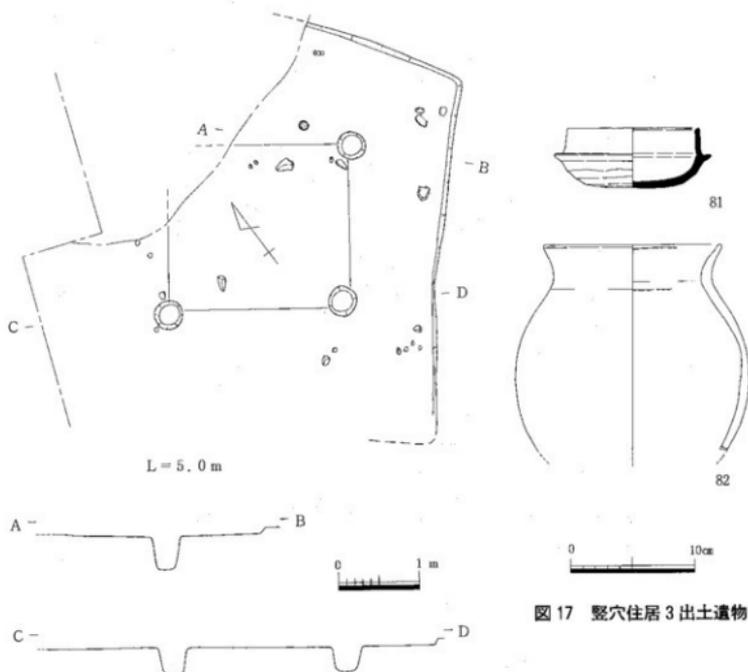


図17 竪穴住居3出土遺物

図16 竪穴住居3実測図

検出面は4.6m付近で、床面の深さは0.1mほどである。柱穴の底レベルは4.5m付近である。遺物は床面から出土しており、杯身81は完形で北側から出土した。この杯身の口縁部は底辺5cmの逆三角形に打ち欠いており、呪術の意味もしくは把手としての意味なども推測される。

竪穴住居2から出土した須恵器のうち、当住居からの混入と考えられる須恵器と、この杯身81とは大体同じ時期である。

竪穴住居3の時期は、出土した須恵器から田辺編年のTK47からTK23に相当する。

竪穴住居4 (図18・19)

A区中央東側で検出された竪穴住居で、東西5.3m、南北5.5mの方形の平面プランをしており、柱穴は4つ検出された。北東コーナー付近は竪穴住居6によって削平を受けている。検出面は4.9m付近で、床面までの深さは0.2mほどである。柱穴の底レベルは4.55m付近である。西壁の北側にはカマドが付設されている。カマドは残存状態が良くないため詳細は明確でないが、床面から0.1mほど台形の平面形に地山を削り残した上にカマドを構築しており、燃焼部の床面のみが検出され、袖部についてはよくわからなかった。埋土は基本的に3層で、住居廃絶後序々に埋没していったことを示している。

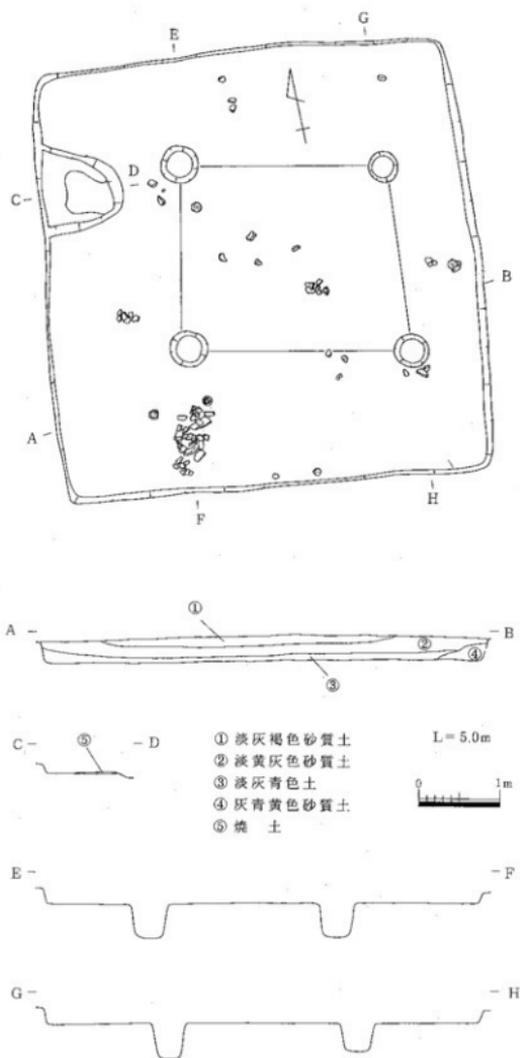


図18 竪穴住居4実測図

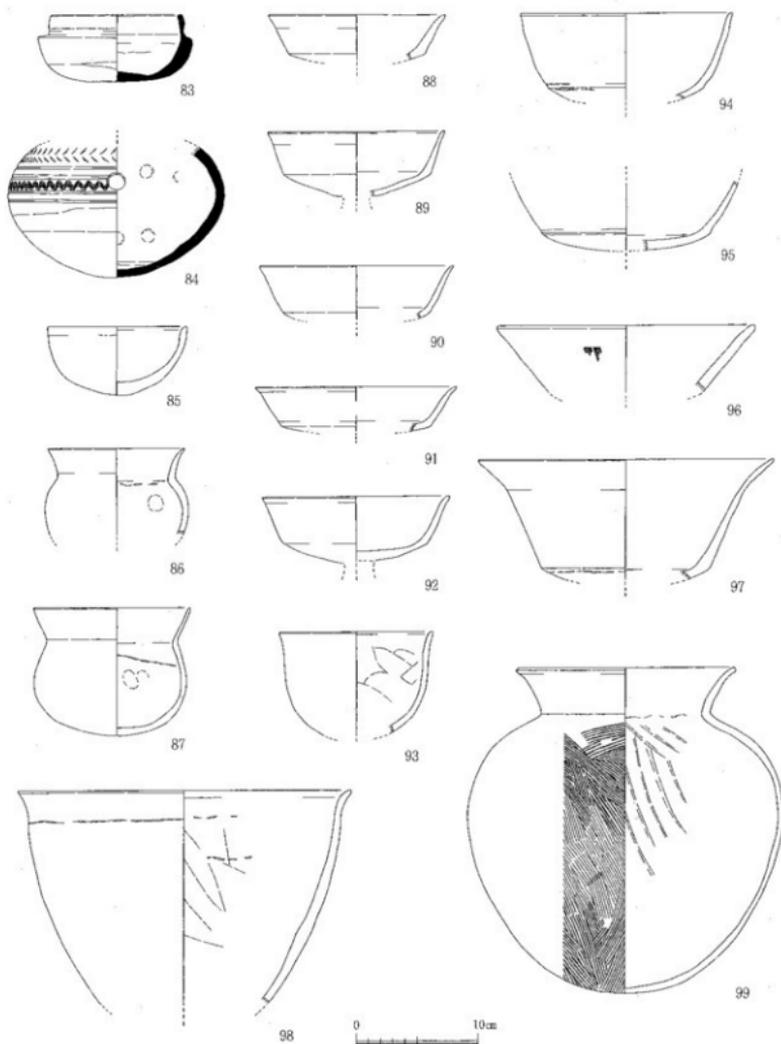


图19 整穴住居4出土遺物

第三章 遺構と遺物

遺物は埋土上層からはほとんど出土せず、床面および床面付近で出土した。甕99、杯83、壺87は南西コーナーやや東寄りの位置でかたまつて出土し、埴84は住居の中央で出土した。カマドの正面からは鉢85が出土した。高杯は比較的ランダムに分布する傾向がうかがわれた。

竪穴住居4の時期は、杯83が独特の形態であることや、埴84が大型の部類に入ることから田辺編年のTK208に相当すると思われる。土師器についても椀形の高杯がないことや、甕の胴部最大径が上半にあることから、同期に属するものと思われる。

竪穴住居5 (図20・21)

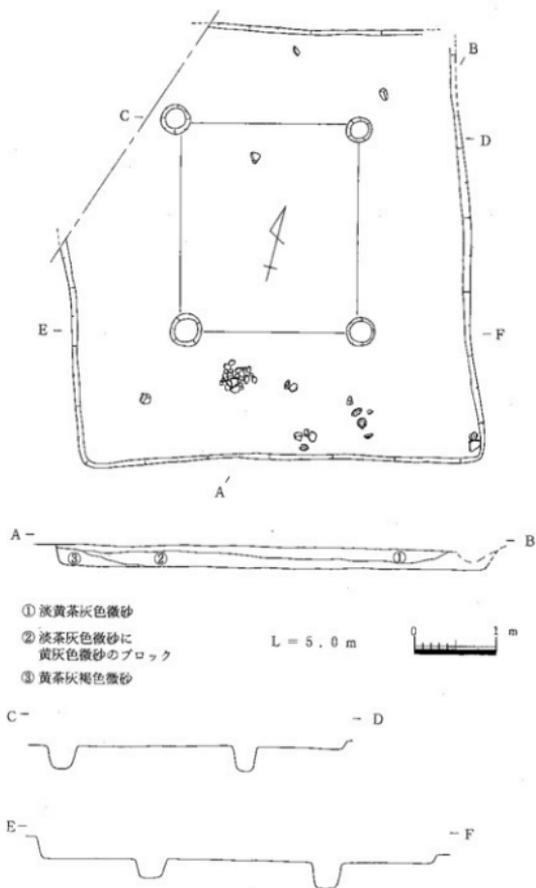


図20 竪穴住居5実測図

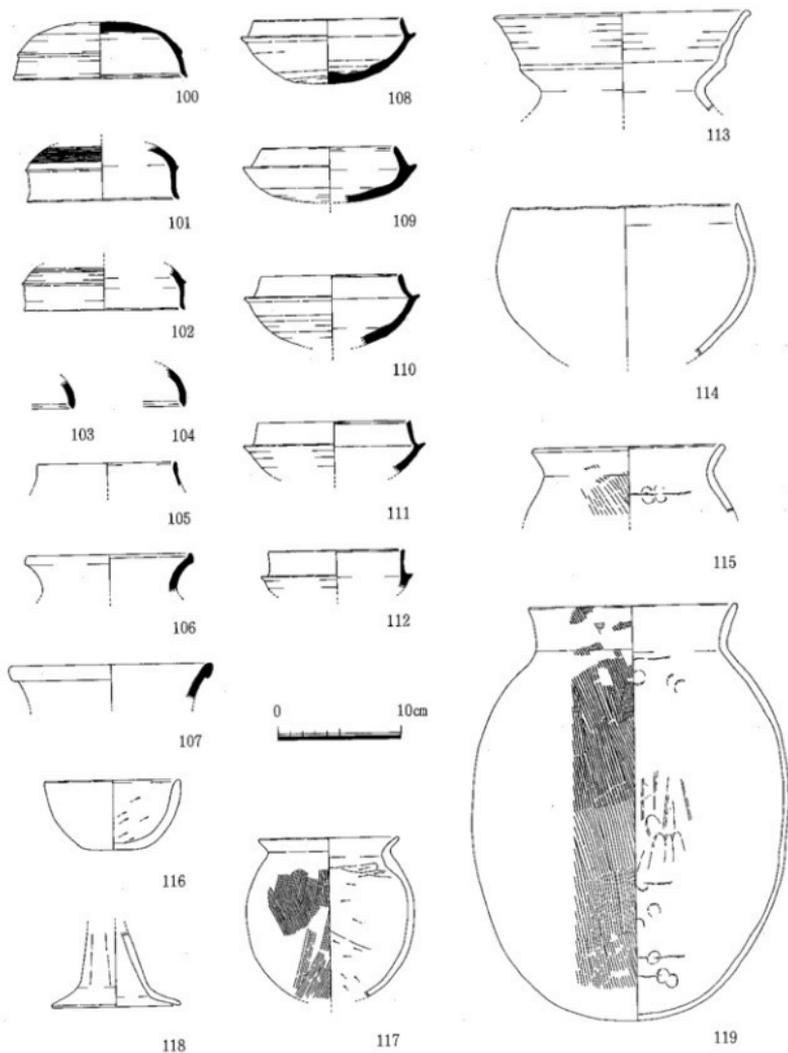


図21 竪穴住居5出土遺物

竪穴住居 2 に南接した位置で検出された竪穴住居で、東西5.0m、南北5.3mの方形の平面プランをしており、柱穴は4つ検出された。検出面は4.9m付近で、床面の深さは0.25m付近である。カマドは検出できなかったが北西部分が調査区外へのびており、そこへ付設されている可能性がある。

遺物の大部分は南半から出土した。そのうち杯101・102・109、壺105・106・107、土師器壺113が埋土から出土し、ほかは床面上から出土した。

竪穴住居 5 の時期は、出土している須恵器が田辺編年のMT15に相当し、土師器甕胴部も長胴化する傾向にあることから、須恵器の時期と矛盾しないと思われる。

竪穴住居 6 (図22・23)

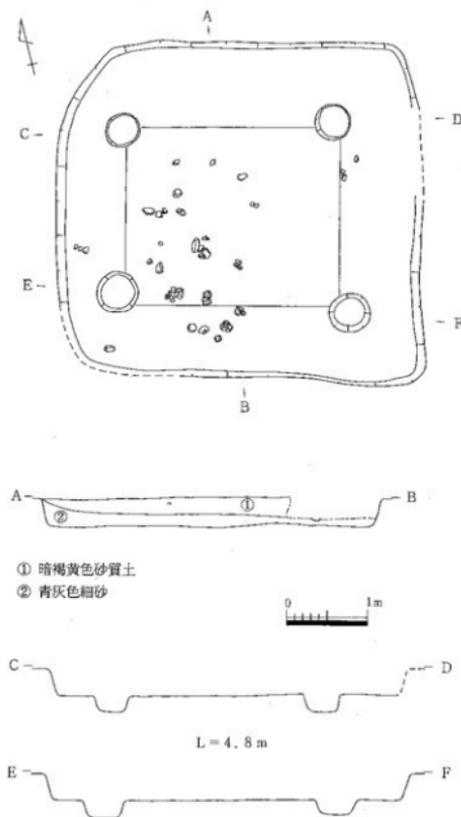


図 22 竪穴住居 6 実測図

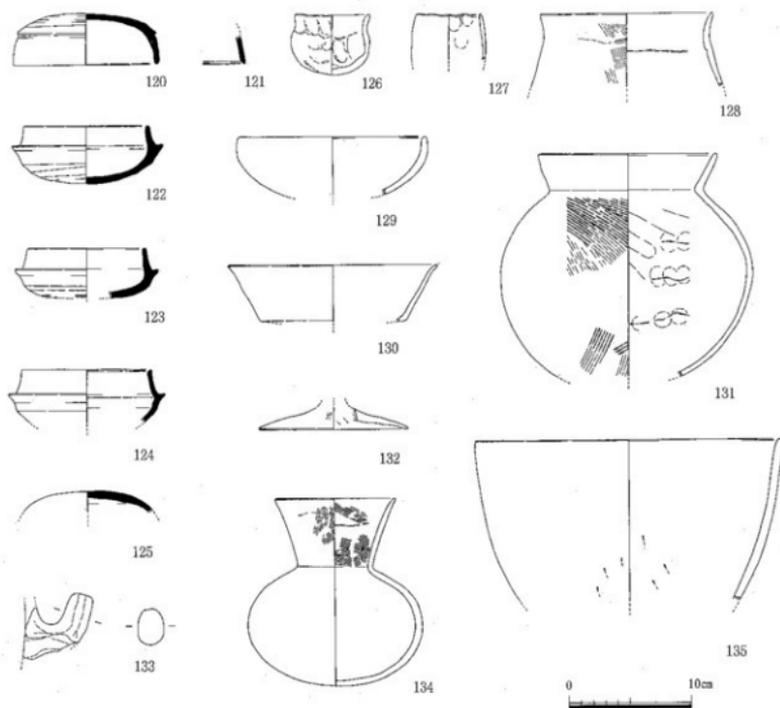


図 23 竪穴住居 6 出土遺物

A区中央やや東寄りで検出された竪穴住居で、近世の土壌により部分的に削平されている。東西4.5m、南北4.1mの方形の平面形をしており、検出面は4.8m付近で、深さは0.3mほどである。柱穴は4つ検出されており、底レベルは4.2m付近である。カマドは検出されなかったが、削平されている部分に存在していた可能性はある。埋土は2層で特徴的な土質でなく、序々に埋没したことがうかがわれる。

遺物は中央付近から南側にかけて分布しており、南側には完形の土器が多い傾向にある。杯120・122・123・124と壺134、甕131、手ずくね126は、南側柱穴間の中央付近の床面でまとまって出土した。また、埋土からは製塩土器127も出土している。

竪穴住居 7 (図24・25)

A区中央付近で検出された竪穴住居で、部分的には近世の遺構によって削平を受けている。東西5.0m、南北4.6mの方形の平面形をしており、検出面は4.7m付近で、深さは0.3mほどである。柱穴は4つが検出されており、底レベルは4.2m付近である。南壁の中央やや西寄りには底辺が0.7m、高さが0.5m

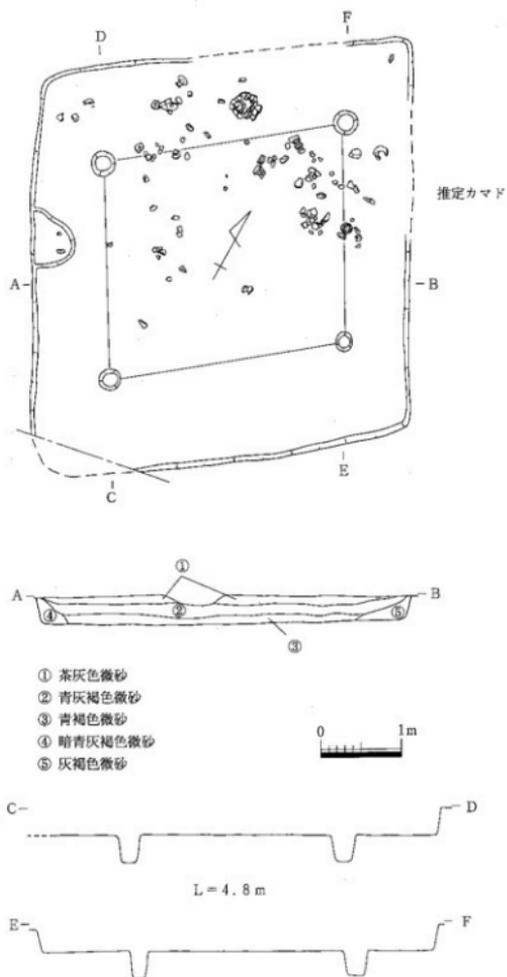


図24 竪穴住居7実測図

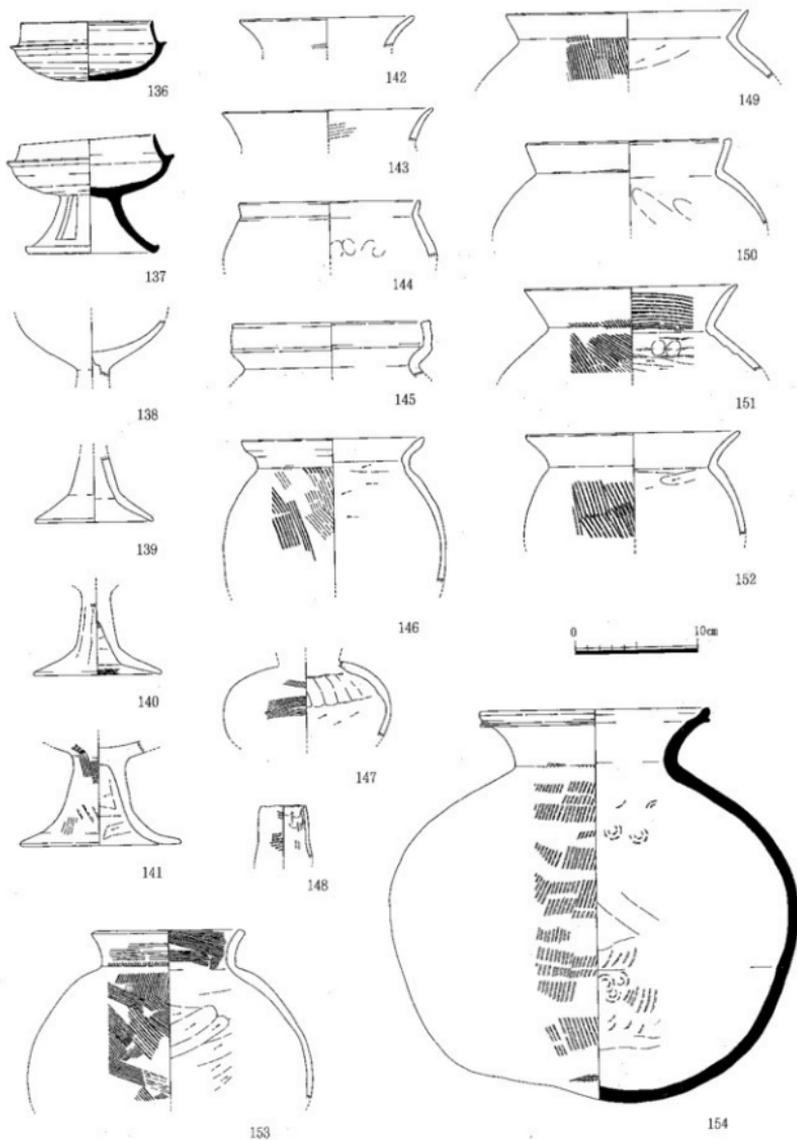


図25 整穴住居7出土遺物

の逆三角形をした高い部分を削り残している。その反対側にあたる北壁の中央付近は、削平を受けているために残存状況はよくないが、付近に焼土痕が認められることからカマドが付設されていた可能性がある。

遺物はカマドが想定される付近の床面から甕142・143・144・146・149・151・152、杯身136、有蓋高杯137、製塩土器148が出土した。西壁中央付近の床面から壺154が完形で出土し、その西からは高杯138・139・140・141が出土した。

竪穴住居7の時期は、出土している須恵器から若干古相の要素も認められるが、大体田辺編年MT15に相当する。

竪穴住居8 (図26・27)

A区中央の西側で検出された竪穴住居で、北西部分は調査区外へ出るため不明である。東西5.3m、南北6.5mの方形の平面形で、検出面は4.7m付近である。深さは検出面より0.3mほどである。柱穴は東壁に平行して2つ検出されており、全体のバランスから考えて4本存在したものと考えられる。柱穴の底レベルは4.2m付近である。南壁中央付近にはカマドが付設されている。カマドは燃焼部の長さが50cm、幅40cmで、袖の長さが80cmである。煙道は20cmほど確認され、短いタイプのもと考えられる。燃焼部の中央では高杯脚部158が立った状態で出土しており、これが支脚と考えられる。この住居は焼失火屋で支柱などは残存していなかったが住居中央から放射状にのびる垂木が残存していた。垂木個々の残存状態は決して良好なものとは言い難いが、大体の傾向として径6～8cmの材を用いており、8～15cm間隔で配されていたようである。

遺物は住居中央付近から甕162・163・164・165・168が出土し、北壁の正面からは杯155、高杯159、壺160、鉢161が出土した。

竪穴住居8の時期は、出土している須恵器から田辺編年のTK47からTK23に相当する。

竪穴住居9 (図28・29)

A区中央付近で検出された竪穴住居で、部分的に近世土壌により削平を受けている。東西5.3m、南北5.8mの方形の平面プランをしており、柱穴は4つ検出された。検出面は4.8m付近で、床面までの深さは0.25mほどである。柱穴の底レベルは4.2m付近である。西壁中央付近にはカマドが付設されており、燃焼部の長さが40cm、幅25cmで、袖の長さは70cmである。カマドの燃焼部内には支脚は認められなかったが、高杯187・188が入れてあった。高杯188は完形であり高杯187も脚部以外は完形である。これらはカマド廃絶期における祭祀に使用された土器とも考えられる。カマドの南に接する位置からは碗184が出土している。カマドの南1.5m付近の床面から甕175が出土しているが、ほかの甕はカマドの正面にあたる東壁付近で出土している。

遺物はカマド周辺と東壁付近に分かれる傾向にあり、杯170、碗171、手づくね185・186は東壁付近から散在的に出土した。

竪穴住居9の時期は、出土している須恵器のうち、かなり古相を示しているものもあるが、最も新しいものからするとTK208に相当する。したがって竪穴住居9は検出された住居中、竪穴住居4と同じく最も古い時期といえる。

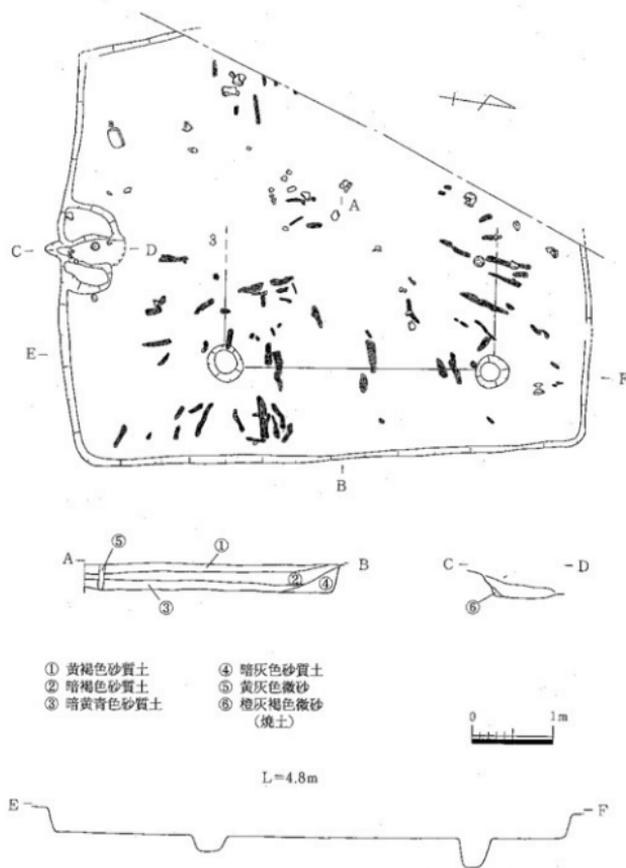


図26 整穴住居 8 実測図

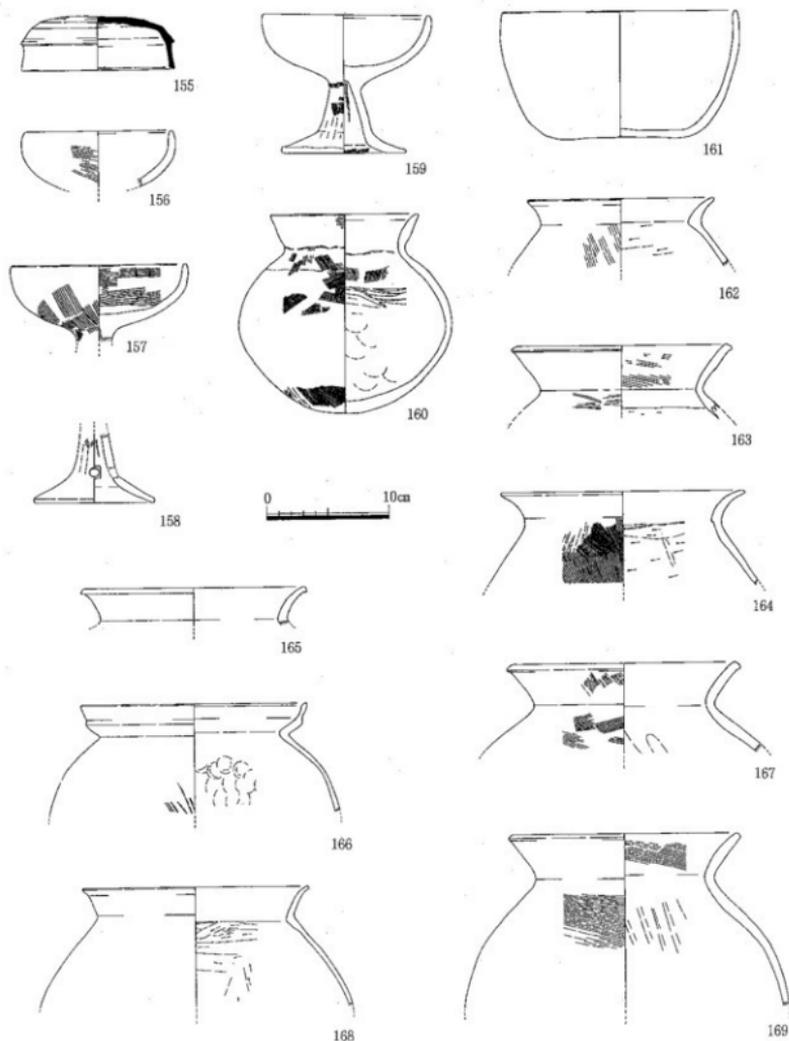


図27 竪穴住居8出土遺物

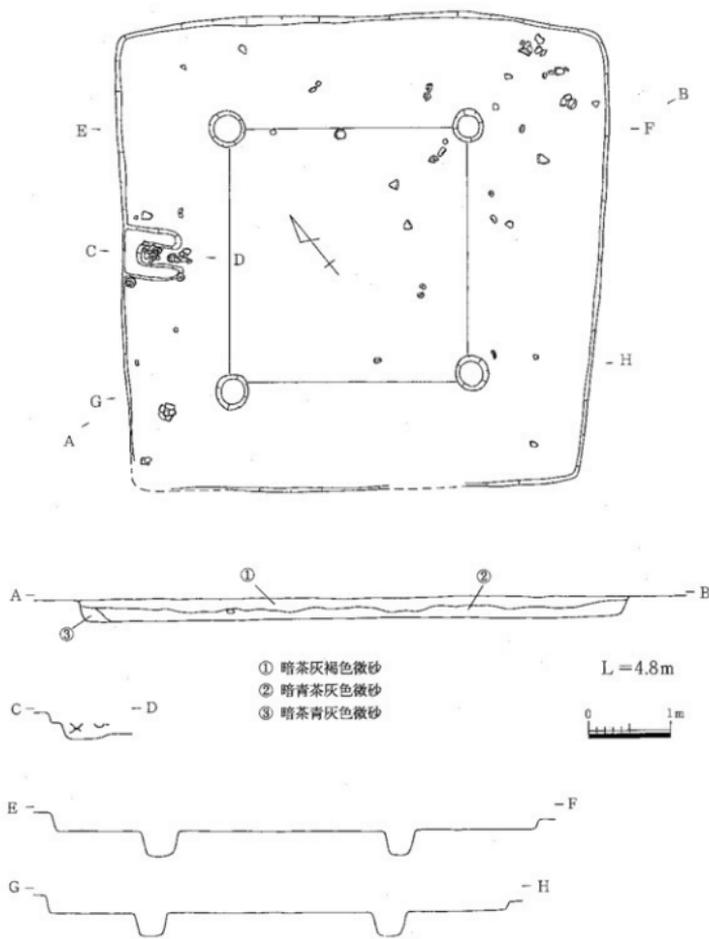


図28 竪穴住居9実測図

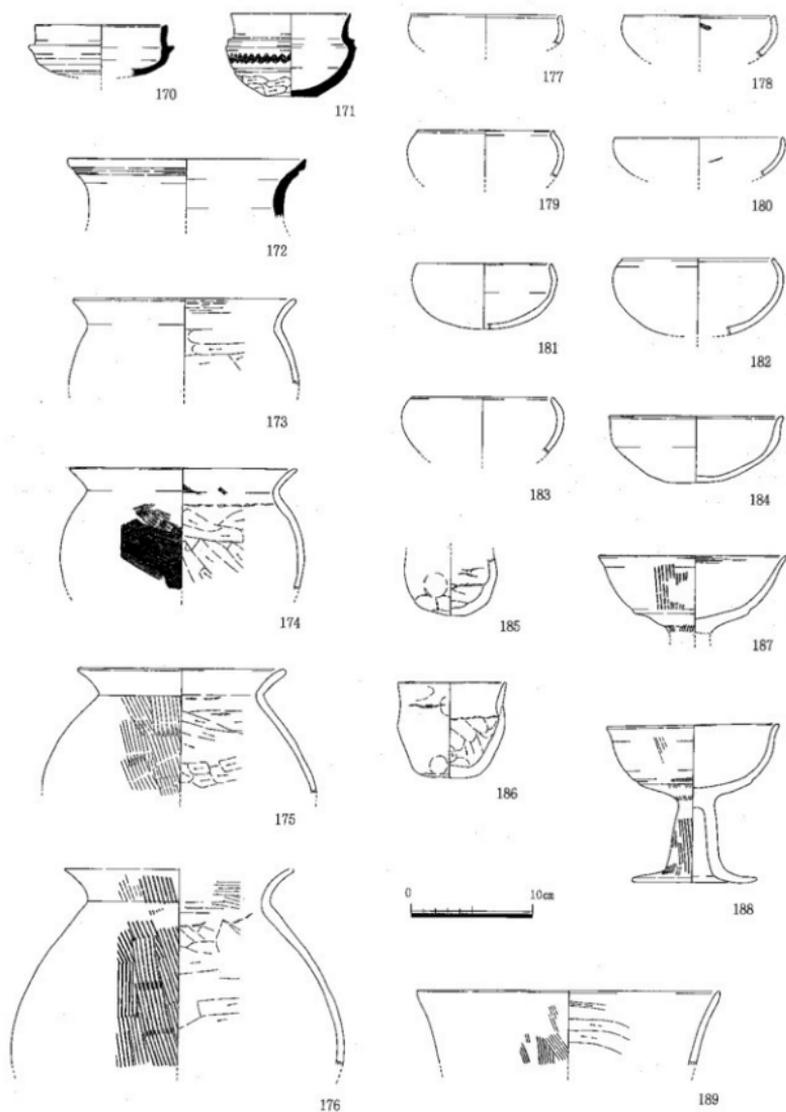


图29 竖穴住居9 出土遺物

P 2 8 9 (図32・33)

A区南側で検出された土壌で、長径1.7m、短径0.9mの長楕円形を呈する。検出面は4.7m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形は台形で、埋土は1層である。遺物は西側でかたまって出土しており底から0.1mほど浮いた位置であった。土師器甕191・192・193と須恵器杯身190である。時期は出土している須恵器から田辺編年のTK47、もしくはTK23に相当する。

P 2 9 2 (図32)

A区南側で検出された土壌で、長径0.8m、短径0.5mの長楕円形を呈する。検出面は4.5m付近で、深さは検出面から0.15mである。断面形はU字形で、南側の方が若干低くなっている。埋土中から土師器壺もしくは甕の胴部片が出土しているが、すべて底より浮いた位置であった。図化できなかったが、古墳時代に属するものと考えられる。

P 2 9 4 (図32)

A区南側で検出された土壌で、長径0.9m、短径0.6mの長楕円形を呈する。検出面は4.6m付近で、深さは検出面から0.3mである。断面形は台形である。埋土は3層確認された。遺物は底から0.1m以上の位置で、土師器片が出土したがその部分は中世のビットにより削平を受けており、本来はもう少し多かった可能性がある。図化できなかったが、古墳時代に属するものと考えられる。

P 2 9 7 (図32)

A区南側で検出された土壌で、長径0.8m、短径0.5mの長楕円形を呈する。検出面は4.6m付近で、深さは検出面から0.3mである。断面形は台形であるが、中央付近がゆるやかに低くなっている。埋土は3層確認され、そのうち②層から土師器片が出土した。図化できなかったが、古墳時代に属するものと考えられる。

P 4 1 7 (図32)

A区中央付近、堅穴住居5に近接した位置で検出された土壌で、長径1.0m、短径0.65mの長楕円形を呈する。検出面は4.9m付近で、深さは0.2mである。断面形はU字形で、埋土は2層確認された。遺物は底から浮いた位置で検出されており、土師器の甕、もしくは壺の胴部片である。図化できなかったが、古墳時代に属するものと考えられる。

P 5 0 1 (図30・34)

A区北側で検出された土壌で、一辺0.7mの隅丸方形を呈する。検出面は5.1m付近で、深さは0.1～0.12mである。断面形は台形であるが中央付近が若干盛り上がっている。埋土は2層確認された。遺構西側の底付近から土師器壺212の胴部上半以上の破片が出土した。また土器と遺構壁面との間には拳大の円礫が1つ認められた。時期は古墳時代である。

P 5 0 2 (図31・33)

A区北側で検出された土壌で、長径1.3m、短径0.9mの長楕円形を呈する。検出面は5.1m付近で、深さは検出面から0.18mである。断面形は台形であるが、底はゆるやかにくぼみ状の傾斜である。埋土は1層で、埋土中からは遺物は出土しなかったが、検出面で土師器高杯194が出土した。時期は古墳時代である。

P 5 0 3 (図30・33)

A区北側で検出された土壌で、長径0.65m、短径0.55mの楕円形を呈する。検出面は5.1m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形はU字形で、埋土は2層が確認された。遺物は①層からのみ出土しており、全て底が浮いた位置である。土師器壺197は、胴部上半以上の破片で、古墳時代に属するものと考えられる。

P 5 0 4 A (図31・33)

A区北側で検出された土壌で、長径1.7m、短径0.95mの隅方長方形、もしくは長楕円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は箱形で、埋土は2層である。遺物は主に①層から出土した。土師器甕201・202で、接合しなかったが同一個体と考えられ、完形品であったと思われる。P 5 1 8と同様に供献的な用途が推測される。時期は古墳時代で南側の竪穴住居群とほぼ同じである。

P 5 0 4 B (図31・33)

A区北側で検出された土壌で、長径1.1m、短径0.7m小判形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形は台形で、埋土は2層である。遺物は①層から全て出土したが中央で出土した手すくね198のレベル高が最も低く、両脇で出土した土師器壺199、鉢200が若干高い。いずれも完形であり、供献的な変形が推測される。時期は古墳時代で、南側の竪穴住居群とほぼ同じである。

P 5 0 5 (図30・34)

A区北側で検出された土壌で、長径1.2m、短径0.9mの小判形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.15mである。断面形は台形で、埋土は1層である。遺構検出面で北側から長さ0.2mの板石と円礫、南側から完形の土師器壺210が出土した。時期は古墳時代で、南側の竪穴住居群とほぼ同じである。

P 5 0 6 (土器棺) (図30・34)

A区北側で検出された土壌で、径0.4mの円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形はU字形で、頸部以上を欠損した壺211がすえてあった。頸部以上については後の削平によるものかどうかについては判然としないが、胴部が全く欠損していないことや、やや斜めにすえているにもかかわらず、頸部が直線的に欠けていることから打ち欠いてすえた可能性が高い。壺内部の土は洗浄したが、骨片等は検出されなかったが、土器棺と考えられる。土器棺に用いられた壺211は古墳時代に属するもので、南側で検出された竪穴住居群の時期と大体同じであると考えられる。

P 5 0 7 (図30)

A区北側で検出された土壌で、径0.4mの円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形はU字形で、埋土は2層確認された。遺物は検出面でのみ出土しており、土壌中央付近にまとまっていた。土師器甕196で下半部は欠損しているが、古墳時代に属するものと考えられる。

P 5 0 8 (図31)

A区北側で検出された土壌で、長径0.8m、短径0.55mの長楕円形を呈する。検出面は5.0m付近で、

深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は1層である。埋土中から土師器甕、もしくは壺胴部の破片が出土したが、すべて底より浮いた位置であった。時期は古墳時代と考えられる。

P509 (図31)

A区北側で検出された土壌で、径0.6mの円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.2mである。断面形はU字形で、埋土は2層である。埋土中から土師器甕、もしくは壺の破片が出土したが、すべて底より浮いた位置であった。時期は古墳時代と考えられる。

P510 (図31)

A区北側で検出された土壌で、長径0.9m、短径0.7mの長楕円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.15mである。断面形は台形で、埋土は1層である。埋土中から土師器の破片が出土しているが、すべて底より浮いた位置であった。胴部片のため図化できなかつたが、古墳時代に属すると考えられる。

P511 (図30)

A区北側で検出された土壌で、長径1.2m、短径0.75mの小判形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は1層である。遺構検出面で小礫と土器片が出土した。遺構の形状や遺物の出土状況はP516とよく似ている。遺物は小片のため図化できなかつたが、古墳時代に属する土師器と考えられる。

P512 (図30・33)

A区北側で検出された土壌で、径0.65mの円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形はU字形で、埋土は2層確認された。遺物は検出面でのみ出土しており、土壌中央付近で土師器高杯195が伏せた状態であった。古墳時代に属するものである。

P513 (図30)

A区北側で検出された土壌で、径0.9mの円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは0.15mである。断面形は箱形で若干北側の方が傾斜がゆるい傾向にある。

P514 (図30)

A区北側で検出された土壌で、径0.5mの円形を呈する。検出面は5.1m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形はU字形で、埋土は1層確認された。遺物は検出面でのみ出土しており、土壌中央よりやや北側でまとまっていた。小片のため図化できなかつたが、古墳時代に属する壺、もしくは甕の胴部分である。

P515 (図32)

A区北側で検出された土壌で、長径1.8m、短径1.3mの長楕円形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは0.1mである。断面形は台形で、埋土は1層である。検出面より0.1mほど上面で、小礫や土器片が確認されたが、埋土中からは出土しなかつた。時期は古墳時代に属すると考えられる。

P516 (図30)

A区北側で検出された土壌で、長径1.2m、短径0.7mの長楕円形を呈する。検出面は5.1m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は1層である。遺構検出面で小礫と土器片が



図30 P501・P503・P505・P506・P507・P511・P512・P513・P514・P516 実測図

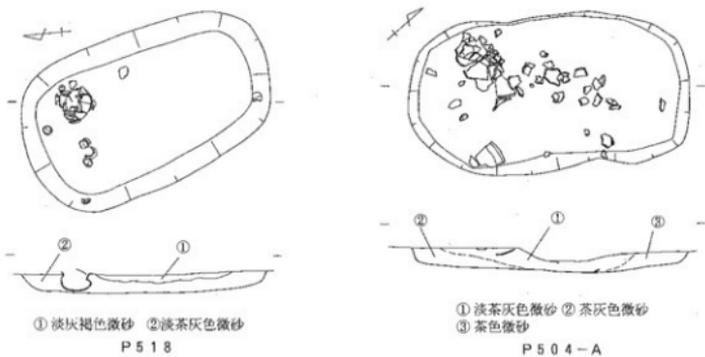
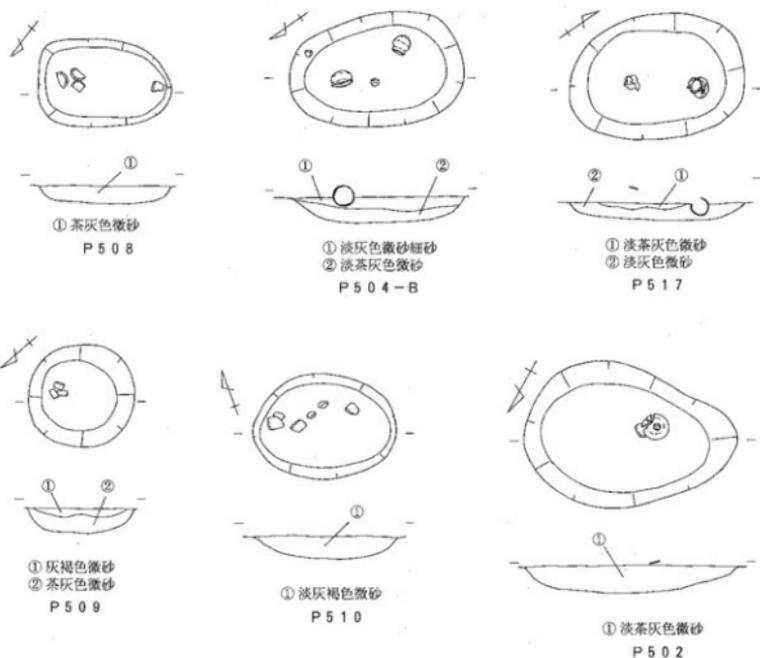


図31 P502・P504-A・P504-B・P508・P509・P510・P517・P518 実測図

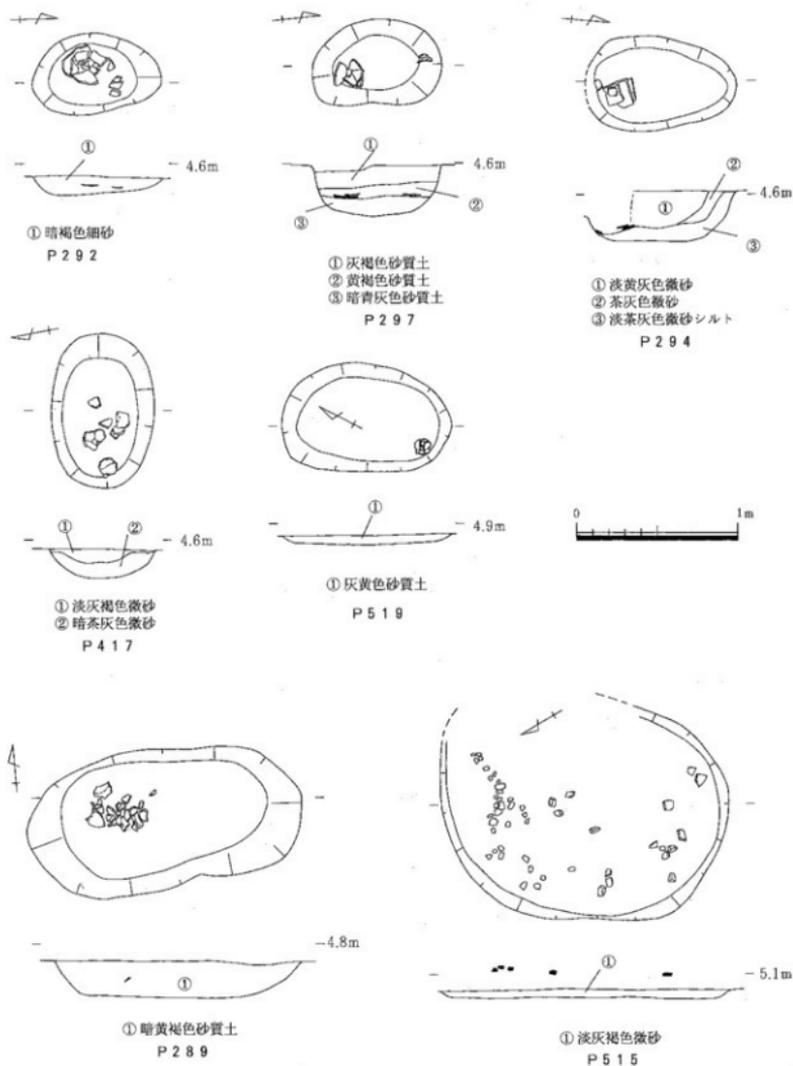


図32 P289・P292・P294・P297・P417・P515・P519 実測図

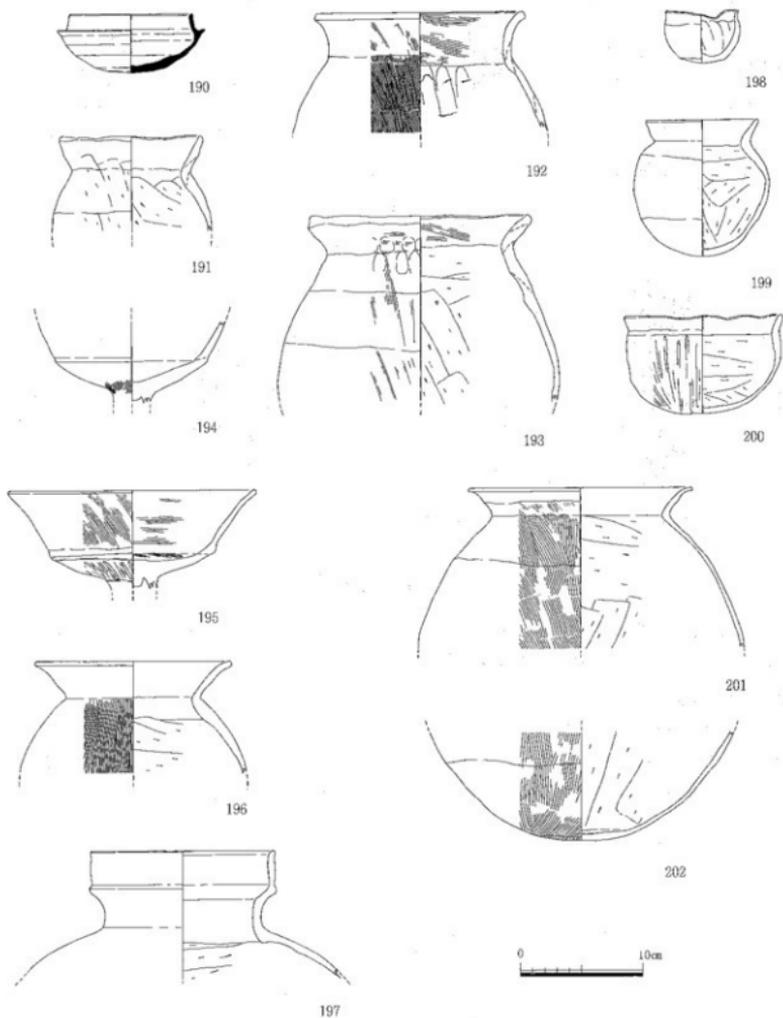


図33 土城出土遺物 (1)

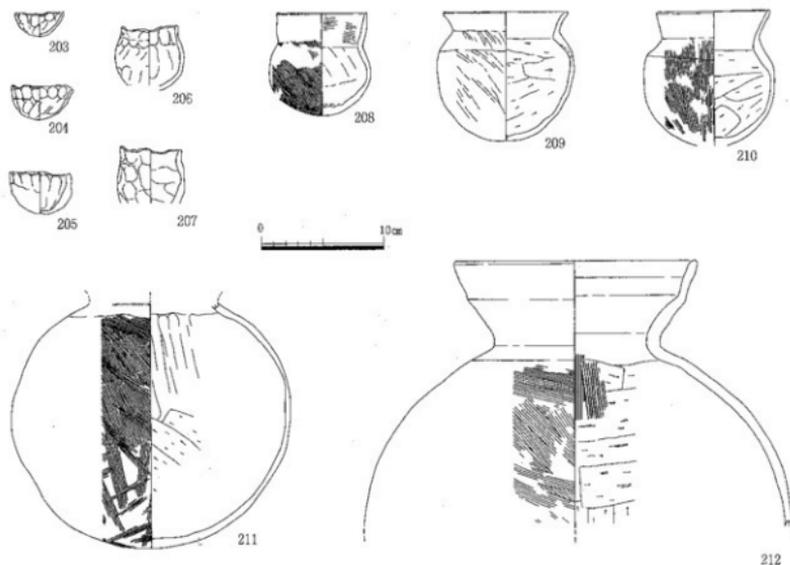


図34 土壇出土遺物(2)

出土した。遺物は北東付近にかたまる傾向があり、検出レベルもほとんど変わらなかった。小片のため図化できなかったが、古墳時代に属する土師器と考えられる。

P 5 1 7 (図31・34)

A区北側で検出された土壇で、長径1.0m、短径0.8mの小判形を呈する。検出面は4.9m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は2層である。遺物は北側の若干底より浮いた位置から土師器壺209が出土し、中央やや南よりで土師器壺の小片が出土した。

P 5 1 8 (図31・34)

A区北側で検出された土壇で、長径1.55m、短径1.0mの隅丸長方形を呈する。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は2層である。遺物は北東コーナー付近で土師器壺と手ずくね203・204・205・207が出土し、南端の埋土中から手ずくね206が出土した。土師器壺は正置されており、供献的な用いられ方をしたものと考えられ、付近の手ずくねについても同様の用途が推測される。なお、土師器壺については残存状態が良くなく、復元・実測ができなかった。時期は古墳時代で、南側の竪穴住居群とほぼ同じである。

P 5 1 9 (図32・34)

A区北側で検出された土壇で、長径1.0m、短径0.7mの長楕円形を呈する。検出面は4.8m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は1層である。遺物は南端の埋土中で土師器壺208が出土した。完形である。時期は古墳時代で、南側の竪穴住居群とほぼ同じ時期である。

出土土器観察表

器形	土器番号	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	濃構
		口径	底径	器高				
須恵器杯蓋	1	13.6	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住1埋土
須恵器底部	2	—	8.0	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住1埋土
須恵器罍	3	—	—	—	下半はヘラケズリ後ナデ	含長石石英	淡青灰色	住1床面
須恵器壺	4	17.5	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰褐色	住1床面
土師器甕	5	12.9	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙黄色	住1床面
土師器甕	6	16.8	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	橙黄色	住1埋土
土師器鉢	7	5.8	—	—	内外面ナデ	含長石石英	黄橙黄色	住1埋土
土師器鉢	8	11.6	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡黄褐色	住1埋土
土師器壺	9	9.0	—	—	外面タテハケの後ナデ	含長石石英	橙黄色	住1床面
弥生土器甕	10	14.0	—	—	外面ナデ、内面下半ヘラケズリ	含長石石英	淡黄橙灰色	住1床面
土師器壺	11	—	—	—	外面タテハケ後下半ナデ、内面ヘラケズリ	含長石石英	淡橙灰色	住1カマド
土師器壺	12	9.4	—	14.7	外面頸部タテミガキ、胴部ヨコハケ後ナデ	含長石石英	淡橙黄色	住1床面
土師器甕	13	—	—	—	外面タテハケ、内面ヘラケズリ、下半に押圧痕	含長石石英	淡橙黄色	住1床面
土師器壺	14	14.8	—	—	外面ハケ、内面ヘラケズリ後口縁内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄灰色	住1床面
土師器甕	15	15.8	—	17.8	外面ヨコハケ、内面ヘラケズリ、口縁部付近ハケ、ナデ	含長石石英	淡橙灰白色	住1床面
土師器甕	16	16.0	—	25.0	外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内面ヨコハケ後、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙黄色	住1床面
手ずくね	17	3.6	—	—	内外面ユビナデ	含長石石英	赤橙黄色	住1床面
手ずくね	18	4.4	—	3.7	内外面ユビナデ	含長石石英	淡橙黄色	住1床面
手ずくね	19	4.0	—	—	内外面ユビナデ	含長石石英	淡橙灰色	住1床面
手ずくね	20	4.2	—	4.2	内外面ユビナデ	含長石石英	茶色	住1床面
手ずくね	21	4.8	—	3.7	内外面ユビナデ	含長石石英	橙黄色	住1床面
手ずくね	22	5.0	—	4.1	内外面ユビナデ	含長石石英	淡赤橙黄色	住1床面
手ずくね	23	—	—	—	外面ハケ、内面ナデ	含長石石英	淡茶褐色	住1床面
製塩土器	24	5.1	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡黄橙灰色	住1埋土
手ずくね	25	5.0	—	6.0	内外面ナデ	含長石石英	淡茶色	住1床面
製塩土器	26	4.3	—	—	外面タタキ、内面押圧	含長石石英	黄橙黄色	住1埋土
製塩土器	27	5.1	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡橙灰色	住1埋土
手ずくね	28	5.2	—	7.1	内外面ナデ	含長石石英	橙黄色	住1床面
製塩土器	29	4.6	—	—	内外面ナデ、内面しぼり痕	含長石石英	黄橙灰色	住1床面
製塩土器	30	5.1	—	—	内外面ナデ、内面しぼり痕	含長石石英	淡黄灰色	住1床面
製塩土器	31	6.8	—	—	内外面ナデ、内面しぼり痕	含長石石英	黄橙灰色	住1床面

土師器鉢	32	10.9	8.5	5.4	外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙灰色	住1床面
土師器鉢	33	11.3	7.0	5.8	内面ヘラケズリ	含長石石英	黄褐色	住1床面
土師器鉢	34	11.2		5.8	外面ナデ、内面ヘラナデ	含長石石英	淡黄白色	住1床面
土師器鉢	35	12.0	4.0	5.7	内外面ナデ	含長石石英	橙灰色	住1床面
土師器鉢	36	11.4	—		外面ケズリ、後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄橙灰色	住1床面
土師器鉢	37	13.8	—	5.0	外面下半ハケ、後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙褐色	住1床面
土師器鉢	38	—	—	—	外面ナデ、内面ケズリ、底部押し痕	含長石石英	淡茶灰色	住1埋土
土師器鉢	39	11.0	—	—	内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	含長石石英	茶色	住1埋土
土師器鉢	40	11.2	—	—	内外面ナデ	含長石石英	褐色	住1床面
土師器鉢	41	11.0	—	—	外面下半ヘラケズリ	含長石石英	淡橙灰色	住1床面
土師器鉢	42	11.6	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住1床面
土師器鉢	43	11.9	—	—	外面下半ケズリ、内外面ナデ	含長石石英	淡茶灰色	住1床面
土師器鉢	44	12.4	—	—	外面下半ケズリ、内外面ナデ	含長石石英	淡橙灰色	住1床面
土師器鉢	45	12.0	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡褐色	住1床面
土師器鉢	46	12.7	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡橙灰色	住1床面
土師器鉢	47	13.7	—	—	内外面ナデ	含長石石英	橙色	住1床面
土師器鉢	48	16.3	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡橙白色	住1床面
土師器高杯	49	14.6	—	—	外面ハケ後ナデ、内面ヘラナデ	含長石石英	赤橙色	住1埋土
土師器高杯	50	14.9	—	—	外面ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	赤橙色	住1床面
土師器高杯	51	13.2	—	—	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	含長石石英	橙色	住1床面
土師器高杯	52	—	9.4	—	外面ハケ、脚部外面ナデ、内面ヘラケズリ	含長石石英	赤橙色	住1埋土
土師器壺	53	8.4	—	—	外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙色	住1カマド
土師器壺	54	10.0	—	10.5	外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙色	住1床面
土師器壺	55	8.0	—	9.8	内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙色	住1床面
土師器高杯	56	—	10.2	—	外面ナデ、内面ケズリ	含長石石英	淡赤橙色	住1床面
土師器高杯	57	—	10.2	—	外面ナデ、内面ハケ後ヘラナデ	含長石石英	橙色	住1床面
土師器高杯	58	—	9.5	—	外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ	含長石石英	橙色	住1埋土
土師器甔	59	20.6	—	—	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	褐色	住1床面
土師器甔	60	25.6	—	—	内面ヘラケズリ後、口縁部付近ナデ	含長石石英	淡橙灰色	住1床面
土師器甔	61	24.8	7.0	22.4	外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ハケ後ヨコナデ	含長石石英	淡橙色	住1床面
土師器甔	62	26.9	6.0	23.6	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄橙色	住1床面
須惠器杯蓋	63	12.2	—	5.3	天井部中位までヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰色	住2埋土
須惠器杯蓋	64	11.6	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰色	住2埋土
須惠器杯蓋	65	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住2埋土

須恵器杯身	66	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	灰白色	住2床面
須恵器杯蓋	67	14.0	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	住2床面
須恵器杯身	68	13.1	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住2埋土
土師器鉢	69	12.8	—	5.9	内面ヘラナデ後、口縁部付近ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住2埋土
土師器甕	70	22.2	—	—	外面タテハケ、内面ケズリ後ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住2カマド
土師器甕	71	—	—	—	外面タテハケ、内面ヘラケズリ	含長石石英	淡黄褐色	住2カマド
土師器甕	72	13.0	—	—	外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡赤灰色	住2床面
土師器甕	73	17.2	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住2床面
土師器甕	74	20.0	—	—	外面ハケ、押圧、内面ケズリ後ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄灰色	住2床面
土師器甕	75	18.2	—	—	内面ハケ後ヨコナデ	含長石石英	淡黄灰白色	住2カマド
土師器甕	76	21.8	—	—	外面ハケ、内面ナデ、ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住2床面
土師器甕	77	21.6	—	—	外面ハケ、内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住2床面
土師器甕	78	21.4	—	—	外面ハケ、内面板ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙	住2カマド
埴輪	79	—	—	15.3	土師甕で、外面ハケ後ケズリ、内面ケズリ後ナデ	含長石石英	橙	住2床面
埴輪	80	—	—	15.4	土師甕で、外面ハケ後ト半ケズリ、内面ケズリ後ナデ	含長石石英	淡青灰色	住2床面
須恵器杯身	81	10.8	10.4	4.9	底面外面ヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住3床面
土師器甕	82	14.4	—	—	内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住3床面
須恵器杯身	83	10.3	11.2	5.4	底部外面ヘラケズリ、底部内面ナデ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住4床面
須恵器鉢	84	—	—	—	底部外面ヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住4床面
土師器鉢	85	—	—	—	不明	含長石石英	淡橙灰色	住4床面
土師器壺	86	11.0	—	—	口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰色	住4床面
土師器壺	87	12.8	—	10.5	内面ナデ	含長石石英	淡黄褐色	住4床面
土師器高杯	88	14.4	—	—	不明	含長石石英	黄褐色	住4床面
土師器高杯	89	14.2	—	—	内外面ナデ	含長石石英	茶褐色	住4床面
土師器高杯	90	15.8	—	—	内外面ナデ	含長石石英	茶褐色	住4床面
土師器高杯	91	16.4	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	橙	住4床面
土師器高杯	92	15.3	—	—	外面ナデ、内面ヨコナデ	含長石石英 角セシ石	黄褐色	住4床面
土師器鉢	93	12.5	—	—	内外面ナデ	含長石石英 角セシ石	淡褐灰色	住4床面
土師器高杯	94	17.2	—	—	外面ヨコナデ	含長石石英 角セシ石	黄褐色	住4床面
土師器高杯	95	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	黄褐色	住4床面
土師器高杯	96	20.9	—	—	外面タテハケ後、ナデ	含長石石英	橙	住4床面
土師器高杯	97	24.0	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡橙	住4床面
土師器鉢(匳)	98	27.2	—	—	内面ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙	住4床面
土師器甕	99	17.6	—	26.6	外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄褐色	住4床面

須恵器杯蓋	100	14.0	—	4.6	大井部外面1/2ヘラケズリ、ほか はヨコナデ	含長石石英	暗青灰色	住5床面
須恵器杯蓋	101	12.2	—	—	天井部外面カキメ、ほかはヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住5埋土
須恵器杯蓋	102	13.0	—	—	天井部外面カキメ、ほかはヨコナデ	含長石石英	灰褐色	住5埋土
須恵器杯蓋	103	—	—	—	外面ヘラケズリ後、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住5埋土
須恵器杯蓋	104	—	—	—	外面ヘラケズリ後、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住5埋土
須恵器短壺	105	11.4	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	住5埋土
須恵器壺	106	13.2	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰黄色	住5埋土
須恵器壺	107	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	灰色	住5埋土
須恵器杯身	108	12.1	11.2	5.3	底部外面1/2ヘラケズリ、ほかは ヨコナデ	含長石石英	淡灰黄色	住5床面
須恵器杯身	109	10.8	11.6	—	底部外面1/2ヘラケズリ、ほかは ヨコナデ	含長石石英	灰白色	住5埋土
須恵器杯身	110	11.5	12.4	—	底部外面1/2ヘラケズリ、ほかは ヨコナデ	含長石石英	青灰色	住5床面
須恵器杯身	111	—	12.4	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	住5床面
須恵器杯身	112	11.0	10.0	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	住5埋土
土師器壺	113	20.4	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄灰色	住5埋土
土師器鉢	114	18.6	—	—	調整不明	含長石石英	淡赤褐色	住5床面
土師器甕	115	15.2	—	—	外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外 面ヨコナデ	含長石石英	橙黄色	住5床面
土師器鉢	116	11.0	—	5.6	外面ナデ、内面ケズリ	含長石石英	淡橙灰色	住5床面
土師器壺	117	11.2	—	—	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外 面ヨコナデ	含長石石英	淡黄白色	住5床面
土師器高杯	118	—	—	10.4	外面ケズリ後ナデ、内面ナデ	含長石石英	淡橙黄色	住5床面
土師器甕	119	17.2	—	33.7	外面タテハケ後ナデ、内面ナデ、口 縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄橙色	住5床面
須恵器杯蓋	120	12.0	—	4.2	天井部2/3ヘラケズリ、ほかはヨ コナデ	含長石石英	灰色	住6床面
須恵器杯蓋	121	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰色	住6埋土
須恵器杯身	122	10.3	10.4	4.7	底部外面1/2ヘラケズリ、ほかは ヨコナデ	含長石石英	灰色	住6床面
須恵器杯身	123	9.6	10.0	—	底部外面1/2ヘラケズリ、ほかは ヨコナデ	含長石石英	灰色	住6床面
須恵器杯身	124	10.6	11.2	—	底部外面ヘラケズリ、ほかはヨコナ デ	含長石石英	灰色	住6床面
須恵器杯蓋	125	—	—	—	外面不明、内面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	住6床面
手づくね	126	6.0	—	5.0	内外面ナデ	含長石石英	淡赤橙色	住6床面
製塩土器	127	5.2	—	—	内外面ナデ	含長石石英	赤橙色	住6埋土
土師器甕	128	14.0	—	—	外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外 面ヨコナデ	含長石石英	淡橙灰白色	住6埋土
土師器鉢	129	15.0	—	—	内面ナデ	含長石石英	橙黄色	住6埋土
土師器高杯	130	17.0	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡黄白色	住6埋土
土師器甕	131	14.8	—	—	外面ハケ、内面ナデ後一部ケズリ、 口縁部ヨコナデ	含長石石英	淡橙白色	住6床面
土師器高杯	132	—	—	12.0	外面ハケ、内面ケズリ	含長石石英	橙黄色	住6埋土
土師器把手	133	—	—	—	内外面ナデ	含長石石英	淡橙白色	住6埋土

土師器壺	134	9.7	-	15.3	外面ハケ後ナデ、内面ヨコハケ	含長石石英	橙 色	住6床面
土師器甕	135	25.0	-	-	外面上半ナデ、下半ケズリ、内面ケズリ	含長石石英	橙 色	住6埋土
須恵器杯身	136	10.8	11.6	-	底部外面2/3ヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	青 灰 色	住7床面
須恵器有蓋高杯	137	11.0	10.2	9.4	底部外面ヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	灰 白 色	住7床面
土師器高杯	138	-	-	-	内外面ナデ	含長石石英	橙 色	住7床面
土師器高杯	139	-	-	9.6	内外面ナデ	含長石石英	淡 橙 灰 色	住7床面
土師器高杯	140	-	-	10.4	外面ナデ、内面ケズリ、ハケ	含長石石英	橙 色	住7床面
土師器高杯	141	-	-	13.1	外面ハケ後板ナデ、内面ケズリ	含長石石英	淡 黄 橙 色	住7床面
土師器甕	142	14.2	-	-	外面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 黄 橙 色	住7床面
土師器甕	143	17.2	-	-	内面ヨコハケ後、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄 橙 色	住7床面
土師器甕	144	14.6	-	-	口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄 橙 色	住7床面
土師器甕	145	16.0	-	-	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 茶 色	住7床面
土師器甕	146	14.8	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 褐 灰 色	住7床面
土師器壺	147	-	-	-	外面ヨコハケ後ナデ、内面押圧後ケズリ	含長石石英	淡 橙 白 色	住7床面
製塩土器	148	3.6	-	-	外面タタキ、内面ナデ	含長石石英	淡 黄 白 色	住7床面
土師器甕	149	19.8	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	赤 橙 色	住7床面
土師器甕	150	16.6	-	-	口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄灰白色	住7埋土
土師器甕	151	17.4	-	-	外面ハケ、内面口縁部ハケ、下半ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 橙 色	住7床面
土師器甕	152	17.4	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 黄 橙 色	住7床面
土師器甕	153	11.8	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、ハケ、口縁部付近ヨコナデ	含長石石英	赤 橙 色	住7床面
須恵器甕	154	18.5	-	31.7	内外面タタキ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	青 灰 色	住7床面
須恵器杯蓋	155	12.5	-	4.5	天井部外面 1/2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石石英	青 灰 色	住8床面
土師器高杯	156	12.0	-	-	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	含長石石英	赤 橙 色	住8埋土
土師器高杯	157	14.2	-	-	内外面ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	赤 橙 色	住8埋土
土師器高杯	158	-	-	9.8	外面ハケ後ナデ、内面ケズリ後ナデ、三方向にすかし穴	含長石石英	淡 橙 灰 色	住8カマド
土師器高杯	159	13.4	10.0	11.3	外面ハケ後ナデ、脚部内面ケズリ、ハケ後ナデ	含長石石英	淡 赤 橙 色	住8床面
土師器壺	160	12.0	-	16.2	外面ハケ、内面ナデ、部分的ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 赤 橙 色	住8床面
土師器鉢	161	19.0	10.0	10.4	内外面ナデ	含長石石英 金 雲 母	淡 赤 橙 色	住8床面
土師器甕	162	15.0	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄 灰 白 色	住8床面
土師器甕	163	17.0	-	-	外面一部ミガキ、内面ケズリとヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄 褐 色	住8床面
土師器甕	164	19.9	-	-	外面タテハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	赤 橙 色	住8床面
土師器甕	165	18.0	-	-	内外面ヨコナデ	含長石石英	赤 橙 色	住8床面
土師器甕	166	18.4	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 橙 色	住8埋土
土師器甕	167	18.0	-	-	外面一部ミガキ、内面ケズリとヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 橙 色	住8床面

土師器甕	168	18.0	-	-	外面タテハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙 色	住 8 床 面
土師器甕	169	18.0	-	-	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙 色	住 8 床 面
須惠器杯身	170	10.8	10.4	-	底部外面ヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 灰 色	住 9 床 面
須惠器碗	171	10.8	4.4	6.8	底部外面ヘラケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	暗 灰 褐色	住 9 床 面
須惠器甕	172	19.5	-	-	内外面ヨコナデ	含長石石英	暗 青 灰色	住 9 カマド
土師器甕	173	18.0	-	-	内外面ヘラケズリ、外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙 色	住 9 床 面
土師器甕	174	18.6	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、一部ハケ、口縁部内外面ナデ	含長石石英 角 閃 石	淡 黄 灰 白色	住 9 床 面
土師器甕	175	17.0	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 黄 褐色	住 9 床 面
土師器甕	176	18.4	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、一部ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄 橙 色	住 9 床 面
土 師 器	177	12.2	-	-	ナデ	含長石石英	黄 橙 色	住 9 埋 土
土師器碗	178	12.4	-	-	内面ハケ後ナデ	含長石石英 角 閃 石	赤 橙 色	住 9 床 面
土師器碗	179	11.2	-	-	ナデ	含長石石英	黄 橙 色	住 9 埋 土
土師器碗	180	13.8	-	-	ナデ(内面に工具痕有)	含長石石英	淡 橙 色	住 9 埋 土
土師器碗	181	11.0	-	-	外面ハケ後ナデ、内面ナデ	含長石石英	黄 橙 色	住 9 床 面
土師器碗	182	12.4	-	-	ナデ	含長石石英	橙 色	住 9 埋 土
土師器碗	183	11.4	-	-	ナデ	含長石石英	淡 橙 色	住 9 埋 土
土師器碗	184	14.4	4.5	5.5	ナデ	含長石石英	淡 橙 灰 白色	住 9 床 面
手ずくね	185	9.0	4.5	8.0	外面ナデ、内面ケズリ	含長石石英 角 閃 石	橙 色	住 9 床 面
手ずくね	186	-	-	2.0	内外面ナデ	含長石石英 角 閃 石	赤 橙 色	住 9 床 面
土師器高杯	187	15.5	-	-	外面ハケ、内面ナデ、一部ハケ、口縁部内外面ナデ	含長石石英	淡 黄 橙 色	住 9 カマド
土師器高杯	188	14.1	10.0	13.0	外面ハケ、内面ナデ	含長石石英 角 閃 石	黄 橙 色	住 9 カマド
土師器鉢(甕)	189	24.9	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 灰 黄色	住 9 床 面
須惠器杯身	190	10.0	10.4	4.8	底部外面2/3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石石英	青 灰 色	P 2 8 9
土師器甕	191	11.4	-	-	外面ケズリ後ナデ、内面ケズリ後ナデ	含長石石英	茶 褐 色	P 2 8 9
土師器甕	192	16.8	-	-	外面タテハケ、内面ナデ、ハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 黄 灰色	P 2 8 9
土師器甕	193	17.6	-	-	外面ハケ後ナデ、内面ケズリ、ハケ後ナデ	含長石石英	茶 褐 色	P 2 8 9
土師器高杯	194	-	-	-	外面ハケ、内面不明	含長石石英	橙 色	P 5 0 2
土師器高杯	195	20.0	-	-	外面ハケ、ミガキ、内面ハケ後ナデ	含長石石英	淡 黄 灰色	P 5 1 2
土師器甕	196	15.8	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡 黄 褐色	P 5 0 7
土師器壺	197	14.8	-	-	外面ミガキ後ナデ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	黄 灰 白色	P 5 0 3
手ずくね	198	6.0	3.7	4.0	内外面ナデ	含長石石英	淡 褐 色	P 5 0 4 B
土師器壺	199	9.0	-	11.2	外面ミガキ後ナデ、内面ケズリ、口縁部ナデ	含長石石英	淡 橙 褐色	P 5 0 4 B
土師器鉢	200	12.0	-	8.0	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	赤 橙 色	P 5 0 4 B
土師器甕	201	28.0	-	-	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	橙 色	P 5 0 4 A

土師器甕	202	-	-	-	外面ハケ、内面ケズリ	含長石石英	橙	色	P 5 0 4 A		
手づくね	203	4.0	-	1.9	内外面ナデ	含長石石英	橙	色	P 5 1 8		
手づくね	204	5.0	-	2.8	内外面ナデ	含長石石英	橙	色	P 5 1 8		
手づくね	205	4.0	-	3.5	内外面ナデ	含長石石英	橙	色	P 5 1 8		
手づくね	206	4.4	-	5.0	内外面ナデ	含長石石英	褐	橙	色	P 5 1 8	
手づくね	207	4.9	-	5.3	内外面ナデ	含長石石英	黄	灰	色	P 5 1 8	
土師器壺	208	7.4	-	8.4	外面ハケ、内面ケズリ、口縁部内 外面ヨコナデ	含長石石英	淡	黄	灰	色	P 5 1 9
土師器壺	209	10.2	-	10.3	外面ヘラミガキ後ナデ、内面ケズ リ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英 金 雲 母	淡	黄	灰	色	P 5 1 7
土師器壺	210	9.2	-	11.2	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ、 口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡	黄	灰	色	P 5 0 5
土師器壺	211	-	-	-	外面ハケ、内面下半ケズリ、上半 ナデ、頸部付近ヨコナデ	含長石石英	褐	橙	色	P 5 0 6	
土師器壺	212	19.9	-	-	外面ハケ後ナデ、内面ケズリ後ハ ケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石石英	淡	黄	褐	色	P 5 0 1

Ⅱ. 中世

中世に属する遺構は、A～D区までの全区で検出された。ただしA区に限り上・下2層があり、上層がB～D区で検出された遺構面と対応する。下層は12世紀末、上層は13世紀前半の時期と考えられる。下層は上層の基盤となる黄灰色微砂層を除去後に検出されており、同層が上層遺構の整地層である可能性がある。A区では建物2棟が検出されているが、いずれも庇付建物であり一方の建物には礎石状の根石をもっている。B～D区でも建物が検出されているが、いずれも小規模なものである。しかしながらC区では土器焼成窯が検出されており、この地区の集落の生業の一端をうかがうことができる。さらに、B～D区の北側には山陽道建設に伴う発掘調査がおこなわれており、その成果と合わせる、この地点の微高地全体を調査したことになる。

A 区

(1) 下層 (図36)

建物12 (図35・37)

A区北西で検出された掘立柱建物で、桁行3間、梁間2間の柱構成である。棟方向はほぼ東西方向を指向している。柱穴の平面形は若干いびつなものもあるが基本的には円形を呈しており、径0.2～0.4mの掘り方で、柱痕跡が確認できなかったことから柱の径は不明である。遺構の検出面は4.6m付近である。

遺物は各柱穴から出土しているが、いずれも小片で図化できたのはPaから出土した土師器小皿1と

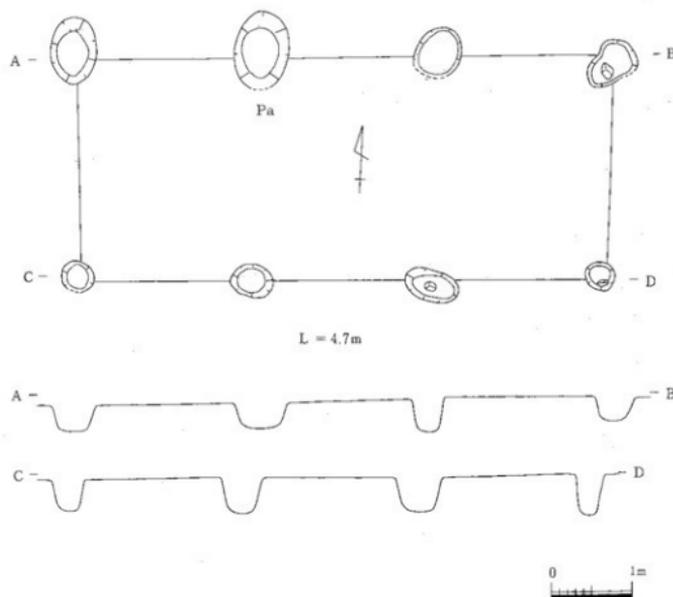


図35 建物12実測図

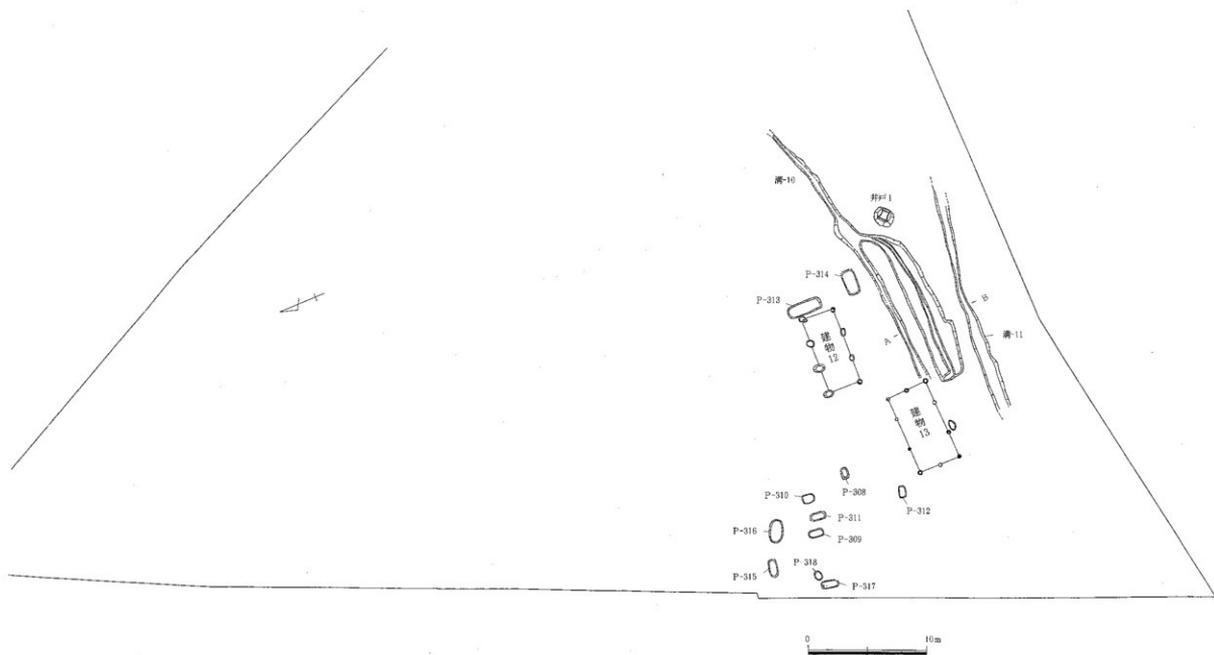


图36 A区中世下層遺構配置圖

須恵器の杯蓋2だけである。小皿はこの建物に伴うものと考えられるが、須恵器は付近から該期の土壌が検出されていることから、それらからの流れ込みと考えられる。

建物13 (図38)

A区北西、建物12の南西で検出された掘立柱建物で、桁行3間、梁間2間の柱構成である。棟方向はほぼ東西方向を指向しており、建物12と平行している。柱穴の平面形は円形を呈しており、径0.2~0.4mの掘り方で、柱痕跡が確認できる柱穴から柱の径は0.1m程と推定される。遺構の検出面は4.5m付近である。

遺物は図化できなかったが、土師器の小片が各柱穴から出土している。

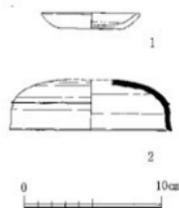


図37 建物12出土遺物

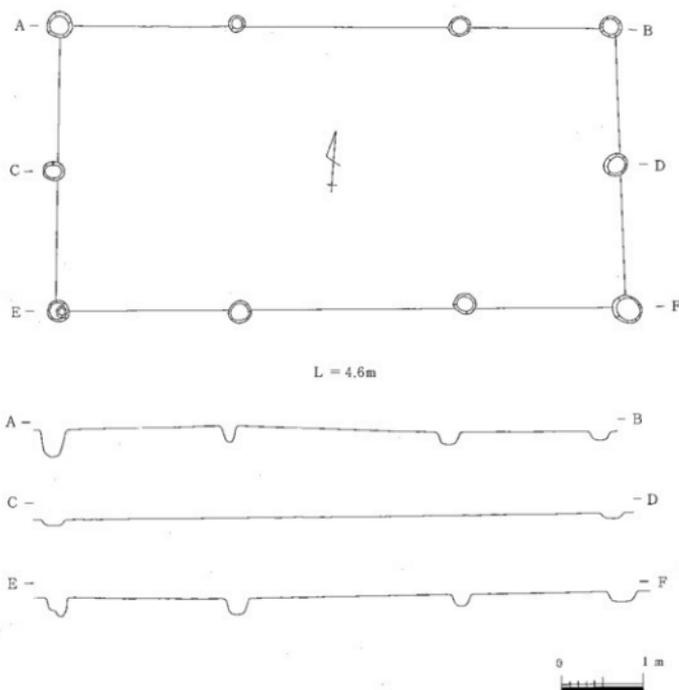
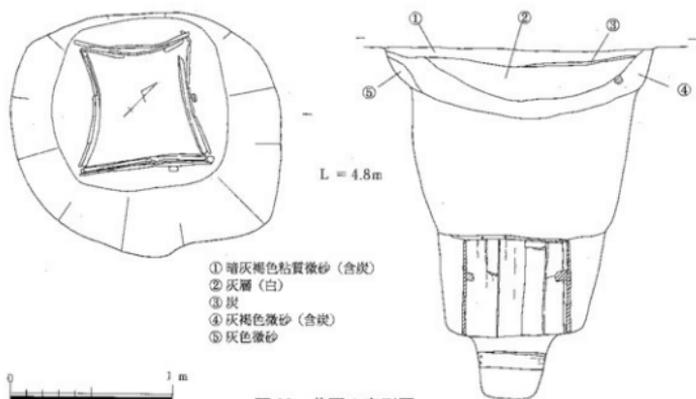


図38 建物13実測図

井戸1 (図39・40)

A区北西で検出された井戸で、上層でも遺構の輪郭は不鮮明ながらも検出していたが、断面の上層



- ① 暗灰褐色粘質微砂 (含炭)
- ② 灰層 (白)
- ③ 炭
- ④ 灰褐色微砂 (含炭)
- ⑤ 灰色微砂

图 39 井戸 1 実測図

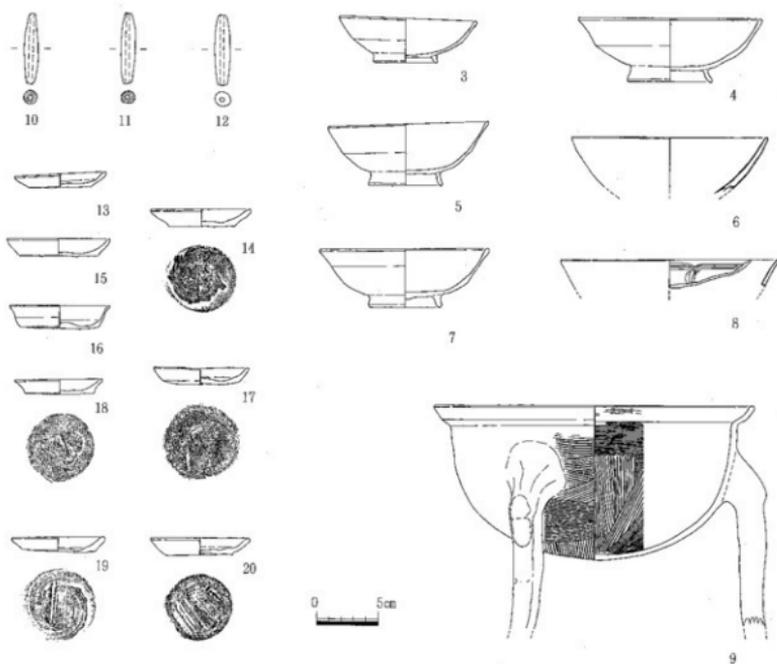


图 40 井戸 1 出土遺物

関係の検討から、それは下層遺構の影響によるものと判断し、下層に伴う遺構として掘り下げた。その結果、遺構の検出面は4.7m付近で、上面形は長径1.6m、短径1.5mの円形を呈する。検出面より-1.15mで平面形が一辺0.9mの隅丸方形となり、中央に方形の平面形の井戸枠が組まれていた。井戸枠は上面より0.2m下がった位置に一辺が8cmほどの方形の材を用いた椀木が組まれていたと考えられる。椀木は北西部分のみが遺存していなかった。椀木の外側には幅0.1~0.2m、厚さ1~2cm、長さ0.6mの側板が並べられていた。側板の外側には一辺5cmほどの角材も打ち込まれていたが、湧水のため井戸枠が崩落したため、井戸枠の取り上げが不可能となり、長さ等のデータは得ることができなかった。井戸枠の中央には径0.4mの曲物が据えられており、深さが0.4mあるところを確認した時点で、湧水のため井戸そのものが崩落したためそれ以上の追及は不可能となった。しかしながらその深さで曲物の底であることや、湧水層である灰色粗砂層が基盤層下部にひろがっていることから、井戸1の底と考えられる。したがって井戸1底部のレベル高は2.6m付近といえる。埋土は①~⑤層までの上層と、それから井戸枠までの中層、井戸枠内の下層の3層に分けられる。上層には炭が多く含まれており、中・下層と異なっている。井戸埋没後のくぼみを2次的に利用した痕跡と考えられる。出土している遺物をもて中・下層と比べて若干新しく、この部分のみは中世上層の遺構面に伴う可能性も考えられる。中・下層は暗青灰色粘質土で、両層の堆積状況に顕著な差は認められなかった。

出土した遺物は、土師器の椀・皿・鍋、土鍾、青磁椀片で、椀3と皿13・14・18~20と土鍾と青磁椀8は上層から出土し、椀4・5・7と青磁6は中層から出土し、皿15~17と鍋9は下層から出土した。

P 313・P 314 (図41・43)

建物12の東側で検出された土壌で、P 313は長軸方向が南北方向を示し、P 314は長軸方向が東西方向を示す。建物12・13と同じ様に東西南北の方向性を意識していると思われる。

P 313は長さが2.9m、幅0.9mの長方形を呈する平面形で、断面は箱型である。遺構の検出面は4.6m付近で、埋土は1層である。この土壌の埋土と土層の基盤層はよく似ており、上層造成の際に埋没した可能性も考えられる。したがってP 313は形状だけでは土壌墓の可能性も考えられるが、埋土の状況からは建物12に付属する施設の可能性の方を考えたい。遺物は埋土から小皿21、台付小皿22が出土した。

P 314は長さが2.1m、幅0.95mの長方形を呈する平面形で、断面は箱型である。遺構の検出面は4.6m付近で、埋土は2層であるが両層はよく似ており、さらに上層の基盤層ともよく似ている。P 313と同じく上層造成の際に埋没した可能性も考えられる。

P 313の長軸方向に対してほぼ直交方向であることから、P 313を意識しているといえそうで、この土壌も



図41 P 313・P 314実測図

第三章 遺構と遺物

P313と同じく建物に付属する施設の可能性が考えられる。遺物は土師器の小片が埋土中より若干出土した。

P308・P309・P310・P311・P312・P315・P316・P317・P318 (図42・43)

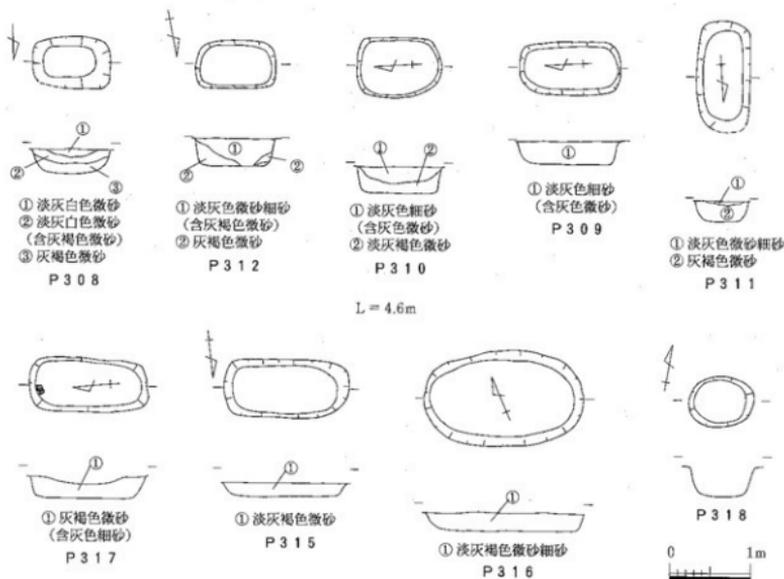


図42 P308・P309・P310・P311・P312・P315・P316・P317・P318 実測図

建物13の西側で検出された土壌群で、いずれも長方形もしくはは方形に近い平面形を呈し、長軸方向も南北あるいは東西方向に合わせている。それぞれ切り合わずままとまっている点や、方向に共通の規則性が認められることから、遺物は少ないものの近接した時期のものと考えられる。とくに方向については建物12、13と同じであり、これらの建物と同時期と思われる。遺構の性格は遺物が少ないため明確でないものの、形状などから土壌墓と推測される。

P308は遺構の検出面は4.5m付近で、長さが0.9m、幅0.7mの長方形を呈する平面形である。断面形は箱型で、埋土は3層である。遺物は出土しなかった。

P309は遺構の検出面は4.6m付近で、長さが1.2m、幅0.65mの長方形を呈する平面形である。断

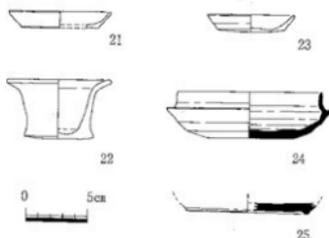


図43 P313・P317・P318 出土土器

面形は箱型で、埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

P310は遺構の検出面は4.5m付近で、長さが1.0m、幅0.75mの長方形を呈する平面形である。断面形は箱型で、埋土は2層である。遺物は土師器の小片が若干出土した。

P311は遺構の検出面は4.6m付近で、長さが1.35m、幅0.7mの長方形を呈する平面形である。断面形は箱型で、埋土は2層である。遺物は出土しなかった。

P312は遺構の検出面は4.6m付近で、長さが0.95m、幅0.6mの長方形を呈する平面形である。断面形は箱型で、埋土は2層である。遺物は土師器の小片が1点出土した。

P315は遺構の検出面は4.4m付近で、長さが1.5m、幅0.7mの長方形もしくは長楕円形を呈する平面形である。断面形は台形で、埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

P316は遺構の検出面は4.5m付近で、長さが2.0m、幅1.2mの長楕円形を呈する平面形である。断面形は台形で、埋土は1層である。遺物は土師器の小片が若干出土した。

P317は遺構の検出面は4.5m付近で、長さが0.95m、幅0.65mの長方形を呈する平面形である。断面形は箱型で、埋土は1層である。遺物は埋土中から小皿23と杯身24が出土した。

P318は遺構の検出面は4.5m付近で、長さが0.8m、幅0.6mの長楕円形を呈する平面形で、断面形は箱型である。遺物は埋土中から杯身底部25の破片が出土した。

溝10・溝11 (図44・45)



図44 溝10・11断面図

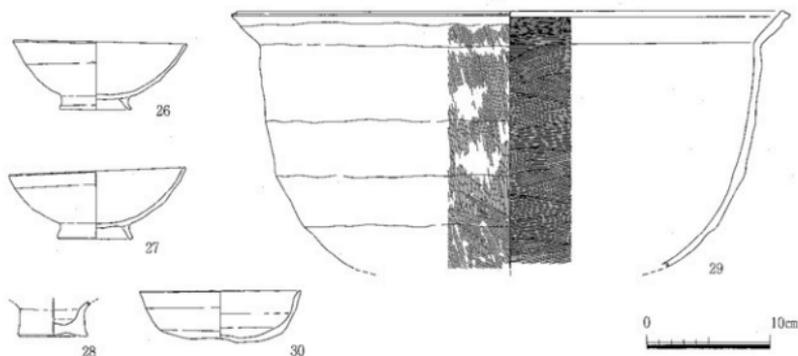


図45 溝10・11出土遺物

建物12の南側で検出された溝である。両溝ともその両端は近世の遺構などによって削平されているために完結的な把握はできなかったが、おそらく微高地の低位部へ接続しているものと推測される。両溝とも建物12・13の棟方向とほぼ平行に並んでいる。

溝10は建物12の南側で2本に分かれており、北側が幅0.6m、南側が幅2.3mで中央付近が幅0.3mほどさらに一段低くなる。遺構検出面は4.5m付近で、北側の深さは検出面より0.2m、南側の深さは0.25mである。遺物は埋土中から椀26・27、台付小皿28、鍋29が出土した。

溝11は幅0.5~0.8mで、東側と西側の低位部をつなぐような位置にある。遺構検出面は4.85m付近で、深さは検出面から0.25mである。遺物は埋土中から椀30が出土した。これは奈良時代のもので、ほかに遺物が出土していないため明確でないが、溝11は中世よりもさかのぼる時期の可能性も考えられる。

(2) 上層 (図49)

建物1 (図46・47・48・50・51)

調査区中央南側で検出された掘立柱建物で、桁行3間、梁間6間の柱構造で、これは3間×2間の身舎に西側、東側のそれぞれに庇を附加したものである。とくに東側の庇については孫庇を附加しており、さらに身舎部分も棟持柱の位置が西側で1.9m、東側で2.7mと間隔が東側の方が広がっており、東側の屋根を長くしていることから東側を強く意識した建物であったことがうかがわれる。建物1の東側には集水枡状遺構であるP66・95がほぼ平行して並んでおり、庭園的な景観であった可能性も推測される。柱穴の大きさは東側の最端部の庇については径0.25~0.2mと小さいものの、ほかは径0.5~0.6mである。柱痕跡の確認できる柱穴から柱材は

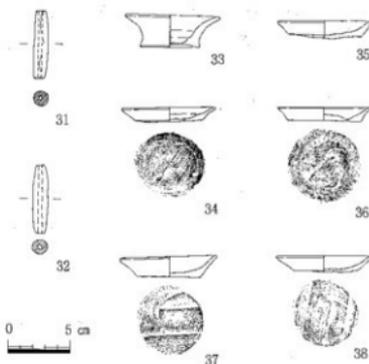


図46 建物1 出土遺物 (1)

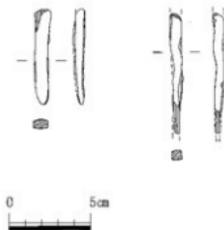


図47 建物1 出土遺物 (2)

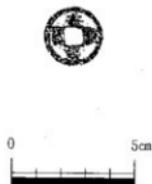


図48 建物1 出土遺物 (3)



图 49 A 区中世上層遺構配置图

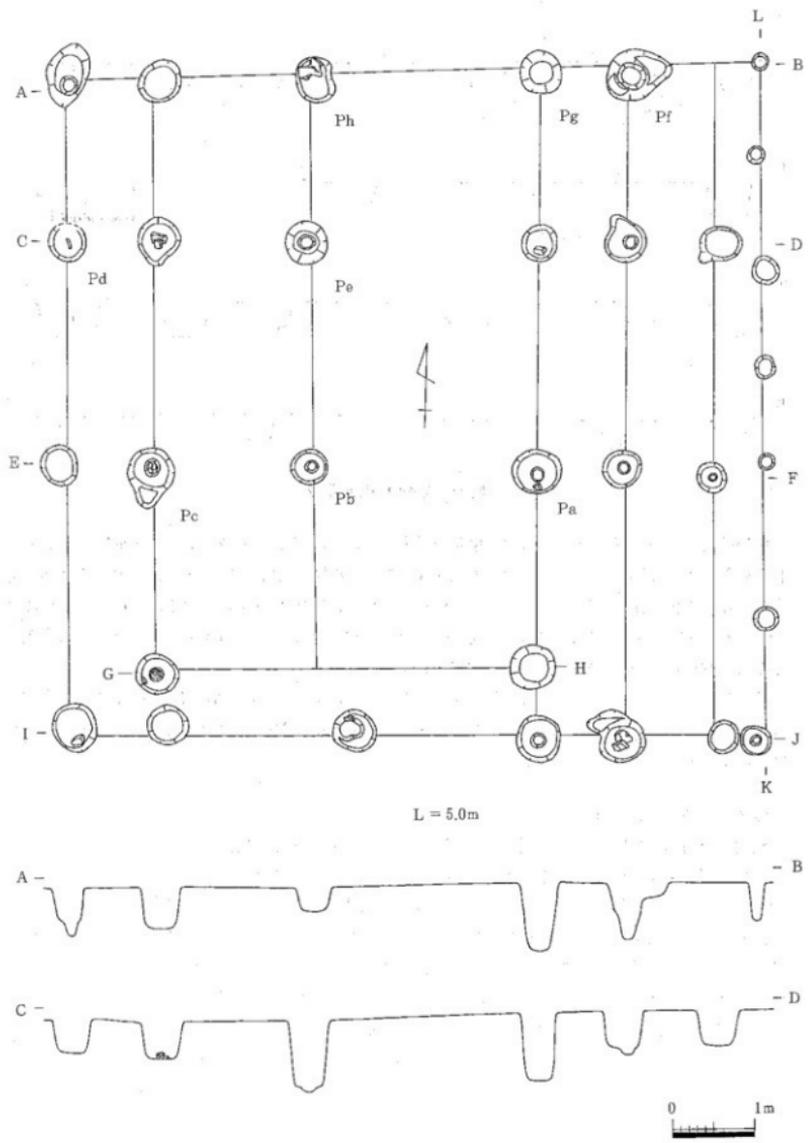


图 50 建物 1 実測图 (1)

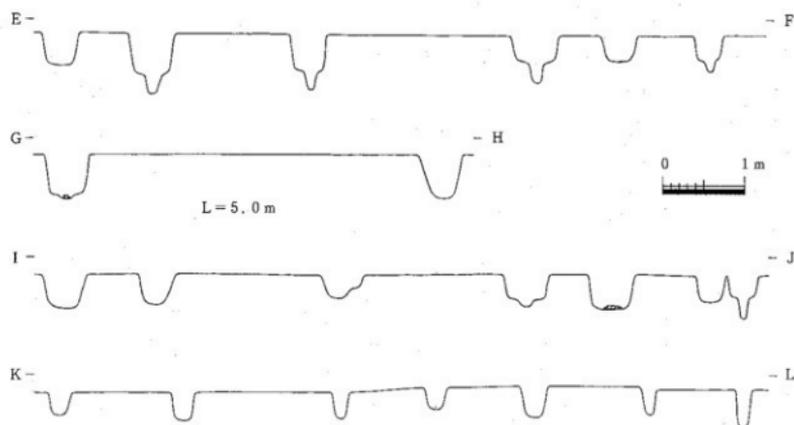


図51 建物1実測図(2)

径0.2m前後であったと考えられるが、東側の孫庇については径0.1m前後と小さい材を用いている。柱間距離は桁間で2.5~2.7m、梁間で1.9~2.7mである。建物の面積は68.04㎡で棟方向はほぼ南北方向である。遺構の検出面は4.85m付近で、身舎部分の柱穴は検出面から0.6~0.8mと深く、底部分は0.3~0.5mと浅い。柱穴のなかには庇に板石を置いたものも2つあるが、基本的にはそういった措置を施していない。この点は建物2と異なっている。

遺物は各柱穴から出土している。Pd・Pe・Pf・Pgからは完形の小皿が出土しており、意識的に埋納したことも推測される。ほかにはPa・Pcからは鉄釘、Pb・Pcからは土鍾が、Phからは銅銭が出土している。

建物2 (図52・53・54)

建物1の西側で検出された掘立柱建物で桁行5間、梁間4間の柱構造で、これは5間×2間の身舎に西側、南側、東側のそれぞれに庇を附加したものである。建物1とは異なり孫庇はなく、身舎と庇の間隔は東側と西側では1.1m、南側では0.9mである。C-DラインとE-Fラインの東側延長部で柱穴を2個検出し、当初はこの建物の柱穴と考え、『法然上人絵伝』に描かれた漆館のように中門廊が付属した建物も想定された。しかし、建物2の柱穴と比べると深さが5~8cmと浅く、南北方向の並びもずれていることから建物2とは別の遺構と判断した。したがって柱間は異なるものの、北側以外に庇が



図52 建物2出土遺物

附加されるといった構造は建物1と共通する特徴といえる。柱穴の大きさは身舎部分では0.4~0.5m、底部分では0.25~0.5mで、底部分の方が小さい傾向にある。また身舎部分の柱穴の大部分の庇には、厚さ5~10cmの板石を置いている。柱間距離は桁間で1.7~1.8m、梁間では棟持柱の東側で2.3m、西側で1.8mである。建物1と同様に東側の屋根を長くしており、東側を意識した建物といえる。棟方

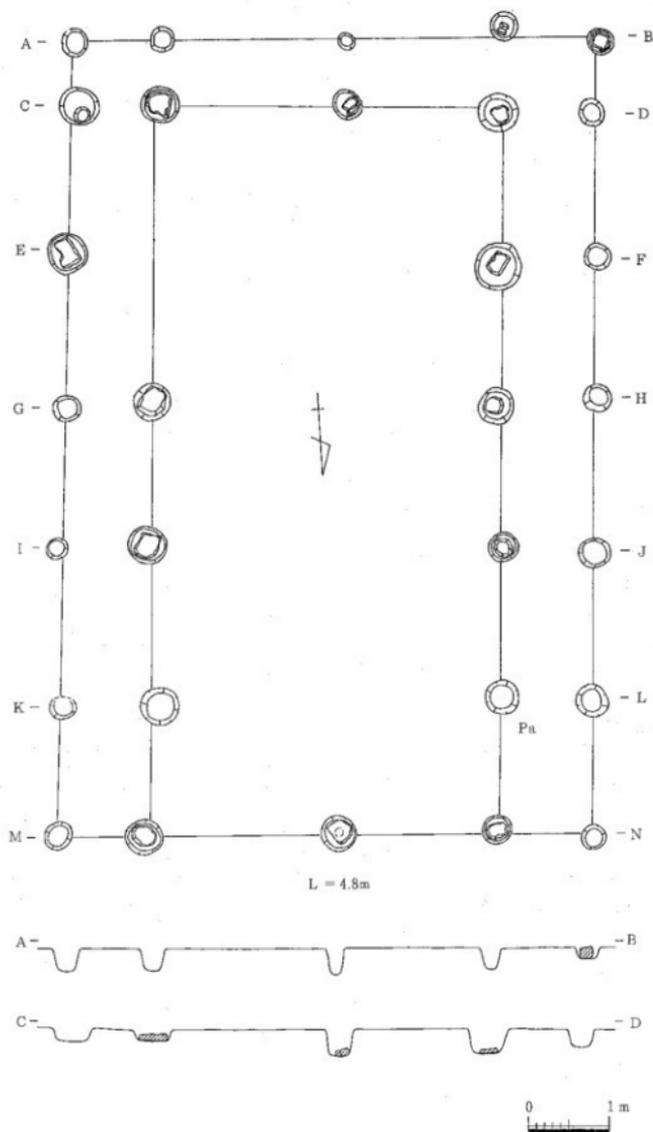


図53 建物2 実測図 (1)

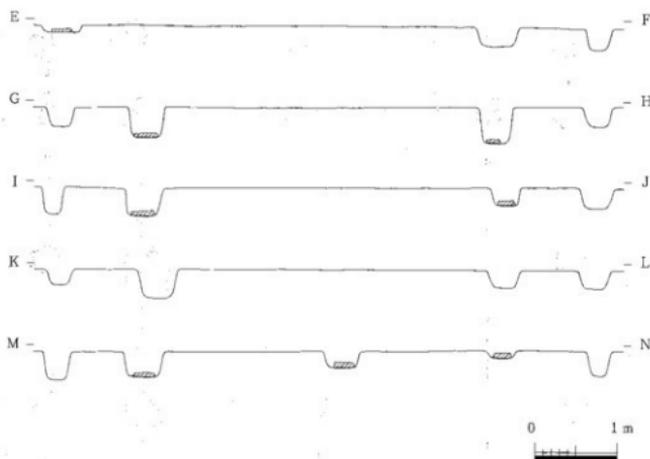


図54 建物2 実測図(2)

向はほぼ南北方向であるが4° 東へ振っており、その分建物1の棟方向とはずれている。ただし、全体的に見るとそれは誤差の範囲と考えられ、建物1と建物2の棟方向はほとんど同じと考えてよいものと思われる。遺構の検出面は4.7m付近で、身舎部分の柱穴は検出面から平均0.35mで、一部に0.1mの浅いものがある。底部分の柱穴の検出面から平均0.3mで、若干0.1m程の浅いものがある。

遺物はほとんど出土していないが、Paの埋土から碗39が出土しており、口縁部が若干欠けているもののほぼ完形であることから、柱穴設置の際に埋納されたと推測される。

P66・P87(集水枡状遺構)(図55・56・57)

建物1の北東コーナー部に検出された遺構で、建物1をめぐる溝3が北側で接続しており、さらに南東部には東側へ低位部への排水を目的としたと思われる溝も認められることから集水枡状の遺構と推測される。この遺構は2度の掘り直しがあり、最初の部分で削平を免れたものをP87、掘り直したものをP66とした。P87の全形はよく分からないが、残存部分から一辺4.0mほどの隅丸方形と推測される。P66は一辺4.5mの隅丸方形の平面形で、掘り直しは遺構の拡張を伴っていたといえる。遺構の検出面は4.9m付近で、断面は緩やかなカーブを描く、すり鉢状である。埋土は13層あり、徐々に埋没した過程を示している。

遺物はP66の埋土中から比較的多く出土しており、完形の碗も少なくない。P87からも、ある程度出土しているが小片が大半である。したがって、図化できた碗47~56、小皿40~45、台付小皿46、青磁皿57・58、土鉢59・60、鍔手状の銅製品は、P66から出土したものである。溝3でもP66と接する付近からは完形の碗が比較的多く出土している。この部分が建物1からすると、北東、いわゆる鬼門に相当することから何らかの祭祀がおこなわれていたことを反映していることも推測される。

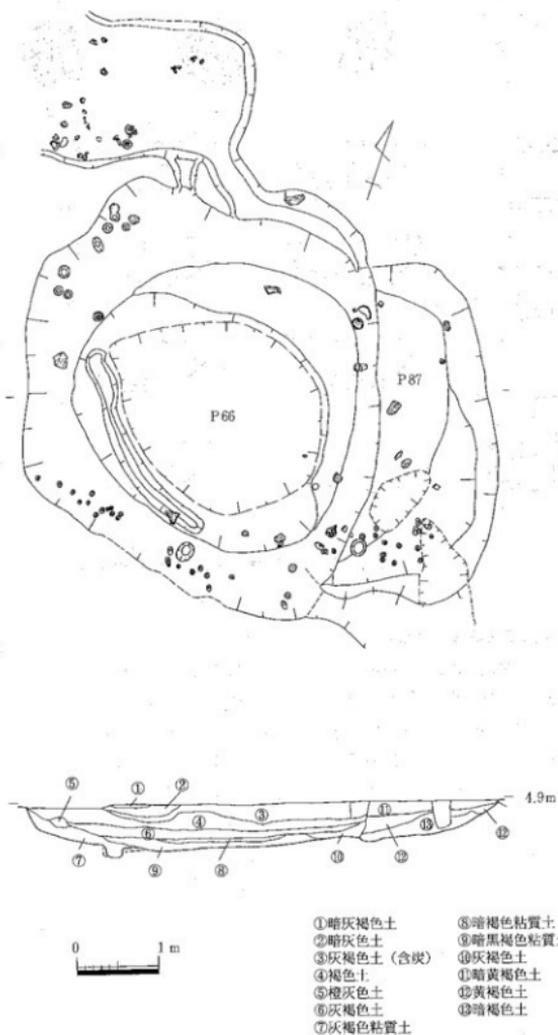


図55 P66・P87実測図

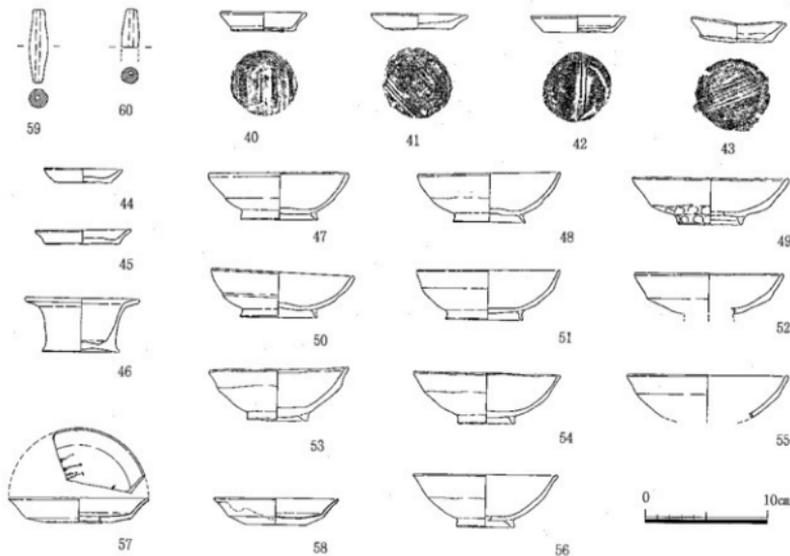


図56 P66(集水枡状遺構)出土遺物(1)

P95(集水枡状遺構)(図58・59)

建物1の東側で検出された遺構で、溝3が南側で接続しており、さらに東側には低位部への排水を目的としたと思われる溝も認められることから集水枡状の遺構と推測される。長径4.7m、短径3.2mの長楕円形、もしくは隅丸方形の平面形を呈している。遺構検出面は4.8m付近で、断面形は緩やかなカーブを描く台形である。埋土は6層認められるが、基本的にP66・87と似ている。ただし遺物の出土状況は異なっており、埋土からは土師器の小片が出土しただけで遺物の量は少なかった。ただ、溝3との接続部付近から土師器碗62と青磁碗片61が出土している。建物1の東側コーナー付近に並んで位置する点や、溝3と接続している点は同じ集水枡状遺構であるP66・P87と共通するが、遺物の出土状況は異なっている。

P57(図60・61)

建物1の東側で検出された土壌で、南と北の集水枡状遺構にはさまれた位置にあり、しかもこの3つの遺構は、建物1に対してある程度規則的な配置を指向していることがうかがわれる。さらに

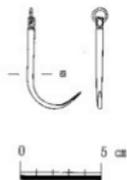


図57 P66 出土遺物(2)

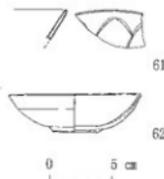


図58 P95 出土遺物

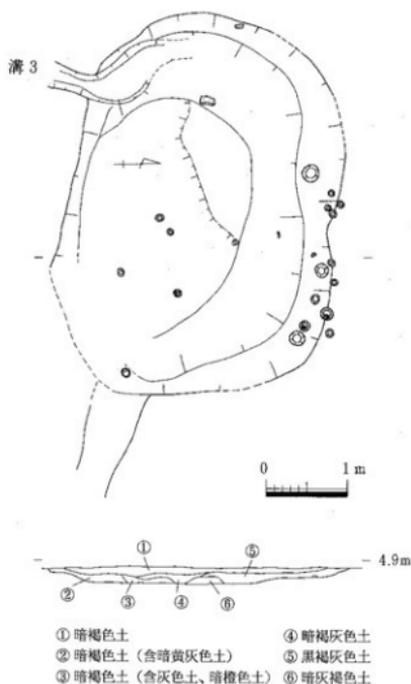


図59 P95 実測図

P66・P87の北側集水枡状遺構から延びる排水溝がP57を迂回していることから、P57は集水枡状遺構と平行して用いられていた可能性がある。溝3とは接続していないが、おそらく水滴めなどを目的とした土壌であったと推測される。一辺3.2mほどの隅丸方形の平面形で、遺構の検出面は4.8m付近である。断面形は緩やかなカーブを描くU字形で、埋土は4層認められる。序々に埋没したと考えられ、埋土の様相は集水枡状遺構と似ている。

遺物は小片の土器が主体であるが、図化できたものは土錘2点(63、64)、青磁2点(65、65)、土師器小皿2点67・68、土師器碗69である。

P1 (図62・64)

建物1の北東部に検出された土壌で、径1.0mの円形を呈する。遺構の検出面は4.8m付近で、断面形はU字形である。深さは検出面から0.1mである。遺物は遺構中央の庇付近から土師器碗75が出土した。

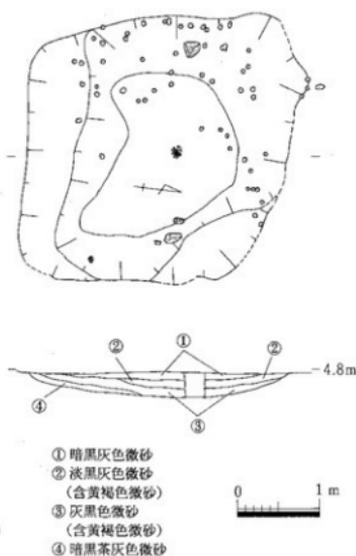
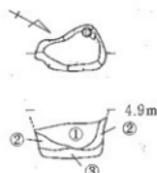


図60 P57 実測図

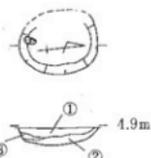


図61 P57 出土遺物



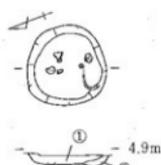
- ① 灰色微砂 (含黄褐色微砂)
② 暗灰色微砂 (含淡黄灰色微砂)
③ 暗灰色粘質微砂

P 88



- ① 茶灰色微砂
② 黄茶灰色微砂
③ 淡黄灰色微砂

P 19



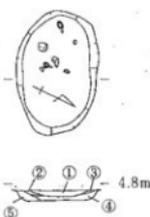
- ① 暗黒灰色微砂
② 暗黒灰色粘質微砂

P 1



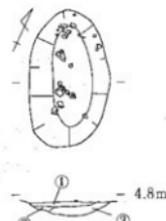
- ① 褐色土
② 暗黄灰褐色土
③ 暗褐色土

P 275



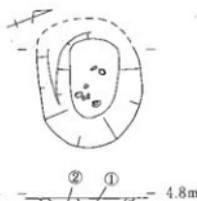
- ① 灰色土
② 灰褐色土
③ 黄褐色土
④ 暗黄灰褐色土
⑤ 暗灰褐色土

P 261



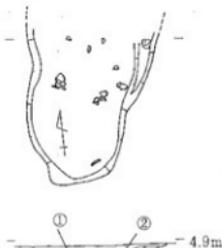
- ① 暗褐色土
② 淡灰黄色シルト
③ 灰黄色シルト

P 166



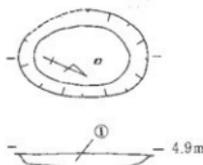
- ① 褐色土
② 暗黄灰褐色土
③ 暗黄灰褐色土
④ 青灰色粘質土
⑤ 暗灰青色土
⑥ 暗黄灰青色土

P 280



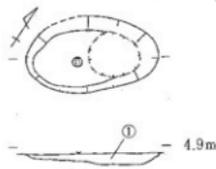
- ① 暗褐色土
② 暗黄灰褐色粘質土

P 71



- ① 暗黄茶灰色微砂

P 7



- ① 茶灰色微砂 (含淡黄灰色微砂)

P 4

図 62 P 1・P 4・P 7・P 19・P 71・P 88・P 166・P 261・P 275・P 280 実測図

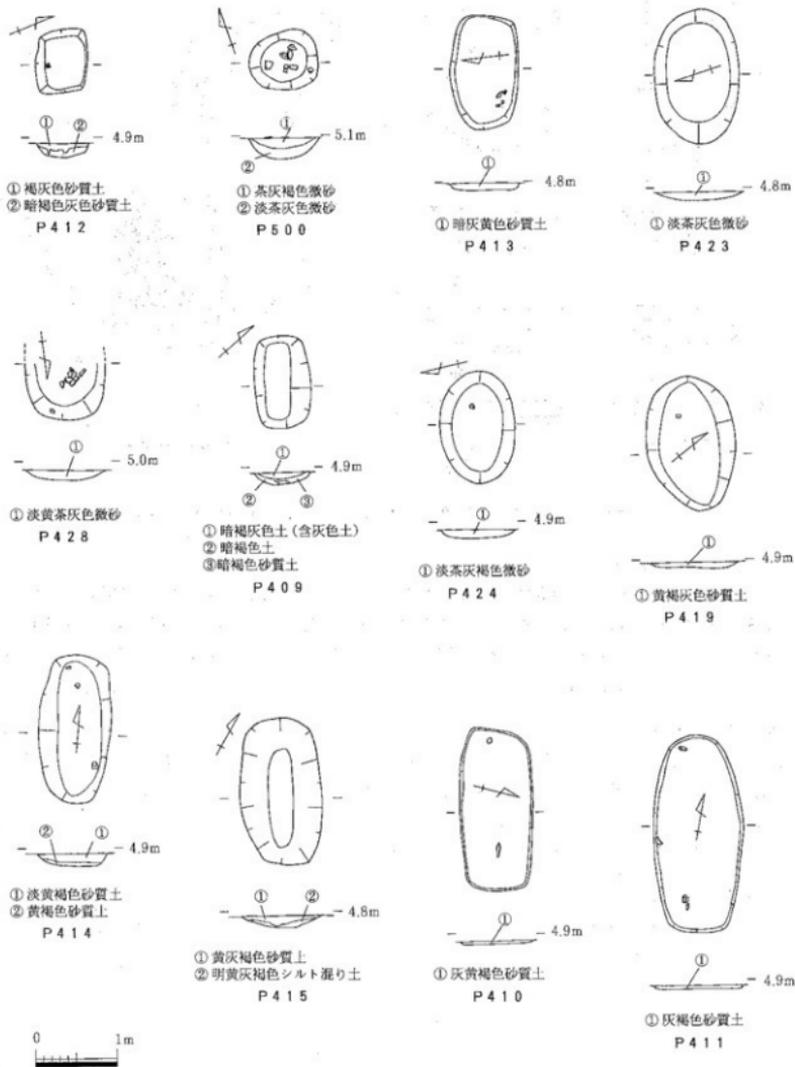


図 63 P409・P410・P411・P412・P413・P414・P415・P419・P423・P424・P428・P500 実測図

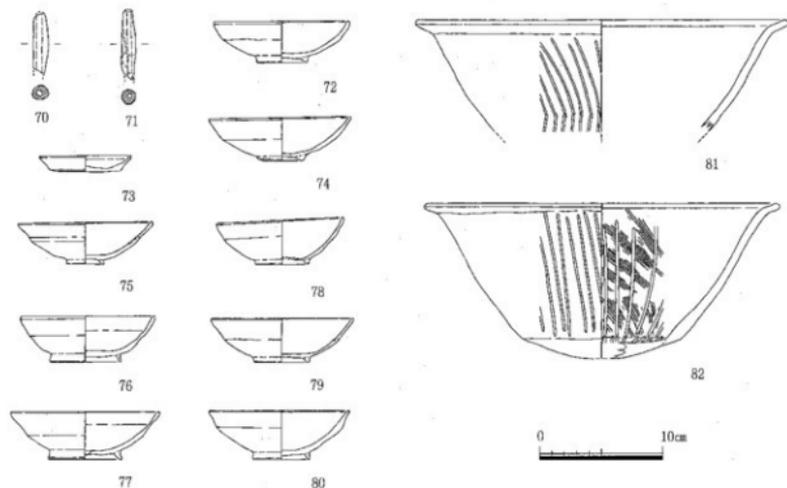


図64 P1・P4・P19・P71・P88・P166・P500 出土遺物

P4・P7・P19 (図62・64)

P66の北側で検出された土壌で、それぞれ切り合っているが平面形はいずれも長楕円形で似ている。遺構検出面は4.8~4.9m付近である。P4は長さが1.6m、幅1.0m、P7は長さが1.6m、幅1.1m、P19は長さが1.0m、幅0.7m以上である。遺物はP4から土師器碗76・77が2個体、P19から土師器小皿73、P7から土師器の小片が出土した。

P71 (図62・64)

建物1の北東、微高地端部で検出された土壌で、北側は削平されており明瞭でない。長さ1.6m以上、幅1.5mの長楕円形、もしくは不整形円の平面形を呈する。遺構の検出面は4.9m付近で、深さは検出面から0.15mである。断面形は台形である。埋土は2層で、遺物は下層から出土した。図化できたのは土鍾70・71、土師器碗72で、そのほか土師器の小片も出土している。

P88 (図62・64)

P95の北西部を一部切っている土壌で長さ0.8m、幅0.4~0.5mの不整形な平面形を呈する。遺構の検出面は4.8m付近で、深さは検出面から0.4mである。断面形は台形である。埋土は3層で、遺物は①層からのみ出土した。出土した遺物は土師器碗74で、ほぼ完形である。

P166 (図62・64)

建物1の南西部、建物1の周囲をめぐる溝の南西コーナー付近で検出された土壌で、長さ1.7m、幅1.0mの長楕円形の平面形を呈する。断面形はU字形で埋土は3層である。遺物の多くは①層から出土した。全て土師器土器碗で、3個体78・79・80が図化できた。

P261 (図62・64)

建物2の北東部柱穴に接して検出された土壌で、長さ1.5m、幅1.1mの小判形を呈する平面形である。遺構検出面は4.7m付近で、埋土は5層、断面形は台形である。遺物は検出面で出土しており、小礫と土師器の小片である。

P275 (図62)

建物2北西部で検出された土壌で、長さ1.4m、幅0.6mの隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は4.7m付近で、埋土は3層、断面形は台形である。遺物は検出面で出土しており、小礫と土師器の小片である。

P280 (図62)

建物2の北西部で検出された土壌で、長さ1.4m以上、幅1.2mの小判形の平面形である。断面形は台形であるが、南側に段があり、南辺のみ2段掘りの形状を呈する。遺構検出面は4.7m付近で、埋土は6層である。遺物は埋土中から出土しており、土師器の小片が若干である。

P409・P410・P411・P412・P413・P414・P415・P419・P423・P424・P428 (図63・65)

建物2の北側で検出された土壌で、近世の遺構により削平を受けているため、結果として建物2と平行するように並んで検出された可能性もあるが、近世遺構に削平されていない北側にはほとんど存在しないことから、建物2に平行していた可能性も否定できない。遺構の平面形が方形、もしくは長楕円形であることから墓壇群の可能性も当初考えていたが、骨片などが出土したのはP410だけでその根拠は少ない。いずれも遺構の残存状態がよくないため、それぞれの遺構の性格を明確にすることはできなかったが、建物1に対して溝が四周めぐることからこれらの土壌群も建物2に平行する植栽などの痕跡も含まれている可能性は考えられる。ただしP410とP411についてはP410から骨片の付着した鉄製の刀子が出土していることや、断面形や平面形がほかの土壌と比べ箱形になることから、墓壇の可能性を考えたい。

それでは各遺構の計測値を記述するとP409は長さ1.1m、幅0.7m、P410は長さ2.0m、幅0.85m、P411は長さ2.4m、幅1.1m、P412は長さ0.75m、幅0.5m、P413は長さ1.4m、幅0.8m、P414は長さ1.8m、幅0.8m、P415は長さ1.8m、幅1.0m、P419は長さ1.7m、幅1.1m、P423は長さ1.7m、幅1.0m、P424は長さ1.3m、幅0.9m、P428は幅1.0mである。それぞれの遺構からは土器の小片が出土しているが、図化できるものはなかった。ただ、P410から出土した鉄製の刀子は、鞘の痕跡と推測される木目や、その上に骨片が付着していた。この刀子は茎の部分付近が欠損しているが、遺構上面が後にかなり削平を受けていることから、その際に欠損した可能性が高い。従ってこの刀子はP410の副葬品と考えられる。

P500 (図63・64)

調査区の北端で検出された土壌で、これのみ他の遺構とは離れた位置にある。長径0.8m、短径0.7mの円形を呈する平面形で、断面形はU字形である。遺構検出面は5.1m付近で、遺構の深さは0.25mである。埋土は2層で遺物は①層中よりまとまって出土した。図化できたのは銅2個体81・82で底部から直線的に開く体部をしており、口縁部の外反は短い形態である。

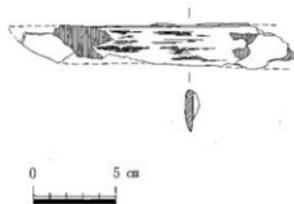


図65 P410 出土遺物

P160 (図66・67・68・69)

建物1の棟の柱穴に近接して検出された土壌である。径0.8mの円形の平面形を呈し、断面形は台形である。底部中央付近には径0.1mの円形ビットが検出され、P160が柱穴とその掘り方である可能性も考えられるが、断面観察からは柱痕跡等は確認できなかった。遺構の検出面は4.8m付近で、深さは0.4mで円形ビットの底までは0.5mである。埋土は2層からなり、円形ビットの埋土②とその上部の埋土とは異なっている。遺物は①層からのみ出土した。検出面付近からは土師器碗84、小皿83、青磁碗85が、①層の中位より上からは、断面方形で片方に円環状にし他方の先端を尖らした鉄製金具と、「聖宋元宝」1枚、「開元通宝」2枚、「大観通宝」1枚、「開元平宝」1枚、「元祐通宝」2枚、「皇宋元宝」1枚、「開慶通宝」1枚、不明2枚の計銅銭11枚が出土した。

当遺構は、銅銭が多数出土していることや、建物1の内部、それも建物の中心となっている棟付近に位置することから、建物1に対する地鎮などの祭祀関係に用いた遺構である可能性が推測される。

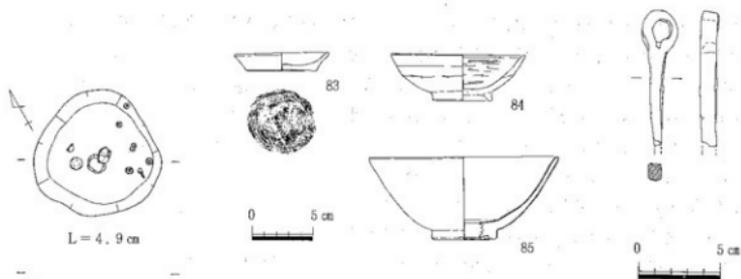


図67 P160 出土遺物(1)

図68 P160 出土遺物(2)

- ① 淡灰色微砂
- ② 黄灰色微砂



図66 P160 実測図

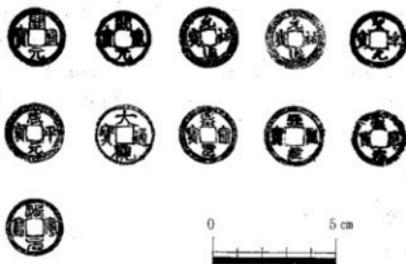


図69 P160 出土遺物(3)

P113 (図70・71)

P57の東側で検出された土壌で、P66からの排水溝を切っている。長さ2.5m、幅1.5mの長楕円形の平面形を呈し、断面形はU字形、もしくは台形である。遺構検出面は4.7m付近で、深さは検出面から0.3mである。埋土は2層確認され、①層には炭の堆積も認められた。遺物は両層から出土しており、中央に向かって落ち込んでいくような出土状況であった。図化できた遺物は、土師器碗2点86・87、亀山焼89、備前焼88である。



図70 P113 実測図

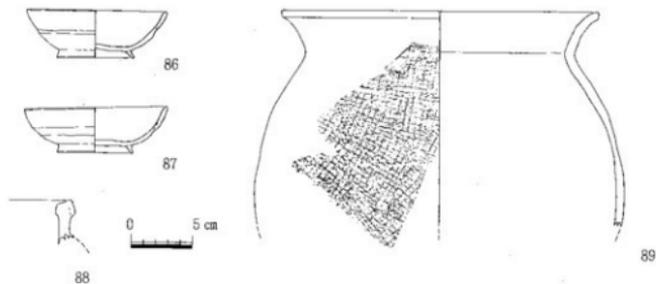


図71 P113 出土遺物

P420 (図72・73)

建物2北側の土壌群の西端で検出された土壌で、当初一連の土壌として考えていたが、出土した遺物のうち小片の土師器については時期が分からないが、完形の杯については明らかに奈良時代のものであり、当遺構も中世の時期ではない可能性が考慮された。ただし出土した土器の小片のなかには中世の土師器碗の破片と思われるものもあり、杯が2次的堆積によって埋没した可能性もある。一応検出面から中世に属する遺構として扱う。長さ0.7m、幅0.5mの長楕円形の平面形を呈し、断面形は四状である。遺構検出面は4.8m付近で、深さは検出面から0.1m、埋土は1層である。遺物は遺構検出面で出土した。

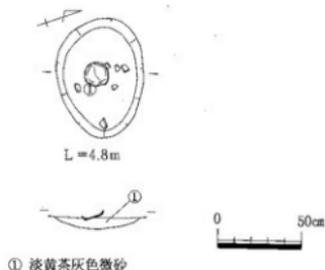


図72 P420 実測図

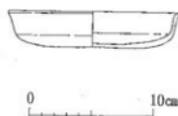


図73 P420 出土遺物

P203 (図74・75)

建物1の孫庇の柱穴に北側に一部切られて検出された土壌である。径0.6mの円形の平面形で、検

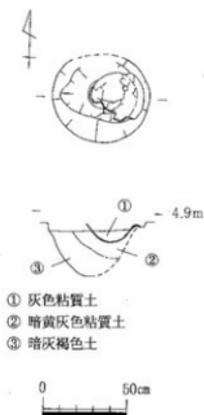


図74 P203 実測図

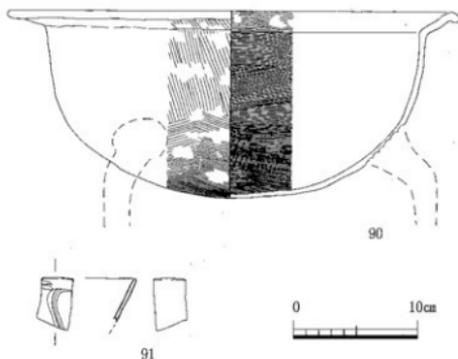


図75 P203 出土遺物

出面は4.8m付近である。断面形は山形で、埋土は2層である。遺構の東側には口縁部を1/2ほどと脚部を欠いた鍋が検出された。鍋の内部には、灰色粘土が堆積しており土壌埋土と異なっていることから、内容物が分解した可能性も考え土壌を部分的に洗浄したが、明確な遺物は検出されなかった。

出土した遺物は銅90と青磁碗片91だけであり、前者は意識的に埋置したもので、後者は混入したものである。

墓1 (図76)

建物1の北西部で検出された土壇墓で、建物1をめぐる溝3を切っている。長さ2.15m、幅0.86mの小判形の平面形をした墓壇に、両手・両足を折り曲げ、頭を南側に向けた状態で埋葬されていた。頭部の方が18cmも足部付近よりレベル高が高いことや、墓壇主軸が東西方向に合わせており頭位方向が西であることから、西枕を意識して埋葬した可能性が推測される。墓壇の検出面で角礫を検出し、それが頭部の位置と一致するものの、この墓に伴うものであるのかは明確でない。副葬品、および出土遺物は全くなかった。

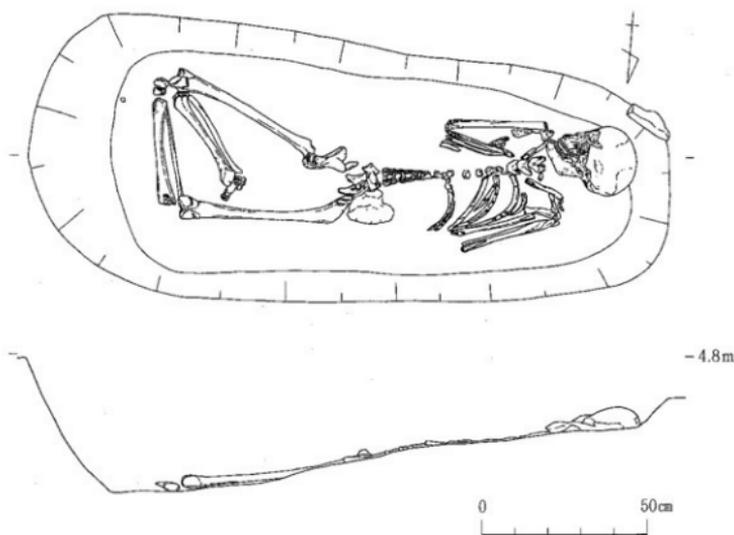


図76 墓1実測図

墓 2 (図77)

調査区中央付近で検出された土墳墓である。長さ98cm、幅67cmの長楕円形の平面形をした墓壇に、頭骨と足の骨の一部が遺存していた。遺存した人骨が少ないため、埋葬形態等は明確ではないが、墓壇の大きさから屈葬であったと推測される。副葬品および出土遺物は全くなかった。

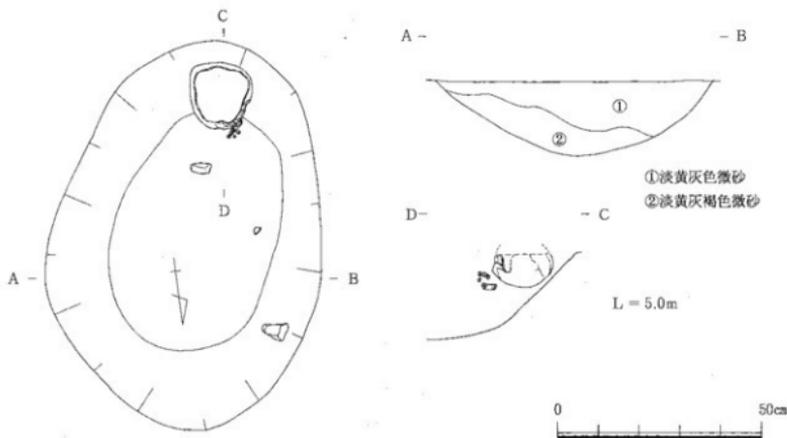


図77 墓 2 実測図

溝 3 (図78・79・80)

建物 1 の周囲をめくり、その東側で P66、P95 の集水弁状遺構と接続し、東側の低位部へ排水される溝である。溝幅は一定でなく建物 1 北側では幅 1.8m で、西側では幅 0.8m と狭くなっている。建物 1 の西側では溝幅 1.0~1.5m で、建物 1 の西から南にかけての平面形は矩形に細かく屈曲している。南側は建物 1 と平行しており、溝幅は 1.0m である。北側と西側では底レベルが 0.1m ほど異なっており、北側の溝底とは段差が存在している。溝の深さは検出面から 0.1~0.2m と比較的浅い。

遺物は各所で出土しているが、その分布はランダムでなく完形、および完形に近い土器は建物 1 の北側の溝で多く出土している (図80)。また、遺構検出時にも比較的多く土器が出土しており (図80)、それらは溝 3 の最終埋土に含まれる土器と考えられる。建物 1 の南西のコーナー付近からは常滑焼大甕の上半部片 120 が出土している。

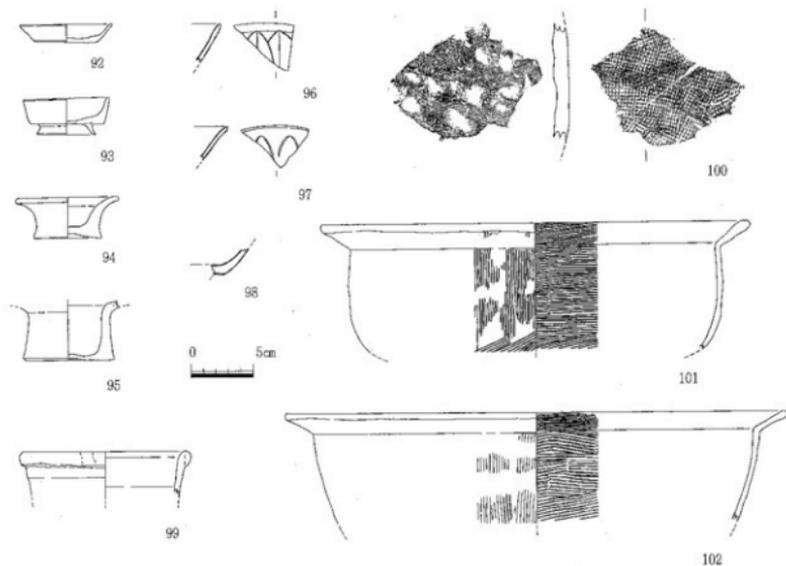


図78 溝3 検出面出土遺物 (1)

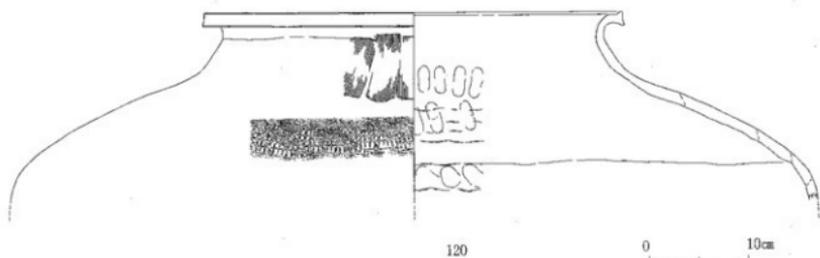


図79 溝3 (建物1南西側) 出土遺物 (2)

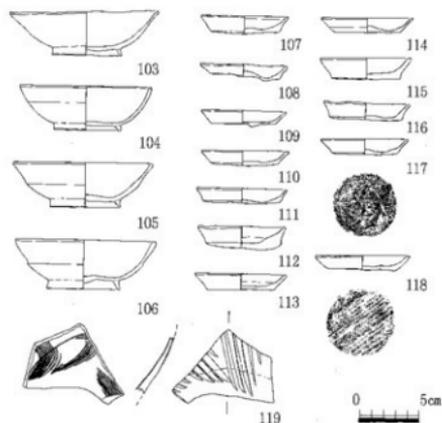


図80 溝3（建物1北側）出土遺物（3）

溝14・15（図81）

調査区北半で検出された溝で、両溝ともほぼ同じ位置で切り合って検出されており、同じ溝の掘り直しと考えられる。溝の方向が南側の建物と平行することから、それらとセットとなる遺構と推測される。溝14は幅0.8～1.2mで、遺構検出面のレベル高は4.9m付近、断面形はU字形、深さは検出面から0.1mである。切り合い関係から溝15の掘り直しの溝と考えられる。溝15は幅0.7～0.9mで、遺構検出面のレベル高は溝14と同じで4.9m付近、断面形はU字形、深さは検出面から0.1m前後で、東側にいくに従って若干低くなっている。埋土は小礫で充填されており、小礫によって埋めたということも考えられる。出土した遺物は大変少なく、土師器の碗と思われる小片が数片出土したのみである。

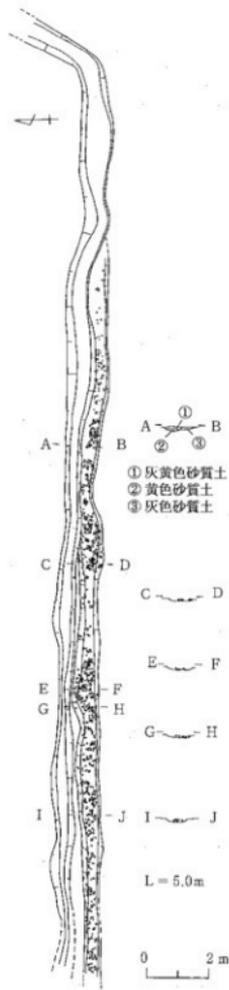


図81 溝14・15実測図

A区包含層出土銅銭 (図82)

微高地上の包含層中から「紹聖元宝」、「元祐通宝」、「元豊通宝」4枚、「開元平宝」、「皇宋通宝」2枚、「洪武通宝」、「治平元宝」の11枚の銅銭が出土した。大雑把な傾向として、これら銅銭は建物1周辺に偏る傾向が看取された。

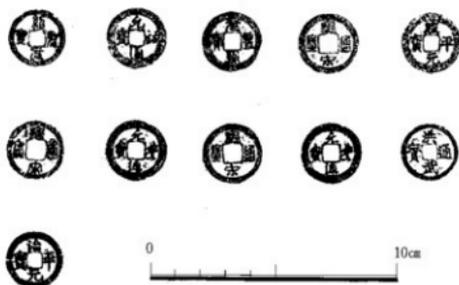


図82 A区上層包含層出土銅銭

B区 (図84)

柵列1 (図83)

調査区の北西付近で検出された柵列である。遺構検出面は4.8m付近で、径0.2~0.3mの円形の平面形をしたビットが東西に6つ並び、西から3つ目のビットから南へビットが2つ並んでいる。東西方向と南北方向のビットは別の柵列である可能性もあるが、検出面、埋土等がよく似ているため一応同じ柵列と考えた。ビットの深さは検出面から0.15~0.2mである。南北方向の南端ビットからは径0.1mの柱痕跡が認められた。遺物は土師器の微細な破片が若干出土したのみである。

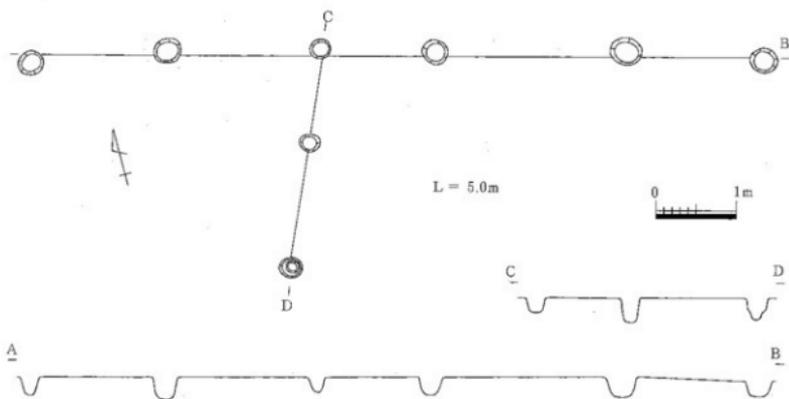


図83 柵列1実測図

柵列2 (図85)

調査区の北西付近で検出された柵列で、P634をはさんで柵列1と平行している。遺構検出面は4.7m付近で、径0.2~0.3mの円形の平面形をしたビットが並んでいる。ビットの深さは検出面から0.1~0.2mで、柱痕跡等は確認できなかった。遺物は土師器の微細な破片が1点出土したのみである。柵

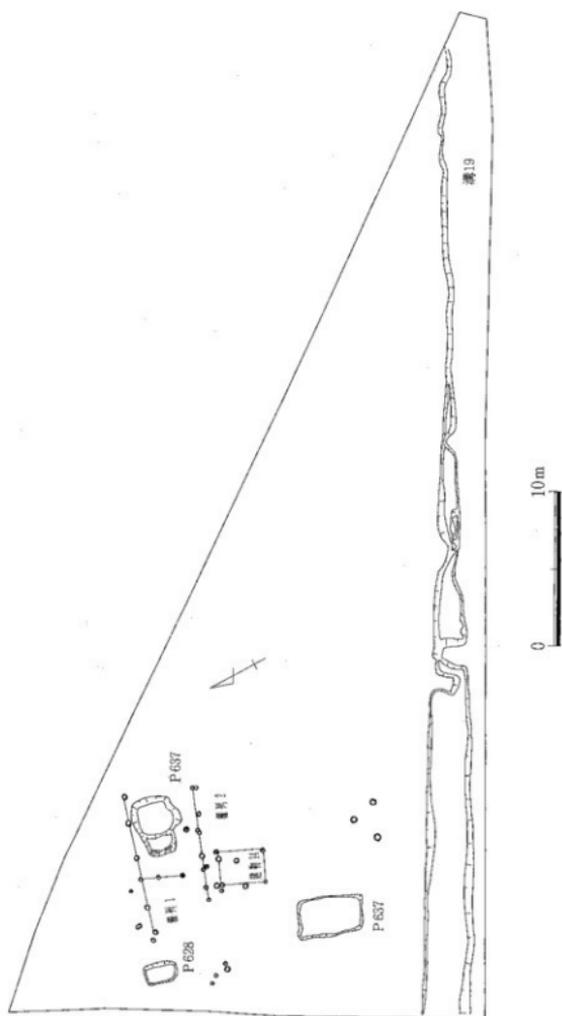


図8.4 B区中世遺構配置図

列1や柵列2の方向性はB区やC区の建物や土壌の方向性と一致しており、一連の遺構であることを示していると考えられる。

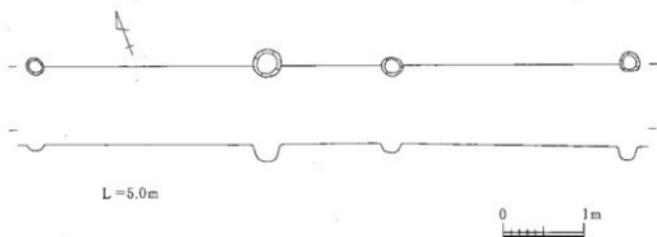


図85 柵列2 実測図

建物14 (図86)

柵列2の南側で検出された掘立柱建物で、柵列2とはほぼ平行している。柱構造は桁行1間×梁行1間で、主軸方向は $N-21^{\circ}-E$ を示す。

遺構の検出面は4.8m付近で、径0.2~0.25mの円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から0.15~0.2mで、東側のピットには径0.1mの柱痕跡が認められる。遺物は微細な土器片が各ピットから出土している。

P628 (図87・88)

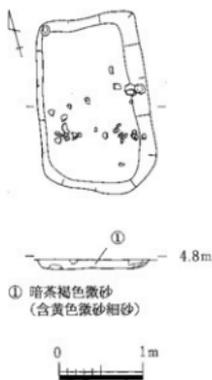


図87 P628 実測図

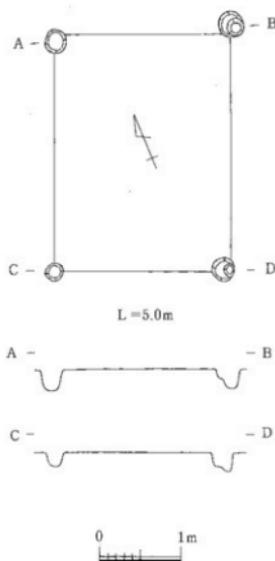


図86 建物14 実測図

欄列1の西側で検出された土壌で、遺構検出面は4.7m付近である。長さ2.05m、幅1.3mの長方形の平面形を呈し、断面形は台形である。深さは検出面から0.1mで、埋土は一層である。遺物は埋土中で出土しており、遺構中央付近にかたまる傾向が看取された。鍋の胴部片もあったが、図化できたのは土師器碗2点121・122である。

P634 (図89・90・91)

欄列1と2の間で検出された土壌で、長さ3.8m、幅3.1mの凸形の平面形を呈する。当初方形の土壌が2つ切り合っていることも想定されたため、長軸方向の土層断面で検討をおこなったが、両部分での埋没経過は連続的であり、同一遺構と考えられる。そうすると長さ3.1m、幅2.2mの方形土壌に長さ2.0m、幅1.6mの突出部が付属する平面形で、突出部の底レベルは0.2mほど高くなるため段差が生じている。遺構検出面は4.8m付近で、最深部までの深さは0.3mである。埋土は5層確認でき、そのうち②～④層に遺物が多く含まれていた。出土した遺物には、0.2～0.3mほどの長さの角礫があり、遺構内に比較的ランダムに分布していた。図化できた遺物は土師器碗4点123～126、土師器皿4点127～130、鍋2点131・132、青磁片133である。そのほか鉄釘、銅銭「大観通宝」がそれぞれ1点ずつ出土した。

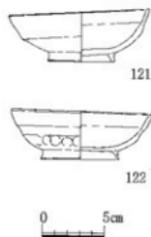


図88 P628出土遺物

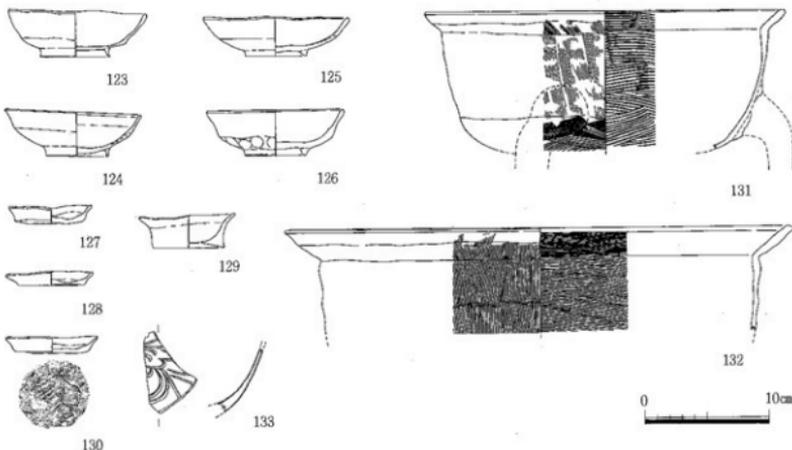


図89 P634 出土遺物 (1)

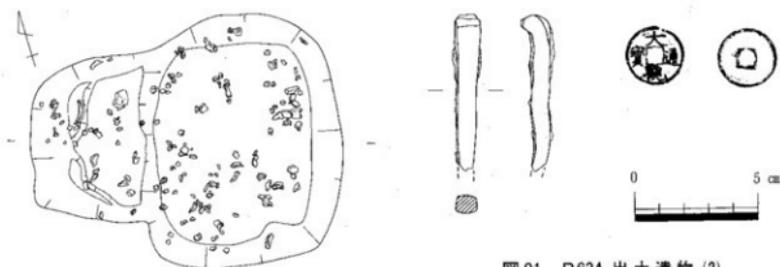
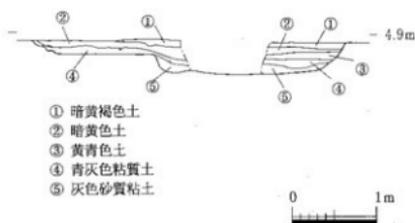


図91 P634 出土遺物 (2)

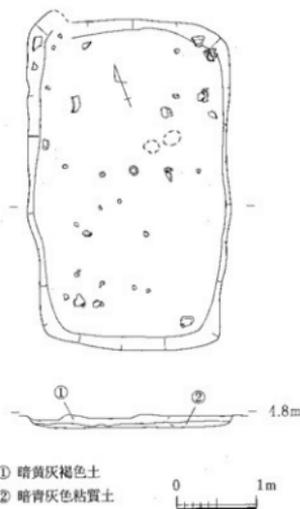


- ① 暗黄褐色土
- ② 暗黄色土
- ③ 黄青色土
- ④ 青灰色粘質土
- ⑤ 灰色砂質粘土

図90 P634 実測図

P637 (図92)

建物14の南側で検出された土壌で、長さ4.15m、幅1.95mの長方形の平面形を呈する。遺構検出面は4.8m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は2層である。遺物は0.1m前後の長さの角礫と土器片で、遺構内に比較的ランダムに分布していた。



- ① 暗黄灰褐色土
- ② 暗青灰色粘質土

図92 P637 実測図

C区 (図93)

建物3 (図94)

調査区の中央付近で検出された掘立柱建物である。柱構造は桁行2間×梁間2間で、主軸方向はN-20°-Eを示す。遺構の検出面は4.8~4.9m

付近で、径0.1~0.3mの円形ビットで構成される。ビットの深さは検出面から0.15~0.5mで、東側のビットには径0.1m前後の柱痕跡が認められる。遺物は柱穴埋土から微細な土器片が出土している。

建物4 (図95)

建物3の東側で重複して検出された掘立柱建物である。柱構造は桁行2間×梁間2間で、主軸方向はN-19°-Eを示す。遺構の検出面は4.8m付近で、径0.1~0.2mの円形ビットで構成される。ビットの深さは検出面から0.1~0.2mである。遺物は柱穴埋土から微細な土器片が出土している。



図93 C区中世遺構配置図

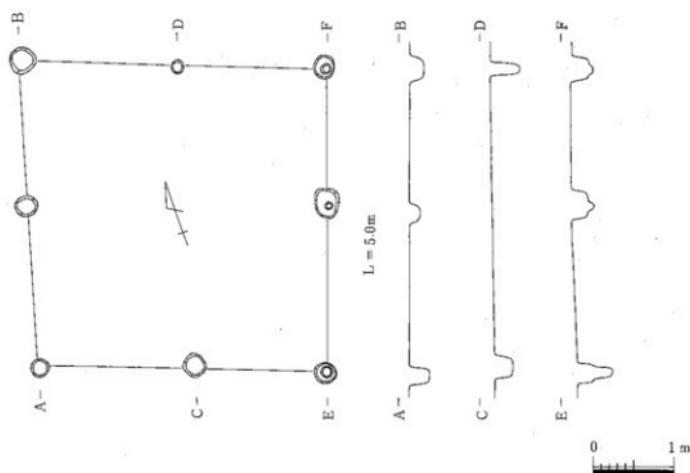


図94 建物3 実測図

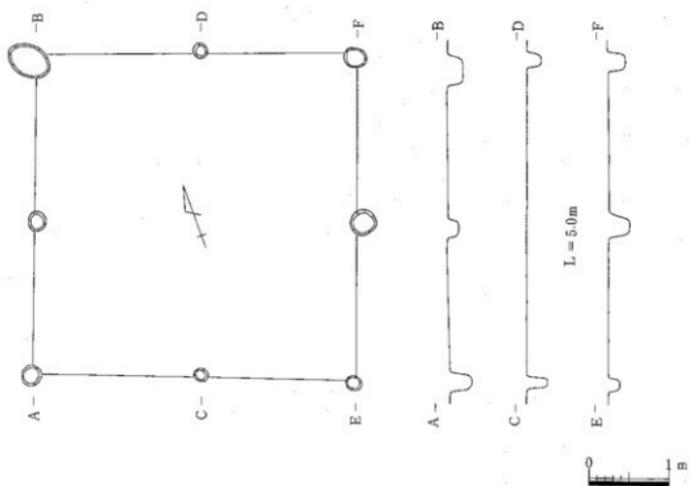


図95 建物4 実測図

建物 5 (図96)

建物 4 の東側で重複して検出された掘立柱建物である。柱構造は桁 2 間×梁間 2 間で、主軸方向は $N-20^{\circ}-E$ を示す。遺構の検出面は 4.9m 付近で、径 0.2~0.5m の円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から 0.15~0.45m で、南東コーナー部のピットには径 0.15m の柱痕跡が認められる。遺物は柱穴埋土から微細な土器片が出土している。

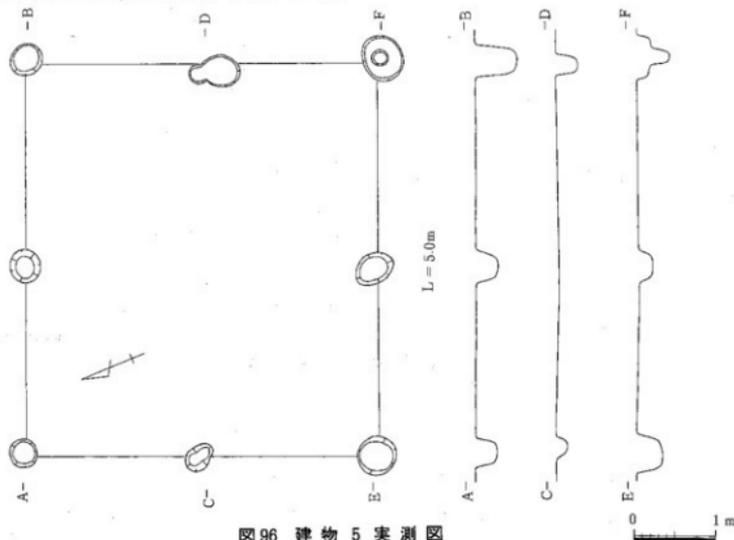


図96 建物 5 実測図

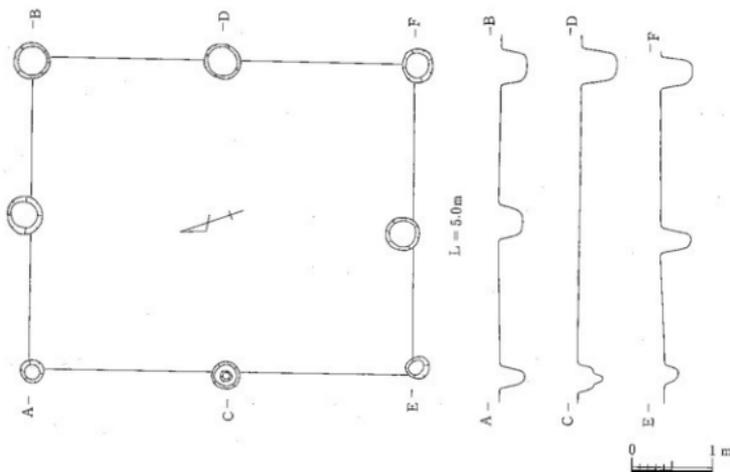


図97 建物 6 実測図

建物 6 (図97)

建物 5 の東側で検出された掘立柱建物である。柱構造は桁行 2 間×梁間 2 間で、主軸方向は $N-20^{\circ}-E$ を示す。遺構の検出面は 4.8m 付近で、径 0.2~0.4m の円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から 0.2~0.4m で、西側中央のピットには径 0.1m の柱痕跡が認められる。建物 3~6 は主軸方向がほとんど同じである点や、重複していたりすることから、同一建物の建て替えである可能性が高いように思われる。ただし、建物 3 と建物 6 については近接して並存していた可能性はある。建物 6 の出土遺物は、柱穴埋土から微細な土器片が出土したのみである。

建物 7 (図98)

建物 5 の北側で検出された掘立柱建物である。柱構造は桁行 3 間×梁間 2 間で、主軸方向は $N-14^{\circ}-E$ を示す。遺構の検出面は 5.0m 付近で、径 0.1~0.4m の円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から 0.15~0.3m で、東側のピットには径 0.1m の柱痕跡が認められる。遺物は柱穴埋土から微細な土器片が出土したのみである。

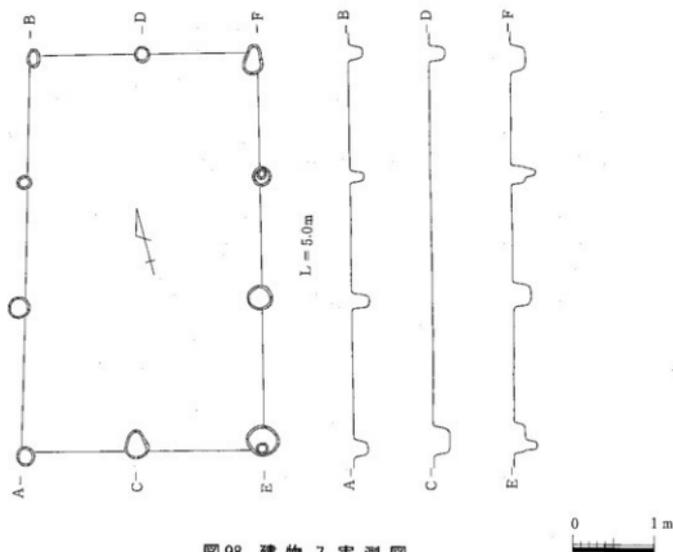


図 98 建物 7 実測図

建物 8 (図99)

建物 7 の東側で検出された掘立柱建物である。柱構造は桁行 3 間×梁間 2 間で、主軸方向は $E-7^{\circ}-S$ を示す。遺構の検出面は 4.9m 付近で、径 0.2~0.3m の円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から 0.15~0.25m で、北側のピットには径 0.1m の柱痕跡が認められる。遺物は柱穴の埋土から微細な土器片が出土したのみである。

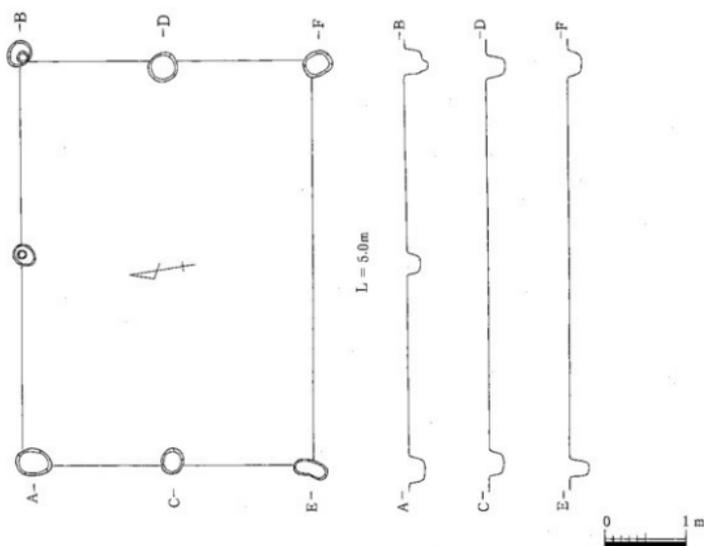


図99 建物8 実測図

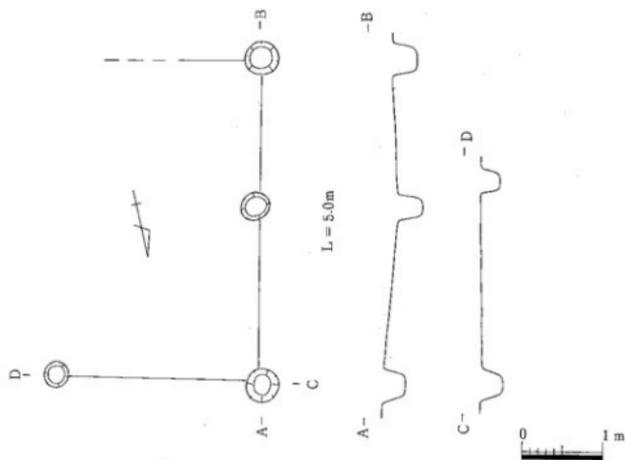


図100 建物9 実測図

建物9 (図100)

調査区の南東部で検出された掘立柱建物である。柱構造は桁行1間以上×梁間2間で、主軸方向は $E-10^{\circ}-S$ と推測される。遺構の検出面は4.7m付近で、径0.2~0.3mの円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から0.2~0.3mである。遺物は柱穴の埋土から微細な土器片が出土したのみである。

建物10・11 (図101・102)

建物9の北側で検出された掘立柱建物で、いずれも東半がB区との境になるため、全形を把握することはできなかった。しかし、B区ではこの建物の柱穴は検出されておらず、桁行、梁間とも2間程度の柱構造と推測される。遺構の検出面は4.9m付近で、径0.1~0.3mの円形ピットで構成される。ピットの深さは検出面から0.1~0.2mである。遺物は各ピットから微細な土器片が出土しているが、図化できたのは土師器椀134だけである。

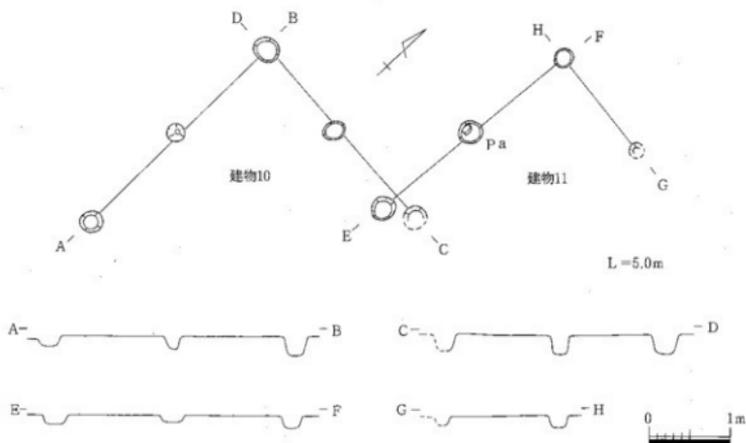


図101 建物10・11実測図

土師器焼成窯1 (図103~107)

調査区の北東コーナー付近で検出された。南側に建物10、11が近接するものの、調査区全体の中ではピットの密度が少なく、窯の操業地区としての集落内における空間占地はある程度継続的に維持されていたことがうかがわれる。把握できた遺構の全長は6.2mであるが、若干B区の方へのびるようであり、7m内外と推測される。主軸方向は、ほぼ東西方向である。検出面のレベル高は4.8m付近である。窯自体は焼成部、焚口、焚口に付属する溝、焼成部と焚口に付属する段状部によって構成されており、焼成部と焚口の長さ

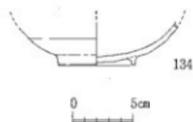


図102 建物11出土遺物

は2.2mである。焼成部は長径1.2m、短径1.0mの楕円形の平面形を呈しており、床面に向かってすり鉢状に壁面が内傾している。検出時(図104)は焼成部内部に焼土塊が多量に含まれており、そのうち壁面周囲の焼土塊は板状で大きさも大きく、壁面の焼土化した部分の可能性が考えられた。そこで、土層断面を検討しながら焼成部内へ流入した土、および焼土塊を除去していった(図105)。その結果、壁面周囲の焼土塊の出土状況は上部が焼成部内傾しているものが大半で、さらに壁面から0.1m程離れていることから、壁面のオリジナルな部分ではないと考えられた。しかしながら、それら焼土塊は焼成部の外周に沿っていることから、深さ約0.2m掘り下げて形成された焼成部上部の構造物と考えられ、それら焼土塊の残存部高から焼成部は地表上0.2mは粘土によって立ち上げられていたと考えられる。そうすると焼成部の総高は床面から0.4m以上ということになる。焼土塊に混じって礫も若干出土しており、焼成部構築の際に粘土と共に埋め込まれた可能性はあるが、量も少なく基本的に粘土によっていたと考えられる。厚さは最も薄いもので2.5cm、厚いもので4cmである。窯壁と考えられる焼土塊をみると、ササなどの混入物は認められず、いくつかは径2.3~3.0cm程の焼成前穿孔による円孔の認められるものがある。これはおそらく上部構造構築の際に、簡単な骨組みをおこなっていった痕跡と推測される。残存している焼成部や燃焼室の壁面は、ほとんど被熱による赤化は認められず、床面についても同様である。焼成部と焚口の境には幅0.1m、長さ0.2mの裾部があり、この部分は焼成部と焚口を掘り下げた際に掘り残した地山部分である。裾部は焼成部側も焚口側も被熱して赤化している。そして、南側裾部付近の焼成部床面から板状の窯道具が出土している。焚口は長径1.1m、短径1.0mの楕円形の平面形を呈しており、深さ0.22m程地山を掘り下げて構築されている。床面のレベル高は焼成部との接点で焚口の方が2cm程低いものの、焼成部から離れるにしたがい、序々に上がっていく。焼成部と同じく周囲の壁面は被熱による赤化は認められないが、焼成部との境の床面が0.1~0.15mの範囲被熱によって焼土化している。この部分が焚口の中心といえる。焚口の床面(図105)付近でも円柱状の窯道具が出土しているが、これは焼成部から掻き出されたものと考えられる。焚口に付属する溝は、幅0.4mで深さは検出面から0.15mである。底レベルはほとんど変わらないことや、焼成部や焚口の床面より高いことから、排水溝といった機能はほとんど期待されない溝である。段状部は焼成部と焚口の周囲にあり、北側の幅は0.2m、南側の幅は1.2mと南側の方が幅広く、そこには径1.0m程の窪みも存在する。段上からは焼土塊や遺物はほとんど出土していないが、窪みには土器や焼土塊の小片がややかたまる傾向が看取された。段状部の深さは検出面から3~5cm程である。

出土した遺物は、焼成部と焚口から出土したものが主体である。しかしながら窯採業直後の遺物と窯絶後の流入による遺物との分離は明確でないが、検出時点では、焼成部の上部構造物であった焼土塊によって覆われており、遺物はその下部より出土したもののばかりであった。したがって、窯より出土した遺物は窯絶後からほとんど隔たらない時期に埋没した遺物と考えられる。遺物には窯道具と考えられる土製品と土器があり、窯道具については円柱状の形態のものと板状の形態のものに分けられる135~144。円柱状のものは一方の端部が広くつくられていることから上・下の違いがあったようである。板状のものには長さによって大小の差があり、一点しか出土していないが端部の中央に挟りを入れたものもある。板状のものは、いずれも継断面が被熱のため円弧状に反っている。さらに、円柱状のものと組み合わせた痕跡を残すもの139もあり、円柱の上に板状のものを並べて用いたことが復元される。このほか円板状の形態に多くの円孔を穿孔した土製品158があり、破片が小さいため大きさなどはよく分からないが、分焰のための土製品であった可能性が推測される。土器は土師

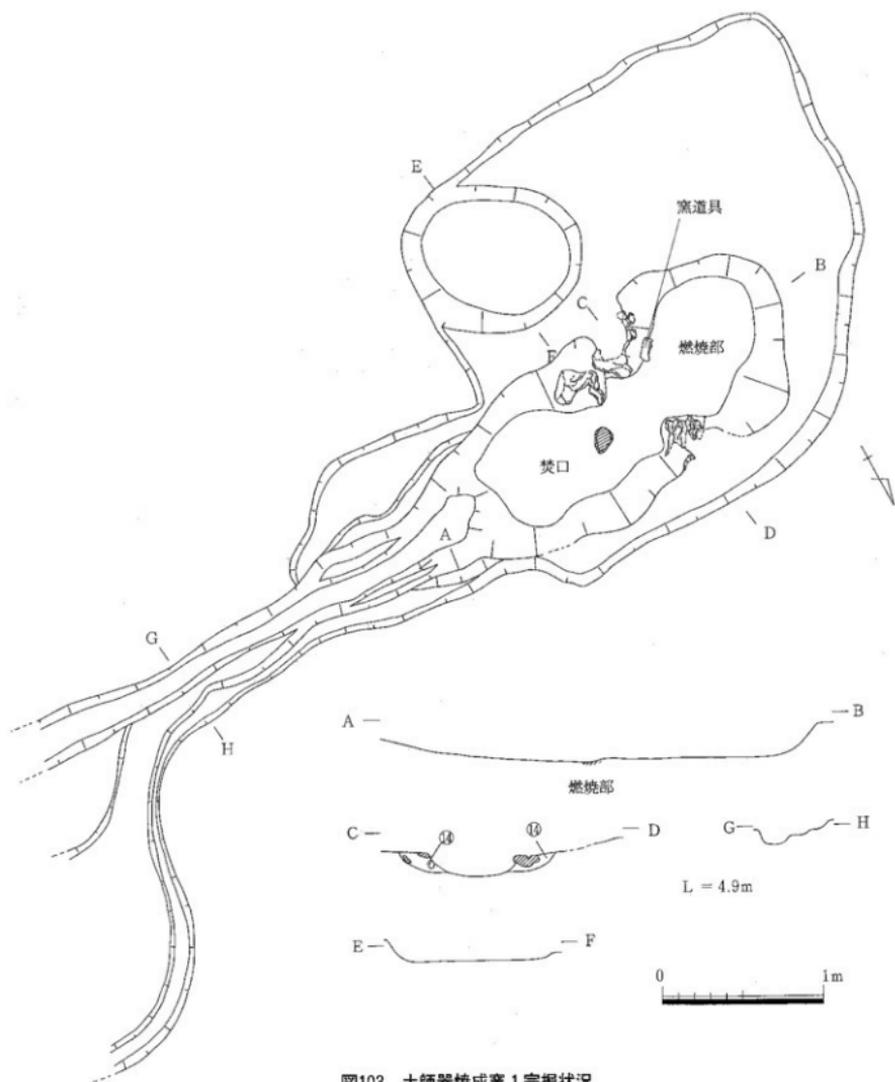


图103 土師器焼成窯 1 完掘状况

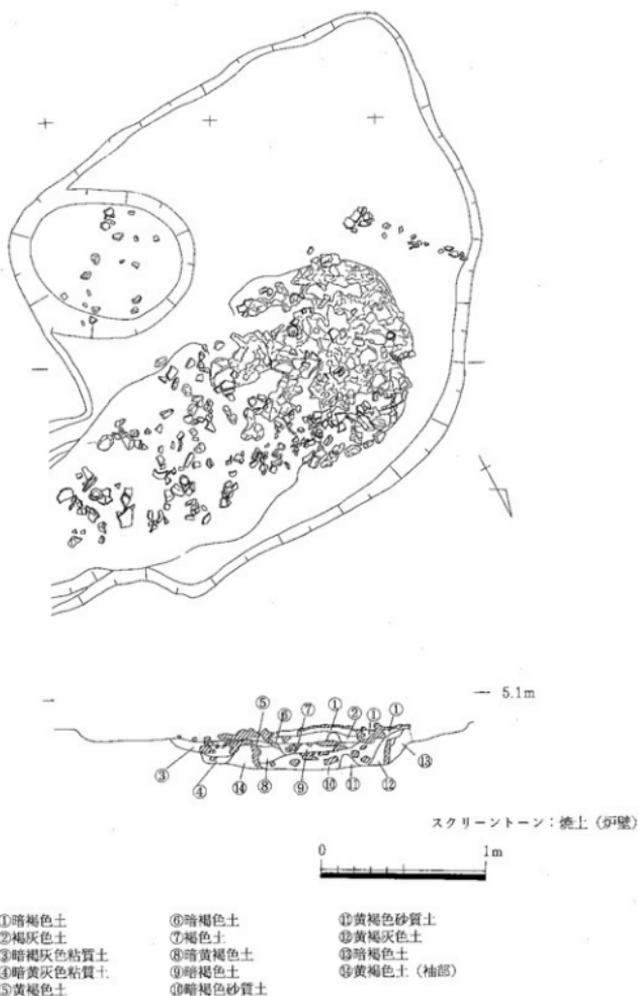


図104 土師器焼成窯1 炉壁検出状況

器の碗146～153、皿159・160、杯161・162、鍋155・156、カマド145・154などと、この時期に集落遺跡で出土する土師器のほぼ全器種が出土している。このうち鍋156は、高温により器表面が劣化し、形も変形している。これは焼成に失敗した土器であり、この窯で焼成された可能性が高いと考えられる。



图105 土師器焼成窯1 炉内遺物除去状況

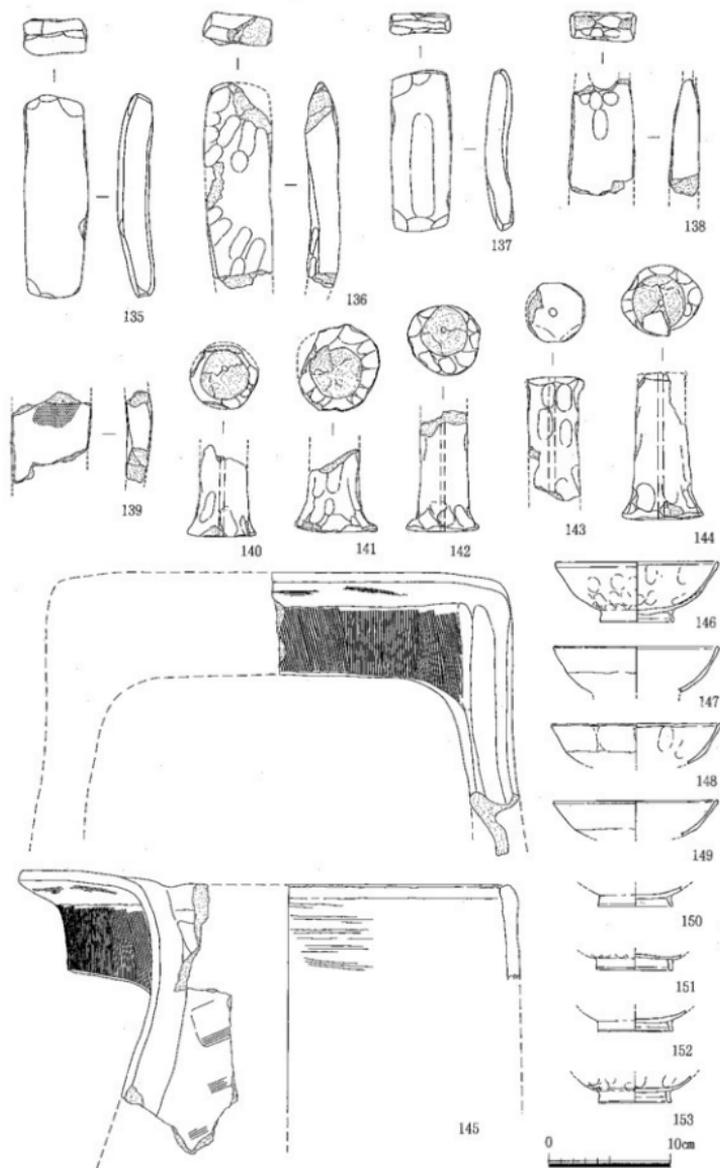


图106 土師器焼成窯1出土遺物(1)

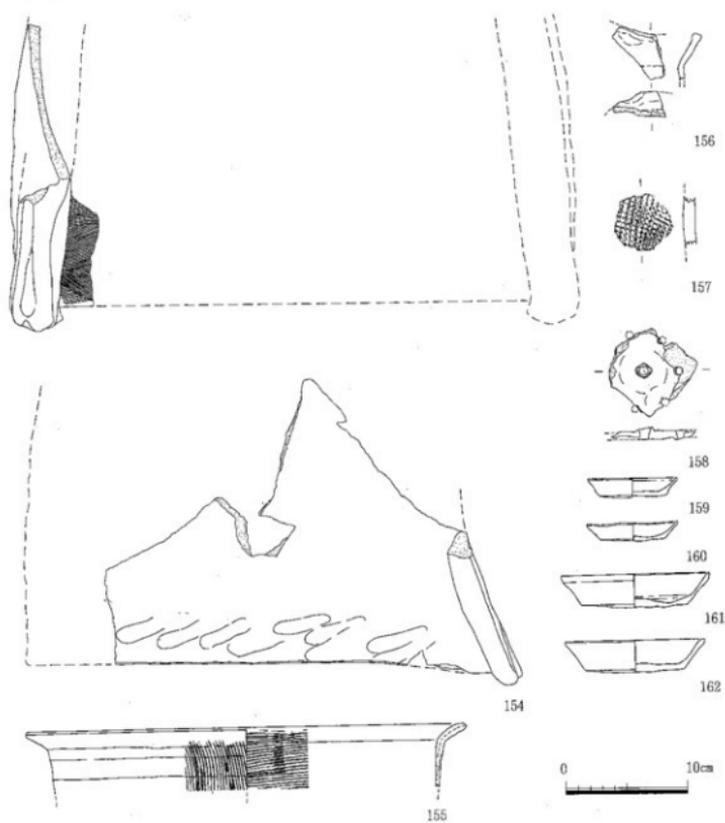


図107 土師器焼成窯1出土遺物(2)

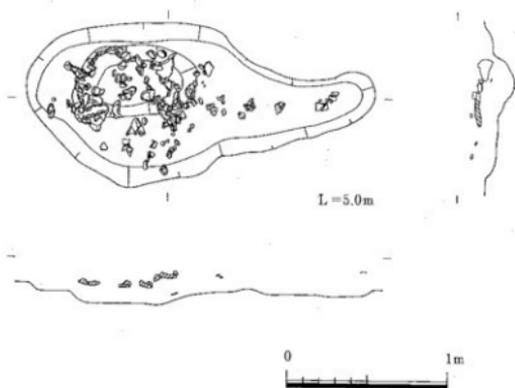


図108 土師器焼成窯 2

土師器焼成窯 2 (図108・109)

土師器焼成窯1の西側約2.2m離れた位置で検出された。土師器焼成窯1と近接並んでいることや、主軸方向もほぼ同じであることから、同時に操業していたかどうかはよく分からないが、一連のものと考えられる。遺構の残存状態は良好でなく、当初は土壌と考えていたが、焼土塊が集中して検出されたことや、全体の形状が焼成窯1の焼成部と焚口を合わせた形状や長さ、幅などと大体一致することから、土師器焼成窯と判断した。遺構の全長は2.1m、幅は1.05mである。遺構検出面は4.7m付近で、壁面はすり鉢状に内傾している。主軸方向はほぼ東西方向で、土師器焼成窯1と平行している。窯壁と考えられる焼土塊は西側に偏って検出されており、西側部分では一部崩落した状態で並んでいる部分もある。これは、この部分が焼成部で、焼土塊がその上部構造物であったことを示していると考えられる。また、焼土塊は全て床面から浮いた位置にあったことから、基本的な構造は土師器焼成窯1と同じであったと推測される。

出土した遺物は焼土塊と窯道具と考えられる土製品が2点である。焼土塊はスサなどの混入物はあまり認められない。窯道具は円状163と円柱状164の破片である。

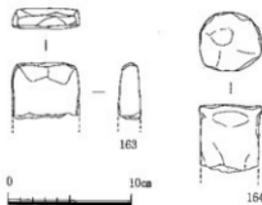


図109 土師器焼成窯 2 出土遺物

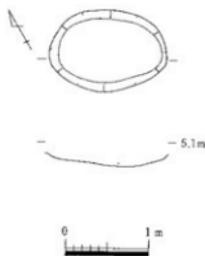


図110 P983実測図

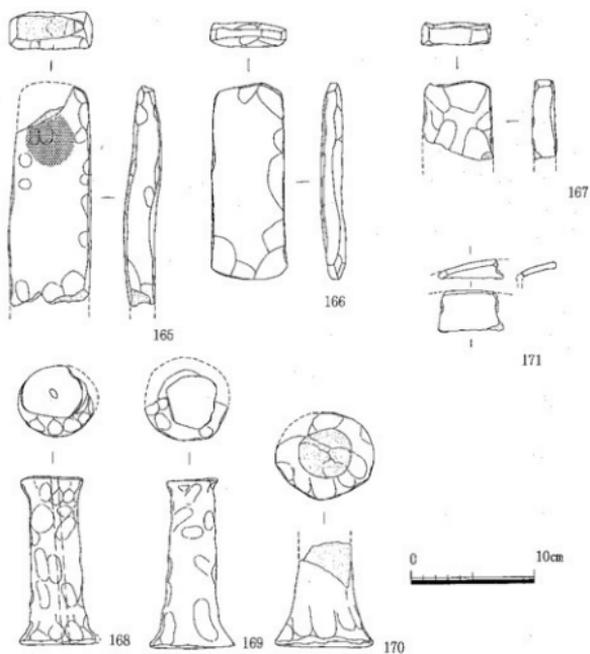


图111 P983 出土遺物

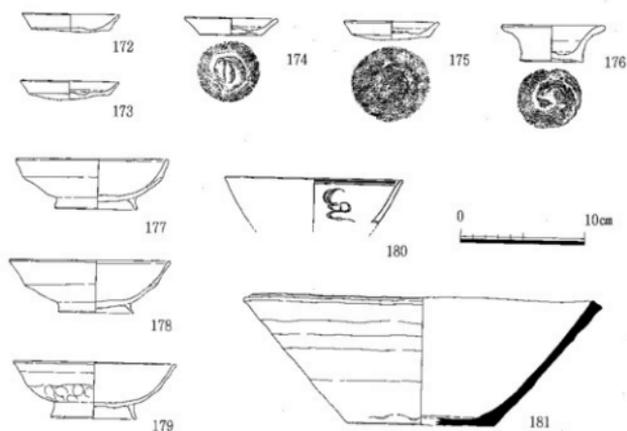
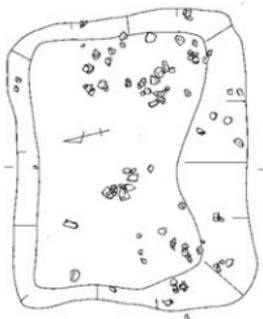


图112 P703 出土遺物

P983 (図110・111)

土師器焼成窯2の南側で検出された土壌で、長径1.4m、短径1.1mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は5.0m付近で、断面形は中央に向かって緩やかに傾斜している。埋土からは若干の焼土塊とともに窯道具が6点165~170と高温により焼け歪んだ鍋口縁部の破片171が出土した。この土壌は、焼成窯2の南側に近接していることなどから、焼成窯1の南側の段状部内にある円形土壌と同じ性格のものである可能性が推測される。



- ① 淡茶灰色微砂
- ② 淡茶褐色微砂
- ③ 茶褐色微砂 (含炭)



図113 P703 実測図

P703 (図112・113)

調査区の南東部で検出された土壌で、長さ3.6m、幅2.8mの長方形の平面形を呈する。建物9の軸方向と大体平行しており、建物9に付属する土壌であることも考えられる。遺構検出面は4.7m付近で、検出面からの深さは0.2mである。断面形は台形で、埋土は3層あり、③層中には炭が多く含まれていた。遺物は埋土中から出土しており、遺構全体に比較的ランダムに分布している。破片が多いが図化できたのは土師器碗178~179、皿172~176、青磁碗180、魚住焼捏鉢181だけである。

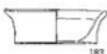


- ① 黄褐色土
- ② 暗灰黄色砂質土
- ③ 黄灰褐色土
- ④ 明黄灰色砂質土
- ⑤ 暗灰褐色土
- ⑥ 暗褐色粘質土



P946 (図114・115)

調査区北東部で検出された土壌で、東側コーナー付近は調査区外へ出るため一部不明な点があるが、長さ3.2m、幅1.85mの長方形の平面プランが想定される。建物8や土師器焼成窯の軸方向とほぼ同じであり、しかもP946が両遺構の中間に位置する関係からも一連の遺構である可能性が考えられる。遺構検出面は4.9m付近で、検出面からの深さは0.2mである。埋土は6層確認された。遺物は遺構中央付近を中心に散在的に出土し、礫が比較的多く認められた。図化できた遺物は土師器皿2点182・183だけである。



P1012 (図116)

調査区中央北側で検出された土壌で、南側には当北床から派生する幅0.7mの溝が付属する。遺構の検出面は4.95m付近で、検出面からの深さは0.1mである。断面形は皿状で、浅く窪み状の様相を呈している。遺物は土器の小片が埋土中より出土した。

図115 P946 出土遺物

図114 P946 実測図

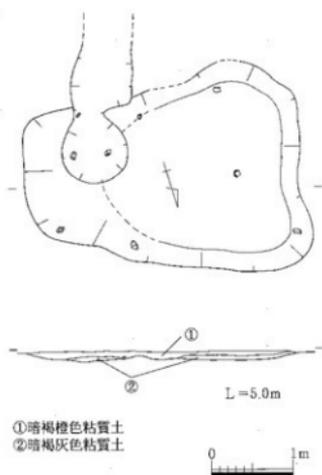


図 116 P1012 実測図

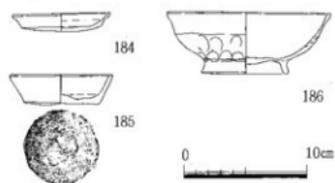


図 117 P893 出土遺物

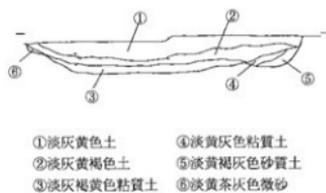
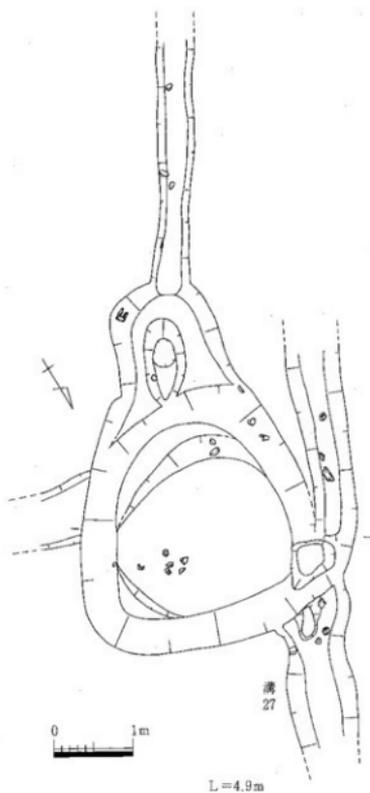
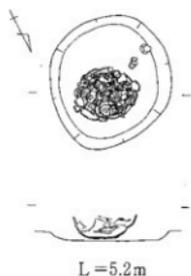


図 118 P893 実測図

P 8 9 3 (図117・118)

調査区南西側で検出された土壌で、北西のコーナー付近で溝27と接続することや、南端から排水溝状の溝が延びることから、集水枡の機能をもった土壌と推測される。遺構の検出面は4.9m付近で、断面形は台形となる。深さは検出面からは0.5mである。埋土は6層確認され、いずれも基本的にレンズ状堆積をしており、自然に近い状態で埋没していったようである。遺物は埋土中から若干出土しており、図化できたのは土師器碗186、皿184・185である。



P 1 0 4 6 (図119・120)

調査区を南北に縦断する溝30の西側で検出された土壌で、径0.7mの円形の掘り方の中央付近に亀山焼の甕216が

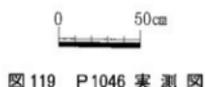


図119 P1046 実測図

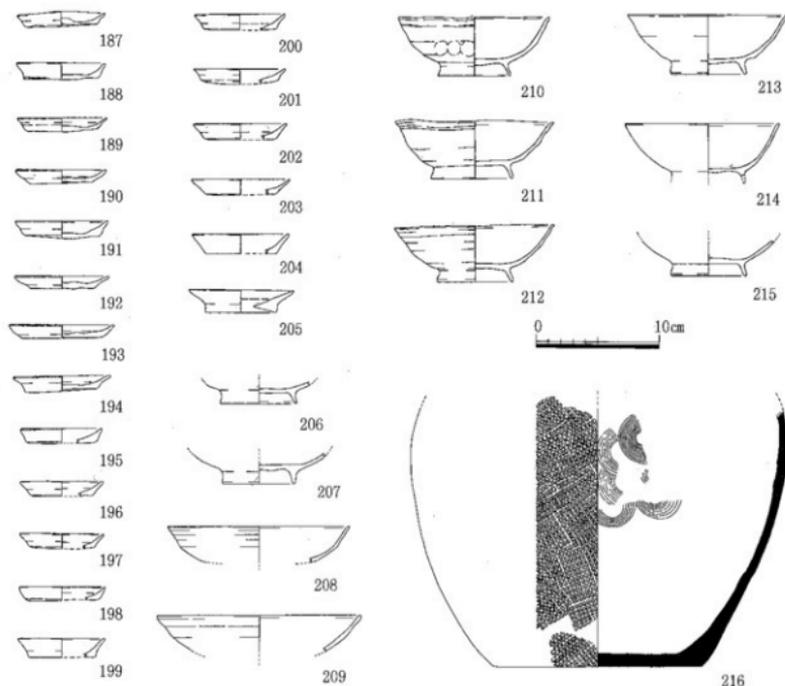


図120 P1046 出土遺物

正置されていた。遺構検出面は5.0m付近だが、亀山焼の甕は0.1m程高い位置で検出できていた。遺構の検出面は台形である。甕の中には土師器碗206～215や皿187～205が多量に入られてあった。蓋については、上面を後の水田開発により削平されているため不明である。中に入れてある土師器の傾向をみると、まず土師器碗を正位方向に置き、その上に皿を詰め込んでいる。ただし、検出面付近は水田による削平と風化のために土器の残存状態が良好でなく、皿が正位方向か、それとも逆に置かれていたのかはやや不明瞭である。P1046で出土した甕と中に入れていた碗・皿が何の目的をもって埋められていたのかはよく分からない。しかし、P1046の位置をC区全体からみても、土器焼成窯付近から溝30までの間は遺構の分布が稀薄で、幅5m程の空白地帯が帯状に続いており、この部分と溝30の接点付近には段も認められる。そして、この部分の延長上にはD区の井戸2がある。つまりこの遺構空白部分は、土器焼成窯と井戸2を結ぶ通路の可能性が高いように思われ、溝30は何らかの理由で両遺構を画する役割があったと言える。そうするとP1046は、両遺構の占める空間の接点にあるといえ、さらに通路の北側に接する位置にあることから、ある種の祭祀のために埋納されたことが推測される。

墓3 (図121・122)

調査区の中央付近で検出された墓である。長さ2.2m、幅1.5mの小判形の平面形をした墓壇に手足を折り曲げて埋葬してあった。墓壇の検出面は5.1m付近である。墓壇底付近からは長さ0.2～0.3mのやや大きめの礫が比較的多く出土しており、埋葬の際に敷かれていた可能性がある。棺の痕跡は認められず、釘も出土しなかった。人骨の腹部上面付近からは、一辺0.5mの角礫が検出されており、層位的に埋葬面に含まれることから、埋葬にあたり埋葬者の直上に置かれたものと考えられる。①層の間層をはさんで、墓壇中央に向かって落ち込む様に角礫と円礫が多数検出された。墓壇中央へ落ち込んでいるのは、埋葬者が腐朽したためと考えられ、当初の遺構面のレベル高にもよるが、本来は塚状

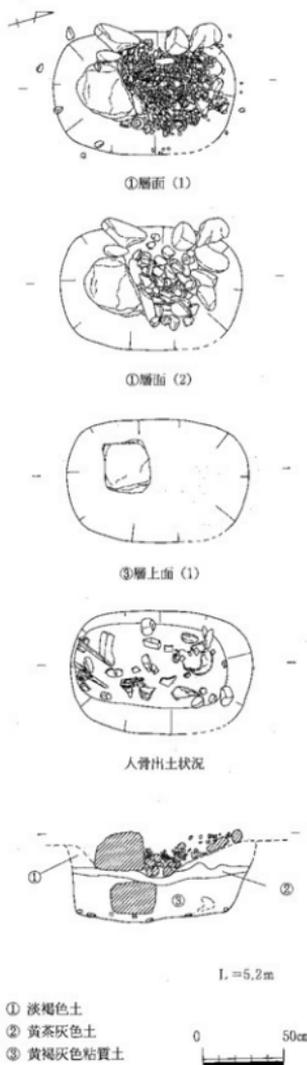


図121 墓3 実測図

に盛り上がっていた可能性がある。角礫と円礫は、まず南側に長さ0.6m、幅0.6m、厚さ0.4mの大きな角礫を置き、その北側に長さ0.3～0.4mの小さな角礫を一边1.1mの方形に並べ、その上に長さ0.1m前後の円礫を充填している。そして、円礫に混じて小椀218～220、皿217が出土しており、供献されたものと考えられる。また、礫に混じて砥石も一点出土した。

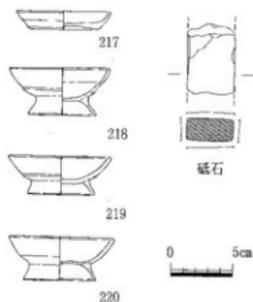


図122 墓3出土遺物

墳墓 (図123)

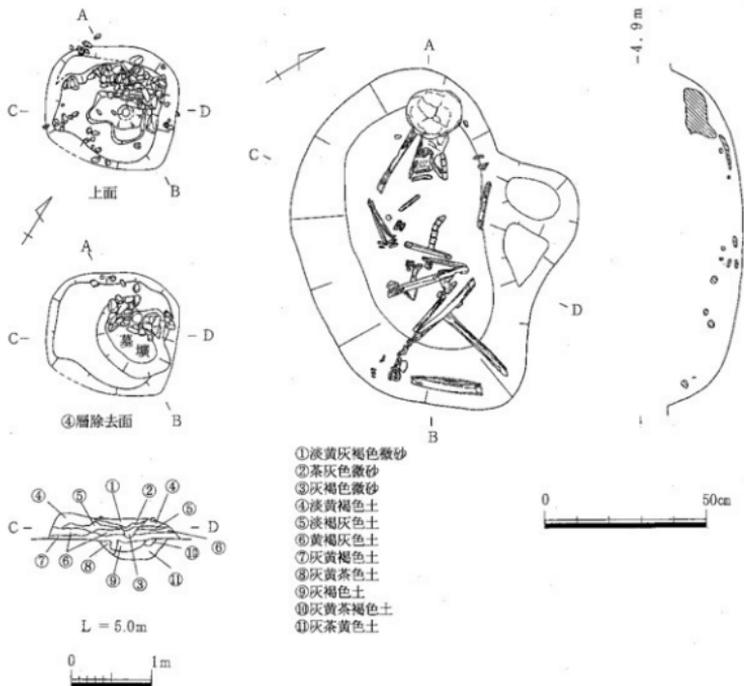


図123 墳墓実測図

建物3の北側で検出された墳墓である。一辺1.5m、現存高0.3mの方形の盛土で、墳頂北側には長さ0.1m程の円礫が葺石状に敷かれていた。円礫は最上層である④層を除去した時点でも検出されており、盛土の最終面では円礫を混じえておこない、最後に円礫を葺いたものと考えられる。墳頂部中央では、上面の形状が長さ0.6m、幅0.5mの不整形形で、下部になると径0.2mの円形となるビットが検出された。このビットの深さは0.2mで(①~③層)、部分的に円礫がビット内に落ち込んでいる状況が看取された。これはビット内に腐朽する材質の柱状のものがたてられていたことを示していると考えられ、おそらく『餓鬼草子』の墓所に描写されているような墓塔がたてられていた痕跡の可能性が推測される。盛土の下部には長さ2.1m、幅1.3mの小判形の円面形を呈した墓壇(⑧~⑩層)があり、その中に手足を折り曲げ、頭骨を墓壇壁面に寄せかけた状態で埋葬されていた。墓壇の断面形はU字形をしており、土層観察からも木棺などはいり込まなかったと考えられる。さらにこの墓壇は盛土との関係から、掘られた当時状態が保存されていたと考えられ、そうすると墓壇の深さは最深部で0.42mということになる。さらに墓壇東側面には長さ0.8m、幅0.4mの不整形形の平面形で墓壇上面から0.1m程の深さの土壌状の窪みが付属している。この部分は墓壇の埋土と同じであることから、埋葬の際に用いた足場などの痕跡と推測される。遺物は土師器の小片が円礫の中から出土した以外は出土しなかった。墓壇の中にも副葬品等は認められなかった。

P 8 4 7 (図124・125)

P893の西側で検出された土壌で、長さ5.4m、幅1.1~1.6mの長方形の平面形を呈する。検出当初は2つの遺構の切り合いも考慮されたが、土層的な違いは認められず、1つの遺構と考えられた。遺構検出面は4.9m付近で、最深部は検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は基本的に2層である。遺物は①層から出土し、大半は長さ0.1m未満の小礫であるが、若干土師器も出土し、図化できたのは皿221~223だけである。

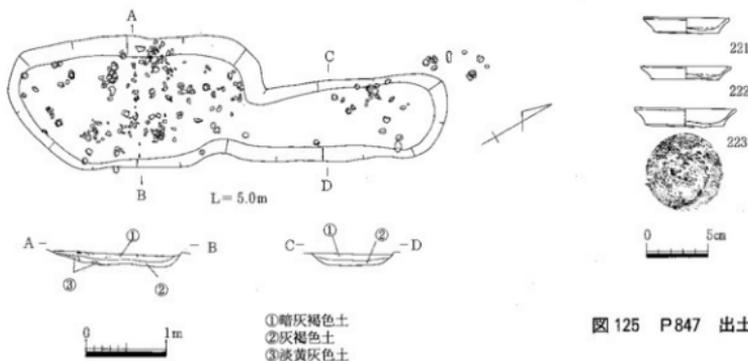


図 125 P 847 出土遺物

図 124 P 847 実測図

P 8 8 9 (図126・127)

P 847とP 893 の間で検出された土壌で、径0.3～0.4mの円形の平面形を呈し、断面形は台形である。遺構検出面は4.9m付近で埋土は1層である。遺構中央付近で土師器の皿が4枚重なって出土し、遺構西端で1枚が壁面に向かって持たせかけたような状態で出土した224～228。ほかに出土した遺物はなく、この土壌は皿を埋納するための遺構と考えられ、祭祀的な用途が推測される。亀山焼の甕に土師器を多量に入れた祭祀的な土壌と考えられるP1046と、溝30に平行して対称的な位置にあることからその用途がうかがわれる。

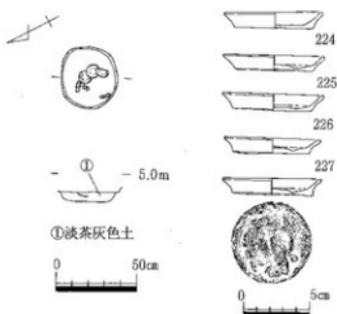


図126 P889 実測図 図127 P889 出土遺物

溝 3 0 (図128・129)

調査区の西端を南北方向に横切る溝である。南端ではP 893 と接続している。溝の方向性は検出された建物と比較的共通しており、南への排水溝としてだけでなく、区画的な意味も具備していたものと推測される。遺構の検出面は4.9～5.0m付近で、幅は1.0～1.4mである。深さは0.2～0.3mである。調査区の中央付近では長さ3.45m、幅0.7～1.2mの方形の平面形で、深さは0.1mの範囲が土壌状に窪んでいた。この窪みの底レベルと溝30対岸である西側のレベルは同じであり、溝30に板などを置いて簡単な橋をかけることを想定すると、この窪みは板上を平らにするための窪みとして必要なものとなる。この部分が東側の土師器焼成窯とD区の井戸とを結ぶラインの中にあり、しかもそのライン上は遺構の分布が稀薄なことから通路と想定されることから、溝30を渡す地点と考えることも可能と思われる。

遺物は埋土中から出土したがそれ程多くなく、図化できたのは土師器椀230、皿229、青磁231・232、窯道具234、土製品233だけである。

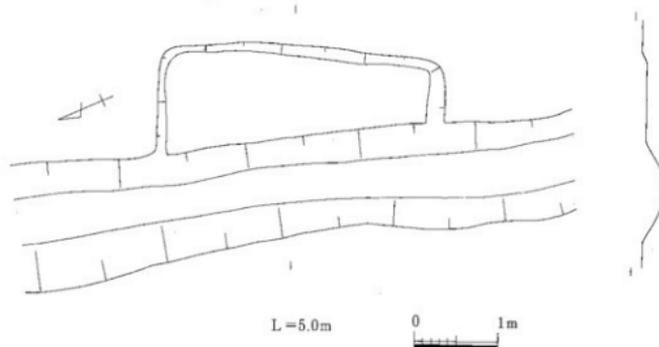


図128 溝30 (部分) 実測図

溝19 (図130・131)

調査区の南側を東西に流れる溝で、おそらく自然流路と考えられる。この溝はA区やB区でも検出されているが、対岸でも検出できたのはこの調査区だけである。溝幅は20mで、北岸については比較的傾斜が急であるが、南岸については段状にやや傾斜が緩くなっている。北岸の微高地が砂質土層、南岸の微高地が礫であることと関係があるものと思われる。溝の検出面は、4.7m付近で、深さは検出面から0.7~1.2mである。南側の岸部の検出面は4.65m付近である。埋土は最下層が暗褐青色の粘質土層が滞積しており、上層にいくに従い砂質土層となっていく。かなりの広面積を占めるにもかかわらず、遺物の出土量は少なく、それも下層からのみ出土した。様々な時期のものを含むが中世の遺物としては微高地上の遺構の時期より若干下がる時期のものが主体で 238~241、微高地上

の集落が廃絶した後に埋没していったものと思われる。最終的に埋没してしまう時期は上層から遺物が出土していないため不明だが、上面の水田層との関係から近世まで下がる可能性もある。土器のほかには「元祐通宝」、「大定通宝」、「皇宋通宝」、「至元通宝」、「永樂通宝」の銅銭も出土している。

包含層出土窯道具 (図132)

包含層からも窯道具と考えられる土製品が出土している。とくに十師器焼成窯周辺からの出土量が多かった。また、隣接するB区やD区からは全く出土しなかったことから、土師器焼成窯周囲の極めて限られた範囲で用いられたといえ、それは集落内での土師器焼成作業が限定された空間で行なわれていたことを示していると考えられる。

包含層から出土した窯道具は全て欠損品で、全形をうかがえるものはない。板状のものと円柱状のものがあり、板状のものは端部が方形におわるもの254と、挟りを入れたもの256とがある。円柱状のものは上端・下端とも拡張された形態で、下端の方が拡張度合いが大きい。ただ、芯ともいえる径0.4cm内外の円孔があるものとなないものがあり、あるものについても貫通しているもの265・267~

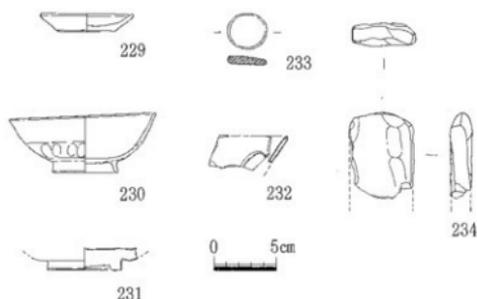


図129 溝30 出土遺物

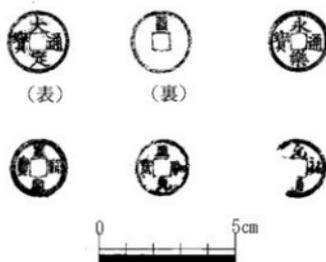


図130 溝19 出土遺物 (1)

第三章 遺構と遺物

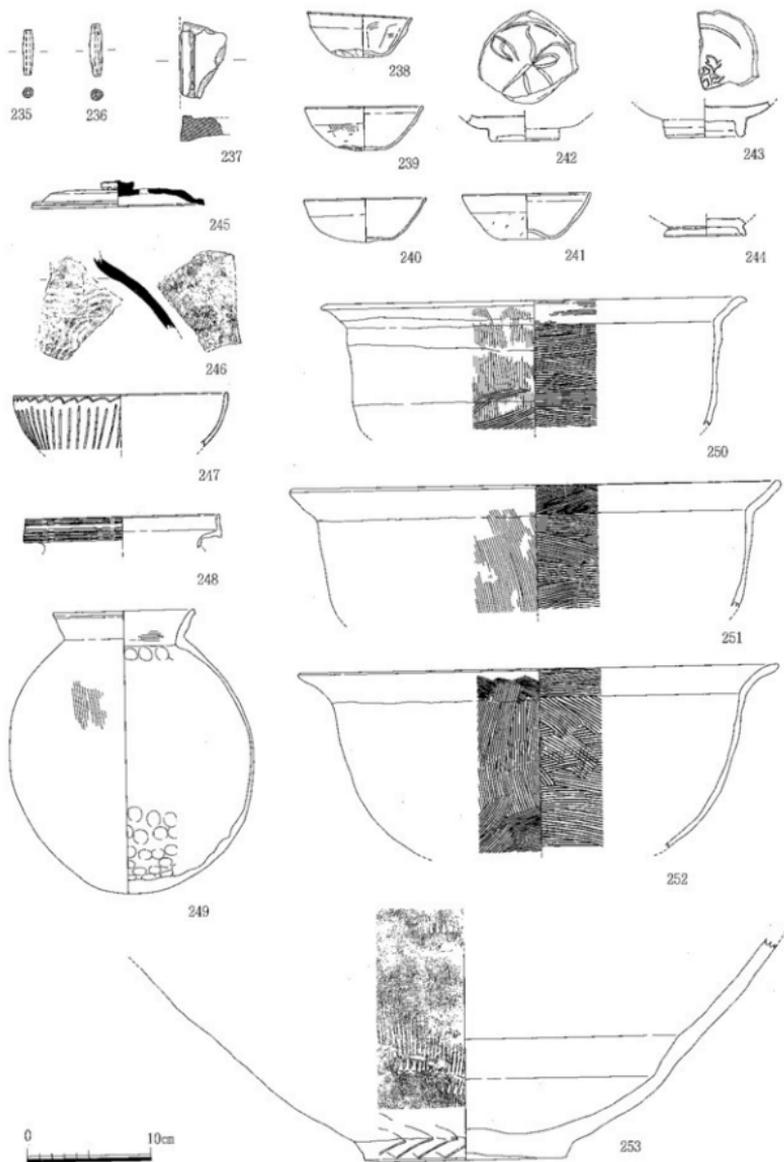


图131 溝19出土遺物(2)

269・272と、途中で止まるもの270、さらに中心からかなりずれているもの266までと多様である。いずれも被熱のため表面が劣化しているものが多い。このほかファイゴの羽口274も1点出土している。

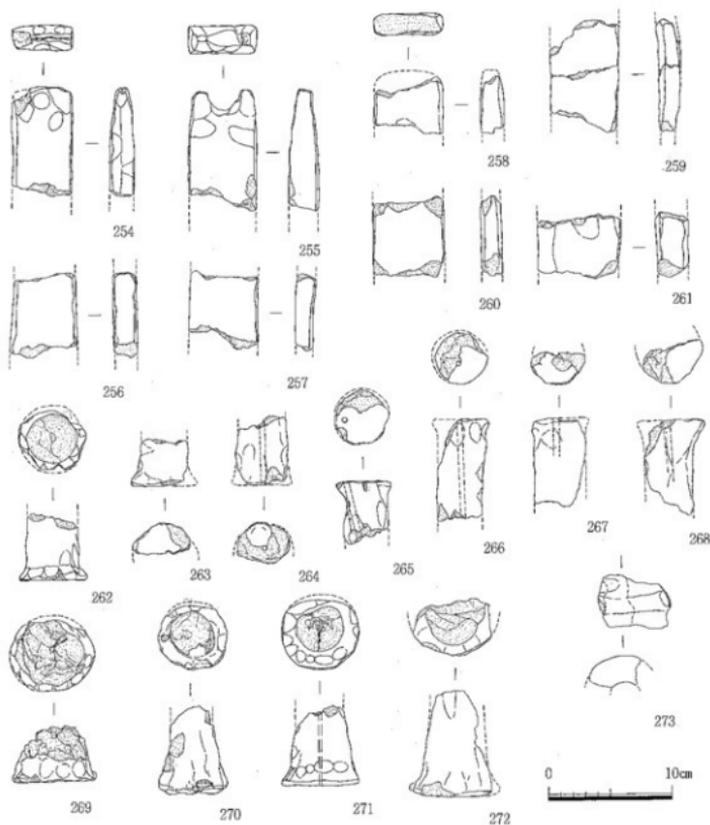


図 132 包含層出土窯道具及びファイゴ羽口

D区 (図134)

井戸 2 (図133・135)

調査区中央東側で検出された井戸である。C区の土師器焼成窯と当遺構の間は、遺構の分布が稀薄な状況が帯状にのびており、これは両遺構間にあった通路の存在を示していると推測される。両遺構

間にある溝30でも、この部分は段差を設け、渡し板などが置かれていたことを示している。したがって井戸2は土器焼成作業に必要な施設の1つであったことがうかがわれ、それは周辺の水位の下がる冬場などの農閑期に、この作業が行なわれたことを示しているのかもしれない。

井戸2の遺構検出面は4.7m付近で、上面径は長径1.5m、短径1.2mの円形を呈する。検出面より0.9mで平面形が一辺0.8mの隅丸方形となり、中央に方形の平面形の井戸枠が組まれていた。井戸枠は上面より0.1m下がった位置に一辺が6cm程の方形の材を用いた椀木が組まれていたが、井戸枠内掘り下げ途中で崩落した。さらに上面より0.6m下がった位置には一辺10cm程の方形の材を用いた椀木が組まれていた。大部の椀木は両端に木内を削り出して組んであった。椀木の外側には幅0.15~0.2m、厚さ1~1.5cm、長さ0.7m前後の側板が並べられていた。井戸枠の下部に径0.3~0.4m程の曲物が据えられていることを確認した段階で、井戸全体の崩落が起り、井戸枠やそれ以上の掘り下げが不可能となり、それ以上のデータを得ることができなかった。したがって井戸2の底レベルは明確にとらえることはできなかったが、曲物等のありようから、2.8m付近と推測される。埋土は井戸枠上面の①~④層と、井戸枠内堆積層とに分けられる。①~④層中からは土師器碗277・278が出土し、井戸枠内からは土師器皿274・275、杯276が出土した。

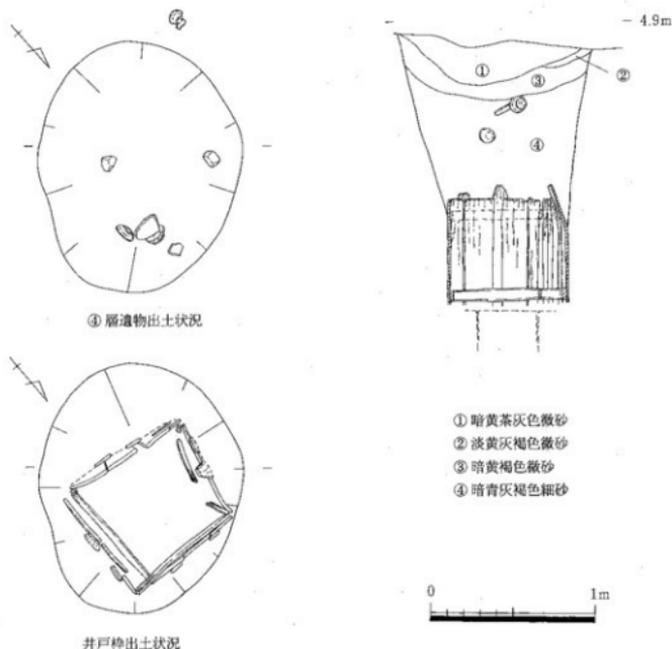


図133 井戸2実測図

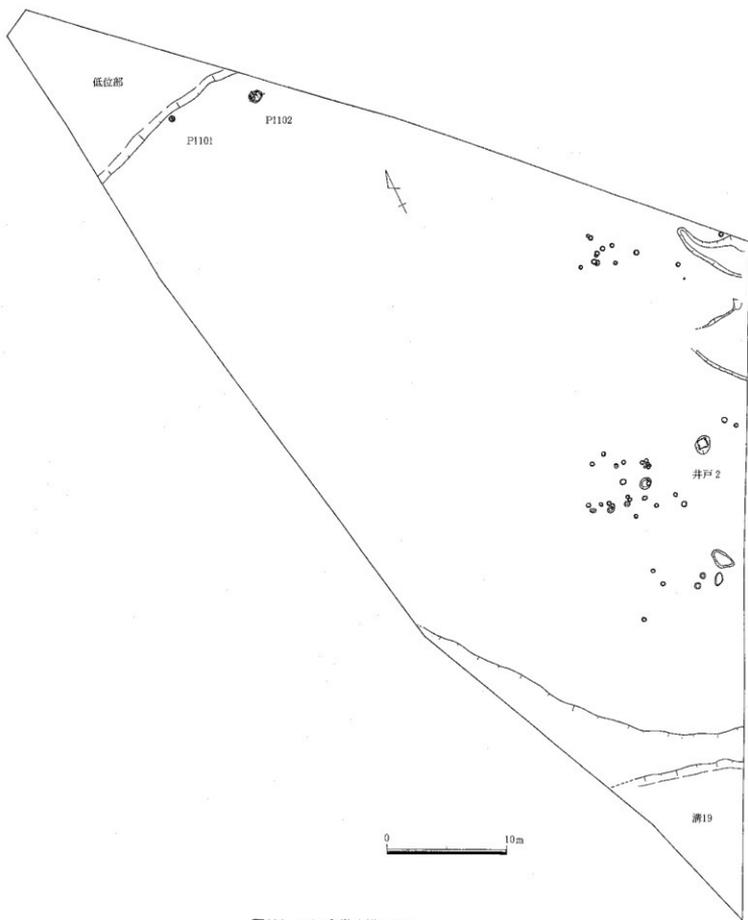


图134 D区中世遺構配置図

P1101 (図136・137)

調査区北端で検出された土壌で、径0.5mの円形の平面形を呈する。遺構検出面は5.0m付近で、断面形は台形である。遺構中央には完形の土師器碗280~282が、3個体かさなるような状態で出土した。またその周辺からは皿279も出土した。当土壌はおそらくそれらの土器を埋納するためのものと思われ、祭祀的な意味のあった土壌と推測される。

P1102 (図138・139)

P1101の東側で検出された土壌で、長径1.2m、短径0.9mの長楕円形を呈する平面形である。遺構検出面は5.1m付近で、断面形は浅い皿状である。遺物は隙が大半で、その間から土師器皿283・284の完形や碗などの破片が出土した。

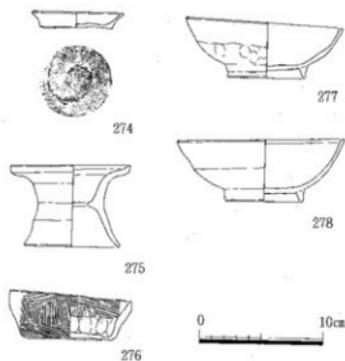


図135 井戸2出土遺物

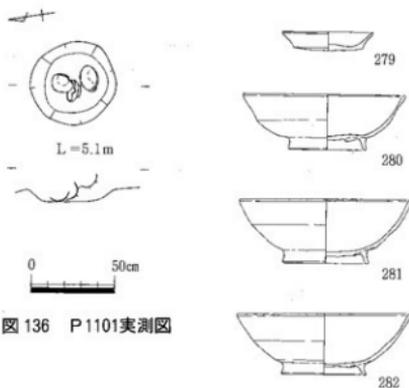


図136 P1101実測図



図137 P1101 出土遺物

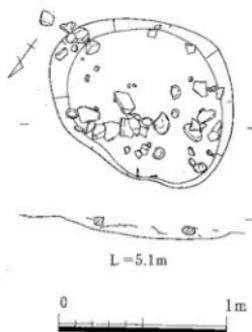


図138 P1102 実測図

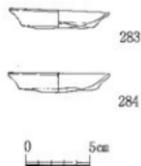


図139 P1102 出土遺物

III. 近世

A区 (図140・141)

現水田の水田耕土除去直後に検出された。基本的には短冊形の土壌群と方形の土壌である。いずれも規則的であり当時の水田区画に規定されているものと思われる。短冊形の土壌は、深さが0.2mの浅いものが大半であるが、南西端部に検出されたものは平面形もやや湾曲しており、深さも0.5~0.8mと深いものばかりである。方形のものも大体深さが0.5~0.6mと比較的深い。これらの埋土は粗砂である。時期については出土した遺物は極めて少ないが、焙烙1、備前焼すり鉢2、京焼・信楽系磁器の水注3などから、18世紀後半から19世紀以降と考えられる。このほかに足守産と推測される「大」の字を陽刻した軒丸瓦4や、中期末の弥生土器5も出土している。これらの土壌は、浅い短冊形のものについては耕作痕の可能性もあるが、埋まり方や埋土が共通していることから、全て土取り穴と考えられ、土採集の後、洪水などで溜まった砂を入れたものと考えられる。

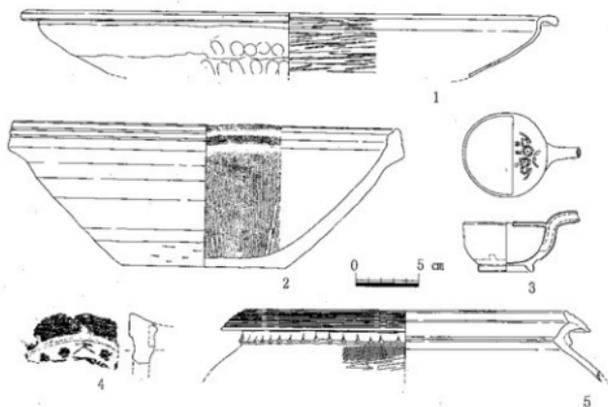


図140 A区土壌出土遺物

B区 (図142・143)

水田畦畔は残存していなかったが、水田区画を示す段を検出した。最も高い水田が水田Aで、レベル高が5.2m、水田Bは5.1m、水田Cは5.0mである。最も低い水田C面上では鋤痕と考えられる幅0.1~0.15mの小溝が南側に検出され、足跡も幾つか認められ、そのうち北から南へ歩いた痕跡がわかるものもあった。時期を示す遺物はほとんど出土しなかったが、A区の土層関係から近世後半と考えられる。この水田層を除去した面で、下層の中世遺構である溝19との境から、銅のインゴットである棒銅が出土しており、いずれも切断されているが、端部に相当するもの2・3・4も認められた。また、鉄砲の玉9・10や、鉄製の犁の先端11も出土した。

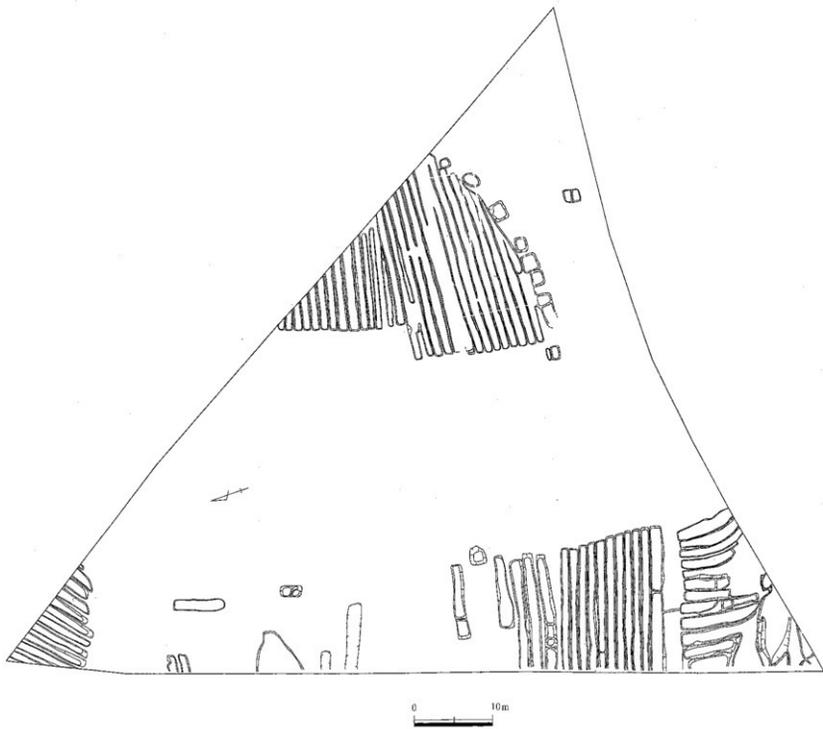


图141 A区近世遺構配置圖

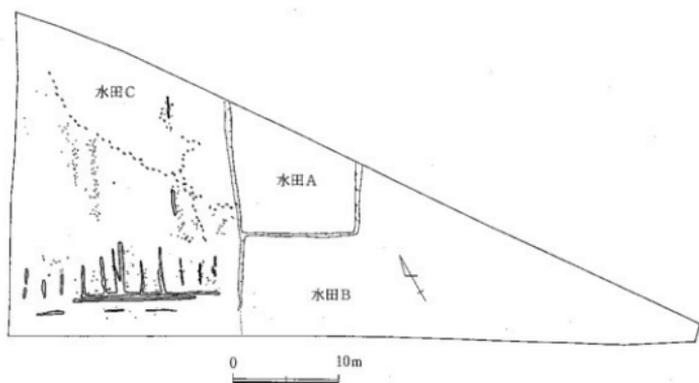


図 142 B区近世遺構配置図

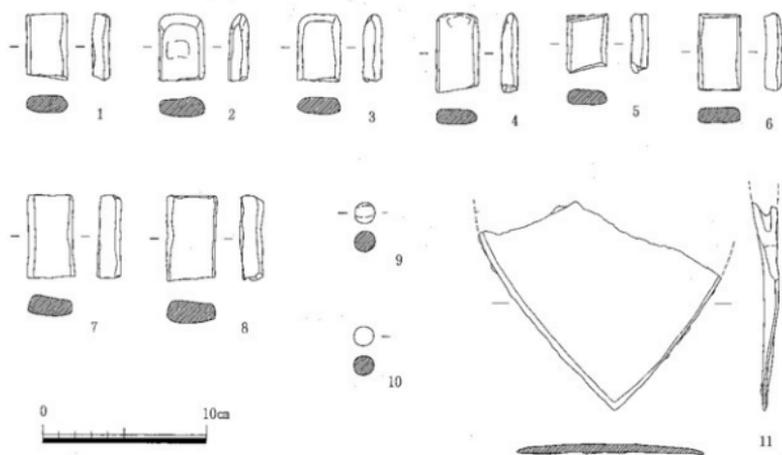


図 143 B区近世水田出土遺物

C区 (図144)

北側は、当時の水田区画を示していると考えられる段が、いくつか検出された。南側については、下層にある溝19の影響で0.2m程は低くなっており、不整形な帯状の窪みが続いている。湿地かもしれないが、河田状の水田として利用されていた可能性もある。時期を示す遺物はほとんど出土しなかったが、土層関係から近世後半と考えられる。

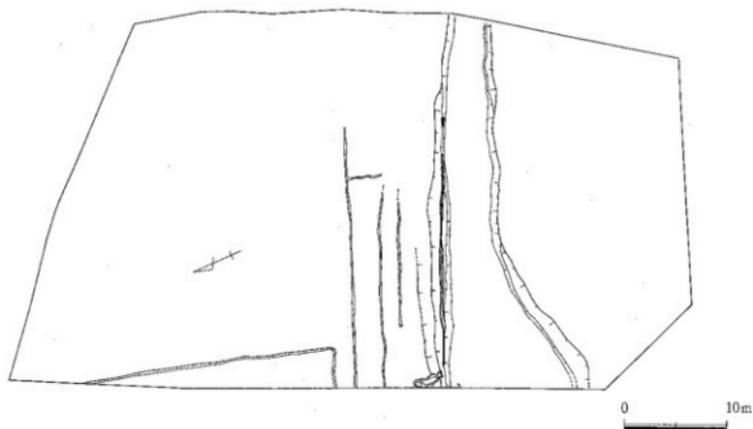


図144 C区近世遺構配置図

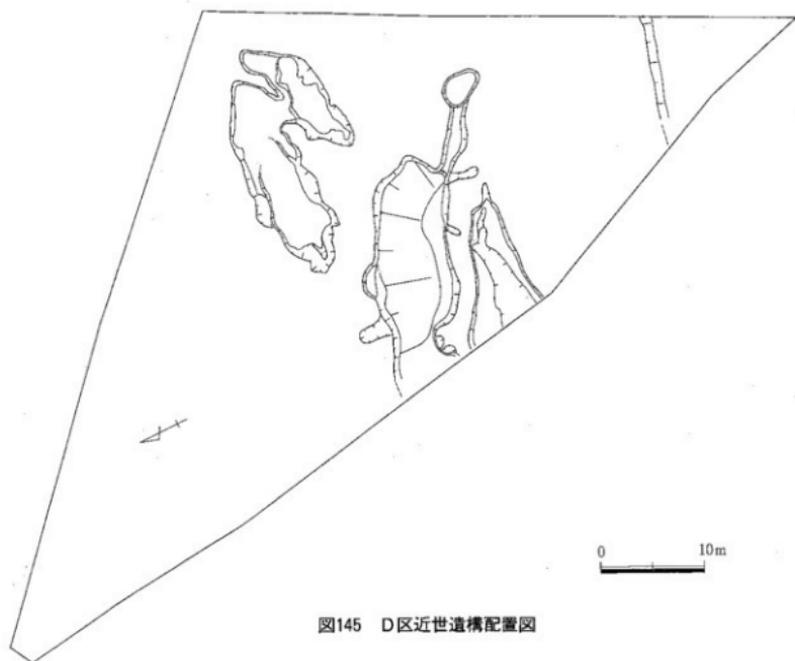


図145 D区近世遺構配置図

D区 (図145)

調査区中央付近で、長さ20~30m、幅5~7mの不整形な土壌が調査区中央で3ないし4つ検出された。C区の中世の土師器焼成窯に関連する粘土採掘場の可能性も想定し掘り下げたが、埋土はA区で検出された土壌と同じく砂層で、若干であるが近世陶磁器の破片も出土した。このことからA区の土壌とは形状も異なるが同じ性格の土取り穴と考えられた。検出面は5.0m付近で、深さは検出面から0.4~0.8mである。なお、調査区南側ではC区で検出した低位部の端部を検出した。

出土土器観察表

器形	土器番号	法量 (cm)			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
土師器皿	1	8.0	5.1	1.2	内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英・金雲母	淡橙色	建物12
須恵器杯蓋	2	13.0	10.0	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡灰色	建物12
土師器椀	3	11.0	5.0	3.65	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	井戸1
土師器椀	4	14.8	6.8	5.2	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡灰色	井戸1
土師器椀	5	12.9	5.1	5.9	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	灰白色	井戸1
青磁椀	6	15.8	—	—	青磁で釉色は黄色気味の釉色ガラス質である	—	—	井戸1
土師器椀	7	13.5	7.7	4.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	井戸1
青磁椀	8	17.6	—	—	青磁で釉色は緑色気味の釉色ガラス質である	—	—	井戸1
土師器鍋	9	25.75	—	—	内外面ヨコハケ後下半タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英	茶褐色	井戸1
土 鉢	10	—	—	—	ナデ	含長石・石英	橙 色	井戸1
土 鉢	11	—	—	—	ナデ	含長石・石英	灰 白色	井戸1
土 鉢	12	—	—	—	ナデ	含長石・石英	黒 灰色	井戸1
土師器皿	13	7.3	5.0	1.1	底部外面ヘラ切り、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡灰橙色	井戸1
土師器皿	14	8.0	5.4	1.4	底部外面ヘラ切り後板ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	井戸1
土師器皿	15	8.3	6.4	1.45	底部外面ヘラ切り、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡 橙 色	井戸1
土師器皿	16	8.0	6.3	1.95	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡灰橙色	井戸1
土師器皿	17	7.6	6.3	1.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡 橙 色	井戸1
土師器皿	18	7.1	5.6	1.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、外面ヨコナデ、内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙褐色	井戸1
土師器皿	19	7.4	5.9	1.3	底部外面ヘラ切り後板ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡黄橙色	井戸1
土師器皿	20	7.9	5.4	1.45	底部外面ヘラ切り後板ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	赤 橙 色	井戸1
土師器皿	21	8.2	6.3	1.35	底部外面ヘラ切り、内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P313
土師器台付皿	22	8.2	5.6	4.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P313
土師器皿	23	7.0	5.5	1.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P317
須恵器杯身	24	11.6	10.0	3.8	外面底部ヘラケズリ、ほかはヨコナデ	含長石・石英	灰 色	P317
須恵器杯身	25	—	10.0	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰 白色	P318

土師器碗	26	14.0	5.7	5.5	内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ	含長石・石英	淡 橙 色	溝10
土師器碗	27	14.15	5.7	5.7	内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ	含長石・石英	淡 橙 色	溝10
土師器台付皿	28	—	5.4	—	底部外面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	溝10
土師器鍋	29	24.0	—	—	外面クテハケ後ナデ、内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ	含長石・石英	淡茶褐色	溝10
土師器碗	30	12.9	9.9	4.2	内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ	含長石・石英	淡 橙 色	溝11
土 鍾	31	—	—	—	ナデ	含長石・石英	黒 褐 色	建物 ¹ Pc
土 鍾	32	—	—	—	ナデ	含長石・石英	橙 褐 色	建物 ¹ Pb
土師器台付皿	33	7.4	4.6	2.65	底部ヘラ切り、内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	建物 ¹ Pc
土師器皿	34	7.6	5.4	1.2	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰 白 色	建物 ¹ Pd
土師器皿	35	7.4	6.0	1.4	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	建物 ¹ Pg
土師器皿	36	7.2	5.7	1.15	底部ヘラ切り、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	淡赤褐色	建物 ¹ Pg
土師器皿	37	7.6	5.1	1.7	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	淡黄橙色	建物 ¹ Pf
土師器皿	38	7.5	5.0	1.3	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	淡黄褐色	建物 ¹ Pf
土師器碗	39	12.0	6.2	4.5	外面下半ナデ、そのほかはヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	建物 ² Pa
土師器碗	40	6.7	5.3	1.5	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	淡赤褐色	P66
土師器皿	41	7.8	5.6	1.35	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	灰 白 色	P66
土師器皿	42	7.6	5.6	1.35	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	橙 色	P66
土師器皿	43	7.6	5.9	1.9	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P66
土師器皿	44	6.2	4.6	1.15	底部ヘラ切り後板目、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	橙 色	P66
師 器 皿	45	7.7	6.2	1.2	底部ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P66
土師器台付皿	46	9.1	6.3	4.4	底部ヘラ切り、ほかはヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P66
土師器碗	47	11.15	6.2	3.9	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	灰 白 色	P66
土師器碗	48	11.4	5.8	4.1	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P66
土師器碗	49	12.5	4.9	3.8	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	黄 灰 色	P66
土師器碗	50	11.5	6.2	3.85	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P66
土師器碗	51	11.6	6.1	4.1	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	黄 灰 色	P66
土師器碗	52	12.0	—	—	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	淡黄褐色	P66
土師器碗	53	11.1	4.8	4.4	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	橙 褐 色	P66
土師器碗	54	11.8	4.5	4.2	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、内面ナデ	含長石・石英	淡橙灰色	P66
土師器碗	55	12.9	—	—	外面下半ナデほかはヨコナデ	含長石・石英	淡灰橙色	P66
土師器碗	56	11.6	4.4	4.3	外面下半ナデほかはヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P66
青 磁 皿	57	11.1	5.3	2.0	釉色は黄色緑色の胎色ガラス質の釉である内面にクシによるジグザグ紋線を有する	—	—	P66
青 磁 皿	58	10.0	4.9	2.2	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉である。施釉貫入が認められる	—	—	P66
土 鍾	59	—	—	—	ナデ	含長石・石英	淡赤橙色	P66
土 鍾	60	—	—	—	ナデ	含長石・石英	黄 橙 色	P66
青 磁 碗	61	—	—	1	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉である	—	—	P95

土師器碗	62	10.5	3.4	3.15	内外面ヨコナデ、外面下半ケズリ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	白灰褐色	P95
土 鍾	63	-	-	-	ナデ	含長石・石英	橙 色	P57
土 鍾	64	-	-	-	ナデ	含長石・石英	黒褐色	P57
青 磁	65	-	-	-	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉である	-	-	P57
青 磁	66	-	-	-	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉で、外面に蓮弁の削り出し紋様がある	-	-	P57
土師器皿	67	6.8	5.9	1.05	内外面ヨコナデ、内面底部付近ナデ、外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡黄褐色	P57
土師器皿	68	7.4	6.2	1.55	内外面ヨコナデ、外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡 橙 色	P57
土師器碗	69	10.8	4.0	3.1	内面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P57
土 鍾	70	-	-	-	ナデ	含長石・石英	黒 灰 色	P71
土 鍾	71	-	-	-	ナデ	含長石・石英	橙 色	P71
土師器碗	72	10.8	4.0	4.35	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	黄灰白色	P71
土師器皿	73	7.4	5.85	1.35	内面ヨコナデ、底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P19
土師器碗	74	11.4	3.6	3.6	内面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	白灰褐色	P88
土師器碗	75	10.8	1.9	3.6	内面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡灰黄褐色	P 1
土師器碗	76	10.6	5.7	3.75	内面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄褐色	P 4
土師器碗	77	12.0	5.8	3.9	内面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P 4
土師器碗	78	10.2	4.1	4.2	内面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P166
土師器碗	79	11.5	4.3	3.6	内面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P166
土師器碗	80	10.2	4.1	4.2	内面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P166
土師器鉢	81	30.0	-	-	外面ナデ後ミガキ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	-	淡 橙 色	P500
土師器鉢	82	28.4	12.6	(12.7)	外面ナデ後ミガキ、内面ハケ後ミガキ、口縁部ヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P500
土師器皿	83	7.6	5.4	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡 橙 色	P160
土師器碗	84	11.0	4.7	4.0	内外面ヨコナデ、内面工具痕、外面下半ケズリ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡 橙 色	P160
青 磁 碗	85	15.5	4.9	6.8	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉で、貫入が認められる	-	-	P160
土師器碗	86	11.3	6.2	5.05	内外面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P113
土師器碗	87	11.6	6.0	4.9	内外面ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P113
備前焼甕	88	-	-	-	内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰 褐 色	P113
亀山焼甕	89	25.9	-	-	外面タタキ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰 色	P113
土師器鍋	90	35.4	-	(15.2)	外面ハケ後ナデ、内面ハケ、口縁部ハケ後ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P203
青 磁 碗	91	-	-	-	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉で、内面にヘラによる片彫り紋様が認められる	-	-	P203
土師器皿	92	7.4	4.6	1.5	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	灰 白 色	溝3
土師器小碗	93	6.8	4.6	3.05	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	溝3
土師器台皿	94	8.1	5.5	4.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り	含長石・石英	淡黄灰色	溝3
土師器台皿	95	-	7.4	-	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り	含長石・石英	橙 色	溝3
青 磁 碗	96	-	-	-	釉の発色は青味を帯びた緑色を主体とし、外面に蓮花紋を片彫りしている	-	-	溝3
青 磁 碗	97	-	-	-	釉の発色は青味を帯びた緑色を主体とし、外面に蓮花紋を片彫りしている	-	-	溝3
青 磁 碗	98	-	-	-	釉色は緑色で、貫入が認められる	-	-	溝3

備前焼壺	99	13.0	-	-	内外面ヨコナデで、一部に自然釉が付着する	含長石・石英	赤灰色	溝3
龜山焼	100	-	-	-	外面格子目タタキ、内面ハケ後ユビ押え	含長石・石英	灰白色	溝3
土師器鍋	101	34.8	-	-	内外面ハケ後、口縁部内外面ナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器鍋	102	40.9	-	-	内外面ハケ後、口縁部内外面ナデ	含長石・石英	淡茶褐色	溝3
土師器碗	103	12.2	5.65	3.6	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡灰黄色	溝3
土師器碗	104	10.65	5.2	4.7	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡灰黄色	溝3
土師器碗	105	11.3	5.7	3.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡橙白色	溝3
土師器碗	106	11.4	5.8	4.05	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	黄灰白色	溝3
土師器皿	107	7.1	5.6	1.48	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	108	7.05	5.7	1.3	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	109	6.9	5.3	1.3	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	溝3
土師器皿	110	7.05	5.45	1.3	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡黄灰色	溝3
土師器皿	111	7.3	6.4	1.25	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ 含長石・石英	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	112	7.1	5.3	1.35	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	113	7.1	6.2	1.9	外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡灰橙褐色	溝3
土師器皿	114	7.6	5.3	1.2	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	115	7.4	5.6	1.75	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	116	7.0	6.1	1.4	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	117	7.1	5.3	1.35	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝3
土師器皿	118	7.6	5.5	1.2	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡黄橙褐色	溝3
青磁碗	119	-	-	-	釉色は緑色の胎色ガラス質の釉で、内外面にクシ目が施される	-	-	溝3
常滑焼甕	120	49.9	-	-	直線的なプロポーションで、外面には押印紋が常状にめぐり、内面はナデ	含長石・石英	淡赤茶色	溝3
土師器碗	121	11.2	5.1	4.15	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	黄灰白色	P628
土師器碗	122	11.15	6.3	3.9	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡茶灰色	P628
土師器碗	123	10.8	5.5	3.85	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡灰橙褐色	P634
土師器碗	124	10.8	4.8	3.65	外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙褐色	P634
土師器碗	125	11.5	4.8	3.2	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙褐色	P634
土師器碗	126	10.85	2.8	3.65	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P634
土師器皿	127	6.6	5.7	1.5	内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P634
土師器皿	128	6.8	5.2	1.15	内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P634
土師器台付皿	129	7.5	5.8	2.75	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り	含長石・石英	淡灰橙褐色	P634
土師器皿	130	7.3	5.9	1.35	内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡灰橙褐色	P634
土師器鍋	131	28.8	-	-	外面ハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ後、内面ヨコハケ	含長石・石英	茶褐色	P634
土師器鍋	132	40.0	-	-	内外面ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡褐色	P634
青磁焼碗	133	-	-	-	釉の発色は青みを帯びた緑色を主体とする内面にヘラによる片彫りがある	-	-	P634
土師器碗	134	-	4.8	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	建物11
窯道具	135	-	-	-	長さ16.7cm、幅5.2cm、厚さ1.2cm ナデ	含長石・石英	灰褐色	土師器 徳成窯1

窯 道具	136	-	-	-	長さ16.9cm以上、幅5.6cm、厚さ1.8cm ナデ	含長石・石英	赤 褐色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	137	-	-	-	長さ13.3cm、幅5.0cm、厚さ1.6cm ナデ	含長石・石英	灰黒褐色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	138	-	-	-	長さ9.6cm以上、幅5.4cm、厚さ2.4cm、ナデ、片割に挟りあり	含長石・石英	灰黒褐色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	139	-	-	-	幅6.3cm、厚さ1.6cm、片面に径3.5cmの円形の爰色部あり	含長石・石英	灰黒褐色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	140	-	-	-	底径7.7cm、中央に径0.8cmの焼成前穿孔あり	含長石・石英	黒 灰色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	141	-	-	-	底径6.8cm以上、ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	142	-	-	-	底径6.0cm、中央に径0.4cmの焼成前穿孔あり	含長石・石英	黒 灰色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	143	-	-	-	上端径4.6cm以上、中央に径6cmの焼成前穿孔あり	含長石・石英	灰 褐色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	144	-	-	-	上端径1.5cm(推定4cm)、底径6.6cm、中央に径0.5cmの焼成前穿孔あり	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
カ マ ド	145	-	-	-	内外面ハケ後、ナデ	含長石・石英・金雲母	茶 褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	146	13.2	5.8	5.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	147	13.4	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	148	13.8	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ	含長石・石英	灰黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	149	13.4	-	-	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ	含長石・石英	黄 褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	150	-	-	6.0	ヨコナデ	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	151	-	-	6.0	ヨコナデ	含長石・石英	淡褐褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	152	-	-	6.0	ヨコナデ	含長石・石英	淡灰褐色	土師器1 焼成窯1
土師器碗	153	-	-	5.8	ヨコナデ	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
カ マ ド	154	-	-	-	外面ナデ、内面ハケ	含長石・石英	茶 灰色	土師器1 焼成窯1
土師器鍋	155	35.8	-	-	外面タテハケ、内面ヨコハケ後、口縁部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙褐色	土師器1 焼成窯1
土師器鍋	156	-	-	-	高温のため重んでいる	含長石・石英	灰 褐色	土師器1 焼成窯1
亀 山 焼	157	-	-	-	胴部片を円形に打ち欠いている	含長石・石英	青 灰色	土師器1 焼成窯1
土 製 品	158	-	-	-	厚さ0.6cmで、中央に径0.7cm、周囲に0.6cmの焼成前穿孔をおこなう	含長石・石英・金雲母	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器皿	159	7.2	5.6	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器皿	160	7.6	5.0	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器杯	161	12.0	8.8	2.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡黄褐色	土師器1 焼成窯1
土師器杯	162	11.2	4.1	2.6	外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	土師器1 焼成窯1
窯 道具	163	-	-	-	幅5.0cm、厚さ1.7cm、ナデ	含長石・石英	灰 褐色	土師器2 焼成窯2
窯 道具	164	-	-	-	上端径5.0cm、ナデ	含長石・石英	茶灰褐色	土師器2 焼成窯2
窯 道具	165	-	-	-	長さ17.9cm以上、幅6.5cm、厚さ1.8cm、片面に径3.8cmの爰色あり	含長石・石英	灰 褐色	P 983
窯 道具	166	-	-	-	長さ16.0cm、幅5.85cm、厚さ1.45cm、ナデ	含長石・石英	灰 褐色	P 983
窯 道具	167	-	-	-	幅6.1cm、厚さ1.65cm、ナデ	含長石・石英	茶 褐色	P 983
窯 道具	168	-	-	-	上端径5.0cm、底径6.2(推定6.5)cm、長さ13.6cm、中央に0.6cmの焼成前穿孔	含長石・石英	淡灰褐色	P 983
窯 道具	169	-	-	-	上端4.1cm、底径6.8cm、長さ13.7cm、ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P 983
窯 道具	170	-	-	-	底径8.0cm、ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P 983
鍋	171	-	-	-	高温による焼け歪みと劣化が著しい	含長石・石英	茶 褐色	P 983
土師器皿	172	7.8	6.5	1.45	内外面ヨコナデ、内面ナデ、底部ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡茶褐色	P 703
土師器皿	173	7.9	6.6	1.6	内外面ヨコナデ、内面ナデ、底部ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡茶褐色	P 703

土師器皿	174	7.35	5.1	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡茶褐色	P 703
土師器皿	175	7.5	6.2	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ	含長石・石英	黄灰色	P 703
土師器台付皿	176	8.1	5.1	3.0	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り	含長石・石英	黄橙色	P 703
土師器椀	177	12.1	6.4	4.15	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	P 703
土師器椀	178	12.9	5.9	4.35	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	P 703
土師器椀	179	13.0	6.8	4.55	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	P 703
青磁椀	180	14.2	—	—	釉色は黄色気味の藍色ガラス質の釉で、内面に片彫り紋様と沈線がある	—	—	P 703
魚住焼壺鉢	181	27.4	11.8	10.4	内外面ヨコナデ	含長石・石英	灰色	P 703
土師器台付皿	182	8.2	5.9	2.6	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り	含長石・石英	淡橙色	P 946
土師器台付皿	183	8.2	6.8	2.8	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り	含長石・石英	淡橙色	P 946
土師器皿	184	7.8	6.5	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P 893
土師器皿	185	8.2	6.1	2.5	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ	含長石・石英	赤橙色	P 893
土師器椀	186	13.2	6.7	4.8	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台付近ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P 893
土師器皿	187	7.2	6.0	1.2	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	188	7.2	6.0	1.3	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	189	7.3	5.9	1.1	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	190	7.3	5.0	1.1	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	191	7.5	6.1	1.4	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	192	7.8	5.1	1.1	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	193	8.6	6.4	1.1	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	194	8.0	6.0	1.2	内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面へラ切り後板目	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	195	6.6	5.7	1.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P 1046
土師器皿	196	6.8	4.8	1.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	197	7.5	5.7	1.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	198	7.0	6.0	1.1	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙色	P 1046
土師器皿	199	7.0	5.4	1.5	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P 1046
土師器皿	200	7.2	5.8	1.3	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器皿	201	7.3	6.0	1.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙白色	P 1046
土師器皿	202	7.6	5.6	1.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙白色	P 1046
土師器皿	203	8.0	5.6	1.3	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙白色	P 1046
土師器皿	204	7.8	5.7	1.6	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰色	P 1046
土師器皿	205	8.4	5.7	1.8	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器椀	206	—	6.2	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器椀	207	—	6.0	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰色	P 1046
土師器椀	208	14.6	—	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器椀	209	16.4	—	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器椀	210	12.3	5.9	4.65	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046
土師器椀	211	12.8	6.6	4.6	内外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P 1046

土師器碗	212	13.0	6.0	4.6	内外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P1046
土師器碗	213	13.0	6.0	4.8	内外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰色	P1046
土師器碗	214	12.6	—	—	内外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰白色	P1046
土師器碗	215	—	—	5.8	内外面ヨコナデ、下半ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡橙灰色	P1046
亀山焼壺	216	—	—	16.6	外面格子目タタキ、内面当て具痕後ナデ	含長石・石英	灰褐色	P1046
土師器皿	217	7.5	5.8	1.45	内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡橙色	墓3
土師器小碗	218	8.0	4.9	5.3	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	墓3
土師器小碗	219	8.1	3.15	5.3	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	墓3
土師器小碗	220	8.2	3.6	5.7	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	墓3
土師器皿	221	7.0	5.2	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡橙色	P847
土師器皿	222	7.3	5.6	1.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡橙色	P847
土師器皿	223	8.2	6.4	1.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目	含長石・石英	淡橙色	P847
土師器皿	224	7.4	6.0	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡橙色	P889
土師器皿	225	7.6	5.8	1.15	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡黄橙色	P889
土師器皿	226	7.4	6.0	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P889
土師器皿	227	7.6	5.8	1.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡黄灰色	P889
土師器皿	228	7.4	6.1	1.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡橙色	P889
土師器皿	229	7.4	4.8	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り、内面ナデ	含長石・石英	淡灰橙色	溝30
土師器碗	230	11.7	5.1	4.7	内外面ヨコナデ、外面ト平ナデ、高台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	溝30
青磁碗	231	—	6.0	—	釉色は黄色気味の紺色ガラス質の釉で、貫入が認められる	—	—	溝30
青磁碗	232	—	—	—	釉色は青色で、外面に蓮弁の削り出し紋様がある	—	—	溝30
土製品	233	—	—	—	径2.8~3.2cmの円形で、焼成前につくられている	含長石・石英	橙色	溝30
窯道具	234	—	—	—	板状で幅5.0cmである	含長石・石英	黒灰色	溝30
土錘	235	—	—	—	ナデ	含長石・石英	橙色	溝19
土錘	236	—	—	—	ナデ	含長石・石英	橙色	溝19
陶硯	237	—	—	—	方形の平面形である	含長石・石英	黄橙色	溝19
土師器碗	238	8.4	3.0	3.58	内外面ヨコナデ、外面下半ケズリ、内面一部ハケ	含長石・石英	黄橙色	溝19
土師器碗	239	9.5	4.0	3.5	内外面ヨコナデ、外面ト平ケズリ後ハケ	含長石・石英	橙色	溝19
土師器碗	240	9.8	4.0	3.5	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ	含長石・石英	淡灰橙色	溝19
土師器碗	241	10.3	4.0	3.7	内外面ヨコナデ、外面ケズリ後ナデ	含長石・石英 金雲母	黄灰色	溝19
青磁碗	242	—	5.2	—	釉色は黄色気味の紺色ガラス質の釉である	—	—	溝19
青磁碗	243	—	5.9	—	釉色は黄色気味の紺色ガラス質の釉である	—	—	溝19
青磁碗	244	—	6.4	—	釉色は黄色気味の紺色ガラス質の釉である	—	—	溝19
須恵器杯蓋	245	13.8	—	2.15	内外面ヨコナデ、外面天井部ヘラケズリ	含長石・石英	白灰色	溝19
須恵器甕	246	—	—	—	外面平行タタキ、内面同心円あて具痕が認められる	含長石・石英	青灰色	溝19
青磁碗	247	17.2	—	—	釉色は緑色の紺色ガラス質の釉で、外面に沈線と波状紋様がある	—	—	溝19
弥生土器壺	248	15.6	—	—	内外面ヨコナデ	含長石・石英	淡黄橙色	溝19
土師器壺	249	11.3	—	23.0	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、口縁部ハケ後ヨコナデ	含長石・石英	淡橙褐色	溝19

第三章 遺跡と遺物

土師器 鍋	250	33.0	—	—	外面ハケ、内面ハケ、口縁部内外面 ヨコナデ	含長石・石英	黄 橙 色	溝19
土師器 鍋	251	39.4	—	—	外面ハケ、内面ハケ、口縁部内外面 ヨコナデ	含長石・石英	黄 橙 色	溝19
土師器 鍋	252	38.6	—	—	外面ハケ、内面ハケ、口縁部内外面 ヨコナデ	含長石・石英	淡茶褐色	溝19
常滑 焼 甕	253	—	16.3	—	外面工具によるナデ、内面ヨコナデ、 自然釉あり	含長石・石英	淡赤褐色	溝19
窯 道 具	254	—	—	—	長さ8.9cm以上、幅4.9cm、橙色厚さ 1.8cm、ナデ	含長石・石英	黄 橙 色	包含層
窯 道 具	255	—	—	—	長さ9.0cm以上、幅5.5cm、厚さ2.15 cm、ナデ	含長石・石英	黄 橙 色	包含層
窯 道 具	256	—	—	—	幅5.25cm、厚さ1.55cm、ナデ	含長石・石英	褐黄褐色	包含層
窯 道 具	257	—	—	—	幅7.45cm、厚さ1.3cm、ナデ	含長石・石英	淡 褐 色	包含層
窯 道 具	258	—	—	—	幅5.6cm、厚さ1.6cm、ナデ	含長石・石英	淡 褐 色	包含層
窯 道 具	259	—	—	—	幅5.5cm、厚さ1.65cm、ナデ	含長石・石英	灰 褐 色	包含層
窯 道 具	260	—	—	—	幅5.8cm、厚さ1.65cm、ナデ	含長石・石英	灰 褐 色	包含層
窯 道 具	261	—	—	—	幅6.6cm、厚さ2.1cm、ナデ	含長石・石英	淡褐褐色	包含層
窯 道 具	262	—	—	—	端部径5.4cm、径4.2cm、ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	包含層
窯 道 具	263	—	—	—	ナデ	含長石・石英	褐 色	包含層
窯 道 具	264	—	—	—	ナデ	含長石・石英	灰 色	包含層
窯 道 具	265	—	—	—	端部径4.3cm、径3.5cm、ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	包含層
窯 道 具	266	—	—	—	径3.5cm、ナデ	含長石・石英	灰 褐 色	包含層
窯 道 具	267	—	—	—	径4.0cm、ナデ	含長石・石英	灰 褐 色	包含層
窯 道 具	268	—	—	—	ナデ	含長石・石英	灰 色	包含層
窯 道 具	269	—	—	—	端部径 6.7cm、ナデ	含長石・石英	灰 色	包含層
窯 道 具	270	—	—	—	端部径5.4cm、径3.5cm、ナデ	含長石・石英	灰 色	包含層
窯 道 具	271	—	—	—	端部径6.2cm、径4.7cm、ナデ	含長石・石英	淡灰褐色	包含層
窯 道 具	272	—	—	—	ナデ	含長石・石英	灰 色	包含層
フイゴ羽口	273	—	—	—	端部は被熱により変色している	含長石・石英	黄灰色～ 灰 色	包含層
土師器 皿	274	7.0	6.1	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り	含長石・石英	橙 褐 色	井戸2
土師器 台付皿	275	9.8	7.7	6.2	内外面ヨコナデ	含長石・石英	橙 褐 色	井戸2
土師器 杯	276	9.9	7.2	3.4	外面ハケ、内面上半ハケ、下半ハケ 後ナデ	含長石・石英	茶 褐 色	井戸2
土師器 椀	277	12.2	6.2	4.4	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高 台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰色	井戸2
土師器 椀	278	13.4	6.2	5.0	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高 台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄灰白色	井戸2
土師器 皿	279	7.3	5.7	1.5	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り	含長石・石英	淡黄褐色	P1101
土師器 椀	280	13.2	6.2	4.45	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高 台部ヨコナデ	含長石・石英	淡灰褐色	P1101
土師器 椀	281	14.0	6.8	5.03	外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高台 部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄褐色	P1101
土師器 椀	282	14.3	6.8	4.75	内外面ヨコナデ、外面下半ナデ、高 台部ヨコナデ	含長石・石英	淡黄褐色	P1101
土師器 皿	283	7.7	5.7	1.55	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後ナ デ	含長石・石英	黄 橙 色	P1101
土師器 皿	284	7.9	6.1	1.55	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後ナ デ	含長石・石英	灰黄褐色	P1101

第IV章 結 語

I 古墳時代

1. 三手向原遺跡出土の土器 (図146・147)

三手向原遺跡から検出された古墳時代に属する遺構は、竪穴住居が9軒と土壌が25基である。該期の包含層は認められず、遺物は遺構内から出土したものが大半であり、それほど大規模な集落ではなかったものと考えられる。しかしながら各遺構から出土した土器は量的にまとまっており、この集落の変遷を考える指標になるもので、まずこれらの土器を基本的に遺構ごとを1つのまとまりと考えて分類した。その結果、I～IV期に分けることができた。以下、各期の概略を説明する。

〈I期〉

竪穴住居4・9から出土した土器群が指標となる。須恵器を伴っており、その特徴から田辺編年のTK208に相当すると考えられる。出土した須恵器の量は少ないが、色調や胎土が杯と縁について若干似ているもののほかは異なっており、複数の生産地から運ばれてきたことが推測される。土師器の特徴としては、甕の胴部上半に最大径があるものと、若干下へ下がっているものがある。前者は竪穴住居4で、後者は竪穴住居9で認められた。両住居出土土器のなかには、碗形をした高杯は認められないが、竪穴住居4に大型の高杯が認められることや、竪穴住居9出土の高杯の方が端部を若干外反させる新しい傾向が看取されることから、竪穴住居4の方が古相を示していると考えられる。その他竪穴住居4は、小型丸底壺の系譜を引くと考えられる薄手の壺も伴っているなど、ほかの土器でも竪穴住居4の方が古い傾向にある。このことから、竪穴住居4がI期古相、竪穴住居9がI期新相に細分が可能である。

I期古相に併行する良好な資料としては、岡山市百間川兼基遺跡2の竪穴住居8⁽¹⁾、同遺跡3の井戸2⁽²⁾、百間川原尾島遺跡3の竪穴住居19⁽³⁾などがある。

I期新相に併行する資料としては、津山市正善庵遺跡住居3⁽⁴⁾、と岡山市津寺遺跡3の竪穴住居49⁽⁵⁾、岡山市三手遺跡土器溜り1⁽⁶⁾、岡山市百間川兼基遺跡2の竪穴住居7⁽⁷⁾がある。このうち正善庵遺跡住居3の土器群には、若干高杯に古相を示す特徴が看取されるものの、他の器種については大体共通している。またいずれの土器群とも碗形の高杯を伴っており、三手向原遺跡の竪穴住居9からは出土していないが、I期新相には伴っていると考えられる。I期の実年代としては、須恵器から5世紀後半と考えられる。

〈II期〉

竪穴住居1・3・6・8から出土した土器群である。伴出した須恵器から田辺編年のTK43、TK27に相当すると考えられる。竪穴住居6を見る限り、I期と比べ須恵器の占める割合が増す傾向がある。土師器の特徴としては、甕の胴部中位に最大径が下がってきていることと、高杯の杯部形態が碗形のもので主体となっているという点が挙げられる。製塩土器はコップ形で丸底を呈しており、かなり薄手に作られている。ただ、口縁部がすぼまる形態のものや開くものがあるなど個体差が目立つ。また、調整についても外面タタキのものとナデのものがある。

II期に併行する資料としては、岡山市三手遺跡の竪穴住居1⁽⁸⁾、岡山市百間川原尾島遺跡2の竪穴住居24⁽⁹⁾、岡山市津寺遺跡3の竪穴住居118⁽¹⁰⁾、同遺跡5の竪穴住居325⁽¹¹⁾などがある。II期の実年代としては、須恵器から5世紀末から6世紀初頭と考えられる。

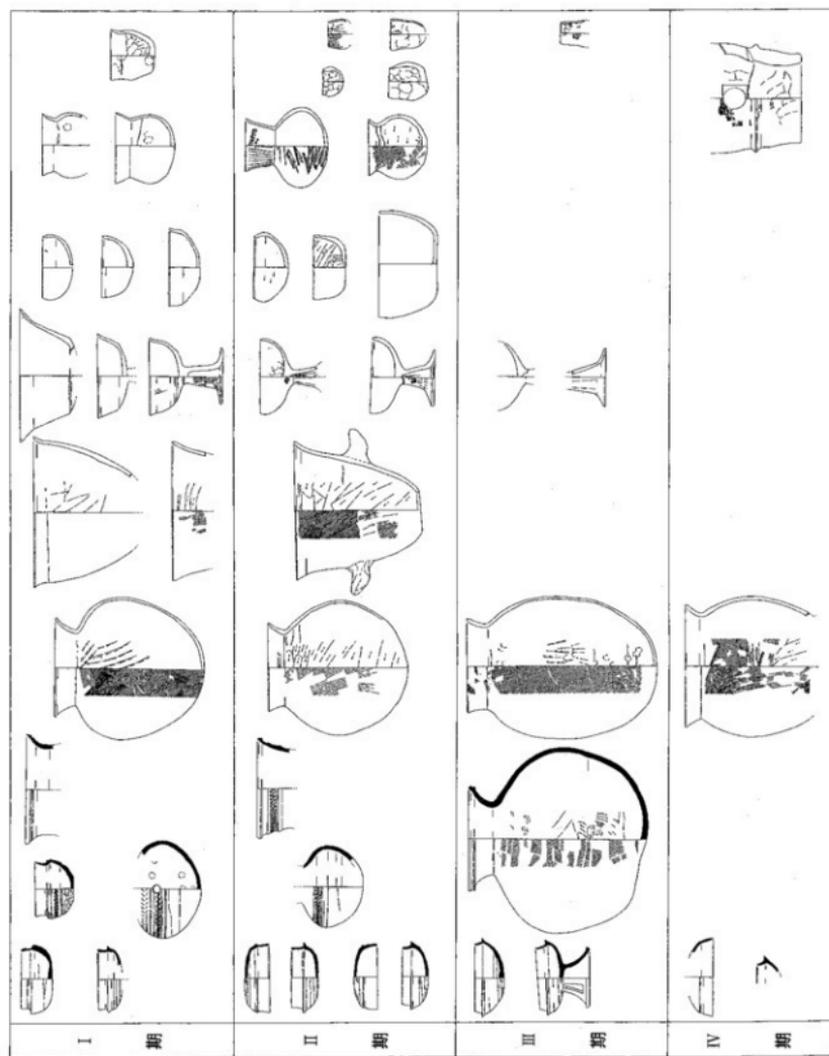


图 146 竖穴住居出土土器分類

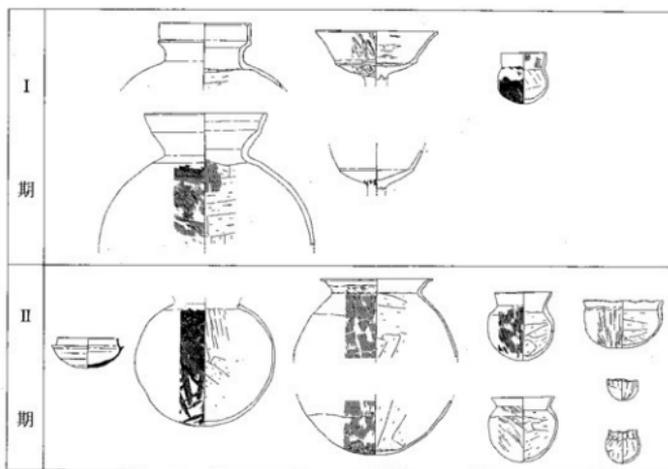


図 147 土壌出土土器分類

〈Ⅲ期〉

竪穴住居5・7で出土した土器群である。伴出した須恵器の特徴から田辺編年のMT15に相当すると思われる。須恵器には淡灰色を呈するものや暗灰色を呈するもの、胎土に大粒の砂粒が含まれるものなどでないものなどがあり、複数の生産地から供給を受けていることが推察される。土器器については出土量が少ないため明確ではないが、甕の胴部は長胴化が顕著であり、高杯の杯部は碗形である。製塩土器も竪穴住居7から出土しているが、Ⅱ期とあまり変わらない形態をしている。この時期の製塩土器は大型の丸底深鉢形とされており、時期的に若干齟齬が看取される。

Ⅲ期に併行する資料としては、岡山市百間川原尾島遺跡2の竪穴住居43⁽¹⁾がある。

〈Ⅳ期〉

竪穴住居2で出土した土器群である。伴出した須恵器の特徴から田辺編年のTK10に相当すると思われる。出土した土器が少ないため詳細はよく分からないが、いわゆる川西編年Ⅴ期⁽¹⁾の外面タテハケで器壁の厚い埴輪も伴っている。

Ⅳ期に併行する資料としては、総社市産木薬師遺跡の竪穴住居23⁽¹⁾がある。

注

- (1) 平井 勝ほか「百間川兼基遺跡」2 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114 1996年
- (2) 柳瀬昭彦ほか「百間川兼基遺跡」3 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』119 1997年
- (3) 宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡」3 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994年
- (4) 小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第44集 1992年

- (5) 龜山行雄ほか「津寺遺跡」3 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 1996年
- (6) 正岡睦夫ほか「三手遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
- (7) 注1
- (8) 注6
- (9) 正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡」2 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1984年
- (10) 注5
- (11) 高畑知功ほか「津寺遺跡」5 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
- (12) 注9
- (13) 島崎 東ほか「窪木業師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 1993年
- (14) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第61巻3号 1976年

参考文献

- 田辺昭三「陶邑古窯址群」I『研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ 1966年
- 高畑知功・平井泰男「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 1987年

2. 三手向原遺跡の集落の変遷 (図148)

出土した土器を指標とした時期区分にしたがって遺構の変遷をみてみたい。

〈I期〉

微高地の中央付近に竪穴住居が2軒と、北側微高地端部で土壌が散在的に5基検出された。検出された竪穴住居から出土した土器には若干時期差が認められ、この期の2軒は同時存在ではなかったと考えられる。この期における三手向原遺跡は、微高地西半が未調査であるため明確でないものの、極めて散在的に竪穴住居が存在するといった景観であったと推測される。

〈II期〉

竪穴住居4軒と土壌が検出されたが、それらは調査区中央付近の径25mほどの空間地の周囲に配されたように分布している。竪穴住居はランダムに分布するのではなく、2軒ずつが近接している。近接する竪穴住居は、それぞれ15mほどの距離で均等であり、2軒が1単位となるような単位が2つ存在するといった構造にもみえる。検出された各竪穴住居の同時性については、火山灰や洪水砂によって一度に埋没していない限りその検証は難しい。しかしII期の竪穴住居の分布状況を見ると、それぞれ近接する竪穴住居間の距離が等しく、2軒の住居は相互に意識して1つの単位を形成しているようである。それは、単位内の住居が同時に存在していたことを示しているように思われる。さらに、相互の単位の共有地と推測される広場が中心に認められることは、2つの単位が併存しているということを示していると考えられ、間接的な根拠からではあるが、II期の集落は、竪穴住居2軒で1単位となる2つの単位によって構成されていた可能性が高いと思われる。

広場の北側で検出された土壌についても2群に分かれる傾向が看取され、それぞれが竪穴住居の単位に対応するものと思われる。土壌の性格については、土器しか出土していないためよくわからないものの、小判形の平面形であることや土器棺も存在することから、墓である可能性が高いと思われる。したがってII期の遺構配置は、広場を中心に住居と墓域が存在することになり、当時の小規模な集落の景観を極めて良好に示している可能性が高い。

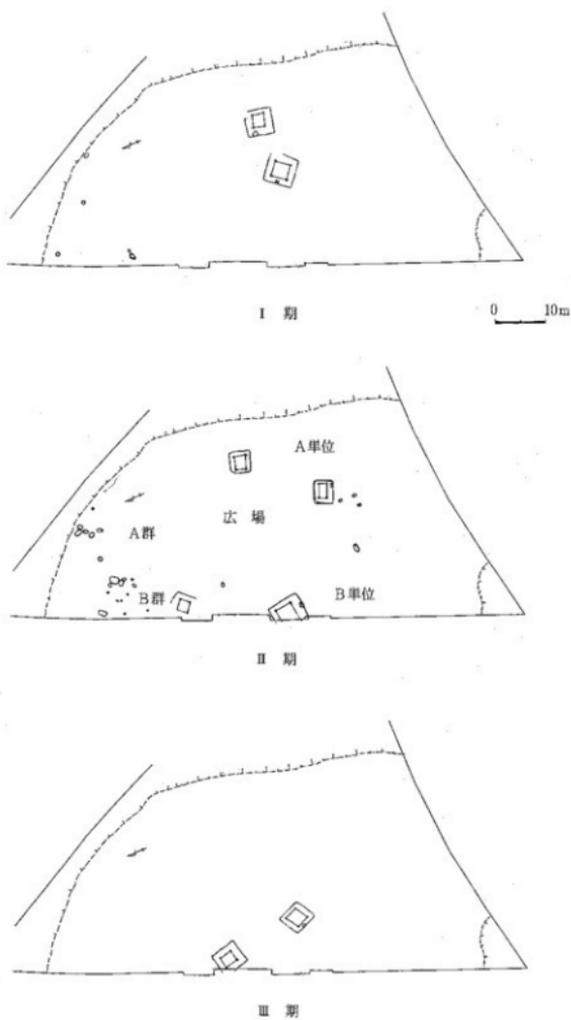


図148 古墳時代遺構変遷図

〈Ⅲ期〉

竪穴住居2軒が検出された。遺物の出土していない、もしくは時期の明確でない遺物しか出土していない土壌もあり、それらのうちのいくつかはこの期に属する可能性がある。したがって竪穴住居以外に、この期に属する遺構はもう少し存在していると思われる。

竪穴住居は平行に並んでおり、住居間は10mほどである。Ⅱ期と同様にこの2軒が1つの単位を構成していた可能性が高い。検出された住居は調査区の西端であり、Ⅱ期と同様にこの2軒が1単位となって、別の単位が未調査部分に存在していることも想定される。ただし集落規模は、出土した遺物を見る限り極端な増減はなかったと考えられる。Ⅱ期と同様に広場を中心として墓群と住居が分布しているとする、この期の集落の中心は若干西へ移動しているということになる。

〈Ⅵ期〉

竪穴住居1軒が検出された。Ⅲ期と同様に遺構は調査区の西端であり、Ⅲ期以降集落の中心が西側へ移動した可能性が推測される。住居内から埴輪が2片出土している。これらは外面調整がタテハケのみであることから川西編年Ⅴ期⁽¹⁾に相当し器壁も厚いことから、竪穴住居の時期である6世紀中葉の時期と矛盾しない。この集落は、古墳の立地する丘陵部とは異なり沖積平野部に存在することから、偶然埴輪が流れ込む可能性は少ない。かといって検出された竪穴住居が、古墳造営主体者の住居と考えるには、埴輪以外に突出するような要素が認められないことから難しいように思われる。むしろ、具体的な遺構や埴輪以外の遺物を検出することはできなかったが、埴輪生産に関与している可能性も推測させられる。

注

(1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第61巻3号 1976年

3. Ⅱ期（5世紀末から6世紀初頭）の集落類型

三手向原遺跡のⅡ期の遺構をみると、径20mほどの広場をはさんでほぼ等間隔に並んだ竪穴住居2軒の単位が2つと、竪穴住居群の単位に対応する墓地と推測される土壌群で構成されている。火山灰であるとか洪水砂によって埋没していない限り、同時に存在した遺構を同定することは難しい。したがって、ここで検出された竪穴住居4軒が同時存在であったかどうかを検証することは困難であるが、単位内の竪穴住居の距離が相互に等しいことや、Ⅲ期の竪穴住居もほぼ等しい距離で2軒あることから、近接する竪穴住居は相互に意識して存在すると考えられ、一応同時存在であった可能性を考えておきたい。したがってⅡ期の三手向原遺跡は、広場をはさんで2軒1単位となる竪穴住居の単位が2つあり、それぞれの単位間の空間に墓域が設定されていると考えることができる。古墳時代の集落遺跡のうち、数軒の竪穴住居が広場を囲んで円形・半円形にまとまる景観にあるものが存在することは、小笠原好彦氏によって指摘されている⁽¹⁾。Ⅱ期の三手向原遺跡もその類例となるものと考えられる。

県下でもⅡ期の時期の集落遺跡の調査例がいくつかある。そのうちかなりの広範囲を調査した例があり、ある程度当時の集落景観を推測できそうである。ここでは、それらのうち竪穴住居が円形・半円形の配置をしていると思われるものを抽出し、規模や集落内の墓

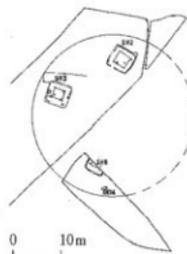


図149 正善庵遺跡
(注 2一部改変)

群の様相から、いくつかの類型に分けて、三手向原Ⅱ期の集落の位置付けを整理しておきたい。

〈Ⅰ類〉(図149)

竪穴住居2~3軒で構成されるもので、津山市正善庵遺跡⁽²⁾がその具体例となる。正善庵遺跡は山間の小平野に位置する5世紀後半から6世紀中頃の集落遺跡で、調査範囲内には2つの微高地があり、それぞれに竪穴住居が散在的に検出されている。なかでも北側の微高地中央部では、5世紀後半から6世紀初頭の竪穴住居と、墓と推定される土壌がまぎれ検出されている。未調査部分を推定すると、径30mほどの範囲に3~4軒が並び、周囲に墓が営まれていると考えられる。遺物の時期差から少なくとも2時期に分けられ、同時存在は2軒ほどであったと思われる。そうするとⅠ類は、三手向原遺跡Ⅱ期の集落構成のなかから1単位欠落している形態と考えられる。

〈Ⅱ類〉

三手向原遺跡Ⅱ期の景観である。径20mほどの広場に竪穴住居群が2単位と、それに対応する墓群が存在するものである。

〈Ⅲ類〉(図150)

三手向原遺跡Ⅱ期の集落よりもさらに竪穴住居の単位が多くなったもので、山陽町の齋富遺跡⁽³⁾

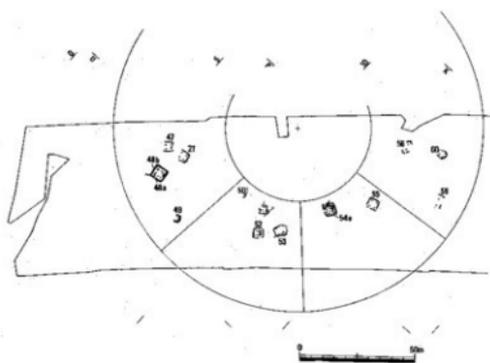


図150 齋富遺跡(注3一部改変)

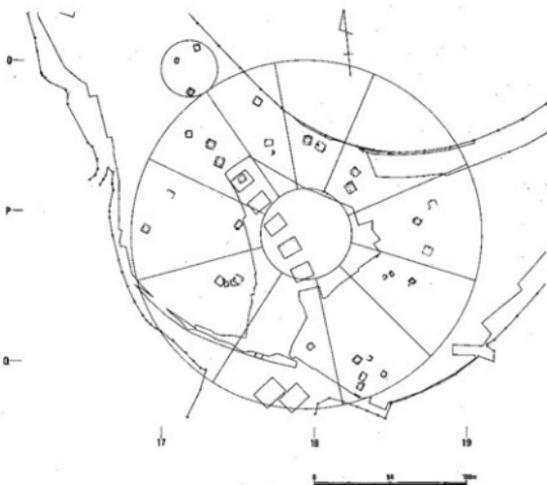


図151 津寺遺跡(注4一部改変)

がその具体例となる。斎高遺跡は扇状地上の集落遺跡で、調査区全体で遺構は見つかっているが、その西半で5世紀末から6世紀初頭の堅穴住居がある程度まとまって検出されている。未調査部分の北半も含めて推測的に復元すると、径50mの広場を中心に3~4軒が1単位となる堅穴住居群が並ぶ。さらに、土器棺や墓と推定される土壇も集落内に存在することから集落規模は大きいものの、基本的に三手向原遺跡Ⅱ期の景観を相似形的に拡大したといえることができる。

〈IV類〉 (図151)

Ⅲ類よりもさらに規模が大きくなったもので、岡山市津寺遺跡⁽¹⁾がその具体例となる。津寺遺跡は沖積平野部の微高地上の集落遺跡で、5世紀末から6世紀初頭の堅穴住居が微高地中央で多数検出されている。径70mの広場を中心に径250mの範囲で、3~6軒が1単位となる堅穴住居群が並んでいる。この集落の北西隅には径40mほどの範囲に堅穴住居が3軒並んでおり、1つの単位として読み取ることができる。この単位はⅠ類に対応するものと考えられ、Ⅳ類形成後に付属した単位と推測される。Ⅳ類にはⅢ類と異なり土壇墓は認められず、集落内での造墓規制が存在していたと推測される。

以上のように、堅穴住居が円形、もしくは半円形にならぶ5世紀末から6世紀初頭の集落遺跡は、堅穴住居数軒で構成されるものから、堅穴住居数軒の単位が複数集まったものまでがある。そして複数単位が存在すると、たとえ2単位であっても中央に広場が存在するようである。この広場は共同作業場や祭祀の場であったと推測される。1単位を形成する堅穴住居群は、血縁関係の最少単位である世帯共同体⁽²⁾に対応するものと考えられ、それが1単位で集落を形成している場合もあることから、ある程度自立的に農業経営をおこなっている単位集団⁽³⁾とも認識できる。

集落景観はⅠ類は別として、Ⅱ類からⅣ類までは相似形となっている。このことは、広場を中心とした集落景観が、複数単位の集団で構成された集落の普遍的な形態の1つであったことを推測させられる。またⅣ類には、墓域が伴わないといった特徴がある。これは集落内で造墓規制が存在していたことをうかがわせ、集落域外の地点に存在する群集土壇墓⁽⁷⁾、すなわち特定の墓域の存在が想定される。これは規制をおこなった首長の存在を暗示しており、Ⅳ類の集落は、それ自体のなかで古墳造営主体者が存在、もしくは首長居館に近接しているような、いわば直接的に古墳造営主体者となっていたことが推測される。

一方Ⅰ~Ⅲ類の集落は、Ⅳ類と異なり集落内に墓域があることから、Ⅳ類ほどの造墓規制は存在していなかったといえる。しかも集落内の各単位の墓群が付属する場合も認められることから、集落内の単位間の集団関係は等質的であったと思われる。そのような中・小規模の集落は、農業水路の維持や開発などの協業もしくは流通、あるいは政治的理由などを契機としていくつかの集落と結合している可能性が高く、その結果として、それら集落のうちから盟主となる首長が選抜され、古墳が造営された場合もあったと想定される。もちろん津寺遺跡のような大規模集落の下位集団として存在している場合も想定される。それら小墳の時期と三手向原遺跡の時期との対応関係は明らかではない。しかし、その小墳の位置する同じ丘陵の北東斜面では、5世紀後半の小規模な古墳も発掘調査されており⁽⁸⁾、三手向原遺跡付近の小墳も時期的に対応するものが含まれていると推測される。そうすると、三手向原遺跡のような小規模集落は、付近にある小規模集落と結びついて小規模な古墳=小首長を演出した場合もあったと考えられる。

注

- (1) 小笠原好彦「民衆のムラ」『古代史復元』6 講談社 1989年
- (2) 小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第44集 1992年
- (3) 伊東 晃ほか「斎宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105 1996年
- (4) 高畑知功ほか「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
- (5) 和島誠一「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』 学生書房新社 1950年
- (6) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻第1号 1959年
- (7) 西口陽一「畿内の群集土坑墓」『考古学研究』第36巻第5号 1990年
- (8) 前角和夫ほか「雲土山11号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10 1993年

4. 5世紀後半における小規模集落の出現背景について

三手向原遺跡は、足守川・血吸川・前川などが合流する地点のすぐ南側に位置しており、そのため足守川流域の平野部のなかでは、洪水などの危険性が高い不安定な地形上に存在しているといえる。そのため三手向原遺跡の調査では、弥生土器や古式土師器も若干出土しているものの明確な遺構は検出されておらず、ある程度安定した集落が営まれるのは5世紀後半になってからである。ここでは、この三手向原遺跡の様相が不安定な地形における集落遺跡の普遍的な様相である点を、周辺の調査例や似た地形上の調査例から確認する。そしてそのような小規模な集落と大規模な集落との関係は津寺遺跡と対比しながら若干整理してみたいと思う。

(1) 周辺遺跡の様相

まず三手向原遺跡の東約600mの地点に位置する、三手(庄内幼稚園)遺跡⁽¹⁾の例をみてる。この調査では弥生時代からの遺構・遺物が若干認められるものの、堅穴住居は5世紀後半・6世紀後半・7世紀後半の3軒のみである。この集落の形成された微高地は北西方向に延びており、より安定した地点には5世紀以前の集落が存在している可能性はあるものの、発掘調査で明らかとなっている様相としては三手向原遺跡と似ている。つまり5世紀後半以降から、堅穴住居数軒で構成されるような小規模な集落が形成されたといえる。

次是三手向原遺跡と接する位置の三手遺跡⁽²⁾の例をみてる。三手遺跡は三手向原遺跡で確認された北側微高地の東半を調査している。その調査区西半では中世以前の遺構や遺物はほとんど出土しなかったが、東半からは弥生土器や5世紀後半の堅穴住居などが検出されている。遺構の密度がかなり薄いものの、5世紀後半に小規模な集落が形成されるようになった点で、これも三手向原遺跡と似た様相といえそうである。

以上のように、三手向原遺跡の調査例を入れても3例しかないが、いずれも5世紀後半から末に、小規模ながらも集落が形成されてくるという点は共通している。足守川流域に隣接する高梁川流域でも、比較的安定度の低い平野部に立地する集落遺跡が調査されている。それは総社市の樋本遺跡⁽³⁾で、弥生時代の遺物や溝も若干検出されているが、集落形成が明確になるのは5世紀になってからで、5世紀後半には堅穴住居3軒、5世紀末には堅穴住居6軒が検出されている。しかしながら遺構の密度は粗で、小規模集落の範疇に入る。

未開地あるいは開闢地への開発を伴った集落遺跡の進出は、各時代を通じての普遍的な動きである。しかし、わずかな調査例からではあるが、5世紀後半から末を中心としたそのような地への小規模集落の進出は、高梁川から足守川流域においてある程度まとまっており、該域における社会的な現象と

してとらえられることができるのではないかとと思われる。

次に、三手向原遺跡とその南に位置する大規模集落である津寺遺跡とを比較し、小規模集落と大規模集落の関係をみてみたい。津寺遺跡は足守川流域の平野部中央に位置しており、5世紀から7世紀にかけての竪穴住居が200軒前後も検出されている⁽⁴⁾。南側に隣接する別の微高地である津寺（加茂小）遺跡でも該期の竪穴住居が密集して検出されており、同じ様相の集落域が広範囲に形成されているといえる。ただし、6世紀前半の竪穴住居は検出されておらず、集落としての断絶期間が存在している。また、5世紀から6世紀初頭までの集落と6世紀後半の集落とは、微高地上の占拠状況や密集度に著しい差があり、両時期の集落形態が異なっていたことが推測されるが、ここでは5世紀から6世紀前半の様相を比較してみたいと思う。

津寺遺跡は、三手向原遺跡が出現する5世紀後半にも存在し、5世紀末から6世紀初頭にかけて最も集落規模は拡大する。三手向原遺跡やその周辺に存在する小規模集落の出現と津寺遺跡の拡大は、

時期的に併行関係にあるといえる。津寺遺跡のような大規模集落と三手向原遺跡のような小規模集落はおそらく無関係ではなく、小規模集落の出現が前者の拡大とある程度時期的に一致していることから、小規模集落は大規模集落の子村といった関係にあったことが推定される。そして、この子村についても二者があり、1つは三手向原遺跡の南側微高地のように小規模ながらも6世紀代まで存続するもの、他の1つは三手向原遺跡の北側微高地東半のように短時間で廃絶するものである。三手（庄内幼稚園）遺跡は断片的ではあるが、三手向原遺跡南側微高地と同じ範疇の可能性が考えられる。

短期間で廃絶した集落は、その地での分村に失敗したと考えられ、母村へ回帰したかもしくは別の地点へ移動したと思われるが、継続する集落は分村に成功したといえる。しかも三手向原遺跡などは、津寺遺跡が集落形成を途絶する6世紀前半でも存続しており、小規模ながらもある程度自立的な農業経営を達成できていたと評価できる。

(2) 後期古墳の分布状況との対比

5世紀後半に出現する小規模集落の性格を考えるために、6世紀後半から7世紀にかけての集落が該域においてどういう構成で展開していたのかを検討してみたい。この時期の集落遺跡の分布状況を把握することは、発掘調査の範囲から考えても限界があるため、それら集落が母体となったと考えられる後期古墳の分布から類推してみたい。三手向原遺跡から津寺遺跡周辺の後期古墳の分布を示したのが図152である。後期古墳は平野部周囲の丘陵部に築かれているが、分布の粗密や地形的な見地からいくつかの群に分けられる。現状では35群⁽⁵⁾が識別できる。それぞれの群の内容は、それらを構成する古墳の数や規模等により様々な差が認められる。例えば1～2基だけで構成されるものや、10基前後の多くの古墳で構成されるものである。これらの群は、足守川周囲の丘陵部に比較的ランダムに分布しており、厳密な検証は難しいが、足守川流域の平野部を中心に営まれた後期古墳の造営主体者の集落単位をある程度反映させていると考えられる。一応そう考えて古墳の分布状況をみると、足守川流域の平野部には、様々な規模の集落が存在していたということになる。実際に発掘調査された該期の集落遺跡の様相をみると、津寺遺跡のように複数の微高地上にわたり多くの竪穴住居が密集して検出されるものから、加茂遺跡や吉野口遺跡のようにある程度竪穴住居が認められるもの、三手遺跡のように散在的に竪穴住居が認められるものなど様々である。三手向原遺跡の西側にある庚申山にも後期古墳の小規模な群がいくつか認められる。三手向原遺跡南側微高地の調査区内では6世紀後半の集落は明確でないものの、三手（庄内幼稚園）遺跡では該期の竪穴住居が検出されていることから、該期における同様の小規模集落が三手向原遺跡の周辺にも存在している可能性が高い。それらが庚申

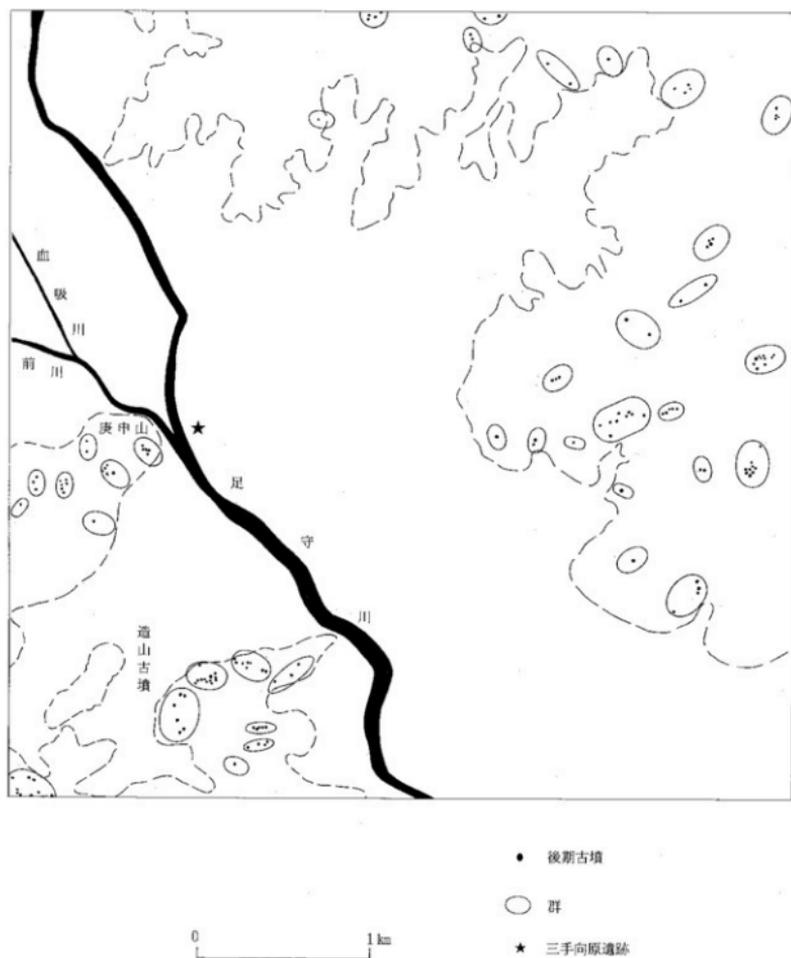


图152 後期古墳分布状況

山の後期古墳の小群に対応するのではないかと思われる。

(3) 5世紀後半における小規模集落出現の背景

6世紀後半から7世紀にかけて多数築かれる後期古墳については、埋葬施設である横穴式石室へ複数の被葬者が葬られることから、世帯共同体を統括する家父長を中心とした有力家族がその被葬者に考えられている⁽⁴⁵⁾。この有力家族は鉄製農具の改良や普及を基礎とした農業生産の増大と、製鉄や製塩などの各種手工業生産をおこなうことにより顕在化したもので、とくに県南部において製鉄遺跡と後期古墳とは近接する位置にある場合も多く、両者の関係が密接であったことが推測される。また、香川県直島町宮兵島の発掘調査では、農業生産に不向きな瀬戸内海の島の1つであるにもかかわらず、後期古墳が6基も確認されている。これは土器製塩をおこなった集団の墓と考えられており、手工業生産と後期古墳造営との関係が強調される事例である⁽⁴⁷⁾。

6世紀後半以前の手工業生産と古墳の関係はどうかであろうか。足守川の上流部である総社市西阿曾に、全長約40mの遺出し付円墳もしくは帆立貝形前方後円墳である隋庵古墳が存在する。中心主体は堅穴式石室で多数の副葬品が出土したが、なかに砥石などを含んだ鍛冶具一式が含まれていた⁽⁴⁸⁾。時期は5世紀後半である。近接した時期である岡山市北方の一本松古墳は全長約65mの前方部の短い前方後円墳で、これからも鍛冶具が出土している⁽⁴⁹⁾。6世紀後半における製鉄関係の手工業生産とこれら2墳に副葬された鍛冶具とは、系譜的に直接結びつかない可能性もあるが、少なくとも5世紀代においては製鉄関係の手工業生産は、2墳の被葬者である中小首長層ぐらいまでに掌握されていたと考えてよいと思われる。しかし、6世紀以降になると小形円墳である横穴式石室にも製鉄関係の遺物が副葬されるようになる。このことは、製鉄などの手工業生産が、より下位層によって主体的におこなわれるようになったことを反映させていると考えられる。そうすると、後期古墳の広汎な造営の背景には、畿内政権による新たな支配秩序の浸透を示すという政治的側面もあるが⁽⁵⁰⁾、古墳造営者側からの最も大きな要因としては、手工業生産が、後期古墳の被葬者に示されるような有力家族を基礎単位としておこなわれるようになったことと考えられる。

手工業生産の発達的前提としては、手工業生産を支える農業生産の安定が必要である。津寺遺跡のような低位部に存在する大規模集落は様々な存在理由を備えているが、大規模な灌漑施設の開発と維持のために必要な労働力の確保もその理由の1つにあったと考えられる。それは当時の農業技術の限界性をも示しており、三手向原遺跡のような分村した小規模集落も母村である大規模集落との関係なくしては存続できなかったと思われる。ところが6世紀初頭以降、大規模集落である津寺遺跡が移動もしくは解体しても、三手向原遺跡は存続している。これは小規模集落でも、ある程度自立的な農業経営を達成できてきたことを示していると考えられる。6世紀初頭より少し前の5世紀中葉頃には、鉄製のU字形鋤・鋤先や桶刈り鎌などの農具が出現し普及する。これらの農具は朝鮮半島に由来するものであり、その背後には大陸からの新式農法の伝来が推測されている⁽⁵¹⁾。この農法は、おそらく旧来の大量労働投下による農法から、ある程度省力化された農法への転換を促したものと考えられ、それが小規模集落の自立化へ結びついたものと考えられる。つまり、三手向原遺跡のような5世紀後半における小規模集落の出現と存続は、6世紀後半の後期古墳の爆発的な築造にみられる有力家族抬頭の前提条件となるより、小単位での農業生産の安定と自立化がある程度達成されてきたことを示していると考えられる。

(4) 小 結

5世紀後半における小規模集落の出現と存続を、6世紀後半の後期古墳の爆発的築造にみられる有力家族の抬頭へつながる前提の1つと考えてみた。しかしながら、5世紀後半から6世紀初頭段階でも、これら小規模集落の出現は、社会的に大きな影響を与えたのではないかと考えられる。小規模集落による水田経営がある程度可能となったことにより、大規模集落はその存在理由の1つを失うこととなる。それは、より小さな経営単位への分解を促すこととなり、6世紀前半における津寺遺跡などの大規模集落の途絶は、単に集落が他の地点に移動したというのではなく、それが実態化したことも示しているように思われる。このようなことは、旧来の社会の基礎構造が変質することであり、社会全体の再編へ連なるものと考えられる。高梁川・足守川流域においては、古墳時代前期以来墳長100mを越える大型古墳が連続と築造されているが、5世紀後半の宿寺山古墳を最後に6世紀後半のこうもり塚古墳までの約100年間築かれぬ。このような大型古墳の途絶も、この変化に起因していると推測されるのである。高梁川・足守川流域における大型古墳の築造停止は、いわゆる吉備の「反乱伝承」と結びついた政治的現象と解釈されている。しかし畿内においても、5世紀後半以降、最大規模の古墳は縮小しており¹⁰⁾、そのことは古墳を造営した労働力の求心性が分解していつているという見方もできるように思われる。5世紀後半から6世紀初頭における社会の再編は、高梁川・足守川地域の局地的な動きでなく、畿内を含めた広範囲の地域における社会変動、もしくは社会の再編である可能性も推測される。

注

- (1) 出宮徳尚ほか『三手(庄内幼稚園)遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1981年
- (2) 正岡睦夫ほか「三手遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
- (3) 高畑知功ほか「榑本遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』65 1987年
- (4) 高畑知功ほか「津寺遺跡」5『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
- (5) 岡山大学考古学研究部『三須丘陵遺跡分布調査報告』1976年
岡山市教育委員会『岡山市埋蔵文化財分布地図』1983年
- (6) 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』1952年
- (7) 近藤義郎編『喜兵衛遺跡の研究』1999年
- (8) 鎌木義昌編『隋庵古墳』総社市教育委員会 1965年
- (9) 近藤義郎「一本松古墳」『岡山市史 考古資料』1986年
- (10) 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』10 1961年
水野正好「群集墳の構造と性格」『古代史発掘6 古墳と国家の成立』講談社 1975年
- (11) 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13巻3号 1967年
黒崎 直「第3節 農耕文化の受容と発展」『体系日本史叢書15 生活史1』山川出版社 1994年
- (12) 橋本博文「古墳が語る政治構造」『考古学による日本歴史』5 雄山閣 1996年

II 中 世

1. 三手向原遺跡中世集落の様相

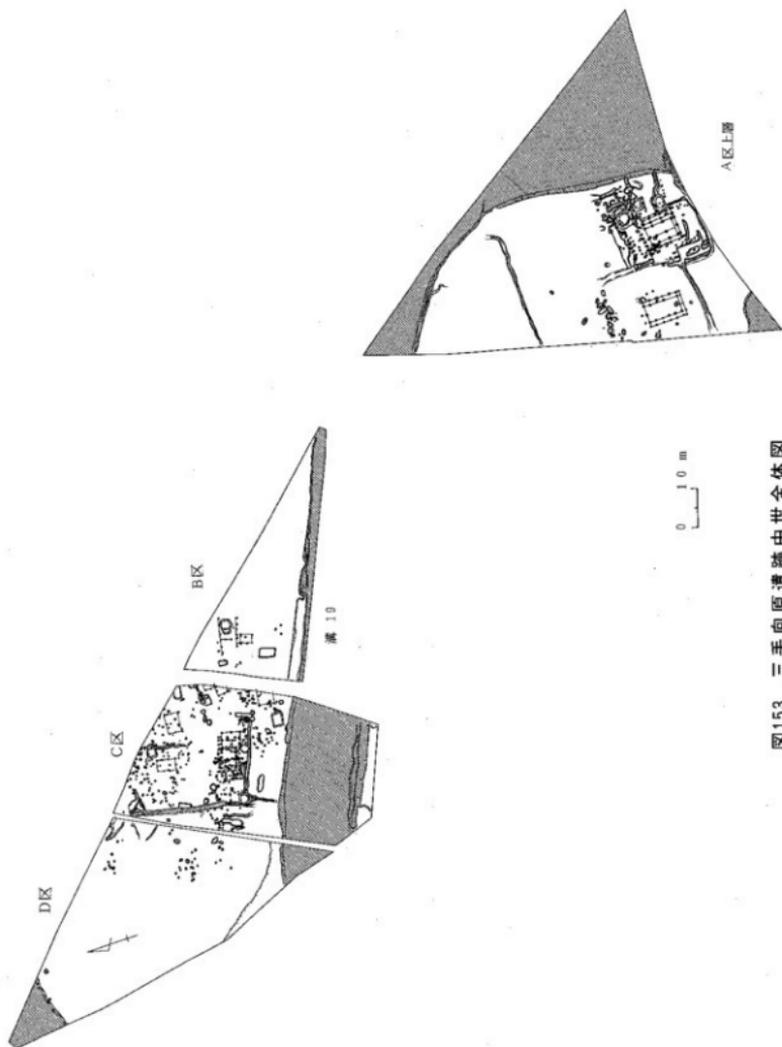


図153 三手向原遺跡中世全体図

前章では排土等の都合により設定した調査区にしたがって遺構・遺物の概略を説明したが、ここではそれらの様相をまとめて整理してみたい。調査区全体の遺構図をみると(図153)、調査区は南北2つの微高地上に立地しており、微高地間には溝19が南流している。南側の微高地はA区、北側の微高地はB・C・D区に相当する。B・C・D区は北側微高地の南半であるが、北半については山陽自動車道建設に伴う発掘調査⁽¹⁾(以下山陽道調査区)により明らかとなっており、その成果と合わせるると北側の微高地全体の様相が明らかになる。

(1) 南側および北側微高地の集落の様相

南側微高地(A区)の様相

まず、南側の微高地(A区)の様相であるが、ここでは上層と下層に分けて遺構面をとらえることができた。A区下層は2棟の掘立柱建物と井戸、土塼、溝からなる。掘立柱建物は棟方向が一致しており規則的である。これらの建物が同時に存在していたかどうかについては明確でないが、上層においても棟方向の一致する掘立柱建物が2棟検出されていることから、2棟の建物はセット関係になると推測され、同時に存在していた可能性も高いと思われる。建物の西側には長方形、もしくは楕円形の土塼が9基群在している。これらの土塼も、建物の棟方向に対して平行もしくは直交する方向であることから、一連の遺構と考えられる。これらの土塼は人骨等は検出されなかったが、形状などから墓であると思われる。山陽道調査区でも中世の掘立柱建物の周囲に土塼墓がまとめて検出されており、共通する景観といえる。出土した遺物からもA区下層は単一時期と考えられ、建物2棟に井戸1、基墓群といった遺構の組み合わせが、当時の屋敷地を構成する1つのパターンである可能性が推測される⁽²⁾。

上層は下層と比べ遺構・遺物の量が飛躍的に増加しており、建物規模も床面積で比較すると下層の倍になっている。ただ井戸は検出されていないものの、建物2棟に墓と推測される土塼群が付属するといった遺構の組み合わせは共通している。

北側微高地(B・C・D区、山陽道調査区)の様相

遺構面は基本的に1層であるが、山陽道調査区では10世紀代の土塼墓も検出されている。しかしながら、同調査区でもそれ以外の遺構はなく、B～D区でも遺構はもちろん該期の遺物も出土していないことから、中世の遺構が主体であると考えられる。北側微高地は南北約85m、東西120m以上の東西に細長い形状で、集落はその中央付近に南北80m、東西70mの範囲に形成されている(図154)。検出された遺構は、掘立柱建物、墓、井戸、土塼、溝であるが、それほど時期幅がないことに起因して比較的整然とした遺構配置を呈している。まず建物は、山陽道調査区の建物2・3が庇付建物で床面積も最も大きいことから、当集落の中心的建物といえる。ただし、それらの建物の棟方向をみると(図155)、規則的であり、古代の官衙ほどではないが全体的に一定の規制が存在していたことを示している。また、山陽道調査区の建物2・3の西側にある建物1については、建物2・3の付属屋である可能性があるものの、ほかの建物は小規模なものも含めて散在的であり、それぞれがある程度独立した家屋であったことを示していると思われる。ただし、井戸は全調査区中1基しか検出しておらず、調査区間のわずかな未調査区域にその存在の可能性はあるものの、数的にも少なく、集落全体での共同使用がおこなわれていたと考えられる。溝や土塼についても建物方向を意識しており、遺構として遺存しにくい植栽などの存在を含めて、屋敷地のような区画が存在していたことが推測される。ただし、この区画は当微高地から南へ約600mの位置にある津寺遺跡土筆山調査区⁽³⁾で検出された、溝によって区画された屋敷地が集まった集落のような厳然とした区画ではなかったと考えられる。

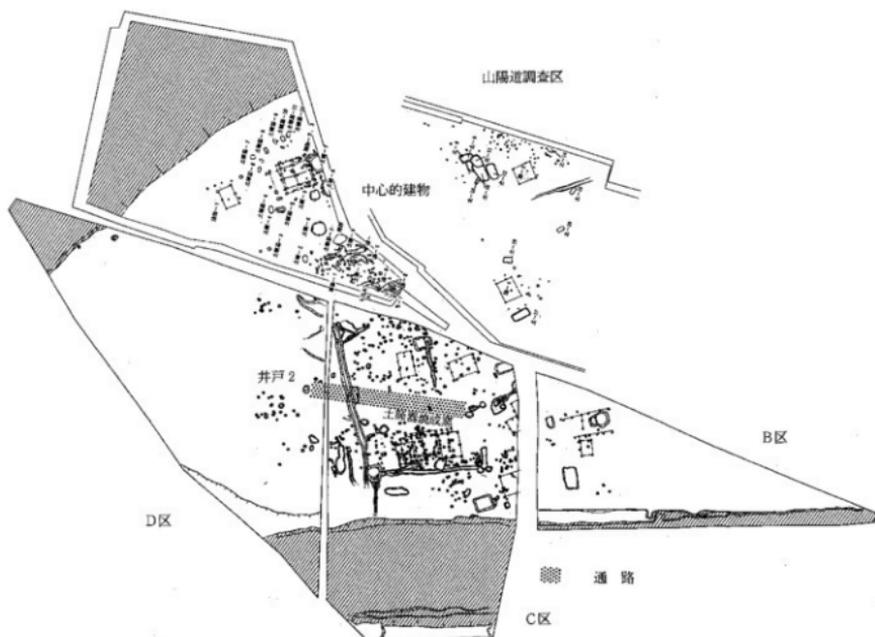


図154 北側微高地（B・C・D区、山陽道調査区）全体図

C区の中央部では、土器焼成窯が2基検出されている。窯と西側にある井戸2との間には柱穴が検出されない空間地が続き、南北方向の区画溝である溝30のこの部分には両岸のレベル差を解消する段があることから、両道橋を結ぶ通路(図154)と考えられる。このことは、土器の焼成作業に井戸水が必要な時期、具体的には冬期などの水位が下がる農閑期にその作業が行われたことを示していると共に、ある程度恒常的に土器焼成が行われたことも示している。ただし、窯の周辺には灰原もなく、失敗品などもほとんど出土していないことから、あくまで農閑期のパートタイム的な操業であったと思われる。

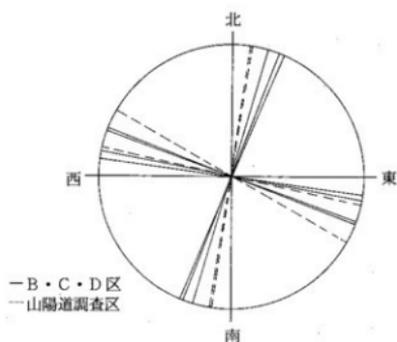


図155 北側微高地建物棟方向

以上のように南側高地よりも多様な遺構のありようであるが、中心となる建物があり、それに付属して墓群と、やや離れているが井戸があるといった基本的な遺構の組み合わせは変わらない。ただ、土器焼成を行っている点は別として、小規模な建物が中心的建物の周囲に分布する点に大きな違いがあるといえる。

(2) A区下層、A区上層、B・C・D区、山陽道調査区で検出された集落の比較

A区下層、A区上層、B・C・D区、山陽道調査区で検出された遺構面はそれぞれ独立し、3つの集落、あるいは屋敷地の様相を示している。以下A区下層を集落①、A区上層を集落②、B・C・D区・山陽道調査区を集落③と呼称する。まずそれぞれの集落の時期を整理し、時間的にどのような関係にあるのかを検討したい。これら3地点の集落からは土師器碗がある程度まとまって出土している。この土器は編年的研究も精緻であるため、この資料を時期区分の基準にする。12世紀後半以降の土師器碗は、時期が下るに従い法量が縮小していく(図156・157)ことが様々な研究や資料から示されている(1)。ここでもそれに従い、各集落で出土した碗の法量をグラフ化(図158)した。

集落①の碗は、口径15~13cm前後、器高は6~4cm前後である。集落②の碗は、口径12.5~10cm、器高は5~3cmである。層的にも集落①の方が古い、出土した碗の法量も集落①の方が古い傾向を示している。集落①は12世紀末、集落②は13世紀中葉の年代が与えられる。集落③の碗は、口径14~11cm前後、器高は5~3cm前後であるが、口径13~12cm前後、器高は5~4cm前後といった集落①と②の中間の法量を示すものが量的に多く含まれる。このことから集落③は13世紀前半の時期と考えられる。以上のことから、集落①・②・③は並存していたのではなく、段階的に時期差が存在しているといえる。しかし、集落①→集落③→集落②と変化することを示す碗の法量変化は漸移的であり、それぞれの集落が近接していることから、断絶的な関係でなかったと考えられる。しかも中心建物に墓群と井戸が付属されるといった基本形は共通していることから、これら3集落は同一集落の移動の痕跡である可能性が高いように思われる。

次に、それぞれの掘立柱建物の床面積を比較してみる。それぞれの集落で検出

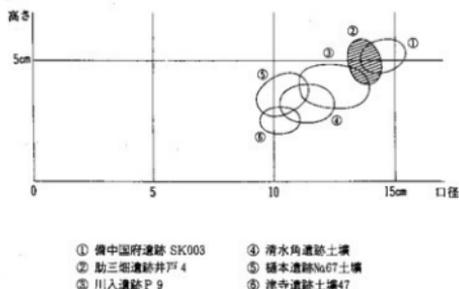


図156 碗法量変遷図

推定年代	遺 構	実年代資料
1150年	備中国府遺跡SK003	1181年
	助三畑遺跡井戸4	
	吉野口遺跡Ⅱ期	
1200年	川入遺跡 P - 9	1345年
	清水角遺跡土壌	
1300年	橋本遺跡 No.67土壌	1345年
	津寺遺跡土壌 47	

図157 碗変遷図

第四章 結 語

された建物の床面積を示したのが表1である。これをグラフ化したのが図159である。集落①と②については全形に分かるものが2棟しかないが、集落③は12棟ある。そのうち床面積が突出し、しかも庇が付属するものが2棟ある。この2棟は同一建物の建て替えであるが、この建物が集落③における中心的建物といえる。さらに集落①と②の建物は土壌墓群が付属することと同じく、この建物にも土壌墓群が付属している。つまり集落①・②の建物と集落③の中心的な建物は、共通の性格を有する建物である可能性が高いように思われる。さらに図159で示しているように、集落①→集落③→集落②への時期的変化は、それぞれの集落の中心建物の床面積の拡大を伴っているといえる。そして集落②・③では建物が庇が付属するなど、時期が下がるにしたがい構造的にも整備されてきているといえる。

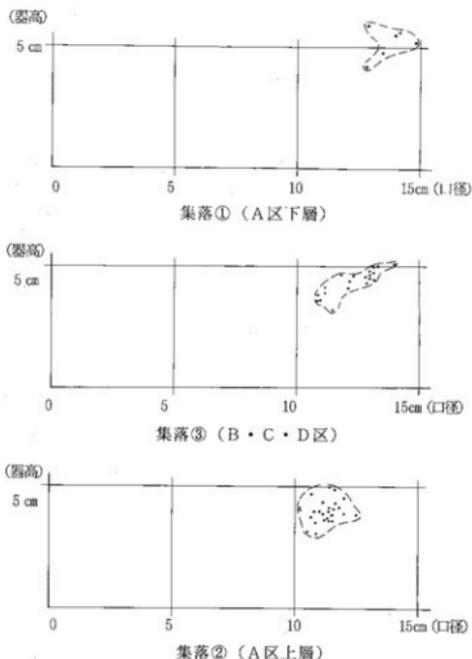


図158 各集落出土碗法量分布

調査区	番号	建物	面積(m ²)
A区下層	1	建物1	2 17.2
A区下層	2	建物2	2 24.1
C・D区	3	建物3	3 13.3
C・D区	4	建物4	4 16.4
C・D区	5	建物5	5 20.4
C・D区	6	建物6	6 18.3
C・D区	7	建物7	7 14.0
C・D区	8	建物8	8 17.6
C・D区	9	建物9	9 6.1
山陽道調査区	10	建物1	10 10.5
山陽道調査区	11	建物2	11 41.3
山陽道調査区	12	建物3	12 33.3
山陽道調査区	13	建物4	13 13.1
山陽道調査区	14	建物5	14 7.2
A区上層	15	建物1	15 68.0
A区上層	16	建物2	16 64.0

表1 掘立柱建物床面積

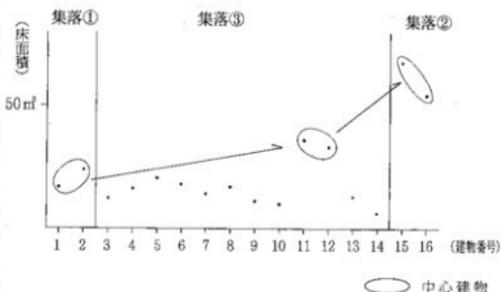


図159 掘立柱建物床面積分布

(3) 三手向原集落の主体者像

三手向原遺跡の変遷を簡単に整理すると、まず12世紀末に、南側の微高地上で建物2棟と井戸・墓をセットとした屋敷地が形成される。13世紀前葉になると、この屋敷地は北側の微高地へ移動する。この時点で、南側微高地上の屋敷地の系譜を引く建物は、規模的にも構造的にも拡大し、さらに周辺には小規模建物がつくられる。このことは、前代の屋敷地主体者を中心に、より下位クラスの人々が集住して集落規模が拡大したことを示しており、その一環として土師器焼成などの手工業生産もおこなわれたのだと考えられる。そして結果として、屋敷地主体者の建物の拡大に示されるように、おそらく中心主体者の社会的位置付けの上昇も促したのだと推測される。

13世紀中葉になると、集落は再び南側の微高地上へ移動し、中心建物の規模はさらに拡大する。そして建物の周囲には排水のための溝をめぐらし、その端部には建物に平行した集水枡を並んで付風させるなど建物周囲の景観も整備されてくる。このことは屋敷地主体者が順調に成長してきていることを示している。ただし集落景観は前代と変わり、周囲に小規模建物が分布するというわけではない。西側の未調査部分に若干存在する可能性はあるものの、13世紀前葉のように、中心建物の周囲に小規模建物が分布するような、小規模建物と中心建物が混在する景観ではないといえる。屋敷地主体者の成長と共に集落景観が変化したと考えられる。

それでは、三手向原遺跡の中世集落を構成した人々が、社会的にどのように位置付けられるのかを若干検討してみたい。伊藤鄭爾氏は、文献資料から室町時代の農家の住居の床面積を集成している⁹⁾。それによると平均は40㎡で、大きいものは53㎡、小さいものは13~20㎡のものが多く、階層別にみると地侍層が80~112㎡、名主層は30~80㎡、被官百姓層は13~60㎡となっている。このデータを参考にして図159をみると、集落①の屋敷地主体者は被官百姓層に、集落③の屋敷地主体者は被官百姓層から名主層に、集落②の屋敷地主体者は名主層に対応する。つまり、一般百姓層として屋敷地を形成した集落①は、13世紀代には名主層クラスまで成長したということになる。

集落③において中心建物の周囲に分布する小規模建物は、それぞれが散在的であることから、弱小とはいえ、ある程度自立的に存在している単位と推測される。床面積的には被官百姓層に相当するが、具体的には、中心建物に住む名主に個別に従属した下人・所従といった人々に相当するのではないかと思われる。

13世紀中葉前後、いわゆる鎌倉時代中期は、一般的に農業技術の発達とそれによる生産力の向上の時期とされ、発掘調査の成果でも該期における集落遺跡数の増加は著しい。さらに文献からの研究では、この時期の開発の原動力は「集約的農業の発達であり、農民の個々の努力にもとづく小規模の土地開発」であったとされる。そしてそういった土地開発は、開発の直接的な推進者である下人や所従などを小百姓として自立させ、名主層はそこから一定の年貢を収受するといった経営形態へ変化したことにより達成されたとされる¹⁰⁾。集落③から集落②への集落景観の変化はこれに相当するのではないかと思われる。つまり、集落③において名主層へ成長した屋敷地主体者は、それまで周囲にいた下人・所従を各開発地ごとに独立させ、そこで水田耕作をおこなわし、年貢を取り立てるといって、いわば在地領主として成長したのが集落②と考えられるのである。そういった意味で集落②は館ともいえる性格の屋敷地であったと考えられる。

(4) 小結

三手向原遺跡の変遷を復元することによって、12世紀末から13世紀における集落変遷の1つのパターンがある程度とらえられたように思われる。こういった集落がその後どうなるかについては、13世紀

後半から14世紀にかけての遺構が、微高地上に形成されていないためよく分からない。ただ最後にその時期も遺構の形成が認められる津寺遺跡土筆山調査区¹⁾の様相を概観し、当遺跡の集落③がその後どのような集落景観になるのかを若干みておきたいと思う。

津寺遺跡土筆山調査区は12世紀末から15世紀にかけての中世集落であるが、景観的には12世紀末から14世紀初頭と、14世紀前半から15世紀の2時期に分けられる。12世紀末から14世紀にかけては掘立建物と墓群が形成されており、中心建物は検出されていないが、検出されている建物を中心建物の周囲にある小規模建物とすると、三手向原遺跡の集落③とよく似ている。14世紀前半から15世紀になると、集落の景観が一変する。この時期は三手向原遺跡の集落②に後続する時期である。幅1mを越える極めて区画意識の強い溝によって区分された屋敷地の集合となる(図160)。個々の屋敷地には掘立建物があり、それらの床面積を比較すると、50㎡前後、30㎡前後、20㎡前後、10㎡前後に分けられる。それらの分布を屋敷地ごとにみると、大規模な建物がある特定の屋敷地に集中するといった傾向は少ないが、50㎡前後の建物がある屋敷地(屋敷地5・6)と、20㎡前後の建物が多い屋敷地(屋敷地4)など、屋敷地間に格差のあることが看取される。さらにそれぞれの屋敷地内には建物が複数存在しており、屋敷地個々はある程度自立的単位として完結していると認識できる。これは三手向原遺跡の集落③のように、名主層に付随する下人・所従で構成される集落とは質的に異なっているといえる。

13世紀中葉頃から周囲の下人・所従層を自立させ、自らも在地領主として成長した名主層であったが、それは搾取る側と搾取される側といった相対立する新たな構図の出現でもあった。この対立の激化の結果、小百姓と小百姓、在地領主と在地領主、あるいは在地領主と小百姓、さらに本百姓をも加えた、様々な形の結合が行われるようになった²⁾。それが津寺遺跡土筆山調査区の14世紀前半から15世紀の格差のある屋敷地の集合という集落景観に、対応するのではないかとと思われる。

注

- (1) 正岡睦夫ほか「三手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
- (2) 中世における屋敷地と屋敷地内の遺構の組み合わせについては、百間川米田遺跡や鹿田遺跡でも検討されている。集落の性格と屋敷地の様相は密接な関係があると思われる、当遺跡の場合は

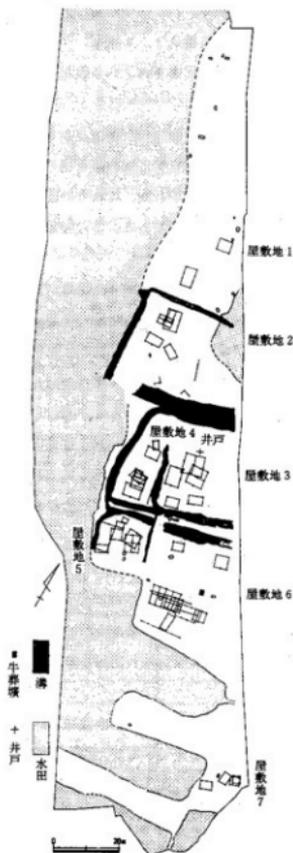


図 160 津寺遺跡土筆山調査区(注2)

中小河川域に立地する農業生産を主とする屋敷地の景観といえる。

岡本寛久「百間川米田遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989年

山本悦生「鹿田遺跡」II『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第4冊 1990年

(3) 正岡睦夫ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年

(4) 福田正維「百間川当麻遺跡」1『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 1981年

神谷正義「三手(庄内幼稚園)遺跡発掘調査報告」岡山市遺跡調査団 1981年

鈴木康之「鹿田遺跡」I『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988年

山本悦生「吉備南部における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』VI 1992年

(5) 伊藤鄭爾『中世住居史』東京大学出版会 1958年

(6) 稲垣泰彦「II 領主と農民」『日本民衆の歴史2 土一揆と内乱』三省堂 1975年

(7) 注3

(8) 注6

2 土師器焼成窯について

1. 窯構造の復元

(1) 三手向原1号窯

三手向原遺跡C区では、土師器焼成窯が2基検出された。そのうち1号窯は残存状態も比較的良好で、焼成に使用された窯道具も伴出している。墓下において土師器焼成窯の検出例自体も3例(4例)と少なく、明確な窯道具が伴った例としては本例が初めてである。窯道具と推測される土製品については、三手向原遺跡の南約7.5kmの位置、当時は足守川河口の前面に浮かぶ島であった早島丘陵上にある奥坂遺跡No.40溝からも2点板状の窯道具(図161)が出土している(1)。そのうち1点は完形

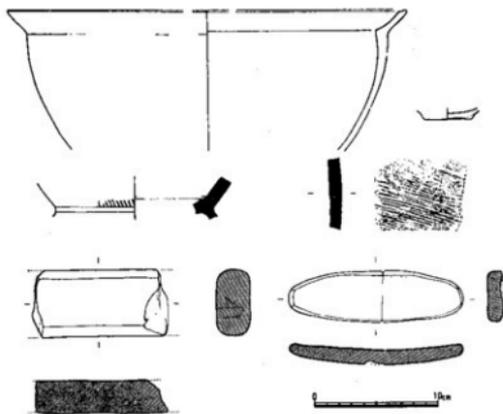


図161 奥坂遺跡No.40溝出土窯道具(注1)

で、長さが14.2cmと三手遺跡出土の板状窯道具の小型のものに近い大きさである。両端を欠損しているものは残存部の厚さや幅からそれより大型品と考えられ、大型と小型の板状窯道具がそろっており、三手遺跡の板状窯道具の構成と一致する。このことは奥坂遺跡周辺に土師器焼成窯が存在していることを示しているとともに、足守川流域には窯道具を用いた土師器焼成窯が、ある程度面的に分布している可能性を示唆しているものと考えられる。

それでは三手向原遺跡1号窯(以下三手1号窯とする)において、どのように窯道具が使用された

のかを復元的に検討してみたい。出土した窯道具は、形態で分けると円柱状のものと板状のものがある。円柱状の窯道具は、P983出土の完形品から長さ13~14cmで、両端がそれぞれ拡張してあるが片方の端部の方が大きい。大きい方の径は6~7cm、小さい方の径は4~5cmである。ほかの破片もそれぞれこの数値と一致するため、全体の大きさは大体同じであったと考えられる。円柱状の窯道具の表面は、2次的な被熱により表面が劣化しているものが多い。ただし端部が大きい方の縁辺部は被熱

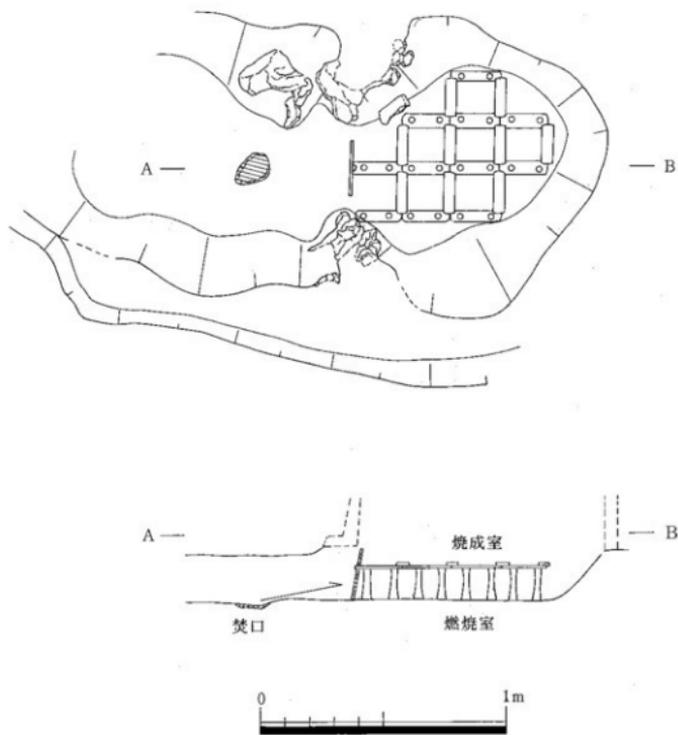


図162 三手向原1号窯復元想定図

せず、焼成時の器表面を維持しているものもある。これは焼成室の床面が被熱によって赤化していないことと共通しており、燃焼室の床面に大きい径の部分を下にして立てて使用されていたことを示している。成形は手捏ねによっており、指頭圧痕と考えられる押圧が全体に認められる。中央付近には、径0.5cm程の焼成前の円孔が認められるものと認められないものがあり、前者については成形の際に用いられた芯の痕跡と考えられる。両者には円孔の有無以外の違いは認められない。

板状窯道具は、三手1号窯、P983出土の完形品から長さ16~17cm、幅5~5.5cm、厚さ1~1.8cmの大型のものと、長さ13cm、幅5cm、厚さ1.5cm前後の小型のものに分けられる。いずれも二次的な被熱により表面が劣化しており、形状も歪んでいる。歪みの傾向としては上反りのものが多く、一方方向からの被熱が想定される。板状窯道具のなかには、三手1号窯出土の139やP983出土の165のように、端部付近に径4cm程度の円形の変色部分が認められるものがある。これは、柱状窯道具上端部の接点痕跡と考えられ、窯床面に並んで立てられた柱状窯道具の上端に、板状窯道具を並べたものと考えられる。しかも139・165とも大型板状窯道具で、小型板状窯道具については痕跡の認められるものはなかった。このことから円柱状窯道具の上に大型板状窯道具を置く列を幾つかつくり、それらを横方向に連結するように小型板状窯道具を置くといった配置が考えられる。つまり、板状窯道具が円柱状窯道具の上に井桁状に並べられたものと想定される。

以上の窯道具を三手向原遺跡1号窯の床面に並べてみる(図162)。この想定図から類推される窯道具の数は、円柱状窯道具21点、大型板状窯道具11点、小型板状窯道具9点である。ただし板状窯道具については、その違いが基本的に長さにあることから、破片での出土では両者の区別が難しいため、一括して扱うと板状窯道具20点となる。そうすると、円柱状窯道具と板状窯道具の比率は21:20となる。この比率を出土した遺構ごとにもてみると、まず1号窯は円柱状窯道具5点、板状窯道具5点で1:1となる。2号窯はそれぞれ1点ずつの1:1、P983はそれぞれ3点ずつの1:1である。包含層を含めた調査区全体の出土点数は、円柱状窯道具20点、板状窯道具18点となり10:9の比率となる。いずれも想定した窯道具の構成比率と近い数値となることから、図162で想定した窯道具の配置はある程度当時の使用状況を復元しているものと考えてよいと思われる。

このほか、三手向原遺跡1号窯からは、径0.8~1.1cmの焼成前穿孔をいくつもおこなった円板状の土製品158も出土している。この土製品の円孔は、中心に径約1.1cmのやや大きい円孔があり、その周囲に径約0.8cmのやや小さい円孔を配している。表面が2次的被熱により劣化していることから、これも窯道具の可能性が高い。形状から機能を推測すると、分焰の機能が考えられ、出土点数も1点と少ないことから焚口の正面に設置されたと推測される(図162)。板状窯道具のなかには端部に突起を整形したものの138・255があり、これも出土点数が2点と少ないことから、分焰窯道具を固定するためのものであることが推測される。なお、時期については明確でないが土師器焼成窯が検出された沖ノ店遺跡の包含層からも同じ形態をした土製品が出土しており⁽¹⁾、それは本例よりも残りがよく、径16.8cmの円板形に復元図化されている。

(2) 県下出土の土師器焼成窯との比較

本例のほかに県下では3例の土師器焼成窯が発掘調査で明らかとなっている。それらの様相を概観し、三手向原遺跡1号窯と比較してみたい。

三蔵畑遺跡(図163)⁽²⁾

山陽町に所在し、周辺水田部との比高差が約40m程の丘陵の傾斜地で、長さ約25m、幅4~5mのテラス状平坦面上に土壌や柱穴とともに検出された窯である。周囲の傾斜は急であり、集落地の一角というよりも集落から離れた孤立的な位置に、小規模な施設とともに存在しているといえる。窯は等高線に沿って構築されており、花崗岩の角礫で外形をつくりその内側に粘土を塗ってつくっている。焚口の残りがよくないが、側壁の幅や灰層の分布から、焼成窯は長さ1.2m、床面幅0.42mとされる。床面は焼成窯奥壁から焚口に向かって平均7度程の傾斜がある。焼成室床面には土師器鍋の破片が並べら

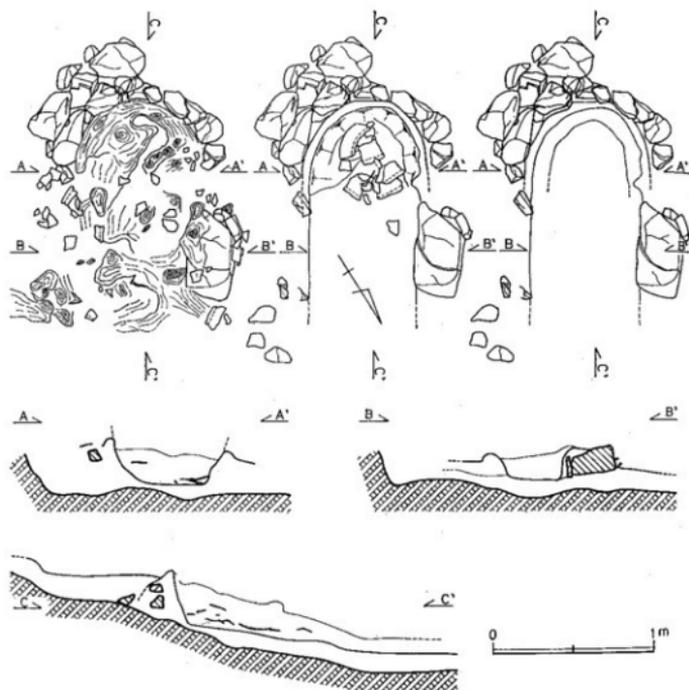


図163 三蔵畑遺跡(注3)

れており、焼台として用いられたと考えられる。窯は灰混り土層の上に構築されていることから、同一地点で数回操業されたようである。遺物は窯および周囲の灰原から、鍋・鉢・羽釜・カマドが出土している。それらから本窯は12世紀末とされるが、13世紀代まで下がる可能性がある。

沖ノ店1号窯(図164)⁽⁶⁾

鴨方町に所在し、狭小な谷に面した丘陵上の標高44m付近の緩傾斜地に位置する。窯の上方15m、標高47.5mの地点には、柱穴・土壇が幅15mにわたって検出されており、窯に付属する建物、もしくは施設と推定される。窯は等高線に直交して構築されており、床面で径0.43~0.53mの楕円形、検出面で0.85~0.95mの楕円形の平面形の焼成室に最大幅で0.52mの焚口が付属する。床面は焚口から焼成室に向かって9度傾斜している。床面中央には分煆柱の機能を想定させる角礫が据えてある。遺物は土師器の椀・皿・杯と焼台に利用されたと考えられる半瓦・鍋が出土している。時期はこの窯から出土した椀が当地域で出土する椀とは異なり、底部に回転糸切り痕が残っていることなどから位置付けが難しいが、一応11世紀末から12世紀初頭と考えられる。

関戸廃寺(図165)⁽⁵⁾

笠岡市に所在し、関戸廃寺という古代寺院内に位置するが、窯の構築は寺院の主要伽藍焼絶後の時

期と考えられている。トレンチ調査によって遺構の東半を検出している。床面で径0.5mの円形の焼成室に焚口が付属する。床面はほぼ水平で、中央には沖ノ店1号窯と同様に分焰柱の機能が想定される角礫が据えてある。石の周囲からは平瓦が出土しており、焼台に利用されたと推定される。瓦のほかに碗・杯・皿が出土しており、11世紀後半から末の時期とされる。

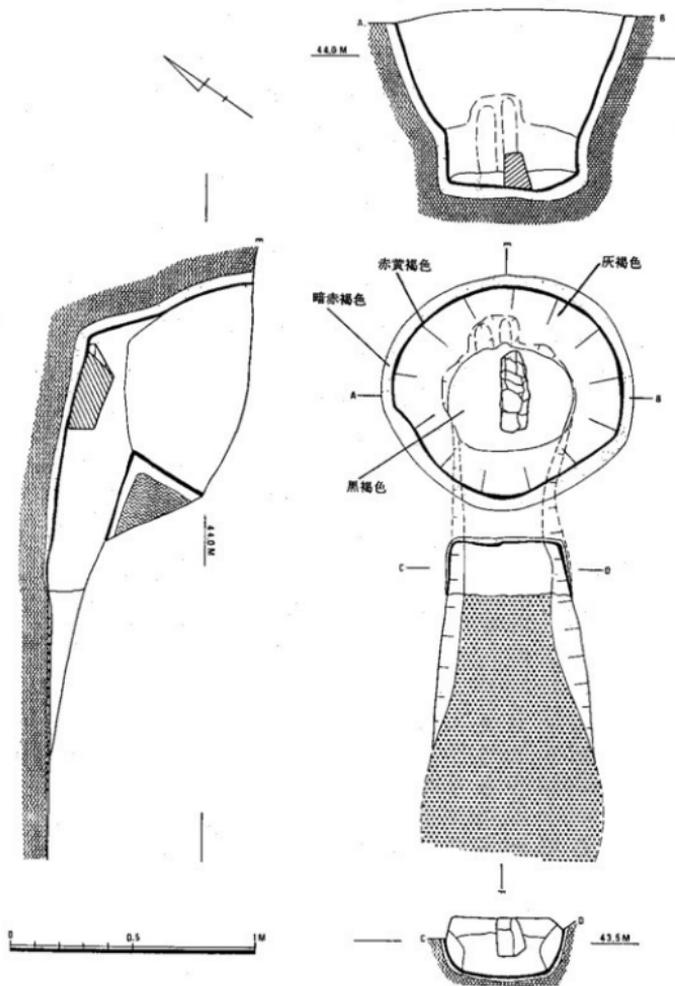


図164 沖ノ店1号窯(注4)

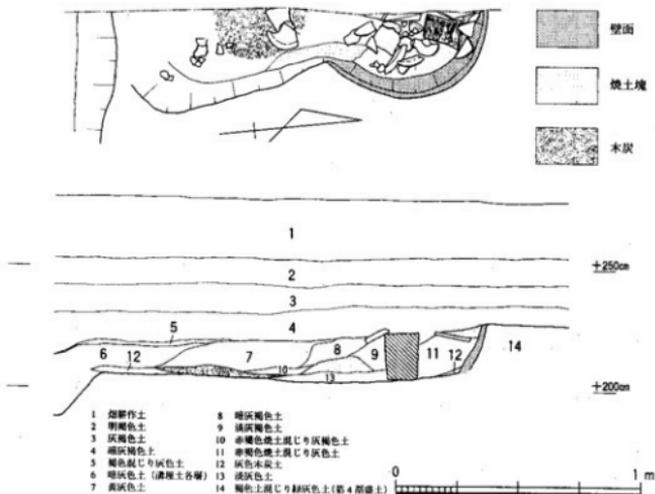


図165 関戸廃寺(注5)

以上概観した窯には角礫を用いた分焰柱や、土器片を用いた焼台は伴うものの、三手向原遺跡のような専用の窯道具は用いられていない。これが何に起因するのかを、それぞれの窯を比較しながら検討してみたいと思う。

まず、それぞれの窯の平面形を比較してみたい。検出面での比較では、遺構の残存状態によって差が出るため床面の平面形で比較した(図166)。全長については、それぞれの遺存条件によって異なっているが、焼成室の奥壁部はかなり近いカーブを描く形態となっている。次に焚口の位置を比較してみると(図166)、奥壁から最も近いのが関戸廃寺窯で、沖ノ店1号窯、三蔵畑窯、三手向原1号窯の順に距離が長くなる。このことは焼成室の大きさ、とくに長軸方向の長さが関戸廃寺窯～三手向原1号窯の順に広がったことを示している。そしてこの順番は、出土遺物から推定される窯の時期の順に対応し、時期が下がるに従い焼成室が縦長に拡大したということを示しているようにも見える。

次に、それぞれの窯の縦断面を比較してみたい(図167)。最も時期の古い関戸廃寺窯がほぼ水平で、沖ノ店1号窯と三蔵畑窯は焚口に向かって傾斜し、三手向原1号窯は水平である。関戸廃寺窯と沖ノ店1号窯は、焼成室の大きさや分焰柱機能を有する角礫の位置までほとんど同じである。しかし焚口の位置は沖ノ店1号窯の方が後退している。おそらく、このことが沖ノ店1号窯の床面が傾斜していることと関係するものと思われる。土器焼成窯における窯の床面傾斜角度の強さは、火のひきを強めるとされており⁽⁴⁾、沖ノ店1号窯の場合は焚口の位置が離れて焼成室が拡大したことに対する措置といえる。三蔵畑窯の焼成室床面の傾斜についても同様に理解される。ところが、三手向原1号窯は最も焚口と焼成室奥壁までの距離が離れているにもかかわらず、床面がほぼ平坦である。おそらくこ

の点が専用の窯道具を用いた要因であったと考えられる。つまり、焚口を焼成室奥壁からできるだけ離し、多くの土器、あるいは鍋などの大型品を焼成するための焼成室の大きさを最大限確保するために、焼成室の床面に窯道具を用いて空間、すなわち燃焼室をつくったのだと考えられる。この措置は床面傾斜の取りにくい平野部における操業であるためという可能性も少なくはないが、丘陵部の遺跡である奥坂遺跡で窯道具を用いた土器焼成がおこなわれたと推測されることから、立地などの条件でなく、窯道具の使用は焼成室の大きさに対応したものと考えることが妥当と思われる。

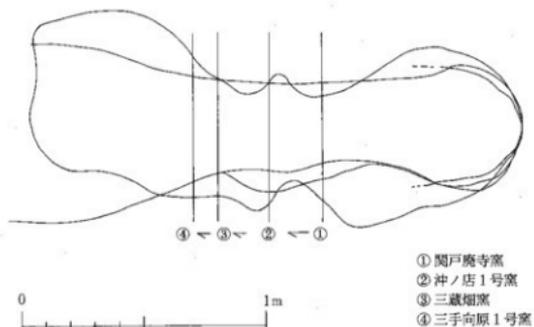


図 166 平面および焚口比較 (番号は焚口的位置)

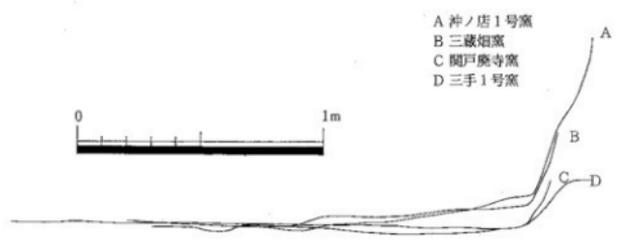


図 167 床縦断面比較

11世紀末から13世紀における土器焼成窯は、現時点までの資料を見る限り、時期が下がるに従い焼成室の大きさが縦長に拡張していくようである。そのため火のひきを強めるために、まず焼成室床面に傾斜を付け、やがて窯道具を用いて焼成室の下部に燃焼室をつくったと推測した。ただし、これが各時期の普遍的な土器焼成窯の構造の変遷を示している可能性も無くはないが、焼成物の大きさや量などに対応している可能性も捨てきれない。この点に関しては資料の増加を待ってさらに検討していきたい。

(3) 土師器焼成窯の操業者

土師器焼成窯は、集落③のなかに構築されている。集落③は集落の様相で整理したように、名主層の住居と推測される中心的建物と、それに従属的立場にある下人・所従などの住居と推測される建物群とで構成されている。土師器焼成窯は、その位置関係からも中心的建物の居住者が直接操業していたとは思われず、従属的立場にある下人・所従などに類する立場の人々によって操業されていたと思われる。

県南部における13世紀の土師器をみても、主体は椀・皿・杯・鍋で、それらは広範囲に分布している。椀や皿の組成などから細かな小地域性を読み取れる地域もあるが⁽¹⁷⁾、土器個々は類似した形態をしており、法量も時期が下がるにしたがい同じ様に縮小するといった傾向は変わらない。鍋についても、端部などの成形などに若干の違いが認められる点もあるが、その差はわずかで外面や内面の調整であるハケの使用手順もよく似ている。そのことから、これらの土器を生産し、供給できるような地域経済圏の存在を指摘する考えもある⁽¹⁸⁾。

しかし、県南部に広く分布する土師器は共通する点が顕著な反面、それらを生産した窯については2基以上が同時に操業されているものはほとんどなく、基本的に単独で、しかも土器生産を行う特殊な集落でなく、一般集落の一角、もしくは付近で行われている場合が大半である⁽¹⁹⁾。三手向原遺跡の土師器焼成窯も同様といえる。

一方、この時期における瓦生産の様相をみても、この時期前後(12世紀から13世紀)の瓦、特に軒平瓦については紋様だけでなく瓦当部成形技法の違いによって工人の系譜を追求できる。平瓦端部を別粘土で包み込んで瓦当部を成形する播磨系の「包み込み技法」(A技法)⁽²⁰⁾、平瓦端部を屈曲させて瓦当部を成形する丹波系・中央官衙系の「折り曲げ技法」(B技法)⁽²¹⁾、平瓦端部の凸面側に別粘土を貼り付けて瓦当部を成形する南都系(C技法)⁽²²⁾などである。これらの技法を手掛りにして県南部の瓦の分布を示したのが図168である。この図によると、県南部における瓦技法の分布は一定のまとまりを示さず、モザイク的であることが分かる。この時期の瓦の需要は、日常的な家屋に対してでなく、寺などの特殊な建物に限定されていた。そのため、必要に応じて各地の瓦工人が移動してきて造瓦活動を行い、それが終了するとまた別の作業場へ移動したのだと思われる⁽²³⁾、それが瓦技法の分布に示されていると考えられる。

このような瓦工人のありようから、この時期には移動を自由に行う工人の姿が復元される。これを土師器生産者の姿に置き換えてみると、必要に応じて移動する土師器工人達があり、彼らは県南部を一応テリトリーとし、移動しながら土器生産を行っていたのではなかろうか。そして彼らは自立できる確固たる基盤をもっていない下人や所従と、移動した作業場での立場は似ており、そのため集落③では土師器焼成窯以外の彼らの住居と下人や所従の住居の区別は明確でないということも考えられる。ただし、土師器工人達のそういった立場は、普遍的なものではない。三手向原遺跡の場合、



図 168 成形技法別軒平瓦分布図

土師器焼成窯と井戸との関係から、操業が水位の下がる冬季、すなわち農閑期と考えられることから、この土器生産の性格は農閑副業¹⁰⁾の可能性が高く、その副業的な作業の性格を反映していると考えられるからである。土師器と比べかなり専門的な技術と労働力が必要である備前焼でさえも、15世紀の段階ではまだ農閑副業であったとされており¹⁰⁾土師器についても同様であったと考えられる。ただし土師器は想定される操業形態から、いわば流動的な農閑副業、備前焼については生産地が地域的に限定されることから固定的な農閑副業としてとらえられる。

注

- (1) 高畑知功ほか「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 1983年
- (2) 伊東 晃ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」2 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981年
- (3) 神原英朗ほか「三蔵畑遺跡」『岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(6) 1976年
- (4) 注2
- (5) 安東康宏ほか「関戸廃寺」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』3 1997年
- (6) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966年
- (7) 草原孝典ほか『吉野口遺跡』岡山市教育委員会 1997年
- (8) 鈴木康之「土師質土器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
- (9) 森 隆「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会 1994年
- (10) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』十三・十四合併号 1978年
- (11) 注10
- (12) 注10
- (13) 草原孝典『小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1993年
なお、小丸山遺跡出土のA技法軒平瓦は技法や文様は播磨産とよく似ているが、焼成・胎土は異なっている。
- (14) 脇田晴子「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』II 1986年
- (15) 石井進「備前焼の発展—中世窯業の一例として—」『講座日本技術の社会史』第四巻 1984年

3 胎土分析の成果との整合性

県南部の14遺跡出土の中世前半(13世紀前半)の銅の胎土分析をしていただいた(附章2)。遺跡の分布は、足守川水系から吉井川水系におよび、東西20kmの範囲である。ここでは、その結果と、遺構から想定した中世の師器生産の形態とを比較してみたい。

分析した14遺跡は、三手向原遺跡と三蔵畑遺跡の土師器生産遺跡と、その他の集落遺跡とに大別できる。集落遺跡の場合は、小丸山遺跡以外は全て¹¹⁾2種類以上の胎土が確認されており、複数の生産地からの供給を受けていた結果と思われる¹²⁾。単一胎土のみの小丸山遺跡は、調査地が集落端部であり、出土資料数も少ないことから、調査地の条件を反映させている可能性¹³⁾が高い。したがって、県南部の該期の集落遺跡から出土する銅は、複数の胎土によって構成されていたと推測される。

一方、土師器生産遺跡の場合、三蔵畑遺跡は単一胎土、三手向原遺跡は複数胎土によって構成されている。三蔵畑遺跡は、集落から離れた丘陵上⁶⁾に位置することから、そこから出土した遺物は全て同遺跡で焼成されたもの⁶⁾であったと思われる。三手向原遺跡の場合は、土師器の生産もおこなっていた集落であることから、同遺跡で焼成されたものだけでなく、他の生産地からの供給があったと考えられる。

中世の土師器生産は、複数胎土で構成されることが一般的な集落遺跡の様相であることや、三手向原遺跡の様相から、一定の生産地が常に安定した供給をおこなっていたとはいえず、むしろ間欠的な生産と供給であったことを示していると思われ、遺構から推測した農間副業的な生産形態に近い成果と思われる。

集落遺跡が、複数胎土の鍋が出土することは、市などを介した複雑な流通構造の反映と思われるが、基本的には生産形態に規定されていたのだと考えられる。また、該期において県南部の広範囲にわたって鍋の形態や調整手法が近似していることについては、胎土の共通する遺跡が水系ごとにまとまらず、かえって異なった水系の遺跡間で共通するものもあるといった分析結果から、単一の生産地からの供給といったことに起因しているとは思われない。共通する胎土のモザイク的な分布は、複数の生産単位からの供給が錯綜していたことを示している可能性が高い。そうすると、似た形態の鍋が分布することは、消費者の要請と、生産者単位の繁茂な移動による接触によっておこなわれた技術交流によって形成されていたと思われるのである。つまり、似た形態の鍋の分布は、生産・流通・消費の安定した経済圏が存在していたことを示していると推測されるのである。

今回の分析資料は、県南部の該期の遺跡数と比べると、極めて限られた点数といえる。さらに多くの遺跡資料をあわせて分析し、今回の成果を検証しなければならないと思われる。また、分析対象となる資料の細部形態の分類をおこない、それと胎土分析の成果を比較し、生産者単位の規模や分布範囲をとらえ、それと庄園領主や在地領主の領域との関係、交通路や市・泊などの結節点との関係を検討していくことが、中世の流通構造を理解するための基礎作業になるものと思われる。今後の課題である。

注

- (1) 神原英朗ほか「三蔵畑遺跡」『岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』
(6) 1976年
- (2) 草原孝典『小丸山(中山中) 遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1993年
- (3) 注2
- (4) 注1
- (5) 注1

附 章

附章1 三手向原遺跡出土の鎌倉時代人骨

岡山理科大学総合情報学部

川 中 健 二

岡山市三手108-1に所在する三手向原遺跡は、岡山市教育委員会によって、平成5年9月に発掘調査が実施された。この遺跡は、出土遺物から鎌倉時代のもつと判断されており、遺跡中に存在する4つの埋葬施設から人骨が出土した。

これらの出土人骨のうち比較的保存状態がよく、計測に堪えうるのは墓1から出土したもので、他の3つの埋葬施設出土人骨は、ほとんどが破片になっていた。本報では、墓1出土人骨だけについて記述しておくことにする。

墓1出土人骨

保存状態

頭蓋骨：保存されている骨の状態はよいとはいえず、骨質はもろくなっているが、脳頭蓋、顔面頭蓋、下顎骨を通じて、全体にほぼ原形を留めている。欠損しているのは、左右の頬骨弓、上顎歯槽突起の左第2切歯から右第2小臼歯までの部分、大後頭孔周辺の一部、左眼窩内側壁の部分、右下顎関節突起の外側部などである。

歯の中で欠損しているのは、上顎左第2切歯から右第2小臼歯にいたる歯、下顎左右の第1切歯、左第2切歯、左犬歯、左第2大臼歯であり、その他の歯の保存状態は良好である。

胸骨：一部の骨が保存されているが、すべて破片になっている。

四肢骨：四肢骨の中で、下肢の骨の保存状態は比較的よいが、上肢の骨はすべて破片になっている。下肢の骨の中では、左右の寛骨は、寛骨臼の中央を通る線から前の部分と腸骨の上部が欠損しているが、大坐骨切痕や坐骨結節を含む寛骨後半部はよく保存されている。

大腿骨は左右とも全長にわたって保存状態はよいが、左大腿骨では骨頭の前面から下面にかけての部分、大転子、外側顆外側面、および内側顆内側面が欠けている。右大腿骨では骨頭前面、大転子、内側顆内側面、漆蓋面の上から外側顆のにかけての部分が欠けている。膝蓋骨は左右とも残存していない。脛骨も左右とも全長にわたって保存されているが、左脛骨では内側顆の後面を除く大部分が欠損しており、右脛骨では脛骨粗面の上から内側顆にかけての表面がなくなっている。腓骨は、左の外顆後半部を除いて、左右とも全長にわたってよく保存されている。

足根骨では、左右の距骨と左踵骨だけが、ほぼ完全な形で保存されている。

性・年齢の判定

残存している寛骨の大坐骨切痕の形状から、本人骨が女性のものであることは明らかである。頭蓋骨3主要縫合のうち、人字縫合は全長にわたって癒着は始まっていない。しかし、矢状縫合の前半部と冠状縫合は、癒着したといえる状態に至ってはいないものの、不明瞭になっている部分がある。残存している上下左右の第1大臼歯の咬耗はやや進んでいる。これらの点から、この人骨の死亡時の年代を壮年期と推定しておきたい。

計測的・非計測的特徴

脳頭蓋：長幅示数（72.0）は長頭型、長高示数（72.0）は中頭型、幅高示数（100.5）は狭頭型に属する。長耳ブレグマ高示数（88.5）は高頭型、幅耳ブレグマ高示数（88.5）は狭頭型に属する。特記すべき非計測的特徴はない。

顔面頭蓋：ウィルヒョウ顔面示数（124.2）は正顔型に属している。眼高示数（右：87.5）は高眼窩型に属し、鼻示数（57.7）は広鼻型に属している。鼻根部の扁平性を示す示数は得られないが、観察できる範囲では著しく扁平である。上顎歯槽突起のプロスチオンを含む部分が欠損しているので、突顎の程度を示す角度は得られないが、顔面の側面観を見ると、かなりの程度に突顎であるように思われる。

上記の頭骨長幅示数が長頭型に属するのとあわせて、本人骨の頭蓋骨は、中世人的な特徴を示しているといえることができる。

四肢骨：大腿骨上骨体断面示数は、左（88.5）が中型、右（81.5）が広型に属する。脛示数は、左（77.8）・右（78.6）ともに厚脛に属する。左大腿骨最大長からピアソン式によって算出した推定身長は152.6cmである。

本人骨の調査の機会を与えていただいた岡山市教育委員会、および発掘担当者の草原孝典氏に感謝の意を表したい。

三手向原遺跡出土鎌倉時代女性人骨計測値および示数

1. 頭蓋骨

1	頭骨最大長	182	42	下顔長	109
2a	ナジオン・イニオン長	165	43	上顔幅	(98)
3	グラベロ・ラムダ長	175	46	中顔幅	95
5	頭骨低長	(101)	47	顔高	118
7	大後頭孔長	(38)	51	眼窩幅	右 40
8	頭骨最大幅	131	52	眼窩高	右 35
9	最小前頭幅	92	54	鼻幅	30
10	最大前頭幅	111	55	鼻高	(52)
11	両耳幅	(121)	61	上顎歯槽幅	66
12	最大後頭幅	102	63	口蓋幅	37
17	バジオン・ブレグマ高	131	65	関節突起幅	(111)
20	耳ブ/グマ高	116	66	下顎角幅	99
22	ナジオン・イニオン線上穹頂高	111	68	下顎骨長	80
23	頭骨水平周	550	69	頤高	30
24	横弧長	315	70	下顎枝高	左 59
25	正中矢状弧長	(380)	71	下顎枝幅	左 34
26	正中矢状前頭弧長	128			右 35
27	正中矢状頭頂弧長	130	73	鼻側面角	94
28	正中矢状後頭弧長	112	79	下顎枝角	123
28(1)	正中矢状上鱗弧長	83	52/51	眼高示数	右 88.5
29	正中矢状前頭弦長	107	54/55	鼻示数	(57.7)
30	正中矢状頭頂弦長	117	66/65	下顎骨幅示数	(89.2)
31	正中矢状後頭弦長	99	71/70	下顎枝示数	左 57.6
31(1)	正中矢状上鱗弦長	73	9/43	前頭両眼高示数	(93.9)
32(1)	前頭傾斜角	65			
32(5)	前頭彎曲角	125			
33(1)	ラムダ・イニオン角	98			
33(4)	後頭屈曲角	125			
34	大後頭孔傾斜角	10			
8/1	頭骨長幅示数	72.0			
17/1	頭骨長高示数	72.0			
17/8	頭骨幅高示数	100.0			
20/1	長耳ブレグマ高示数	63.7			
20/8	幅耳ブレグマ高示数	88.5			
22/2a	穹頂示数	67.3			
9/10	横前頭示数	82.9			
9/8	横前頭頭頂示数	70.2			
27/26	矢状前頭頭頂示数	101.6			
28/26	矢状前頭後頭示数	87.5			
28/27	矢状頭頂後頭示数	86.2			
29/26	矢状前頭示数	83.6			
30/27	矢状頭頂示数	90.0			
31/28	矢状後頭示数	88.4			
31(1)/28(1)	矢状上葉示数	88.0			
	Vertex Rad. (VRR)	122			
	Nasion Rad. (NAR)	89			

2 四肢骨

大腿骨		左	右
1	最大長	410	412
2	自然長	406	404
4	自然位転子長	(376)	(371)
6	中央矢状径	25	25
7	中央横径	23	22
8	中央周	77	76
9	骨体上横径	26	27
10	骨体上矢状径	23	22
13	上幅(上端長)	92	87
15	頸垂直径(高)	25	26
16	頸矢状径(幅、深)	22	23
23	外顆最大長	56	—
25	外顆後高	33	—
26	内顆後高	36	36
8/1		18.7	18.4
8/2	長厚示数	19.0	18.8
6/7	中央断面示数	108.7	113.6
6+7/2	頤丈示数	11.8	11.6
10/9	上骨体断面示数	88.5	81.5
16/15	頸断面示数	88.0	88.5
脛骨			
1	全長	312	311
1a	最大長	314	315
2	顆距間長	—	296
4a	上内關節面深	—	(38)
4b	上外關節面深	—	36
6	最大關節面深	39	40
7	下端矢状径	31	31
8	栄養孔部横径	23	23
8a	栄養孔部最大径	27	28
9	中央横径	19	18
9a	栄養孔部横径	21	22
10	骨体周	69	67
10b	最小周	63	63
9a/8a	脛示数	77.8	78.6
9/8	中央断面示数	82.6	78.3
10b/1	長厚示数	20.2	20.3
腓骨			
1	最大長	311	310
2	中央最大径	14	14
3	中央最小径	9	9
4	中央周	41	40
4(1)	上端幅	—	29
3/2	中央断面示数	64.3	64.3
4/1		13.2	12.9



前面觀



側面觀



上面觀

三手向原遺跡出土人骨—頭蓋骨三面觀

附章 2 三手向原遺跡出土土師質鍋の胎土分析 —岡山南部出土の鍋を中心に—

白石 純

1. 分析の目的

中世で日常的に使用されている土師質鍋は、形態、技法的な分析により規格性がみられ、ある特定の工人集団により制作されていることが考えられている⁽¹⁾。また、これら鍋を焼成した窯も数基確認されているがいずれも小規模なものであることから工人集団の移動により、各地域あるいは遺跡ごとに生産されていたのではないかと推測されている⁽²⁾。

そこで、理化学的な手法により、岡山県南部の中世の各遺跡から出土している土師質鍋の胎土分析を実施し、各遺跡および地域(水系)ごとに胎土に差異があるかどうか調べた。胎土の分析方法は、蛍光X線分析法により胎土中の成分を測定し、各成分量の違いから胎土の差異を検討した。また、この分析結果をもとに、違いがみられる分析試料(鍋)が、胎土に含まれるどのような砂粒(岩石・鉱物)によるものか検討するため、実体顕微鏡を用いた肉眼観察で砂粒の種類と含有量について調べた。

2. 分析方法、結果

【蛍光X線分析法による胎土分析】

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析計(セイコーインスツルメンツ製2010L)を用い、試料・測定方法などは従来までの方法に従い分析した。

分析した試料は、第1表に示した94点の各遺跡出土の鍋である。各遺跡を水系別にまとめると以下のようなになる。

足守川水系……三手向原遺跡、足守庄関連遺跡、津寺遺跡、東山遺跡、吉野口遺跡、

妹尾住田遺跡

砂川、中川水系……小丸山遺跡

旭川水系……百間川沢田遺跡、津島江道遺跡、新道遺跡、ハガ遺跡、三野浄水場遺跡

吉井川水系……西村遺跡

赤磐郡山陽町三蔵畑遺跡(窯址)

分析の結果、Si(珪素)、Ti(チタン)、Al(アルミニウム)、Fe(鉄)、Mn(マンガン)、Mg(マグネシウム)、Ca(カルシウム)、Na(ナトリウム)、K(カリウム)、P(リン)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)の13元素について定量値を測定した。このうちSi、Al、Ca、K、Rb、Srの6元素に顕著な差がみられることから、これらの元素を用いてXY散布図を作製し、差異について検討した。

第1図K-Ca、第2図Rb-Srの各散布図では、水系ごとに遺跡をプロットした図を示した。この散布図から、各水系別にわかれる傾向はみられなかった。ただ、第1図では大きく三グループに識別ができそうである。それはCa量が2.00%以上に分布するもの(Aグループ)、1.50%~2.00%に分布するもの(Bグループ)、1.50%以下に分布するもの(Cグループ)である。また、第2図では第1図ほど識別できなかったが、Sr量が90ppm~200ppmに集中するものと200ppm以上に広く分布するものに識別できそうである。

第3、4図では、各遺跡別にプロットし、遺跡ごとに差異がみられないか検討した。その結果、遺

跡別にまとまるものは、小丸山遺跡（砂川・中川水系）と山陽町の三蔵畑遺跡の窯址資料のみで、ほかの遺跡の鍋は、二つないし三つのグループに胎土が識別された。

また、第1図の水系別のところで三つのグループに分類できたものを、各グループで詳細に検討すると、以下ようになった。

Aグループ…東山(3)、吉野口(6)、妹尾住田(4)、津島江道(1)、新道(3・4・5)

Bグループ…三手向原(4・5)、足守庄関連(6)、津寺(1・2・3・4)、吉野口(3・4)、妹尾住田(3・6)、百間川沢田、ハガ(4)、三野浄水道(2・4)、西村

Cグループ…三手向原(1・2・3・6)、足守庄関連(1・2・3・4・5)、津寺(5・6)、東山(1・2・4・5) 吉野口(1・2・5)、妹尾住田(1・2・5)、小丸山(1・6)、津島江道(2・3・4・5・6) 新道(1・2・6)、ハガ(1・2・3・5・6・7・8・9・10)、三野浄水道(1・3・5)、三蔵畑

第2図でもほぼ同じ結果となった。

【実体顕微鏡による胎土観察】

この胎土観察では、実体顕微鏡による肉眼観察で、胎土中に含まれている砂粒（岩石、鉱物）の種類・含有量を調べることで、胎土の差異を検討した。

第1表には胎土に含まれている岩石・鉱物の種類、量を示している。この表より岩石・鉱物の種類で分類すると、おおまかに以下の三種類に分類される。

(a) 石英、長石、雲母、花崗岩でおもに構成されるもの

(b) 石英、長石、角閃石でおもに構成されるもの

(c) 石英、長石、雲母、赤色粒でおもに構成されるもの

このうち(a)(b)の粘土素地には、ほとんどに火山ガラスが含まれていた。

また、山陽町三蔵畑遺跡の鍋試料には、多量の赤色粒が含まれていた。この赤色粒には、「赤色酸化粒」と「焼土塊」があるといわれており⁽²⁾、今回確認した赤色粒は赤色酸化粒と考えられる。その理由としては、蛍光X線分析結果から、鉄の含有量が他と比べて非常に多いことによる。

また、第3図の蛍光X線分析結果では、三つのグループに分類されていたが、実体顕微鏡による砂粒分類では、Aグループに属する鍋には角閃石が多く含まれていることがわかった。また、BおよびCグループになるに従い角閃石の含有量が減少している傾向がみられた。このことは、角閃石の多少によりCa(カルシウム)量に変化していることがこの結果より推測される。

3. 考 察

蛍光X線分析法および実体顕微鏡による胎土の砂粒観察の両面から胎土分析を実施したが、これらの分析で明らかになったことを述べ若干の考察を行いたい。

(1) 蛍光X線分析では、土師質鍋が水系および遺跡別に関係なく、三つのグループにわかれた。

これは、水系ごとに胎土に明確な識別がないこと。また、遺跡ごとでも小丸山遺跡、三蔵畑遺跡以外は複数の胎土に分類され、同一遺跡内出土でも複数の胎土の鍋が存在するようである。

(2) 実体顕微鏡による胎土観察では、蛍光X線分析で三つのグループに分類されたものの、胎土の砂粒観察でもほぼ同じように分類できた。それは、Aグループには角閃石が多量に含まれ、BグループにはAグループよりは少ないが角閃石が含まれている。Cグループには角閃石が少量あるいは全く含まれていないものが分布している。このようにCa量が少なくなるに従い角閃石の含有量も減少し

ていることがわかった。

また、胎土の砂粒観察から(a)、(b)、(e)の三つに分類されたが、砂粒組成から(a)・(c)は花崗岩起源、(b)は閃緑岩起源に由来する砂粒と推定される。この結果をもとに各遺跡をみると以下のように分類されよう。

(花崗岩起源の砂粒が混入されている遺跡)

- ・足守川水系……………三手向原遺跡、足守庄関連遺跡
- ・赤磐郡山陽町三蔵畑遺跡(窯址)

なお、三蔵畑遺跡の鍋には、赤色酸化物粒が多量に含まれており、明らかに他の遺跡の鍋と胎土が異なっており、識別が可能であった。

(閃緑岩起源の砂粒が混入されている遺跡)

- ・足守川水系……………津寺遺跡、東山遺跡、吉野口遺跡、妹尾住田遺跡
- ・砂川、中川水系……………小丸山遺跡
- ・旭川水系……………百間川沢田遺跡、津島江道遺跡、新道遺跡、ハガ遺跡、三野浄水場遺跡
- ・吉井川水系……………西村遺跡

ただし、津寺、東山、妹尾住田、小丸山、新道、ハガの各遺跡の中には、一部ではあるが角閃石が含まれていない胎土のものがみられた。

ここで各水系の地質基盤をみると、足守川上流域には閃緑岩の基盤層がみられ、旭川流域では一部で閃緑岩もあるが、砕屑岩が主体をしめる基盤層である⁽⁴⁾。このことより、角閃石が混入している胎土のものは、足守川流域の粘土を使用していることが推測されるが、旭川流域でも閃緑岩の基盤層があり、この流域でも量的に少ないかもしれないが角閃石の混入は十分あり得ることである。この砂粒観察による分析でも、明確な生産地推定が難しいことが考えられる。

以上のことから、蛍光X線分析では水系・遺跡ごとに識別できなかったが、胎土の砂粒観察(角閃石の有無)より足守川水系の三手向原遺跡、足守庄関連遺跡には花崗岩起源の砂粒が混入し、同じ足守川水系の津寺遺跡、東山遺跡、吉野口遺跡、妹尾住田遺跡には閃緑岩起源の砂粒が混入していることより、同じ水系のなかで遺跡により胎土に違いがみられた。このことから各遺跡への供給は、単一あるいは複数の生産地より供給され、水系・地域をこえた供給ルートを考慮する必要がある。しかし、今回の分析では明確な生産地(窯址)の資料を分析しておらず、生産地資料を蓄積し比較検討することにより、生産地を特定することが可能になるかもしれない。分析資料を増加して再検討したい。

この分析の機会を与えていただいた草原孝典氏をはじめ岡山市教育委員会の方々や、資料提供では山陽町教育委員会にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

註

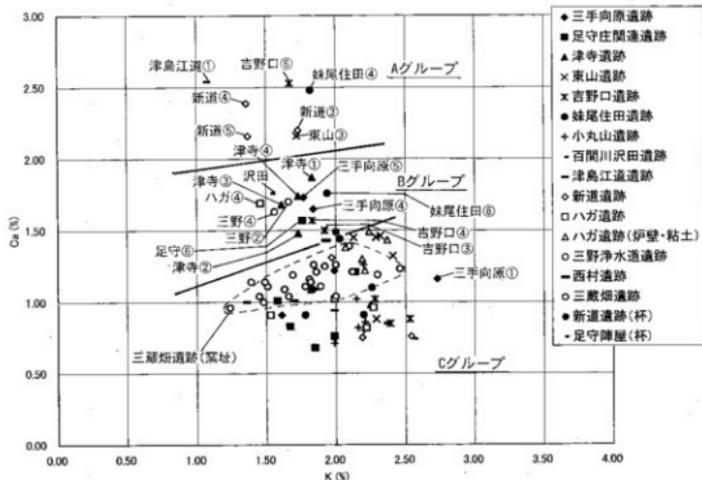
(1) この分析の目的は、資料提供者による。

(2) 註(1)

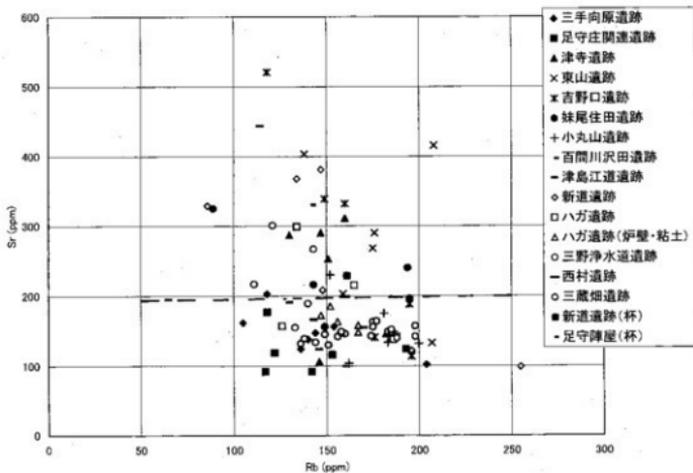
(3) 狐塚省蔵、奥田 尚「吉備型(器台・壺)胎土中の含有物-砂礫とシャモットをめぐる-」

『古代学研究』第109号 1985年11月

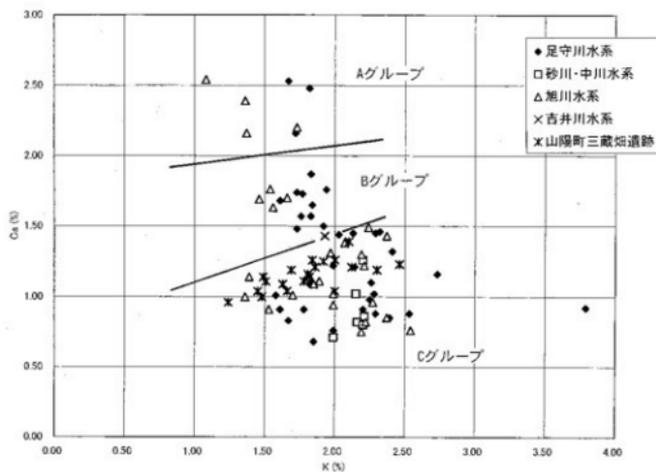
(4) 光野千春・杉田宗満「岡山県地質図」内外地図株式会社



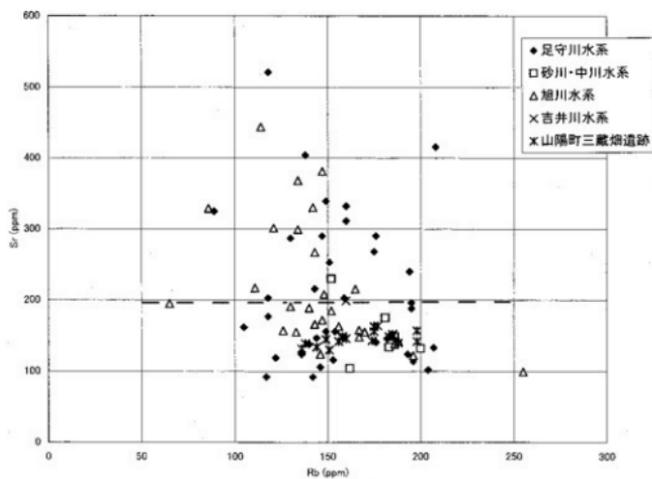
第3図 K-Ca散布図 遺跡ごとの分布K



第4図 Rb-Sr散布図 各遺跡ごとの錫分布



第1図K-Ca散布図 土師質綫の各水系別分布



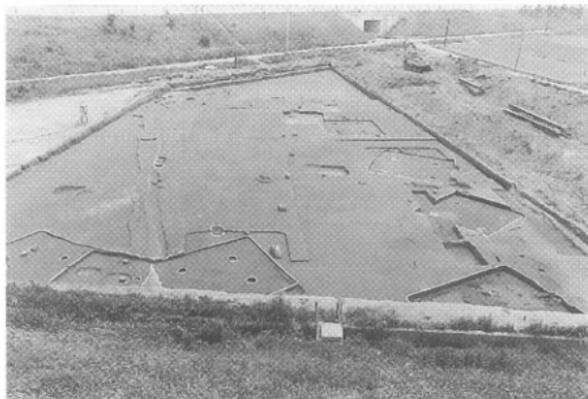
第2図Rb-Sr散布図 土師質綫の各水系別分布

表1 岡山県東部地域の中生代岩質の地味分析表(%) (n=2-Znppm) 前記の元素の単位は、◎:多い、○:ふつ、△:少ない、×:稀に検出された。

番号	産地名	所在地	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Sr	Zr	元素	長石	角閃	黄鉄鉱	赤色岩	火山岩質	斑岩類
1	三石町東部	岡山三石町東部	67.30	0.82	15.52	4.27	0.91	1.24	11.8	2.11	2.73	0.98	144	147	◎	◎	◎	◎	△	△	×
2	三石町東部	岡山三石町東部	67.30	0.82	15.52	4.27	0.91	1.24	11.8	2.11	2.73	0.98	144	147	◎	◎	◎	◎	△	△	×
3	三石町東部	岡山三石町東部	64.00	0.82	23.62	5.21	0.94	1.76	0.93	2.70	1.91	1.16	254	207	◎	◎	◎	◎	△	△	×
4	三石町東部	岡山三石町東部	65.19	0.74	19.84	4.65	0.97	1.41	2.41	1.84	3.09	1.05	142	142	◎	◎	◎	◎	△	△	×
5	三石町東部	岡山三石町東部	63.30	0.82	20.98	5.25	0.97	1.79	1.73	2.69	1.77	1.26	118	203	◎	◎	◎	◎	△	△	×
6	三石町東部	岡山三石町東部	66.83	0.87	16.69	3.95	0.93	1.44	1.96	2.68	1.93	1.45	130	140	◎	◎	◎	◎	△	△	×
7	三石町東部	岡山三石町東部	68.38	0.85	16.01	4.82	0.87	1.67	0.92	2.82	2.79	0.97	136	134	◎	◎	◎	◎	△	△	×
8	三石町東部	岡山三石町東部	62.12	0.86	23.52	5.68	0.94	1.75	1.21	2.25	1.14	0.98	182	174	◎	◎	◎	◎	△	△	×
9	三石町東部	岡山三石町東部	70.12	0.87	18.21	3.25	0.93	1.80	0.68	3.54	1.82	0.99	131	147	◎	◎	◎	◎	△	△	×
10	三石町東部	岡山三石町東部	66.90	0.74	18.60	3.37	0.95	1.75	0.83	2.74	1.87	0.95	142	147	◎	◎	◎	◎	△	△	×
11	三石町東部	岡山三石町東部	66.83	0.87	16.69	3.95	0.93	1.44	1.96	2.68	1.93	1.45	130	140	◎	◎	◎	◎	△	△	×
12	三石町東部	岡山三石町東部	65.05	0.96	18.97	4.38	0.94	1.66	1.01	2.42	1.58	1.12	122	119	◎	◎	◎	◎	△	△	×
13	三石町東部	岡山三石町東部	67.48	0.87	16.72	4.79	0.94	1.52	1.57	2.61	1.36	1.10	118	177	◎	◎	◎	◎	△	△	×
14	三石町東部	岡山三石町東部	64.00	0.82	23.62	5.21	0.94	1.76	0.93	2.70	1.91	1.16	254	207	◎	◎	◎	◎	△	△	×
15	三石町東部	岡山三石町東部	61.30	0.89	21.62	5.68	0.97	1.82	1.48	2.56	1.22	0.81	153	135	◎	◎	◎	◎	△	△	×
16	三石町東部	岡山三石町東部	66.83	0.87	16.69	3.95	0.93	1.44	1.96	2.68	1.93	1.45	130	140	◎	◎	◎	◎	△	△	×
17	三石町東部	岡山三石町東部	64.61	0.85	19.67	5.09	0.91	1.74	2.30	1.75	1.45	1.00	161	151	◎	◎	◎	◎	△	△	×
18	三石町東部	岡山三石町東部	65.98	0.73	19.98	3.55	0.99	1.84	1.09	1.42	1.82	0.25	146	196	◎	◎	◎	◎	△	△	×
19	三石町東部	岡山三石町東部	69.72	0.87	19.02	4.85	0.93	1.74	0.94	2.64	2.81	0.56	162	146	◎	◎	◎	◎	△	△	×
20	三石町東部	岡山三石町東部	62.58	0.89	18.27	4.69	0.93	1.87	1.45	2.80	2.13	0.74	208	416	◎	◎	◎	◎	△	△	×
21	三石町東部	岡山三石町東部	61.13	0.92	17.45	4.48	0.93	1.92	1.45	2.77	2.29	1.25	165	205	◎	◎	◎	◎	△	△	×
22	三石町東部	岡山三石町東部	64.07	0.72	19.75	5.08	0.96	1.76	2.19	2.45	1.75	1.56	158	194	◎	◎	◎	◎	△	△	×
23	三石町東部	岡山三石町東部	66.83	0.86	16.84	4.24	0.96	1.76	0.88	3.06	2.25	0.72	207	133	◎	◎	◎	◎	△	△	×
24	三石町東部	岡山三石町東部	67.48	0.82	14.14	5.69	0.97	1.70	0.69	2.71	2.51	0.17	178	141	◎	◎	◎	◎	△	△	×
25	三石町東部	岡山三石町東部	66.75	0.79	16.69	4.41	0.97	1.82	3.85	2.44	2.09	0.19	196	114	◎	◎	◎	◎	△	△	×
26	三石町東部	岡山三石町東部	64.79	0.86	17.88	5.87	0.99	1.89	1.90	1.76	1.97	0.21	190	204	◎	◎	◎	◎	△	△	×
27	三石町東部	岡山三石町東部	65.21	0.85	17.61	5.28	0.95	1.66	1.57	2.84	1.82	0.98	163	204	◎	◎	◎	◎	△	△	×
28	三石町東部	岡山三石町東部	67.68	0.79	18.27	4.24	0.94	1.71	1.62	2.88	2.53	0.44	195	188	◎	◎	◎	◎	△	△	×
29	三石町東部	岡山三石町東部	63.21	0.82	18.60	5.34	0.95	1.85	2.53	2.42	1.87	0.99	116	201	◎	◎	◎	◎	△	△	×
30	三石町東部	岡山三石町東部	66.75	0.87	19.31	4.66	0.94	1.65	0.91	2.57	2.27	0.77	166	208	◎	◎	◎	◎	△	△	×
31	三石町東部	岡山三石町東部	66.77	0.87	18.85	4.98	0.94	1.75	0.91	2.87	1.78	1.35	146	156	◎	◎	◎	◎	△	△	×
32	三石町東部	岡山三石町東部	64.72	0.81	19.58	5.66	0.96	1.86	1.76	2.61	1.82	0.82	143	202	◎	◎	◎	◎	△	△	×
33	三石町東部	岡山三石町東部	65.98	0.82	21.30	6.11	0.98	1.82	2.48	2.83	1.82	1.34	89	205	◎	◎	◎	◎	△	△	×
34	三石町東部	岡山三石町東部	65.78	0.78	19.54	5.42	0.96	1.71	1.10	2.21	2.26	1.26	195	186	◎	◎	◎	◎	△	△	×
35	三石町東部	岡山三石町東部	64.72	0.81	19.58	5.66	0.96	1.86	1.76	2.61	1.82	0.82	143	202	◎	◎	◎	◎	△	△	×
36	三石町東部	岡山三石町東部	64.86	0.83	15.47	8.11	0.95	1.88	0.88	2.41	2.21	0.88	250	132	◎	◎	◎	◎	△	△	×
37	三石町東部	岡山三石町東部	67.48	0.82	14.14	5.69	0.97	1.70	0.69	2.71	2.51	0.17	178	141	◎	◎	◎	◎	△	△	×
38	三石町東部	岡山三石町東部	61.13	0.92	17.45	4.48	0.93	1.92	1.45	2.77	2.29	1.25	165	205	◎	◎	◎	◎	△	△	×
39	三石町東部	岡山三石町東部	64.07	0.72	19.75	5.08	0.96	1.76	2.19	2.45	1.75	1.56	158	194	◎	◎	◎	◎	△	△	×
40	三石町東部	岡山三石町東部	66.83	0.86	16.84	4.24	0.96	1.76	0.88	3.06	2.25	0.72	207	133	◎	◎	◎	◎	△	△	×
41	三石町東部	岡山三石町東部	67.48	0.82	14.14	5.69	0.97	1.70	0.69	2.71	2.51	0.17	178	141	◎	◎	◎	◎	△	△	×
42	三石町東部	岡山三石町東部	66.75	0.79	16.69	4.41	0.97	1.82	3.85	2.44	2.09	0.19	196	114	◎	◎	◎	◎	△	△	×
43	三石町東部	岡山三石町東部	64.79	0.86	17.88	5.87	0.99	1.89	1.90	1.76	1.97	0.21	190	204	◎	◎	◎	◎	△	△	×
44	三石町東部	岡山三石町東部	65.21	0.85	17.61	5.28	0.95	1.66	1.57	2.84	1.82	0.98	163	204	◎	◎	◎	◎	△	△	×
45	三石町東部	岡山三石町東部	67.68	0.79	18.27	4.24	0.94	1.71	1.62	2.88	2.53	0.44	195	188	◎	◎	◎	◎	△	△	×
46	三石町東部	岡山三石町東部	63.21	0.82	18.60	5.34	0.95	1.85	2.53	2.42	1.87	0.99	116	201	◎	◎	◎	◎	△	△	×
47	三石町東部	岡山三石町東部	66.75	0.87	19.31	4.66	0.94	1.75	0.91	2.87	1.78	1.35	146	156	◎	◎	◎	◎	△	△	×
48	三石町東部	岡山三石町東部	64.72	0.81	19.58	5.66	0.96	1.86	1.76	2.61	1.82	0.82	143	202	◎	◎	◎	◎	△	△	×
49	三石町東部	岡山三石町東部	65.98	0.82	21.30	6.11	0.98	1.82	2.48	2.83	1.82	1.34	89	205	◎	◎	◎	◎	△	△	×
50	三石町東部	岡山三石町東部	65.78	0.78	19.54	5.42	0.96	1.71	1.10	2.21	2.26	1.26	195	186	◎	◎	◎	◎	△	△	×
51	三石町東部	岡山三石町東部	64.72	0.81	19.58	5.66	0.96	1.86	1.76	2.61	1.82	0.82	143	202	◎	◎	◎	◎	△	△	×
52	三石町東部	岡山三石町東部	64.86	0.83	15.47	8.11	0.95	1.88	0.88	2.41	2.21	0.88	250	132	◎	◎	◎	◎	△	△	×
53	三石町東部	岡山三石町東部	67.48	0.82	14.14	5.69	0.97	1.70	0.69	2.71	2.51	0.17	178	141	◎	◎	◎	◎	△	△	×
54	三石町東部	岡山三石町東部	61.13	0.92	17.45	4.48	0.93	1.92	1.45	2.77	2.29	1.25	165	205	◎	◎	◎	◎	△	△	×
55	三石町東部	岡山三石町東部	64.07	0.72	19.75	5.08	0.96	1.76	2.19	2.45	1.75	1.56	158	194	◎	◎	◎	◎	△	△	×
56	三石町東部	岡山三石町東部	66.83	0.86	16.84	4.24	0.96	1.76	0.88	3.06	2.25	0.72	207	133	◎	◎	◎	◎	△	△	×
57	三石町東部	岡山三石町東部	67.48	0.82	14.14	5.69	0.97	1.70	0.69	2.71	2.51	0.17	178	141	◎	◎	◎	◎	△	△	×
58	三石町東部	岡山三石町東部	66.75	0.79	16.69	4.41	0.97	1.82	3.85	2.44	2.09	0.19	196	114	◎	◎	◎	◎	△	△	×
59	三石町東部	岡山三石町東部	64.79	0.86	17.88	5.87	0.99	1.89													

報 告 書 抄 録

ふりがな	みてむかいほらいせき							
書名	三手向原遺跡							
副書名								
編著者名	草原孝典							
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化財課							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 tel 086-803-1000							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みてむかいほらいせき 三手向原遺跡	おかもやまけんおかもやまし 岡山県岡山市 みて 三手108-1	33201		34° 41' 00"	133° 48' 45"	1993.09.20 ～ 1995.09.30	10,600	採集処分場建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
三手向原遺跡	集落	古墳時代 中世		建物 土壇 竪穴住居 土師器焼成窯		土師器 須恵器 陶磁器	中世の土師器焼成窯 と窯道具の出土	



A区古墳時代遺構面



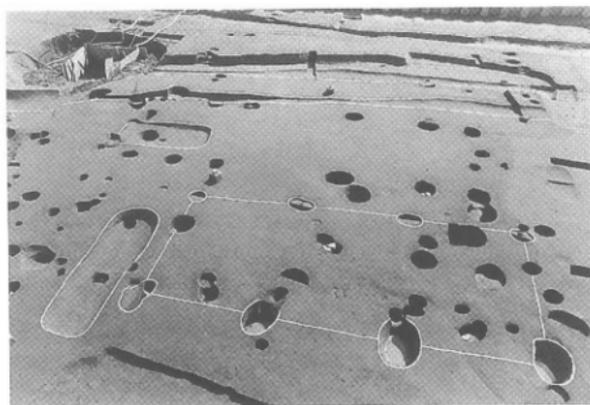
竪穴住居 1



竪穴住居 1 カマド周辺遺物出土状況



A区古墳時代土墳群



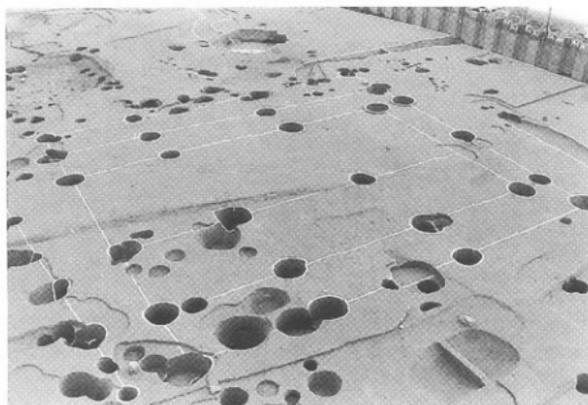
A区中世下層遺構面



A区中世下層遺構面



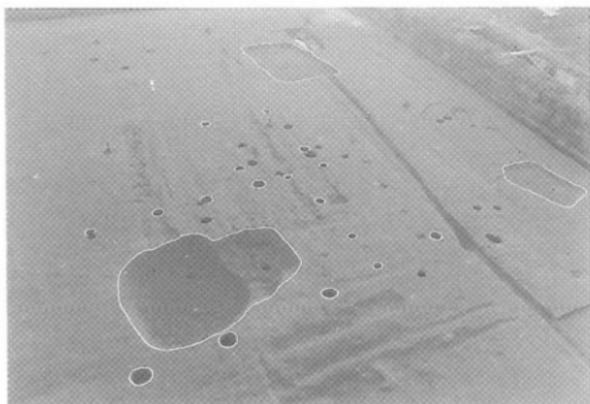
A区中世上層遺構面



建物 1



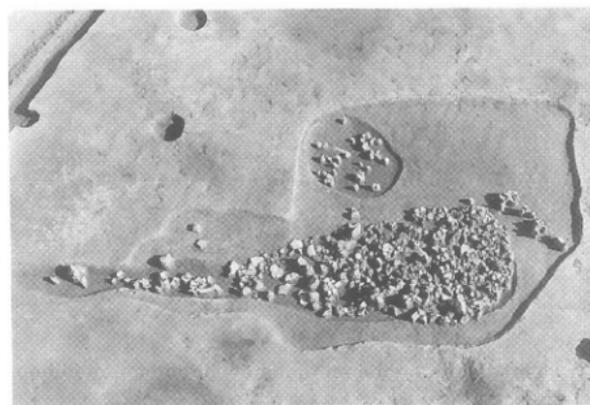
墓 1



B区中世遺構面



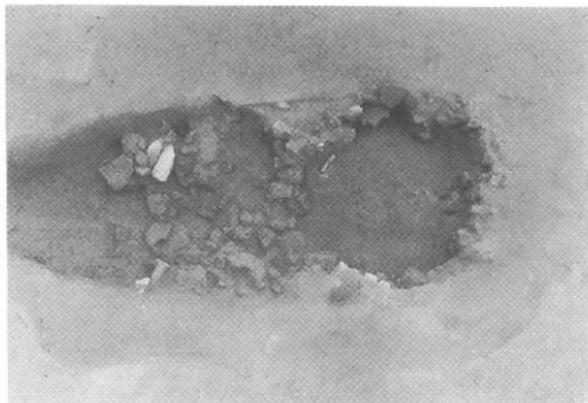
C区中世遺構面



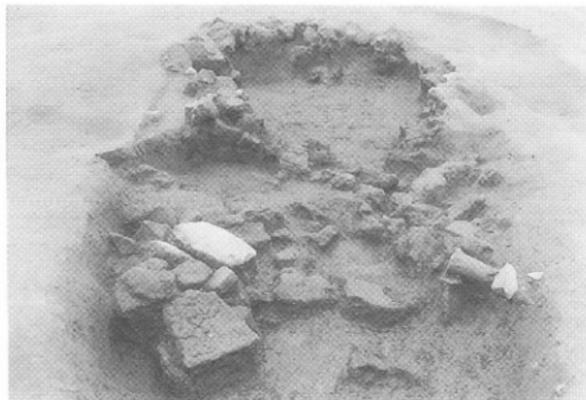
土師器焼成窯1 焼土検出状況



土師器焼成窯 1 焼土除去



土師器焼成窯 1 焼成室と焚口



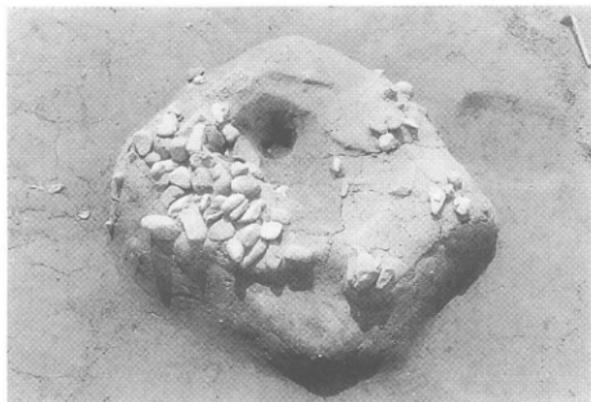
土師器焼成窯 1 焚口から



土師器焼成窯1発掘状況



P1046



墳墓



墳墓下部人骨出土状況



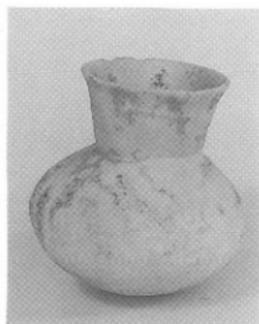
墓3上面



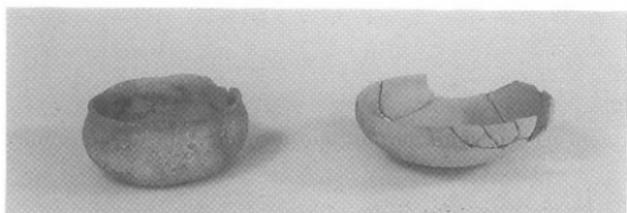
墓3人骨出土状況



16



12



32

37



15. 20. 23. 25. 28. 55